

# 山形大学人文学部

# 研究年報

第 6 号

## 目 次

### 論 文

- 英語および日本語の語りの談話・文章における指示詞 ……………渡辺文生…… 1  
結果構文における動詞主導型と結果句主導型  
——有界性制約から考える—— ……………鈴木 亨…… 15  
NPI licensing by FORCE<sub>v</sub> features……………富澤直人…… 35  
インターネットを利用した英語学習支援システムの構築  
——動画配信によるPodcastingの試み——  
…本多 薫、森田光宏、Mark IRWIN、富田かおる、Todd ENSLEN、Jerry MILLER…… 51  
Mora Splitting in Loanword Compounds ……………Mark IRWIN…… 71  
「詞」の言葉——楽章集と花間集——……………芦立 一郎…… 87  
曹植と「国難」——先秦漢魏文学における国家意識の一面—— ……………福山泰男…… 101  
歴史への内在：ボリス・エイヘンバウムの世界観 ……………中村唯史…… 121  
「過去」を背負う者、背負わない者  
——マルティン・ヴァルザーの戦後ドイツ社会論—— ……………渡辺将尚…… 143  
むだ時間システムとしてとらえたサプライチェーンについての一考察  
——リードタイムが既知の場合—— ……………西平直史…… 157

### 講演録

- Czechs and Germans shaping the regional milieu : The case of growing regional cooperation  
influenced by the Europeanization of mutual relations ……………Václav Houžvička…… 163  
平成20年度研究・教育活動報告 ……………185  
投稿規程 ……………229

平成21年3月

山形大学人文学部

## 英語および日本語の語りの談話・文章における指示詞

渡 辺 文 生

### 1. はじめに

本研究は、英語および日本語による語り (narrative) の談話・文章における *this* と *that*, 「この」と「その」の使われ方をもとに、談話と文章の違い、英語と日本語の違いについて分析し、庵(2007)が指示詞(demonstratives)の結束的な使用の説明原理として用いた「トピックとの関連性」「テキスト的意味の付与」という概念の有効性について考察することが目的である。

金水・田窪(1990)は、日本語の指示詞の現場指示用法と文脈指示用法について談話管理理論という知識モデルを用いた統一的な説明を行い、指示詞研究に大きな影響を与えた。一方、庵(2007)は、知識モデルでは説明できない文脈指示の用法の存在を指摘し、その分析を行っている。本研究が分析の対象とする語りの談話・文章とは、時間的・空間的に連続した一連の出来事を、その流れに沿って再現するために実現された、話しことばおよび書きことばによる、ことばのまとまりである(渡辺ほか 2007)。このようなストーリー性を持った内容を伝えるためには、その中に登場する人物やものを指し示す表現<sup>1</sup>が必要になる。本研究では、現場に指示対象が存在せず、かつ受け手との間に共有知識のない内容を伝える際の指示詞の使われ方に注目し、ストーリー中の登場人物および登場物を指示する名詞句に現れている指示詞の用例の分析を行う。

分析するデータには、英語および日本語の母語話者同士がアニメーションのストーリーを説明する談話データ(話しことば)と、談話データのインフォーマントが同じストーリーを書いた文章データ(書きことば)を用いる。これらのデータにおいて、*this* と *that* または「この」と「その」が、ストーリー中の登場人物および登場物を指示する名詞句に現れている用例を分析の対象とする。

---

1 何らかの対象(referent)を指し示す表現を指示表現(referring expressions)と呼ぶ。たとえば、〈太郎〉という名前の人物は、「太郎」「彼」「この人」「その人」「あの人」…などの表現で表されるが、これらは〈太郎〉という指示対象を指し示す指示表現である。省略されたゼロ形式も指示表現と見なす。指示詞は指示表現の一種ととらえる。

## 2. 結束的な文脈指示用法における「この」と「その」の使い分け

結束性 (cohesion) とは、文の連続がひとまとまりの談話や文章として理解されるための重要な性質として挙げられるものの一つである (cf. Beaugrande & Dressler 1981)。庵 (2007) は、Halliday & Hasan (1976) を参照しながら、結束性を次のように定義している。

ある文がその文だけでは解釈が完結しない要素を内包しているとき、その文は先行／後続する文 (連続) に解釈を依存しており、そのことによってその文連続は全体でテキストを構成する。この場合、その文連鎖は「結束的」であり、そのテキストには「結束性」が存在する。(庵 2007:17)

たとえば、(1)において「その本」は、先行文脈で言及されている「本」と同一物を指示していなければならない、そのことによってこの2つの文につながり、すなわち結束性が生じる。このような結束性に基づく文脈指示的な用例においてはコ系統とソ系統の指示詞が対立しており、その使い分けは金水・田窪 (1990) のような知識管理的な原理では説明できないと主張している (庵 2007:39)。

(1) 先日生協で本を買って読んだ。その本は面白かった。(庵 2007:18)

結束的な指示詞の使用において、「この」は使えるが「その」は使えない場合を、庵 (2007) は、(2)のような言い換えがある場合のほか、遠距離照応の場合など4つに下位区分しているが、それらに共通の性質として「トピックとの関連性」という概念を挙げている。談話や文章の内容を1名詞句で要約できるようなものを「トピック」と呼び、トピックを構成する意味上の諸要素の中で特に重要度の高いものをそのトピックと関連性が高い名詞句と呼ぶ (庵 2007:93)。たとえば、(3)のトピックは「殺人事件」であり、そのトピックは殺人者、被害者、殺人現場などの要素から構成されているが、「この女性」の先行詞になっている「無職女性」は、この「殺人事件」というトピックに対して非常に高い関連性を持った名詞句であると考えられる。

(2) エリザベス・テラーがまた結婚した。この/\*その女優が結婚するのはこれで七回目だそうだ。(庵 2007:18)

(3) 名古屋・中村署は、殺人と同未遂の疑いで広島市内の無職女性(28)を逮捕した。調べ

によると、この女性は20日午前11時45分ごろ名古屋市内の神社境内で、二男(1)、長女(8)の首を絞め、二男を殺害した疑い。(庵 2007:93)

結束的な指示詞の使用において、「その」は使えるが「この」は使えない場合の説明原理になるのは、「テキスト的意味の付与」という概念で(庵 2007:97)、それは先行文脈からの意味的な限定を受けることと言い換えることができる。

(4) 順子は「あなたなしでは生きられない」と言っていた。その／??この順子が今は他の男の子供を二人も産んでいる。(庵 2007:98)

たとえば(4)において、後続文の「順子」は、属性が何も指定されない単なる「順子」ではなく、「『あなたなしでは生きられない』と言っていた順子」でなければならず、このようなテキスト的な意味が付与された名詞句には「その」だけが適格となる。

### 3. *this* と *that* の用法についての先行研究

英語の *this* と *that* の用法の違いについては、*this* が話し手に近いことを含意し、*that* が遠いことを含意するという近接性の違いによって説明されることが一般的である(Quirk et al. 1972, 1985; Halliday & Hasan 1976)。この近接性の違いは、現場指示用法に見られる用法の違いだけでなく、文脈指示用法における違いについての説明原理としても用いられる。服部(1968)は、*this* と *that* の文脈指示的用法における違いについて、*this* の方はその対象について親近感や興味を持っているのに対して、*that* の方は客観的な態度を持っていることを表す、というような表現を用いて説明しているが、これは心理的な近接性による特徴付けとすることができる。神尾(1990)も、「情報のなわ張り」に関わる対立の例として *this* と *that* の違いを取り上げ、*this* は話し手の情報のなわ張りに属する〈近〉情報を指すのに対し、*that* は話し手の情報のなわ張りに属さない〈遠〉情報を指すと、その違いを説明している。また、*this* と *that* の文脈指示的用法における違いとして、*this* が前方照応・後方照応のどちらの用法も持っているのに対し、*that* の方は後方照応には用いられないという点も指摘されている(Quirk et al. 1972, 1985; 神尾 1990)。

表1: Givenness Hierarchy

In Focus	Activated	Familiar	Uniquely Identifiable	Referential	Type Identifiable
<i>it</i>	<i>that</i> <i>this</i> <i>this</i> N	<i>that</i> N	<i>the</i> N	(indefinite) <i>this</i> N	<i>a</i> N

(Gundel, Hedberg, & Zacharski 1993:275)

Gundel, Hedberg, & Zacharski (1993) は、指示表現の異なる形式とそれによって指し示される対象の情報ステータス、つまりその対象に関わる情報がどういう記憶に入っているのか、またはどういう注意状態 (attentional state) にあるかということをつなげて、以下のような Givenness Hierarchy と呼ばれる階層的なモデルを提案している。

この表の一番左の「焦点にある (In Focus)」とは、その指示対象が聞き手の短期記憶の中にあるだけでなく、その談話の時点での注意の中心にある場合を指し、省略形や強勢の無い代名詞などがこれにあたる。そして、そこから右に行くにしたがって、指示対象が聞き手の注意の中心から離れて行き、一番右の「タイプ同定可能 (Type Identifiable)」とは、聞き手がその表現によって記述される対象のタイプに関する表示を得ることができる場合、すなわち不定の名詞句がこれにあたる。

*this* と *that* に関しては、指示代名詞としての用法についてはともに「活性化された (Activated)」に分類され、区別は付けられていないが、決定詞 (determiner) としての用法については、*this* の場合は「活性化された (Activated)」、*that* の場合は「なじみの (Familiar)」と差が付けられている。この違いは、近接性による説明と同様に、*this* の方が意識の上でより近い対象に対して使われるということを示していると思われる。

「指示的 (Referential)」とは、話し手がある特定の対象を指し示そうとしていて、かつ聞き手はそれを理解するために新たな談話実体の表示を談話モデルに導入する必要がある場合と説明されている。英語においては、話しことばで使われる不定の *this* がこれに当たる表現として挙げられている。

この不定の *this* について Chafe (1994) は、特定の対象として同定できない指示対象が「指差されている (pointed to)」ことを示す指示詞の機能を維持した用法であり、そのような機能は不定冠詞が使われたのでは表されないと説明している。そして、同定できない指示対象が主語になるような文においては、不定冠詞の名詞句では不自然な文になるので、不定の *this* が現れやすいと指摘している (Chafe 1994:98-99)。

#### 4. データ

分析する談話データは、ピングーシリーズのアニメーションの一つ「ピングーと凧」を語り手役のインフォーマントに見せ、その後そのストーリーを聞き手役のインフォーマントに話してもらった談話である (渡辺 2007)。データの数は、英語の母語話者同士による談話が 18 組、日本語母語話者同士による談話が 15 組である。文章データは、談話データ収録後、語り手役・聞き手役それぞれのインフォーマントに談話データのストーリーを書いてもらったもので、英語母語話者による文章が 36 人分、日本語母語話者による文章が 30 人分である。

考察の対象としては、談話データにおいて、聞き手のインフォーマントとの質問・応答など

表2：英語データにおける指示詞の用例数

	<i>this</i>		<i>that</i>	
	談話	文章	談話	文章
合計	66	13	3	2

表3：日本語データにおける指示詞の用例数

	この		その	
	談話	文章	談話	文章
合計	7	0	74	27

のやり取りの発話は考察の対象から除外し、ストーリーの内容を語っている発話のみを対象とする。また、指示詞の用例としては、*this* と *that* や「この」と「その」がストーリーの中の登場人物や登場物、および場所を指示する名詞に前接している用例を考察の対象とする。

各データにおける指示詞の用例数をまとめると、上の表のとおりである。英語データにおいては、*this* の用例の方が多く、特に談話データにおいて66例と、用例数の多さが顕著である。*that* については、用例がないというわけではなかったが、談話データで3例、文章データで2例と、非常に少なかった。一方、日本語データでは、「この」の用例の方が少なく、文章データでの用例はなかった。「その」の方は、談話データで74例、文章データで27例と、「この」に比べて多用されていることが分かる。以下では、これらの結果について詳しく見て行くことにする。

## 5. 英語データにおける指示詞の使われ方

### 5.1 *this* の用例

談話データに現れた66例の *this* の用例のうち、不定の *this* と判断されるものは42例で、先行詞との結束性が認められるものは22例であった。残りの2例は、直接の先行詞はないが、直前の文脈からその指示対象の存在が推論される (inferable) 定名詞句と判断される例であった (Prince 1981)。不定の *this* のうち、指示対象が人物の用例は13例、*house* や *shop* のような場所の用例は19例、*kite* や *sled* のような登場物の用例は10例であった。

例(5)~(7)は、不定の *this* の用例で、それぞれ *this* または *these* が現れている名詞句は先行詞を持たず、そこで初めて談話に導入されている。(5)は、ストーリーの冒頭部で不定の *this* をともない人物が導入されている例で、同様の例はほかにも7例あった。(6)は、主人公がソリに乗っておじいさんの家に出かける場面を記述している例だが、移動先の場所に不定の *this* が用いられており、同様の例はほかにも10例見られた。(6)では、移動の途中で通り過ぎる場所については、*a music store*, *a fish shop* などと不定冠詞が用いられているのに対し、最

最終的に到着した場所には、*this old guy's house* と *this* が用いられている。初めて談話に登場するという点では同じでも、不定冠詞と不定の *this* とを使い分けることによって、談話における重要度の違いを示しているものと言える。(7)も主人公がソリでの移動する場面を記述しているが、ここで初めて登場したソリに対し *this sled* と不定の *this* が用いられている。不定の *this* の名詞句が現れる文法的な位置は、文の主語の位置ではなく、この(5)~(7)の例のように *be* 動詞の補語や前置詞の目的語として現れる例が多かった。

- (5) 1 but um there's these two penguins initially out there outside the igloo,<sup>2</sup>  
 2 and they're playing,  
 3 and I think that they're brothers, or one's older one's younger.
- (6) 1 so they go by a music store, a fish shop, and a couple of other houses,  
 2 and they get to this old guy's house,  
 3 maybe it, maybe it's their grandfather or something.
- (7) 1 so they get on this sled.<sup>3</sup>  
 2 and cruise into town.

以下の(8)~(11)の例は、先行詞との結束性が認められる *this* の例である。そのうち(8)と(9)は、先行詞との距離が非常に大きい例である。つまり、(8)の *this man* も(9)の *this big yellow kite* も同一指示の名詞句がすでに談話上に現れてはいるが、長いあいだ談話に登場していなかったため、聞き手の意識の中心からは遠ざかっていた対象と言える。(10)は、(9)と同じ状況を記述しているが、2行目で一度 *the kite* と定冠詞を用いて述べたあと、それを詳述するために *this* を用いた形でくりかえしている。(11)も近い位置に先行詞が認められる例で、2行目の *a mechanized snow vehicle* と4行目の *this thing* とのあいだに結束性が認められる。

- (8) 1 and then they um go home,  
 2 and they are all waving to this man.
- (9) 1 and so finally they get to, like, the last igloo,  
 2 and they see this big yellow kite in the sky.

2 Chafe (1985) は、この文のように複数形の名詞に単数形の動詞が使われるのを、話しことばの英語において用いられる文法的装置の一つだと指摘している。

3 Quirk et al. (1972) は不定の *this* にあたる用例を後方照応的な用法であると記述している。つまり、先行詞がその前の文脈にはないが、後続する文脈において同じ指示対象を持つ表現が再び現れ、その表現と照応するという説明と解釈できる。一方、Quirk et al. (1985) においては、新しい人物やものを語りに導入する用法として、照応関係には触れずに記述されている。(7)の例文が現れた談話の場合、*this sled* と同一指示の名詞句はこの談話の中に現れておらず、後方照応的という考え方は、この不定の *this* の用例をうまく説明できないということが言える。

- (10) 1 and they get to the old man's house,  
2 and they see the kite.  
3 you know this kind of this happy face kite, flying over the old guy's house.
- (11) 1 well like the kids, the kids used the sled,  
2 and then the parents came after um with like a mechanized snow vehicle,  
3 I don't know what, what it was exactly,  
4 and then, so then they all got on this thing.

例(12)は、先行文脈から指示対象の存在が推論できる例で、1行目の *the third house* からそこに住んでいる人の存在が推論され、それが2行目で *this penguin* と表現されている。

- (12) 1 and so they pass the third house,  
2 and this penguin was sitting outside, sunbathing or something,

文章データに現れた *this* の用例は13例あり、そのうち先行詞との結束性が認められるのは11例で、残りの2例は談話データの(6)と同様の不定の *this* の用例であった。(13)と(14)は結束性が認められる例だが、(13)では2行目の *the dad* が3行目の *this penguin* に、(14)では1行目の *the fourth place* が2行目の *this house* へと表現の変換が行われている。

- (13) 1 The mom was sitting reading a newspaper  
2 & the dad was ironing blankets or towels or something.  
3 This penguin had a pipe  
4 so we could tell it was a male, probably the dad.
- (14) 1 Finally they get to the fourth place,  
2 and they see a big yellow kite flying in the sky in back of this house.

庵(2007)では、先にも見たとおり、日本語の「この」が使われる状況として、言い換えがある場合、遠距離照応の場合、トピックとの関連性が高い場合などが指摘されている。本研究の英語データの *this* の用例においては、例(11)、(13)、(14)などのように言い換えがある用例が見られ、例(8)や(9)のように先行詞との距離が大きい用例が見られたという点で、〈近〉の近接性を持つ指示詞の結束的用法においてある程度の共通点が認められたと言えるだろう。トピックとの関連性については、先行詞との結束性のある *this* の用例において、名詞句の指示対象は登場物や場所が多く、人物の場合でも副次的な登場人物がほとんどで、語られ

る場面の中心人物に *this* が用いられる例はなかった。時系列に沿って出来事を再現するという語りにおいて、聞き手の意識の「焦点にある (In Focus)」中心人物は代名詞か固有名詞で表現され、指示詞は談話における役割がそれより一段階低い対象に用いられる傾向にある。

## 5. 2 *that* の用例

談話データに現れた *that* の用例は、*this* に比べて非常に少なく、3 例であった。そのうち先行詞との結束性が認められるのは 1 例で、ほかの 2 例は、先行文脈からその指示対象の存在が推論される例であった。例(15)は、先行詞との結束性が認められる例で、1 行目の *a smaller building* と 2 行目の *that room* および *that building* とが照応している。例(16)においては、2 行目で一度 *the* と言ったあとに *that person* と言い直しているが、そのことによって指示対象が先行文脈である 1 行目の *the music store* から存在が推論される人物であるということにより明確にしようとしていると思われる。

- (15) 1 and then there's a smaller building to the right,  
 2 and they go into that room, or that building,  
 3 and they start to build a new kite.

- (16) 1 they first, they go by the music store,  
 2 and ask the, that person if, if he saw their kids.

文章データに現れた *that* の用例は、例(17)に現れている 2 例だけであった。2 例とも先行詞との結束性が認められる例で、2 行目の *that igloo* と 5 行目の *that penguin* が、それぞれ直前の行の *one igloo*, *the penguin* と同一指示の関係にある。

- (17) 1 and there is just one igloo left.  
 2 In that igloo there is a penguin with glasses that appears to be older than Pingu.  
 3 He tells the older penguin of his dilemma.  
 4 The penguin with glasses offers to help Pingu.  
 5 With materials he has, that penguin, Pingu, and his sister construct a new kite.

談話データにおいても文章データにおいても、*that* の用例が非常に少ないということや、上記の用例と同じ状況で *this* が用いられている用例もあるということなどから、これらの例

において *this* ではなく *that* が用いられている積極的な理由を探ることは難しい。しかしながら、定冠詞ではなく指示詞を用いることによって指示対象を取り立てようとしている意図は感じられる。

## 6. 日本語データにおける指示詞の使われ方

### 6.1 「この」の用例

日本語データにおいて、「この」は談話データにしか用いられず、用例数は7であった。そのうち、先行詞が存在しない用例は2例、先行詞との結束性が認められる用例は5例（代行指示<sup>4</sup>の1例を含む）だった。(18)の例は、先行詞が見当たらない用例である。「この」と同じ行にある「タバコ」から推論される定名詞句だとも言えるが、パイプを示す表象的なジェスチャーをともなって発話されているので (McNeill 1992; 喜多 2002)、現場指示的な用例ととらえるべきだと判断される。(19)の例は、遠距離照応の用例で、2行目以降アニメーションで使われることばについての説明がなされたあと「親子」の話題に戻る際、「この」が用いられている。

- (18) 1 ちょっと声はちょっとだ、ちょっと低いけど、  
 2 お父さんは、あのーこうタバコのこのパイプを持って、  
 3 お父さんアイロンあててるんですね、あの、衣類に、

- (19) 1 ペンギンの親子の、話なのね、  
 2 でー、動物でー、しゃべって、  
 《中略》  
 3 それで、んーまず、ペンギンのこの親子がいて、

先にも書いた庵 (2007) による「この」の用例の特徴のうち、(19)の例のように遠距離照応については用例があったが、言い換えが起きている例は見当たらなかった。また庵 (2007) では、「この」の定名詞句は「は」が使われやすいと指摘されているが、今回のデータの「この」の用例で「は」が使われている例はなかった。渡辺 (2005a, 2006) が指摘するように、語りの談話における「は」の使用は文章の場合と比べて著しく少ないということが影響しているかもしれない。

4 代行指示とは、「昨日友達とすしを食べた。この／その／ $\phi$ 味はなかなか良かった。」のように「この／その」の中の「こ／そ」の部分だけが先行詞と照応して「これの／それの」という意味になっている場合を指す (庵 2007:83)。

## 6. 2 「その」の用例

談話データにおける「その」の用例数は74例と、「この」の場合とは対照的に数が多く、それらのすべてが先行詞との結束性が認められる例であった（代行指示は2例）。先行詞と「その」の名詞句との距離は、離れていない例がほとんどだが、遠距離照応と言える例も6例認められた。(20)はその遠距離照応の例で、先行詞と判断される名詞句はかなり前の文脈に現れてからしばらく談話に現れていない。英語の場合、遠距離照応で指示詞が用いられるときは、例(8)や(9)のように *this* が用いられていたが、日本語では「この」よりも「その」の用例の方が多かった。

- (20) 1 魚屋さんのおばちゃんとかに聞いて、  
 2 みんな知らなーいとか言って、  
 3 でその大工のおにいさんかおじさんの家の前に行ったら、  
 4 なんかも新しい風がこうあがっててるのがみっ見えて、  
 5 おーっと思って、

文章データにおける「その」の用例数は27例で、こちらもすべて先行詞との結束性が認められる例であった（代行指示は6例）。談話データの(20)のような遠距離照応の用例はなく、(21)のように近い距離での照応の用例ばかりであった。

- (21) 1 外では、お兄ちゃんが雪玉をたこにぶつけてとろうとしたが、  
 2 その雪玉が弟にあたってしまった。

文脈指示用法における「その」の特徴として、庵(2007)は「テキスト的意味の付与」を指摘している。その付与される意味にさまざまな程度の差はあるだろうが、語りの談話・文章に現れる「その」の定名詞句に対して、「テキスト的意味の付与」という観点での説明は有効であると思われる。(21)を見ても、「その雪玉」とは「お兄ちゃんがたこにぶつけてとろうとした」雪玉だ、という「テキスト的意味の付与」がなされていると言える。

## 7. まとめ

アニメーションのストーリーについて語る英語および日本語のデータをもとに、*this* と *that*、「この」と「その」の用例を分析した。

英語のデータに現れた *this* の用例を見ると、談話の場合不定の *this* の用例が60%以上もあり、文中に現れる位置としては、*be* 動詞の補語や前置詞の目的語として現れる傾向があった。

文章の場合では、先行詞との結束性が認められる用例がほとんどであり、言い換えや遠距離照応など庵(2007)が指摘する日本語の「この」の特徴との共通点も認められた。*that*については、用例が非常に少なく、本研究のデータに限って言うと、無標の指示詞は *this* であったと言える。

日本語のデータにおいて、「この」の用例は談話データのみで用例数も7例と少なかった。「その」の用例は、「この」に比べて圧倒的に用例数が多く、「その」の方が無標の指示詞であったと判断される。庵(2007)が指摘する「この」や「その」の特徴付けと一致する部分もあればしない部分もあったが、時系列に沿った出来事を記述するという語りの談話・文章の特徴との関連で、さらに考察を深めていくことができると考える。

\*本研究は、山形大学人文学部から研究活動支援を受けた研究成果の一部であり、日本語文法学会第9回大会(甲南大学, 2008年10月19日)のパネルセッションにおいて口頭発表した内容をもとに、加筆してまとめたものである。パネルの主催者である庵功雄氏、およびパネルメンバーの春木仁孝氏、金善美氏からは、研究の原案を考える段階からアドバイスや支援をいただいた。また、ポリリー・ザトラウスキー氏からは、発表内容についてコメントをいただいた。ここに記して、感謝の意を表する。

## 参 考 文 献

- 庵功雄(2007)『日本語におけるテキストの結束性の研究』くろしお出版。
- 神尾昭雄(1990)『情報のなわ張り理論－言語の機能的分析－』大修館書店。
- 喜多壮太郎(2002)『ジェスチャー 考えるからだ』金子書房。
- 金水敏・田窪行則(1990)「談話管理理論から見た日本語の指示詞」『認知科学の発展』3.講談社。(金水敏・田窪行則編(1992)に所収 pp.123-149.)
- 金水敏・田窪行則編(1992)『指示詞』ひつじ書房。
- 服部四郎(1968)「コレ・ソレ・アレと *this, that*」『英語基礎語彙の研究』三省堂。(金水敏・田窪行則編(1992)に所収 pp.47-53.)
- 渡辺文生(2005a)「語りの談話における『は』の使われ方について」『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』創刊号, pp.3-15.
- 渡辺文生(2005b)「日本語の語りの談話における指示表現のあいまいさと分かりやすさについて」南雅彦編『言語学と日本語教育IV』pp.125-136.くろしお出版。
- 渡辺文生(2006)「ストーリーを語る談話・文章における『は』の使用の比較」『談話と文法の接点』科学研究費補助金基盤研究(B)(課題番号:15320048「諸外国語と日本語の対照的記述に関する方法論的研究」)研究論文集 pp.17-24.

- 渡辺文生 (2007) 『日本語母語話者と非母語話者の語りの談話における「話段」についての研究』 科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書.
- 渡辺文生・奥川育子・権賢珠・俵山雄司 (2007) 「語りのデータを用いた談話分析の可能性」 『日本語文法学会第8回大会発表予稿集』 pp.41-70.
- Chafe, Wallace (Ed.) (1980) *The Pear Stories: Cognitive, Cultural, and Linguistic Aspects of Narrative Production*. Norwood, NJ: Ablex.
- Chafe, Wallace (1985) Linguistic differences produced by differences between speaking and writing. In D. Olson, N. Torrance, and A. Hildyard (Ed.) , *Literacy, Language, and Learning*, pp.105-123. Cambridge: Cambridge University Press.
- Chafe, Wallace (1994) *Discourse, Consciousness, and Time*. Chicago: University of Chicago Press.
- Beaugrande, R. de and Dressler, W. (1981) *Introduction to Text Linguistics*. New York: Longman. (池上嘉彦・三宮郁子・伊藤たかね共訳 (1984) 『テキスト言語学入門』 紀伊国屋書店)
- Gundel, Jeanette, Nancy Hedberg, and Ron Zacharski (1993) Cognitive status and the form of referring expressions in discourse. *Language* 69(2), pp.274-307.
- Halliday, M. A. K. and Ruqaiya Hasan (1976) *Cohesion in English*. London: Longman.
- McNeill, David (1992) *Hand and Mind: What Gestures Reveal about Thought*. Chicago: University of Chicago Press.
- Prince, Ellen (1981) Toward a taxonomy of given-new information. In P. Cole (Ed.), *Radical Pragmatics*, pp.223-255. New York: Academic Press.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1972) *A Grammar of Contemporary English*. London: Longman.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

## Demonstratives in English and Japanese Narrative Discourse

Fumio WATANABE

In this paper I analyze the use of demonstratives in spoken and written English and Japanese narrative discourse, and evaluate Iori's (2007) theory explaining the non-deictic use of demonstratives. The data for this study derives from narratives elicited using a 5-minute animated film.

Analysis of the English data shows that 1) over 60% of spoken data occurrences of *this* were used for indefinite NPs; 2) NPs with indefinite *this* tended to appear either as a complement of the verb *be* and as a prepositional phrase; and 3) some characteristics of proximal demonstratives claimed by Iori (2007) were found in the written data.

Analysis of the Japanese data shows that 1) the unmarked form of demonstratives in narratives was *sono*; and 2) not all the characteristics of Iori (2007) matched the use of demonstratives in the data, suggesting discourse genre influences demonstrative use.



## 結果構文における動詞主導型と結果句主導型

### ——有界性制約から考える——

鈴木 亨

#### 0. はじめに

結果構文の特徴として、「結果句は有界スケール解釈を持つ」という主旨の有界性制約 (boundedness constraint) がこれまで様々な形で提案されてきたが、一方でその反例も指摘されている (有界性制約については, Goldberg (1995), Vanden Wyngaerd (2001), Wechsler (2005), Suzuki (2006), 鈴木 (2007), その反例については, Boas (2003), 小野 (2007) を参照)。本稿では、一見反例と思われる事例の文法特性を再検討することを通じて、それらはいわゆる〈見せかけの結果構文 (spurious resultatives)〉 (Washio 1997) として独立した分析がなされるべきであり、有界性制約は依然として〈真の結果構文 (true resultatives)〉の特徴づけとして有効であることを論じる。具体的には、〈見せかけの結果構文〉は、結果含意動詞に基づく〈弱い結果構文〉とともに、「変成事象 (transformation)」に対応し、〈見せかけの結果句〉は、動詞が含意する結果産物 (resultant product) を詳述する副詞的機能を持ち、先行する名詞句 (= 目的語) とは厳密な叙述関係を持つわけではないという分析を提案する。さらに、結果構文には、結果句主導の〈真の結果構文〉と動詞主導の〈見せかけの結果構文〉があり、いわゆる創造的拡張の事例とされる結果構文の多くは、結果句主導の後者によることを指摘し、そのことが結果構文の限定的な生産性に与える含意について考察する。

1 節で、有界性制約による結果構文の特徴づけを概観し、2 節では、〈見せかけの結果構文〉の特性を新たなデータとともに考察し、有界性制約の反例とされる事例も同様に分析されることを見る。3 節では、2 節の分析に基づき、〈見せかけの結果構文〉と変成事象の下位分類を提案する。4 節では、〈見せかけの結果構文〉と対比するかたちで、〈真の結果構文〉が有界スケール解釈の結果句を基本レポーターとする非選択目的語構文であることを論じ、さらに結果構文の創造的拡張性と半生産性の要因について考察する。最後の 5 節が、本稿の議論のま

---

\*本稿は、2007年5月に開催された日本英文学会第79回大会シンポジウム「Issues in the Typology of Resultatives: Ten Years After」(於慶應義塾大学)における執筆者の発表「Spurious Resultatives Revisited」に部分的に基づいている。有益なコメントをいただいたシンポジウムの参加者に感謝する。また、インフォーマントとして同僚の Todd Enslin, Mark Irwin の両氏に協力いただいたことをここに記し、感謝する。本研究は、科学研究費補助金(基盤研究(C)課題番号18520373)の援助を受けている。

とめとなる。<sup>1</sup>

## 1. 結果構文における有界性制約

### 1.1. 有界性制約

英語の結果構文において結果句として機能する形容詞には一定の制限があり、おおむね「有界スケールの解釈を持つ」という主旨の制約が様々な立場から提案されている (Goldberg 1995, Vanden Wyngaerd 2001, Wechsler 2005, Suzuki 2006, 鈴木 2007)。ここでは、以下の議論の前提として、Suzuki (2006), 鈴木 (2007) における有界性制約による結果構文の特徴づけを概観する。

結果構文が認可される条件として、Suzuki (2006), 鈴木 (2007) は、Cruse (1980, 2000) の一連の反意語研究の洞察に基づいて、(1)の反意語形容詞の3つの対立スケールのうち、対立する2つの形容詞がスケール上の領域を相互排他的に占める(1A)の相補対立 (complementary opposition) スケールが関与していることを論じた。<sup>2,3</sup>

(1) 反意語形容詞における3つの対立スケール (鈴木 (2007) から若干の修正を含む)

A. <相補対立 (complementary opposition)>:

{clean/dirty, dry/wet, sober/drunk, smooth/rough, straight/bent, dead/alive, empty/full, open/shut}

<clean>                      <dirty>

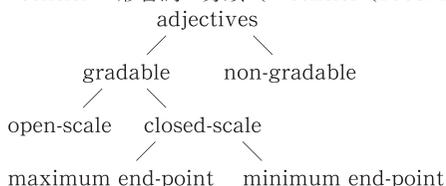
<+-----> (/+/は、スケールの上限 (=有界点) を示す)

<sup>1</sup>本稿において、〈真の結果構文〉という名称は、有界性制約に従うという意味で、いわゆる〈強い結果構文 (=派生的結果構文)〉にほぼ対応する。一方、有界性制約の適用を受けないという意味で、〈見せかけの結果構文〉という名称は、結果含意動詞に基づくいわゆる〈弱い結果構文 (=本来的結果構文)〉まで含んで使用することになる。

<sup>2</sup>それぞれの対立パターンの詳しい特性については、Suzuki (2006), 鈴木 (2007) を参照。また、形容詞のスケール特性一般に関しては、Hay, Kennedy and Levin (1999), Kennedy and McNally (2005) も参照のこと。

<sup>3</sup>Wechsler (2005) は、スケール特性に基づき、形容詞を(i)のように分類し、最大終点 (maximum end-point) の閉鎖スケール形容詞のみが、動詞に語彙的に選択された目的語を持つ選択目的語結果構文 (Wechsler の用語では、「コントロール結果構文」) に認められると述べている。wet や dirty などは、最小限度の成立条件 (例えば水滴一粒) を持ち、その先の変化の上限は原則的に決められないので、実質的な開放スケールとなり、有界的とはいえないので、上限を持つのは最大終点を持つ閉鎖スケール形容詞のみということになる。

(i) Wechsler の形容詞の分類 (Wechsler (2005: 263) から)





b. 離脱 (egression) (e.g. *out of, off, from*)

===== /----->

以上をまとめて、相補対立スケールの上限への推移を抽象的に設定することにより、選択目的語を伴う場合から、非選択目的語結果構文や PP 結果構文にも、(9)のように有界性制約を一般化することができる。

(9) 結果構文の有界性制約 (鈴木 2007)

結果構文における変化事象は、相補対立のスケール (もしくは経路) 上における有界点への推移として解釈される。

このような有界性制約に基づく結果構文分析に対して、小野 (2007) は、(10)のような開放スケール形容詞も結果句として生起する場合があることを指摘している (有界性制約に対する同様の批判的検証として Boas (2003) も参照)。

(10) a. She wrenched the stick tight.

b. I froze the ice cream hard.

c. Jack painted the house very bright.

d. Lilian cut the bread too short.

(小野 (2007: 75))

次節では、このような反例が、これまで見てきたような一般的な結果構文とは別種の、有界性制約の適用を受けない〈見せかけの結果構文〉として分類できるものであり、〈真の結果構文〉に関する有界性制約にとって真の反例にはならないことを論じる。

## 2. 〈見せかけの結果構文〉の特性

### 2.1 〈見せかけの結果構文〉 (Washio 1997)

この節では、Washio (1997) によってその存在が初めて指摘された〈見せかけの結果構文〉の特性を詳しく検討し、それが前節の最後に見た(10)のような事例も含めて、〈真の結果構文〉とは区別されるべきものであることを論じる。<sup>5</sup>一言でいうと、結果構文の目的語に対する叙述的な形容詞結果句とは異なる、副詞的/付加詞的な修飾機能を持つ結果句のタイプがあると主張する。(11-12)が〈見せかけの結果構文〉の例であり、その特徴は、Washio

<sup>5</sup>Washio (1997) とは若干異なる〈見せかけの結果構文〉についての考察として、Rapoport (1999) も参照。また、本稿の分析とは理論的枠組みや分析の細部は異なるが、〈見せかけの結果構文〉に関して本質的に類似の洞察を含む分析が、構文文法の枠組みで Iwata (2006)、ミニマリスト統語論の枠組みで Levinson (2006) によりそれぞれ提案されている。

(2007) により(13)のようにまとめられている。

- (11) a. He tied his shoelaces {tight/loose}.  
b. He spread the butter {thick/thin} (on the toast).  
c. He cut the meat {thick/thin}.
- (12) a. She piled the books high (on the table).  
b. She opened the window wide.  
c. She ground the coffee beans fine.
- (13) 〈見せかけの結果構文〉の特徴
- (A) 特定の行為様態が特定の結果状態に直接結びつくような行為を表す。  
(B) 形容詞に対応して、ほぼ同義の -ly 型の副詞表現が存在する。  
(C) 通例、当該形容詞に反意語が存在し、同じ文脈で使用できる場合が多い。  
(D) [x causes y to become z]という通常の結果構文に典型的な言い換えが必ずしも成立しない。

## 2.2 〈見せかけの結果句〉の副詞的機能

以下では、〈見せかけの結果構文〉に典型的に生じる形容詞は、副詞的修飾要素との類似性が強く、形容詞特有の名詞句に対する叙述が必ずしも成立しないことを、いくつかの具体例をもとに見ていく。

・フラット副詞 (flat adverb) と呼ばれる、形容詞と副詞が同型で使われる語彙は、〈見せかけの結果構文〉に生じる形容詞と重複するものが多い。(14)はフラット副詞の代表例であり、(15)が具体的な用例である (Huddleston and Pullum (2002), Quirk, et al (1985) を参照)。

- (14) clean, clear, deep, direct, fine, first, flat, free, full, high, last, light, loud, low, plain, sharp, slow, tight
- (15) a. She cut her hair short.  
b. He spoke to John sharp.  
c. The parsley was chopped fine.  
d. She travels light.

(14)には、非相補対立スケールを持つ単音節のゲルマン語系基本形容詞を中心に、相補対立スケールの形容詞 (clean, flat, dry など) も一部含まれるが、後者は文脈に応じてどちらの

スケール解釈もありうると考えられる。すべての形容詞が、固定的にスケール特性を規定されていると考える必要はないからである。これらのゲルマン語系の基本語彙が語彙的に副詞との親和性が高いことは、同じゲルマン語系のドイツ語などでは形容詞と副詞が形態上区別されないという事実からも示唆される。

・〈見せかけの結果構文〉に生じる形容詞は、場所や経路を現す PP や、状態を表す AP を付加詞的に修飾することができる。これは、一見すると「唯一的経路制約 (Unique Path Constraint)」(Goldberg 1995) の反例のようにも思われるが、逆説的に、これらの結果句が通常のタイプと異なり、付加詞的修飾機能を果たしていることを反映しているとも考えられる (Iwata (2006) 参照)。

- (16) a. She just stood there with her eyes (wide) open.  
 b. Fasten your seatbelt (tight) on your waist.  
 c. He fell (flat) on the floor.  
 d. Her remarks cut (deep) into his heart.

・見せかけの結果句は、典型的に様態を尋ねる How 疑問文との適合性が高いが、これは一般の結果句の場合と異なる (Horrocks and Stavrou (2003), Kratzer (2004) にも同様のテスト結果がある)。

- (17) a. Q: How did he tie his shoelaces?  
 A: {Tight/Loose/Quickly/Slowly}.  
 b. Q: How did she spread the butter (on the toast)?  
 A: {Thick/Thin/Quickly/Slowly}.

- (18) a. Q: How did he hammer the metal?  
 A: {??Flat/Quickly/Sloppily}.  
 (cf. He did so {\*flat/quickly/sloppily}.)  
 b. Q: How did he wipe the table?  
 A: {??Clean/??Dry/Quickly/Sloppily}.  
 (cf. He did so {\*clean/\*dry/quickly/sloppily}.)

・見せかけの結果句は、‘a little/very’ による程度修飾が可能だが、スケール性を前提とする ‘half/halfway’ による修飾は不可能であり、これは一般の結果構文の場合とちょうど反対であ

る。

- (19) a. He hammered the metal {\*a little/??very} flat.  
b. I wiped the table {\*a little/\*very} dry.
- (20) a. I tied my shoelaces {a little/very} loose.  
b. You spread the butter {a little/very} thick.
- (21) a. He hammered the metal {half/halfway} flat.  
b. I wiped the table {half/halfway} clean.
- (22) a. \*He tied his shoelaces {half/halfway} tight.  
b. \*You spread the butter {half/halfway} thick.

・〈見せかけの結果句〉は、少なからぬ事例において、表面上の目的語とのあいだに厳密な叙述関係 (predication) が成立しない。(23-27)のそれぞれの(b)例においては、(23b)を例外として、be 動詞による単純な叙述表現が多かれ少なかれ不自然であることがわかる。

- (23) a. He tied his shoelaces {tight/loose}.  
b. His shoelaces are {tight/loose}.
- (24) a. He spread the butter {thick/thin}.  
b. ??The butter is {thick/thin}.
- (25) a. He cut the meat {thick/thin}.  
b. ??The meat is {thick/thin}.
- (26) a. He opened the window {wide/narrow}.  
b. \*The window is {wide/narrow}.
- (27) a. She ground the coffee beans {fine/coarse}.  
b. \*The coffee beans are {fine/coarse}.

(23-27)における〈見せかけの結果句〉の叙述関係の不自然さは、むしろ動詞が含意する結果産物とのあいだで潜在的な叙述関係があると考えerことで説明できる。典型的な〈見せかけの結果構文〉に生じる動詞は、一般に結果産物を含意するが、これはこれらの動詞について、結果産物を名指す名詞が語彙化されたものと分析する可能を示唆している。<sup>6</sup>

- (28) a. The knots of his shoelaces are {tight/loose}.

---

<sup>6</sup>動詞の語彙化プロセスについては、Hale & Keyser (2002), Harley (2005) を参照。

- b. the {tight/loose} knots of his shoelaces
- (29) a. The spread of butter is {thick/thin}.  
b. the {thick/thin} spread of butter
- (30) a. The slices of the meat are {thick/thin}.  
b. the {thick/thin} slices of the meat
- (31) a. The opening of the window is {wide/narrow}.  
b. the {wide/narrow} opening of the window
- (32) a. The grind of the coffee beans is {fine/coarse}.  
b. the {fine/coarse} grind of the coffee beans
- (33) a. \*The hammer(ing) of the metal was flat.  
b. \*the flat hammer(ing) of the metal
- (34) a. \*The {wiping/wipe} of the table was dry.  
b. \*the dry {wiping/wipe} of the table

以上の観察を勘案すると、(35)のような記述的一般化が得られる。

- (35) 〈見せかけの結果構文〉は、結果産物を含意する動詞と結果句の組み合わせによって構成される。〈見せかけの結果句〉は、動詞が含意する結果（結果産物を含む）を副詞的・付加詞的に修飾（＝詳述）し、先行する名詞句に対して必ずしも叙述機能を持つわけではない。

### 3. 結果産物と変成事象

この節では、前節の(35)の一般化に至る〈見せかけの結果構文〉の背後にある意味構造について、(36)の「変成事象 (transformation)」を基盤に、そのサブタイプとして位置づける分析を提案する。変成事象とは、素材 (material) となる事物 Y が、X を主語とする動詞で表される働きかけを受けて、存在論的に独立した結果産物 (resultant product) Z に変化する事象であると定義する。

- (36) 変成事象 (transformation) :

[X acts on Y in such a way that Z is created]

このように考える1つの根拠として、典型的な〈見せかけの結果構文〉が、(37)のように明示的な変成事象へ書き換えることが可能であり、その際に結果句の形容詞が結果産物に対す

る修飾語として現れるという事実が挙げられる。<sup>7</sup>

- (37) a. He tied his shoelaces into a (tight) knot.  
 b. He cut/chopped parsley into (fine) pieces.  
 c. She tore the document into (thin) shreds.  
 d. She cut the meat into (thick) slices.  
 e. He melted the chocolate into a (runny) liquid.  
 f. They ground the leftover food to a (thick) pulp.  
 g. She stacked books into a (high) tower.

(37)のような例に生じる動詞は、広い意味で状態変化動詞といえるが、とりわけ事物の外面形状に働きかけて、その「構成 (constitution)」, もしくは「空間配列 (spatial configuration)」に変更を加え、動詞行為の様態に応じて特定の外面形状を備えた結果産物を生じるという特徴がある。このタイプの動詞を「外面形状変化動詞」としてまとめると、上位概念としての状態変化動詞に関して、次の3つの下位分類が成り立つことになるだろう。

(38) 状態変化動詞の下位分類 (A と B のみ結果産物の含意あり)

(A) 外面形状変化動詞 (braid, cut, chip, grind, open, pile, scatter, slice, spread, tear, tie, twist, stack, open, etc.): 結果産物が語彙化されており、動詞の働きかけの様態が結果産物の外面形状を規定する。

(B) 本来的状態変化動詞 (break, melt, freeze, paint, etc.): 形状と内在特性の一体化した変化を現し、含意する結果は、〈産物〉でありかつ〈状態〉であるような抽象概念 (PIECES, LIQUID, SOLID, COLOR など) となる。(A)と(C)に分化する前の基幹型と見なすこともできる。<sup>8</sup>

(C) 形容詞派生の状態変化動詞 (cool, clear, darken, dry, wet, empty, etc.): 語彙化された結果状態 (=形容詞) が、別な形容詞 (=結果句) による詳述を阻止するので、結果構文には生じにくいと考えられる。

<sup>7</sup> 変成事象における明示的な結果表現として、他に to a crisp, into cubes, into a pile, into a puddle, to smithereens などの慣用的表現を用いる場合もある。いずれも外面形状の変化に焦点化した描写である。

<sup>8</sup> このタイプは、典型的に AP と PP 両方の結果句が可能である。

- (i) a. He broke the box open.  
 b. He broke the dishes into pieces.  
 (ii) a. She melted the chocolate soft.  
 b. She melted the ice into a runny liquid.

このような観点から、(13)における〈見せかけの結果構文〉の特徴づけを再考すると、まず、(13A)の特定の行為様態が特定の結果状態を含意するのは、動詞が内在的語彙意味が(元の事物の構成が組み換えられることにより)特定の外面形状特性を持つ結果産物の産出を含意しているからである。次に、(13B)のほぼ同義の-ly形副詞の存在は、〈見せかけの結果句〉が、構造上の主語を持たない副詞的・付加詞的機能を持つことの反映であると考えられる。<sup>9</sup>(13C)の反意語の存在は、デフォルトの基準を持たない開放スケール形容詞からなる非相補対立スケール(1B)に関連づけて、中間領域を含むあいまいさの反映であると考えられる。換言すると、この結果状態はコントロールする余地があることになる。最後に、(13D)のCAUSE-BECOMEによる書き換えの不自然さは、非叙述的な副詞的結果句と表面上の目的語とのあいだで主述関係が成立しないことによる。また、結果産物の形状変化がすでに単一語彙として含意されている動詞において、その状態変化プロセスをさらに分解的に述べるのが本来的にはらむ不自然さによるところもあると考えられる。CAUSE-BECOMEによる書き換えは、動詞が結果含意ではなく、行為の様態/手段の描写として機能する場合(典型的には活動動詞)にもっとも自然に成立するからである。

結論として、Washio(1997)における〈弱い結果構文〉と〈見せかけの結果構文〉は、動詞タイプとしては本来的状態変化動詞と外面形状変化動詞にほぼ対応するが、いずれも結果産物を生じる変成事象の具現化パターンの変異型とみなすことができる。結果産物が語彙化された動詞と、本来的状態変化動詞という違いがあるが、いずれも結果含意動詞をもとに、結果産物が含意される変成事象に対応するという点で、〈見せかけの結果構文〉と〈弱い結果構文〉は同類である。いずれの場合も結果句は、含意された結果産物や状態を副詞的・付加詞的に修飾(=詳述)する。以下では、両者を包摂するカテゴリーとして〈見せかけの結果構文〉という名称を用いることにする。<sup>10</sup>

さらに従来の研究ではあまり取り上げられていないが、変成事象の意味構造に基づいて分析できる別種の〈見せかけの結果構文〉として、次のような事例を挙げることができる。

- (39) a. They dug a hole deep.  
b. He baked the cake sweet.

<sup>9</sup>関連して、Iwata(2006:467)は、結果状態(result state)と結果産物(outcome)を区別して、結果産物の場合にのみ-ly副詞による修飾が可能であると指摘している。

- (i) a. She dressed elegantly.  
b. They loaded the cart heavily.  
(ii) a. \*The lake froze solidly.  
b. \*He painted the wall redly.

<sup>10</sup>〈見せかけの結果句〉は、付加詞として事象構造にかかわるので、有界性制約の適用対象外になると考えられる。関連して、有界性制約にかかわる同型性(homomorphism: Krifka 1998, Wechsler 2005)については、Ramchand(2008)が、プロセス動詞を主要部とする構造において補部の形容詞に適用するものとして、構造的に動機づけを与える説明を提案している。

c. She cut a groove just deep enough for the fence wire.

(39)では、創造動詞の表す行為の結果産物の状態が、形容詞(結果句)によって修飾されているが、いずれも開放スケールの形容詞なので、有界性制約にとっては反例となりうるものである。これまで見た〈見せかけの結果構文〉との違いは、結果産物としての目的語が統語構造上に明示されているので、目的語と結果句のあいだに通常の叙述関係が成立している点である。<sup>11</sup>

ここでは、(36)の変成事象の意味構造を共通基盤として、項が具現化される際に複数の可能性があると考えることにより、(39)のような創造動詞を含む事例を含めて、次のような〈見せかけの結果構文〉の3つの下位分類を提案する。

(40) 〈見せかけの結果構文〉の3つの下位分類

(A) 外面形状変化 (transfiguration) : [X acts on Y in such a way that (Z) is created]

(外面形状変化動詞に基づく、典型的な〈見せかけの結果構文〉で、素材としてのY項が焦点化され、結果産物のZ項は抑制(脱焦点化)されている。)

- a. He cut/sliced the meat {thick/thin}.
- b. You spread the butter {thick/thin}.
- c. He opened the window {wide/narrow}.
- d. She ground the coffee beans {fine/coarse}.

(B) 本来的状態変化 (true change of state) : [X acts on Y in such a way that (Z) is created]

(本来的状態変化動詞に基づく、いわゆる〈弱い結果構文〉で、素材としてのY項が焦点化され、結果状態としてのZ項は抑制(脱焦点化)されている。)

- a. She froze the ice cream hard. (Z = SOLID)
- b. He melted the chocolate soft. (Z = LIQUID)
- c. She broke the dishes into tiny pieces. (Z = PIECES)

(C) 創造変化 (creation) : [X acts (on Y) in such a way that Z is created]

(創造動詞に基づく結果構文で、素材となるY項が抑制(脱焦点化)されて、結果産物であるZ項が焦点化されている。)

- a. They dug a hole deep.

<sup>11</sup>(39)の例における形容詞は、結果産物に対する描写句 (depictive) としての用法と見なすことが可能である。描写句を副詞的修飾語として分析する Maruta (1995) に従えば、より大きなカテゴリーとして、〈見せかけの結果句〉と描写句をまとめて、形容詞の副詞的・付加詞的機能を持つ用法として分析することができると思われる。その際には、形容詞が副詞的・付加詞的機能を持つとはどういうことかを、理論的にさらに明確化する必要があるだろう。

- b. He baked the cake sweet.
- c. She cut a groove just deep enough for the fence wire.

〈見せかけの結果構文〉の基盤となる変成事象に共通する特徴は、いずれも、働きかけを受ける素材である Y と、結果産物である Z が、意味構造上の存在物として独立していることであり、動詞の語彙意味に基づいて相対的に際立ちを持つ方が、目的語として統語的に具現化されている。これらの変成事象に対し、存在論的に自律した結果産物を持たず、事物の構成上の同一性が保持される変成事象が、(41)のような活動動詞とともに典型的な使役変成事象を表す〈真の結果構文〉であり、概略(42)の意味構造を仮定することができる。

- (41) a. He hammered the metal flat.
- b. He wiped the table clean.

(42) 使役変化 (alteration): [X acts on Y in such a way that Y becomes Y']

(素材 Y と変化を経たのちの Y' は、意味構造上は同一事物である。)

本節では、Washio (1997)における〈見せかけの結果構文〉と〈弱い結果構文〉は、それぞれ変成事象の下位タイプとして位置づけられ、それぞれの結果句は、含意された結果(産物)に対する副詞的・付加詞的修飾として機能すること、さらにもう1つのサブタイプである創造変化の結果構文も含めて、〈見せかけの結果構文〉として統合的な分析が与えられることを論じた。

#### 4. 結果句主導の〈真の結果構文〉

##### 4.1 〈真の結果構文〉をつくる有界スケール結果句

前節では、〈見せかけの結果構文〉の概念を拡張的にとらえ、創造動詞を含む結果含意の状態変化動詞と副詞的・付加詞的修飾機能を持つ結果句との組み合わせからなる変成事象に広く対応するものとして分析した。以下では、同じ視点から逆に〈見せかけ〉ではない〈真の結果構文 (true resultatives)〉の範囲を再検討する。

鈴木 (2007, 2008) では、活動動詞を基盤として結果句が目的語と主述関係を結ぶ〈真の結果構文〉は、機能不全解釈の非選択目的語タイプを除くと、(43)のように一見限定的なものとなるが、その場合むしろ動詞ではなく、有界性スケールの結果句の方が基本的なレポーターとして、多様な動詞(基本的に物理接触により「被影響性 (affectedness)」の解釈が得やすいもの)との組み合わせで、結果構文の生産性の基盤となっていることを指摘した。(44)は、研究文献やインターネットでの検索で確認された結果句のレポーターを中心に、動詞と

の組み合わせのパターンを、網羅的ではないが、まとめたものである。

- (43) a. He hammered the metal *flat*.  
b. She wiped the table {*clean/dry*}.  
c. She combed her hair {*straight/smooth*}.  
d. She shook him *awake*.  
e. He slapped me *sober*.  
f. He shot the man *dead*.  
g. He kicked the door {*open/shut*}.
- (44) a. flat: hammer/stomp/water/knock/slap/iron/fold/press  
b. clean: wipe/polish/rub/scrape/scrub/shave/wash  
c. dry: wipe/wring/wipe/spin/squeeze/suck/towel  
d. straight: comb/blow-dry/stretch/yank  
e. smooth: comb/rub/polish/sand/wash/grind/shave/stir  
f. awake: shake/hit/slap/jerk/touch/shove/push/elbow/shock  
g. sober: slap/scare/shock/strike/hit  
h. dead: shoot/cut/knock/strike  
i. open: kick/click/crack/knock/push/slide/bang/yank/wrench

(44) に挙げた形容詞がそれぞれに自律的な有界スケール解釈を持つということが、結果構文の一定の生産性に反映されていると考えられる。さらに、非選択目的語結果構文においても、これらのうち特に機能不全の否定的含意を持ちうるものが、重要な役割を担っている場合が多い。

- (45) a. They drank the teapot dry.  
b. The dog barked me awake.  
c. The bus will bounce it open. (Megan McDonald, *Judy Moody*)  
(‘it’ は食虫植物を指し、バスに乗っている語り手は、振動で花が開いてしまうことを恐れている。)

従来の研究における〈本来の結果構文〉を特徴づける1つの基準として、目的語が動詞の語彙選択に従うということがあった(影山 1996, Washio 1997, Wechsler 1997, 2005)。しかし、(46)のような他動詞を含む事例は、むしろ結果句主導(もしくは結果事象を表す小節

主導) の非選択目的語結果構文が遍在する可能性を示唆している。

- (46) a. The construction workers hammered me awake. (Embick(2004:378))  
 b. He painted the floor black and blue.

(46a)は、文字通り叩かれたのではなく、工事現場の音がうるさくて目が覚めた、また(46b)は、例えば天井にペンキを塗っていて、誤って床まで汚してしまった、という解釈が可能である。つまり、(43a)の He hammered the metal flat のような結果構文の典型例ですら、the metal が必ずしも動詞行為 hammering の直接の対象ではない、非選択目的語解釈が原理的にありうると考えられる。事実、結果構文が本質的に非選択目的語構文の1つであると分析するのが、近年のミニマリスト統語論の分析では主流となっている (Mateu (2002), McIntyre (2004), Zubizarreta & Oh (2007), Ramchand (2008) などの分析を参照)。そのように考えると、(43)に挙げた例は、動詞と目的語の組み合わせが、たまたま選択目的語の読みと一致して、自然な使役事象解釈が成立しているが、構造的には有界スケールの結果句に基づく非選択目的語結果構文であるということになる。つまり、(43a)における the metal が動詞 hammer の選択目的語であるかのような解釈は、語用論的に得られる推論にすぎないと分析される。このような典型例が持つ潜在的な構造上の多義性が、従来の研究における結果構文の分類に混乱を生じさせる一因となっていたのではないだろうか。以下の議論では、〈見せかけの結果構文〉と対比される〈真の結果構文〉は、有界スケール結果句を基盤として構築される非選択目的語構文であるという立場を採用する。

#### 4.2 結果構文の半生産性と有界スケール

英語が構造的に非選択目的語を許すのであれば、その類型論的説明とは独立に、なぜそのような表現が完全に自由ではなく、かなり狭く制限されているのかも考えなければならない。ここでは、結果句の有界スケール解釈に基づいて問題を整理し、説明の見通しを述べる。

結果構文の有界スケール解釈は、(I)結果句自体が固有の語彙意味として有界スケール解釈を持つ場合と、(II)イディオムの機能不全解釈により有界スケール解釈を持つ場合に大きく分けて考えることができる。

(I)の場合、非選択目的語構文の構造が基本であるとすれば、変件事象に対応する小節と、原因事象に対応する動詞とのあいだに、常に推論による整合的な解釈が成立しなければならない。なぜなら、動詞と目的語のあいだで、意味選択に基づく関連づけがそれ自体としては与えられないからである。サブケースとしては、‘hammer the metal flat’や‘wipe the table clean’のように、動詞の典型的な意味選択と変件事象の主体(=構文の目的語)のタイプが一

致するために、定着度の高い世界知識(=シナリオ)に基づく推論が容易に得られる場合から、‘drink the pub dry’や‘run the pavement thin’のようにメトニミー等の比喩的理解を介した推論による中間レベルのもの、さらに‘bark someone awake’のように、安定した世界知識ではなく、むしろその場限りの文脈情報に大きく依存したワンショット型の解釈に基づく場合があるだろう。世界知識としての慣用的なシナリオに依存するタイプは、まさにそのシナリオの慣用性から、動詞行為と結果句の組み合わせが慣用表現として固定されることに加え(e.g. wipe\_\_clean), 前述したように有界性スケールを持つ形容詞のレパートリーが限定されていることから、構文としての拡張性は低いものにならざるをえない。一方、動詞行為と結果句の組み合わせを認可する際に発話状況への文脈依存度が高い場合も、まさにその理由で創造的で稀少な結果構文ということになる(鈴木 2008)。

次に(II)の場合は、(a)機能不全の形容詞や進入/離脱を表す前置詞句(および不変化詞)と、(b)再帰代名詞目的語や譲渡不可能な身体部位目的語が、それぞれ組み合わせられた構文イディオムとして、活動動詞であれば比較的自由に生じることができる。一定の生産性を持つ構文と見られるゆえんである。次の4.3節では、結果表現において特に高い生産性を示すPP結果句について、その生産性のメカニズムをさらに考察する。

#### 4.3 PP結果句の生産性

有界スケール解釈を持つPP結果句は、(47)の例が示すようなある種のイディオムの解釈(行為の過剰性)を伴い、多様な動詞(主に非能格活動動詞)と組み合わせられて、構文として高い生産性を示す。

- (47) a. He laughed himself out of job. (笑いすぎて職を失う)  
 b. She coughed herself out of sleep. (激しい咳をして目が覚める)  
 c. He ate himself off the team. (食べすぎて太り、チームからはずされる)  
 d. You can {jog/swim/walk} your fat off. (ジョギング/水泳/散歩を一生懸命してやせる)

歴史的には、形容詞が最初に用いられたものが、やがて意味的に対応するPP結果句の方がより一般的になっていく傾向が見られることが、都築(2007)によって指摘されている(例えば, asleep から to sleep へ)。本稿の議論に従えば、これは最初に副詞的・付加詞的に用いられた形容詞(=見せかけの結果句)が、PPの形式を得ることにより明示的な有界スケール解釈を持つ自律的な構文性を獲得し、広く用いられるようになったものと考えられる。

さらに、PP結果句は、(48)のような生産的に項を読み換えるしくみにより、動詞行為の本来の対象物を、「地(ground)」として降格し、新たに「図(figure)」として非選択目的語

を導入する(49)のような多様な事例を可能にしている。

(48) X acts on Y  $\Rightarrow$  X acts on Z in such a way that Z moves {out of/into} Y

(49) a. “When the pain rises, what will you do?” “Catch it. Bite it into Bobby’s belt.”

(ベルトを噛んで苦痛をこらえる) (Stephen King, *Hearts in Atlantis*)

b. Messenger kissed these questions from her lips. (David Lodge, *Thinks...*)

c. He frightened the hiccups out of her. (Google 検索に基づく作例)

d. She melted the handle off the coffee pot. (Google 検索に基づく作例)

e. Without meaning to, he had frozen her out of this conversation. (COBUILD)

形容詞結果句との大きな違いは、前置詞が本来的に二項間の関係性を表すカテゴリーであることにより、本来的な他動詞との組み合わせであっても、選択目的語が完全に抑圧されるのではなく、前置詞の補部として降格されるかたちで構造上保持されるという点である(鈴木2008)。このことは、(49a-e)において、PP結果句内の名詞句が、それぞれ動詞本来の選択目的語として解釈できることから明らかである。この特性により、形容詞結果句とは異なり、PP結果句は、文法外の文脈的サポートが比較的少ない状況でも整合的な解釈が得やすく、より強い拡張性を持つと考えられる。

このように、PP結果句は、有界スケール解釈が明示的に得られることと、整合的な解釈を得るのに文脈依存度が相対的に低いことから、非選択目的語の導入に関して形容詞結果句よりも大きな役割を担っているといえる。

## 5. お わ り に

本稿では、〈見せかけの結果構文〉の特性と範囲を再検討することにより、英語の結果構文には、動詞の語彙的な結果含意に基づく動詞主導の〈見せかけの結果構文〉と、自律的な有界スケール解釈を持つ結果句(有界スケールの形容詞結果句とPP結果句)を基盤とし、様々な動詞と組み合わせられる拡張性を持った〈真の結果構文〉があることを論じた。前者は、動詞が語彙的に本来含意する結果産物/状態が文構築における主たる動機づけを担うのに対し、後者は、より抽象的なスケール解釈とともに、文脈情報に大きく依存した結果構文であり、それゆえに構文としての創造的拡張性を担っているともいえる。後者のタイプは、構造的に非選択目的語が導入されるため、動詞の活動事象と結果句小節の結果事象を推論に基づいて整合的に解釈しなければならないという要請が、結果構文を全体として半生産的な構文にとどめている要因となっていることを指摘した。

## 参 考 文 献

- Beavers, John (2005) "Scalar Complexity and the Structure of Events," *Event Structures in Linguistic Form and Interpretation*, ed. by Johannes Dolling and Tatjana Heyde-Zybatow, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Boas, Hans C. (2003) *A Constructional Approach to Resultatives*, CSLI Publications, Stanford.
- Cruse, Alan (1980) "Antonyms and Gradable Complementaries," *Perspektiven der Lexikalischen Semantik: Beiträge zum Wuppertaler Semantikkolloquium vom 2-3*, ed. by Dieter Kastovsky, 14-25, Bouvier Verlag, Bonn.
- Cruse, Alan (2000) *Meaning in Language: An Introduction to Semantics and Pragmatics*, Oxford University Press, Oxford.
- Embick, David (2004) "On the Structure of Resultative Participles in English," *Linguistic Inquiry* 35, 355-392.
- Goldberg, Adele (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, University of Chicago Press, Chicago.
- Goldberg, Adele and Ray Jackendoff (2004) "The English Resultative as a Family of Constructions," *Language* 80, 532-568.
- Hale, Ken and Samuel Keyser (2002) *Prolegomenon to a Theory of Argument Structure*, The MIT Press, Cambridge.
- Harley, Heidi (2005) "How Do Verbs Get Their Names?: Denominal Verbs, Manner Incorporation, and the Ontology of Verb Roots in English," *The Syntax of Aspect: Deriving Thematic and Aspectual Interpretation*, eds. by Nomi Erteschik-Shir and Tova Rapoport, 42-64, Oxford University Press, Oxford.
- Hay, Jennifer, Christopher Kennedy and Beth Levin (1999) "Scale Structure Underlies in 'Degree Achievements'," *Semantics and Linguistic Theory* 9, 127-144.
- Horrocks, Geoffrey and Melita Stavrou (2003) "Actions and their Results in Greek and English: The Complementarity of Morphologically Encoded (Viewpoint) Aspect and Syntactic Resultative Predication," *Journal of Semantics* 20, 297-327.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Iwata, Seizi (2006) "Argument Resultatives and Adjunct Resultatives in a Lexical Constructional Account: The Case of Resultatives with Adjectival Result

- Phrases,” *Language Sciences* 28, 449-496.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論—言語と認知の接点』, くろしお出版, 東京.
- Kennedy, Christopher and Louise McNally (2005) “Scale Structure and the Semantic Typology of Gradable Predicates,” *Language* 81, 345-381.
- Krifka, Manfred (1998) “The Origin of Telicity,” *Events and Grammar*, ed. by Susan Rothstein, 197-235, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.
- Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, MIT Press, Cambridge.
- Levinson, Lisa (2006) “Finding Arguments for Pseudo-Resultative Predicates,” Paper read at Penn Linguistics Colloquium, Feb 25, 2006. [<http://home.nyu.edu/~l1222>]
- Maruta, Tadao (1995) “The Semantics of Depictives,” *English Linguistics* 12, 125-146.
- Mateu, Jaume (2002) *Argument Structure: Relational Construal at the Syntax-Semantics Interface*, Doctoral dissertation, Universitat Autònoma de Barcelona.
- McIntyre, Andrew (2004) “Event Paths, Conflation, Argument Structure and VP Shells,” *Linguistics* 42, 523-571.
- 小野尚之 (2007) 「結果述語のスケールの複合性」, 小野尚之編『結果構文研究の新視点』, 68-101, ひつじ書房, 東京.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
- Ramchand (2008) *Verb Meaning and the Lexicon: A First-Phase Syntax*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (2001) “An Event Structure Account of English Resultatives,” *Language* 77, 766-797.
- Rapoport, Tova R. (1999) “Structure, Aspect, and the Predicate,” *Language* 75, 653-677.
- Suzuki, Toru (2006) “Between Conventionality and Compositionality: The Resultative Construction Deconstructed?” *English Linguistics* 23, 213-244.
- 鈴木亨 (2007) 「結果構文における有界性制約を再考する」, 小野尚之編『結果構文研究の新視点』, 103-141, ひつじ書房, 東京.
- 鈴木亨 (2008) 「結果構文の半生産性と創造性のありか」, 金子義明・高橋大厚・小川芳

- 樹・菊地朗編『言語研究の現在—形式と意味のインターフェース』, 387-396, 開拓社, 東京.
- 都築雅子(2007)「ゲルマン語に見られる派生的結果構文に関する一考察」, 小野尚之編『結果構文研究の新視点』, 144-176, ひつじ書房, 東京.
- Vanden Wyngaerd, Guido (2001) “Measuring Events,” *Language* 77, 61-90.
- Washio, Ryuichi (1997) “Resultatives, Compositionality and Language Variation,” *Journal of East Asian Linguistics* 6, 1-49.
- Wechsler, Stephen (1997) “Resultatives Predicates and Control,” *Proceedings of the 1997 Texas Linguistics Society Conference, The Syntax and Semantics of Predication*, eds. by Ralph C. Blight and Michelle J. Moosally, 307-322, University of Texas at Austin (Linguistics Department), Austin.
- Wechsler, Stephen (2005) “Resultatives under the ‘Event-Argument Homomorphism’ Model of Telicity,” *The Syntax of Aspect: Deriving Thematic and Aspectual Interpretation*, eds. by Nomi Erteschik-Shir and Tova Rapoport, 255-273, Oxford University Press, Oxford.
- Zubizarreta, Maria Luisa and Eunjeong Oh (2007) *On the Syntactic Composition of Manner and Motion*, MIT Press, Cambridge.

# Verb-driven Resultatives and Result Phrase-driven Resultatives: A Perspective from the Boundedness Constraint

Toru SUZUKI

This paper considers two types of the resultative construction, namely ‘spurious resultatives’ and ‘true resultatives.’ Although several recent criticisms of the boundedness approach to resultatives point out the occurrence of (unbounded) open-scale adjectives in some resultatives, it is shown that within my extended analysis of the semantics of ‘transformation’ events those counterexamples observed are properly classified as ‘spurious resultatives,’ which involve adverbial modification of the resultant product by apparent result phrases, while ‘true resultatives’ are still aptly characterized in terms of the boundedness constraint. It is also argued that ‘true resultatives’ should assume the basic structure that allows unselected objects, which can then partly account for the semi-productive characteristics of the resultative construction in general.

# NPI licensing by FORCE<sub>U</sub> features\*

Naoto TOMIZAWA

## 1. Introduction

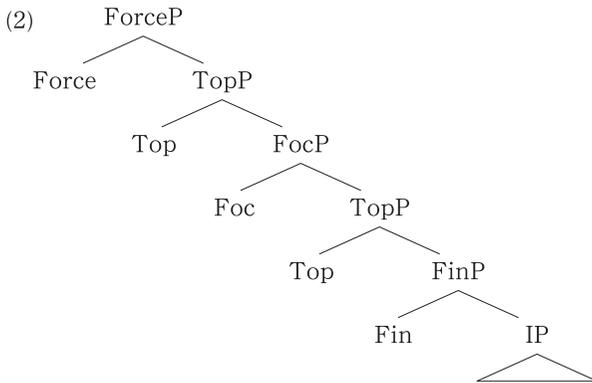
This paper proposes a new analysis of the licensing condition on the so-called negative polarity items (NPIs) and derives their well-known distributional properties such as c-command, intervention, and downward entailment from this new analysis. The main proposal to be pursued in this paper is that NPIs are FORCE<sub>U</sub> variables and the FORCE<sub>U</sub> variables must ultimately be connected to C with a FORCE<sub>U</sub> feature, which is a C-head that always takes as its TP complement a proposition that has not been established to be true in the relevant discourse.

- (1) a. NPIs are FORCE<sub>U</sub> variables.
- b. A FORCE<sub>U</sub> variable must ultimately be connected to C with a FORCE<sub>U</sub> feature.

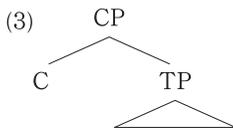
FORCE is a cover term for various kinds of information that C carries such as a question, a declarative, an exclamative, and so on. The set of information is called “force” in Chomsky (1995) and “type” in Cheng (1991). I will use the term FORCE just for the sake of simplicity. Rizzi (1997) elaborates the notion of FORCE and proposes the following complementizer system, along the spirit of the “split IP hypothesis” put forth by Pollock (1989).

---

\* This is an interim report of the research I have been conducting with support from Japan Society for the Promotion of Science: grant #19520411.



Instead of this articulated C system, however, this paper assumes a simple CP structure in (3) with the option of multiple Specifiers.



C is the place where various FORCE features are licensed. The list of instances of FORCE features includes: a question, a declarative, an exclamative, an imperative, a relative, a comparative, an adverbial of a certain kind (such as a conditional), a topic, a focus, a negative. Of these FORCE features, some are licensed clause-internally and others clause-externally. In matrix *yes/no* questions, for example, the question-FORCE feature is licensed in relation with the relevant discourse, whereas in embedded *yes/no* questions the feature is licensed by the selecting predicate. In this sense, the complementizer system can be viewed as “the interface between a propositional content (expressed by the IP) and the superordinate structure (a higher clause or, possibly, the articulation of discourse, if we consider a root clause)” (Rizzi 1997: 283).

Given this unifying role of the C system, we can characterize the domains that license NPIs as a proper subset of the set of CP domains defined by FORCE features. To be specific, I will claim that NPIs are licensed by C with a FORCE feature that takes an “unestablished” proposition, or simply FORCE<sub>U</sub>. This paper attempts to derive the distribution/licensing of NPIs in what Ladusaw (1980) calls downward entailing (DE) domains as well as those NPIs located in the scope of negation, from the FORCE nature of the C by which NPIs are c-commanded.

The paper is organized as follows. Section 2 deals with the formalization of the licensing mechanism of  $\text{FORCE}_U$  variables. It is claimed that  $\text{FORCE}_U$  variables can be unselectively bound by an operator and that the  $\text{FORCE}_U$  variables have to be connected to C with a  $\text{FORCE}_U$  feature via movement. Section 3 considers NPI licensing in what Ladusaw (1980) call downward-entailing domains. It is argued that NPIs in these domains are uniformly licensed by C with a  $\text{FORCE}_U$  feature. Section 4 is a conclusion.

## 2. $\text{FORCE}_U$ -variables

### 2.1. The $\text{FORCE}_U$ -based analysis

Given that NPIs are  $\text{FORCE}_U$ -variables, the following property follows from it.

- (4) a. Since NPIs are variables, they must be bound; otherwise, a violation of free variable would arise.  
 b. Since NPIs have  $\text{FORCE}_U$  features, they must be connected to the C system.

An immediate consequence of (4a) is the so-called intervention effect observed with NPIs. Compare the following sentences.

- (5) a. \*John doesn't always call anyone. (Szabolcsi 2004)  
 b. \*I don't think that every boy has any potatoes. (Horn & Lee 1995)  
 c. \*John didn't give every charity any money. (Horn & Lee 1995)
- (6) a. John doesn't call anyone.  
 b. I don't think that John has any potatoes.  
 c. John didn't give the charity any money.

NPIs are not operators; rather, they are variable that undergo unselective binding by the nearest operators. In (5a)-(5c), NPIs are unselectively bound by *always*, *every boy* and *every charity*, respectively. As a result,  $\text{FORCE}_U$ -variables form "FORCE-chains" with the operators that do not have  $\text{FORCE}_U$  features; and we have a type-mismatch in (5a)-(5c). On the other hand, NPIs in (6a)-(6c) are unselectively bound by *doesn't*, *don't* and *didn't*, respectively. Negative operators take a proposition that is not established to be true, so that they are compatible with the feature  $\text{FORCE}_U$ . Then, in (6a)-(6c), unselective binding of NPIs by negation creates FORCE-chains that are uniform in the light of  $\text{FORCE}_U$  fea-

tures.

The original cases of the intervention effect that Linebarger (1987) discusses are illustrated in (7) and (8).<sup>1</sup>

(7) She didn't wear any earrings to every party.

i. \*Not Ay Ex (she wore  $x$  to  $y$ )

It wasn't to every party that she wore any earrings.

ii. Ay NOT Ex (she wore  $x$  to  $y$ )

For each party ( $y$ ), it was to  $y$  that she didn't wear any earrings.

iii. NOT Ex Ay (she wore  $x$  to  $y$ )

There are no earrings that she wore to every party.

(8) \*He didn't budge an inch because he was pushed, but because he fell.

Sentence (7) has the following configuration.

(9) [<sub>TP</sub> she [<sub>T</sub> didn't][<sub>VP</sub> she  $v$  [<sub>VP</sub> any earrings [<sub>V</sub> wear [to every party]]]]]

NPI (*any earrings*) is directly c-commanded by *didn't*; just as in the cases of (6a)-(6c), it is licitly connected to an operator with a FORCE<sub>U</sub> feature. If the universal quantifier (*every party*) stays within the scope domain of the negation, then we get the interpretation in (7iii). If it takes wider scope, on the other hand, we have the interpretation given in (7ii). In order to obtain the interpretation in (7i), however, we would have to connect *any earrings* to *every party*, which is impossible because of the configuration they appear in: the nearest binder of the NPI cannot be *every party*. Therefore, our analysis gives a principled account of the lack of the interpretation in (7i).

In (8), the negative polarity expression (*budge an inch*) is c-commanded by *didn't* and they form a licit FORCE<sub>U</sub> chain in the light of (4a). Since FORCE is a characteristic of the C system, it is quite natural to hypothesize that the FORCE<sub>U</sub> chain, headed by negation, is connected to the matrix C, as stated in (4b), and that this process guarantees that the

---

<sup>1</sup> Linebarger (1987: 338) formulates the relevant constraint as in (i).

(i) The Immediate Scope Constraint

A negative polarity item is acceptable in a sentence S if in the LF of S the subformula representing the NPI is in the immediate scope of NOT only if (a) it occurs in a position that is the entire scope of NPI, and (b) within this proposition there are no logical elements intervening between it and NOT.

sentence is interpreted as a negative sentence. If this is on the right track, then we cannot get the “not X but Y” interpretation that the sentence in (8) originally intends to convey, where the person that *he* refers to is understood to have shifted his posture.

Let us here take a look at the relevant mechanism more closely. Consider why the following sentence is excluded as ungrammatical.

(10) \*Anyone didn't invite John. (Progovac 1994)

We cannot appeal to the failure of *didn't* to c-command *anyone*, because such a failure is obtained only at the “surface structure”. From a derivational point of view, *anyone* is c-commanded, and hence unselectively bound, by *didn't* at a relatively earlier stage of the derivation, illustrated in (11a). Here, *didn't* and *anyone* form a licit FORCE<sub>U</sub> chain. Later, *anyone* internally merges with the whole TP, yielding the structure in (11b), where the raised *anyone* is no longer c-commanded by *didn't*.

(11) a. [<sub>TP</sub> [<sub>T</sub> didn't] [<sub>vP</sub> anyone [<sub>v'</sub> v [<sub>VP</sub> invite John]]]]  
 b. [<sub>TP</sub> anyone [<sub>T</sub> [<sub>T</sub> didn't] [<sub>vP</sub> ~~anyone~~ [<sub>v'</sub> v [<sub>VP</sub> invite John]]]]]

Therefore, the ill-formedness of (10) could not be attributed to a failure of *didn't* to licitly bind *anyone*. It is natural to contend that these FORCE<sub>U</sub> chains are licensed at a Complementizer system, as stated in (4b), because FORCE<sub>U</sub> features are properties of the C system by definition. This idea can be implemented in the following way.

(12) A FORCE<sub>U</sub> chain (F<sub>1</sub>, ..., F<sub>n</sub>) is connected to C iff F<sub>1</sub> is (adjoined to) C.

In the case of the derivation illustrated in (11), the condition in (12) requires the head of the FORCE<sub>U</sub> chain (= *didn't*) to be adjoined to C at LF. This LF adjunction of *didn't* to C is, however, blocked by the presence of the non-initial member of the FORCE<sub>U</sub> chain (namely, *anyone*) in a position structurally superior than *didn't*, as illustrated in (13).<sup>2</sup>

<sup>2</sup> One might argue that since *anyone* in [Spec,TP] and *didn't* in T are equidistant from the probe (C), either may be licitly chosen as the goal. If this is the case, we can expect *didn't* to undergo LF movement to adjoin to C, satisfying the condition in (12). However, see Ochi (2008), who proposes that equidistance is available/operative only during the stages of the derivation where a c-commanding phase head is not introduced. In (13), the relevant structure is the one in which a phase head (C) is introduced. This is why a configurational differentiation of *anyone* from *didn't* is obtained.

- (13) [<sub>CP</sub> C [<sub>TP</sub> anyone [<sub>T</sub> [<sub>T</sub> didn't] [<sub>vP</sub> ...

Let me note here that *anyone* cannot move to adjoin to C. This is because it is not a quantifier and as a result it does not have an ability to initiate (LF) movement by itself.

In sum, starting with the variable nature of NPIs, we have established the following licensing system for FORCE<sub>U</sub> features of NPIs.

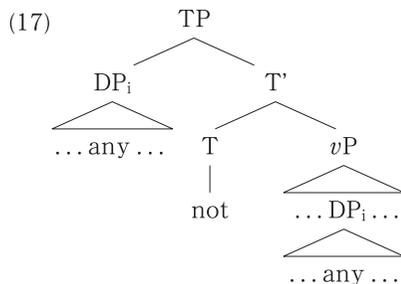
- (14) a. Being a FORCE<sub>U</sub>-variable, an NPI is bound by whatever operator c-commands it (if there is one).  
 b. If the local binder does not have a FORCE<sub>U</sub> feature, then a type-mismatch arises.  
 c. The head element of the FORCE<sub>U</sub> chain that has an NPI as its member must be connected to C through movement, if such a connection has not yet been established.  
 d. Since NPIs are not operators, they cannot initiate LF movement by themselves.

## 2.2. Anti-c-command contexts

Let us consider anti-c-command contexts extensively discussed by Nishioka (2007).

- (15) a. Pictures of anyone did not seem to be available.  
 b. A good solution to any of these problems does not exist.  
 (16) a. That anyone might do anything like that never occurred to him.  
 b. That anybody would leave the company wasn't mentioned in the meeting.

First, the schematic structure for (15a) and (15b) is something like (17), where DP<sub>i</sub> within *vP* has undergone A-movement to [Spec, TP].



The NPI within  $vP$  is c-commanded, and hence bound, by negation in T, so that a  $FORCE_U$  chain is successfully formed. At a later stage of the derivation, the DP that includes the NPI undergoes A-movement to [Spec,TP]. One crucial difference between the configuration in (17) and the one in (13) we saw above is that in the latter the raised NPI does c-command negation, but not in the former. In (17), neither NPI nor negation c-commands the other. Therefore, the head of the  $FORCE_U$  chain (= negation), which is a quantifier, can undergo LF movement to C.

An essentially similar analysis is available for the well-formedness of sentences like (16a) and (16b).<sup>3</sup>

Chain formation of an NPI and a  $FORCE_U$  operator is not mediated by movement but by c-command. This means that the establishment of binding relation between them may be achieved long distance. It is therefore expected that a licit  $FORCE_U$  chain is created in the following cases, cited again from Nishioka (2007).

- (18) a. A doctor who knew anything about acupuncture was not available.  
 b. A messiah who would bring any home didn't appear to the Jews.

Let us now turn to another type of anti-c-command context that Nishioka discusses:

- (19) a. I gave pictures of no one to anyone.  
 b. Even the writers of none of the reports thought that any rain had fallen anywhere else.

In these examples, there is no c-command relation at all between NPIs and negative operators. Therefore, the NPIs are not bound by negation during the overt component. In the covert component, the negative operators undergo LF-movement and adjoin to C. After this operation, the NPIs are c-commanded, and hence unselectively bound, by the C-adjoined negation. Now that the NPIs form licit  $FORCE_U$  chains with the C-adjoined negation and that the negation has already been adjoined to C, the  $FORCE_U$  chains so created have been licitly connected to C.

---

<sup>3</sup> Let me note in passing that the present analysis presupposes that the sentence-initial *that*-clause has a "reconstruction" site within the domain c-commanded by negation in T. This means that sentential subjects are not always base-generated in topic positions. Cf. Koster (1978) and Alrenga (2005).

The difference in grammaticality between (20a) and (20b) reflects the success or failure of the establishment of connection to C of the FORCE<sub>U</sub> chains headed by negation.

- (20) a. Which of the kids doesn't anyone like?  
 b. \*Which of the kids does anyone not like? (McCloskey 1997)

In (20b), just as in (13) above, LF movement of *not* to C is blocked by the presence of *anyone*, which is located in a position closer to C than *not* is. In (20a), on the other hand, the negation (*doesn't*) has connected to C by overt movement that is independently induced by the Q feature on C. To put it differently, the connection of the head of the FORCE<sub>U</sub> chain to C in (20a) is achieved during the process of the feature-checking that has nothing to do with the interpretation of FORCE<sub>U</sub> features.<sup>4</sup>

The contrast in grammaticality between (21a) and (21b), drawn from Ladusaw (1980), is also accounted for.

- (21) a. Rarely is anyone audited by the IRS.  
 b. \*Anyone is rarely audited by the IRS.

An essentially similar analysis accounts for the contrast in grammaticality between (22a) and (22b), on the one hand, and (23a) and (23b), on the other. (The examples are drawn from Progovac 1994.)

- (22) a. ?\*John gave only his girlfriend any flowers.  
 b. ?\*John told only Mary about any books.  
 (23) a. Only to his girlfriend did John give any flowers.  
 b. Only last year did John get any grey hairs.

*Only*-phrases have dual functions in the sense that the relevant proposition is taken to be established to be true in relation with the individual/entity denoted by the DPs *only* modifies, but not in relation with all the other individuals/entities imaginable. In other

---

<sup>4</sup> The well-formedness of the following sentences is also explained in the same way.

- (i) a. Didn't any one of you invite him?  
 b. She didn't invite him; neither did any one of her friends.

words, *only*-phrases can be analyzed as having a FORCE<sub>U</sub>-feature. They are potential binders of FORCE<sub>U</sub>-variables, and actually form FORCE<sub>U</sub>-chains with NPIs. However, *only*-phrases are not operators. This is why they do not have an inherent ability to move themselves to C. Since the FORCE<sub>U</sub> chains are not connected to C, they are not properly interpreted.

In (23a) and (23b), on the other hand, *only*-phrases are assigned topic-features, which are attracted by EPP-feature on C. NPIs (*any flowers* in (23a) and *any grey hairs* in (23b)) are c-commanded, and hence bound, by the *only*-phrases, creating licit FORCE<sub>U</sub> chains. Since the chains are connected to C during the feature-checking process of the topic-features on *only*-phrases, the resulting structures are properly interpreted.<sup>5</sup>

### 3. NPI licensing in non-negative contexts

NPIs are licensed by a variety of non-negative items, some of which are drawn from Linebarger (1987), Ladusaw (1980) and Progovac (1994):

(24) Antecedents of conditionals

- a. If you steal any food, they'll arrest you.
- b. \*If you steal food, they'll ever arrest you.

(25) Comparatives

- a. He was taller than we ever though he would be.
- b. \*He was so tall that we ever thought he would bump his head.

(26) Adversative predicates

- a. He refused to budge an inch.
- b. \*He promised to budge an inch.
- c. I'm surprised that he ever speaks to her.
- d. \*I'm sure that he ever speaks to her.
- e. I doubt that he much likes Louise.
- f. \*I think he much likes Louise.

(27) *Only*

---

<sup>5</sup> It is well known that NPIs are licensed by *only*-phrases in [Spec,TP], as illustrated by (i).

(i) Only Mary showed any respect for the visitors. (Progovac 1994)

To tackle with the well-formedness of this kind of examples, we have to consider the details of the special relation between C and T. In this respect, Chomsky's (2005) attempt is worth considering, though I will put the issue aside here.

- a. Only to his girlfriend did John give any flowers.
  - b. ?\*John gave only his girlfriend any flowers.
- (28) Relative clauses headed by a universal quantifier
- a. Everyone who knows a damn thing about English knows that it's an SVO language.
  - b. \*Someone who knows a damn thing about English knows that it's an SVO language.
- (29) Questions
- a. Have you ever met George?
  - b. \*You have ever met George.

Ladusaw (1980) attempts to derive the paradigms in (24)-(29) from the nature of downward entailment. This is quite successful in the cases of, for example, antecedents of conditionals (24) and relative clauses with a universal quantifier (28). That antecedents of conditionals are downward-entailing contexts is indicated by the fact that in (30) below, the entailment proceeds from (30a), with the superset of pets, to (30b), the subset of cats.

- (30) a. If you have a pet, you will not be allowed in.  
 b. If you have a cat, you will not be allowed in. (Progovac 1994)

Similarly, the entailment relation between (31a) and (31b) shows that a relative clause with a universal quantifier is another downward entailing context.

- (31) a. Everyone who has a pet will get in free.  
 b. Everyone who has a cat will get in free. (Progovac 1994)

However, *yes/no* interrogative sentences are not downward-entailing contexts, as pointed out by Progovac (1994), who notes that Ladusaw himself has noticed it. This is obvious from the fact that (32a) does not “downwardly” entail (32b).

- (32) a. Do you have a pet?  
 b. Do you have a cat?

In the analysis we pursue in this paper, by contrast, the contexts given in (24)-(29) form a natural class, which I will illustrate in what follows. First, consider negations and questions. Negative sentence (33a) below has an LF representation as in (33b), where C has a negative FORCE feature, to which *didn't* has adjoined. Here, the proposition that C<sub>NEG</sub> takes (i.e. *John came to the party*) is never a proposition established to be true. This clearly shows that C with a negative FORCE takes a proposition that is not established to be true. Let us refer to such a proposition as an “unestablished proposition” for the sake of simplicity.

- (33) a. John didn't come to the party.  
 b. [<sub>CP</sub> didn't<sub>i</sub>+C<sub>NEG</sub> [<sub>TP</sub> John T<sub>i</sub> come to the party]]

Interrogative sentences also have C with an unestablished proposition. For example, (34a) has an LF representation (34b).

- (34) a. Did John come to the party?  
 b. [<sub>CP</sub> did+C<sub>Q</sub> [<sub>TP</sub> John T<sub>i</sub> come to the party]]

C<sub>Q</sub> takes a proposition: *John came to the party*. This proposition is not established to be true in the context that the relevant sentence is expressed. From this consideration, it can be concluded that negation and question form a natural class in the sense that they have FORCE features that require an unestablished proposition.

Bearing this in mind, let us now turn to the nature of FORCE features that provide contexts for other licit NPI licensing examples. Antecedents of conditionals, as we saw in (24), are viewed as contexts where the proposition that the relevant C with a conditional FORCE feature takes is an unestablished one:

- (35) a. If John come to the party, . . .  
 b. [<sub>CP</sub> C<sub>CONDITIONAL</sub> [<sub>TP</sub> John T come to the party]]

Similarly, clauses introduced by *before* provide another context where the TP selected by C represents a proposition that has not been established to be true at the moment when the matrix event that *before*-clauses modify takes place. It is expected that sen-

tences with an NPI in *before*-clauses are properly interpreted. This expectation is correctly borne out, as the well-formedness of sentence (36a) shows.

- (36) a. John left before he ate any vegetables. (Progovac 1993)  
 b. [<sub>CP</sub> C<sub>UNREALIZED</sub> [<sub>TP</sub> John T ate vegetables]]

(36a) contrasts sharply with (37), which has an NPI appear in an *after*-clause. *After*-clauses take a TP proposition that has been established to be true in the relevant discourse. Therefore, they are incompatible with NPIs.

- (37) \*John left after he ate any vegetables. (Progovac 1993)

Let us now look at comparatives such as (38a). The comparative CP clause introduced by *than* has an empty operator in its Spec, with its value unspecified. Therefore, the proposition that the comparative C takes should be something like (38b).

- (38) a. Mary is taller than any girl in her class is. (Progovac 1993)  
 b. [<sub>CP</sub> C<sub>COMPARATIVE</sub> [<sub>TP</sub> any girl in her class T is *x*-much tall]]

The presence of unspecified value of height makes it impossible to evaluate the truth/false value of the proposition. As a result, NPIs are allowed to appear in this domain.

Relative clauses contain operators, just as comparative clauses. But the following example shows that relative operators apparently do not contribute to the licensing of NPIs, unlike comparative operators.

- (39) \*Someone who has any pets will get in free. (Progovac 1993)

One crucial difference between relative operators and comparative operators is that the value of the former can be specified by the “antecedent” of the operators (*someone* in the case of (39)) whereas the value of the latter cannot be specified, as we saw in (38b).<sup>6</sup> From this consideration, we will conclude that relative operators are not the key agents to license NPIs. With this in mind, let us examine the contrast in grammaticality between

---

<sup>6</sup> Cf. Chomsky's (1986) strong binding.

(39) and (40).

(40) Everyone who has any pets will get in free. (Progovac 1993)

Suppose that P = the proposition (*x has any pets*) and Q = the proposition (*someone/everyone will get in free*). Then, (39) is represented as (41), while (40) is represented as (42).

(41)  $\exists x (P \ \& \ Q)$

(42)  $\forall x (P \rightarrow Q)$

In (42), the proposition P serves as the antecedent of a conditional. As we saw in the discussion of (35) above, antecedents of conditionals allow appearance of NPIs. This is why *any pets* in (40) is licit. In (41), on the other hand, the proposition P is a “regular” proposition and has no appropriate FORCE feature that can license an NPI.

Let us now turn to adversative predicates such as *refuse*, *surprised*, *doubt*. They take propositions that are “unexpected” in the relevant discourse. This semantic property is reflected on C these predicates take as their complement: C has a FORCE feature of “unexpected.” Because of this FORCE feature, the proposition it takes has to be one that is “unexpected,” whether it is actually true or not. Thus, example (43a) has an LF representation in (43b), where the TP proposition is treated as a proposition that has not been established to be true in the relevant discourse.

(39) a. I doubt that Mary trusts anyone. (Progovac 1993)

b.  $[_{CP} \ C_{UNEXPECTED} \ [_{TP} \ \text{Mary T trusts anyone}]]$

Therefore, NPIs are allowed in the complement clause of these predicates.

Notice here that our analysis depends crucially on the FORCE feature of C. Therefore, just as Progovac (1993, 1994) notes, these predicates cannot license NPIs in sentences like (40a), since there is no C with an appropriate FORCE feature.

(40) a. \*Mary forgot anything. (Progovac 1993)

b. Mary forgot that anyone visited her on Monday.

To summarize the discussion, there are a variety of FORCE features. Of these, only the features that take a complement proposition that has not been established to be true can license NPIs.

- (41) FORCE<sub>U</sub> features (taking a proposition that has not been established to be true)
- a. negation
  - b. question
  - c. conditional (*if*, relative clauses)
  - d. unrealized (*before*-clauses)
  - e. comparative
  - g. unexpected (adversative predicates)

FORCE features that are listed in (42) do not license NPIs.

- (42) FORCE features that do not license NPIs
- a. declarative
  - b. topic
  - c. focus
  - d. exclamative
  - e. imperative

#### 4. Conclusion

This paper argues that NPIs are FORCE<sub>U</sub> variables and they are licensed by FORCE<sub>U</sub> features. Since FORCE features are properties of C, NPIs are always licensed in the CP domain, just as Progovac (1993, 1994) convincingly argues for. It is shown that since FORCE<sub>U</sub> includes not only negation and question but also a conditional, comparative, and other unexpected/unrealized FORCE, it accounts for the NPI-licensing domain that Ladusaw (1980) tries to derive from the notion of downward entailment.

## References

- Alrenga, Peter. 2005. A sentential subject asymmetry in English and its implications for complement selection, *Syntax* 8, 175-207.

- Cheng, Lisa. 1991. *On the typology of wh questions*. Doctoral dissertation, MIT.
- Chomsky, Noam. 1986. *Knowledge of language: Its nature, origin, and use*. New York: Praeger.
- Chomsky, Noam. 1995. *The Minimalist program*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2005. On phases. Ms., MIT.
- Horn, Laurence R. & Young-Suk Lee. 1995. Progovac on polarity, *Journal of Linguistics* 31, 401-424.
- Koster, Jan. 1978. Why subject sentences don't exist. In *Recent transformational studies in European languages*, ed. S. J. Keyser, 53-64. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Ladusaw 1980. *Polarity sensitivity as inherent scope relations*. New York: Garland.
- Linebarger, 1987. Negative polarity and grammatical representation, *Linguistics & Philosophy* 10, 325-387.
- McCloskey, Jim. 1997. Subjecthood and subject positions. In *Elements of grammar*, ed. L. Haegeman, 197-235. Dordrecht: Kluwer.
- Nishioka, Nobuaki. 2007. *Eigo hiteibun no toogoron kennkyu*. Tokyo: Kurosio.
- Ochi, Masao. 2008. Kakuno kootai to toogoteki kyokusyosei. Paper read at the 137 th meeting of the Linguistic Society of Japan held at Kanazawa University on November 29, 2008.
- Pollock, J.-Y. 1989. Verb movement, universal grammar and the structure of IP, *Linguistic Inquiry* 20, 365-424.
- Progovac, Ljiljana. 1993. Negative polarity: Entailment and binding, *Linguistics and Philosophy* 16, 149-180.
- Progovac, Ljiljana. 1994. *Negative and positive polarity: A binding approach*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rizzi, Luigi. 1997. The fine structure of the left periphery. In *Elements of grammar*, ed. L. Haegeman, 281-337. Dordrecht: Kluwer.
- Szabolcsi, Anna. 2004. Positive polarity— negative polarity, *Natural Language & Linguistic Theory* 22, 409-452.

## 素性 FORCE<sub>U</sub>による否定極性表現の認可

富 澤 直 人

否定極性表現（NPI）の認可条件に関する論考は、統語条件に係わるものと意味あるいは論理条件に係わるものの2つに大別することができる。前者は、NPIとその認可子（例えば否定辞）との構造上の位置関係を巡って研究が進められ、両者の直接的なc統御関係ではなく、Cあるいはその指定部を舞台として成立する両者のc統御関係が認可の可否を決定することを支持する証拠が提示されてきた。一方、後者の研究は、下方含意（downward entailment）の概念を中心に進められてきた。本稿は、(i) 節（TP）が担う命題情報とその上位節（あるいは主節の場合にはその命題が表現される談話）との接触領域としての機能を持っているのだと Rizzi (1997) が論じる「CP 領域」の特性（つまり、FORCE）の一部として、この下方含意の特性を捉えること、および、(ii) NPIは数量詞ではなく変更であり特定の演算子（FORCE<sub>U</sub>）によって束縛を受けなければならないという2つの提案を行い、NPIの分布に関する一元的な説明モデルを提示する。

# インターネットを利用した英語学習支援システムの構築

## ——動画配信によるPodcastingの試み——

本多 薫、森田光宏、Mark IRWIN、  
富田かおる、Todd ENSLEN、Jerry MILLER

### 1. はじめに

近年の急激なインターネットやマルチメディア技術の発展は、高等教育における教授・学習のあり方に大きな多様性をもたらしつつある。特にインターネットを活用した学習支援システムが急速に教育現場に普及してきている<sup>1) 2)</sup>。その結果、従来の学習機器に比べ、マルチメディア情報の利用を含めて、学習の内容が多面的、双方向になっている。しかし、学習支援システムをインターネット上に公開することによるコンテンツ（音楽や画像など）の著作権や二次使用などの問題が表面化してきている。また、インターネット上で用いられるコンテンツのデータサイズが大容量化しており<sup>3)</sup>、トラフィックの増加や通信回線への負担が危惧されている。

山形大学人文学部から援助を受け、著者らのグループによりインターネットを利用した英語学習支援システム（Podcasting）を構築し、英語母語話者による英会話を聴取できるように英語音声配信（音声のみ）を行っている。このシステムは主に、中級英語学習者、具体的には、英語を専攻としない大学1年生や2年生をターゲットにし、実際の授業の補助教材として活用している。しかし、昨年度、アンケート調査を行ったところ、静止画（写真）と音声の組み合わせよりも、実際に話者の口元や表情を見ることができる動画の方が、内容理解や発音の学習に効果的であるとの意見が寄せられた<sup>4)</sup>。そのため、WWW（World Wide Web）をベースとする動画を取り入れた英語学習支援システムに移行することとした。なお、インターネットを使った教育は、距離や時間の制約を越えて実現でき、学生の理解のペースやレベルに応じて選択し、繰り返して英語学習できる利点がある。

また、英語音声配信しているWebサイトは数多くあるが、ほとんどは英語の難易度が高く、その内容も時事的なものを取り扱っているものが多く、必ずしも中級英語学習者に適した補助教材としては利用できない。そのため、新たに英語学習支援システムを構築し、学習者のレベルを熟知した教員が英語の難易度や話題（テーマ）などを検討し、コンテンツ（動画、音声、テキストなど）を作成して配信する必要がある。

本稿では、インターネットにおける教育利用と動画配信の諸問題を検討し、動画配信による英語学習支援システム（Podcasting）の構築を述べる。そして、学習者からのアンケート調査をもとに、動画配信による英語学習の Podcasting について検討する。

## 2. 教育とインターネット、動画配信

### 2.1 インターネットの普及

平成5年度に初等中等教育においてコンピュータネットワーク（インターネット）の利用・活用などを検討する実験プロジェクト（100校プロジェクト）<sup>5)</sup>が実施され、平成7年2月から全国の小中高等学校にインターネット回線などが整備された。現在ではほとんどの学校にインターネット回線が整備されている。また、高等学校においては、普通教科「情報」の必修として情報A、情報B、情報Cが導入されている。高等学校学習指導要領解説（情報編）<sup>6)</sup>で示されている「情報活用の実践力」の教育内容の一つとして、情報通信ネットワーク（インターネット）を介しての情報収集能力の習得が求められている。よって、現在の学生は、大学入学以前にインターネットを利用した教育を受けてきている。

また、社会的な情報インフラとしてインターネット（通信回線）が家庭や職場にも導入が進んでいる。日本インターネット協会の調査によれば、2007年3月時点でインターネットを利用している世帯（インターネット世帯浸透率）は83.3%であり、利用者数は8,226万人に上ると報告<sup>7)</sup>されており、Web2.0、電子書籍、映像配信、電子商取引など新しい技術によるWWWの利用が急激に広がっている。

以上のようにインターネット利用に関する教育や通信回線の整備が進んでおり、大学教育においてインターネットを利用する環境が整っていると考えられる。

### 2.2 教育におけるインターネット活用

インターネットを活用した教育事例としては、英語教育<sup>8) 9) 10) 11)</sup>、情報処理教育<sup>2) 12) 13)</sup>、専門職の継続教育<sup>14)</sup>、通信教育<sup>1)</sup>などがある。これらのインターネットを利用した学習支援システムを開発した理由を整理すると、以下のことが挙げられる。

- ①マルチメディア教材によって多様な形態での学習が可能である（音声や動画の活用）。
- ②世界中のデータを拡張教材として、活用できる（リンクや検索エンジンの活用）。
- ③WWWを使用できる環境があれば、専用のソフトウェアを必要としない。
- ④時間・空間の制限を越えて学習でき、時間の有効利用が可能である。
- ⑤自己学習が可能であり、理解度や目標に合わせて学習できる。
- ⑥E-Mailなどを使って交流、レポートの提出や添削が可能である。
- ⑦学習情報の共有ができる（掲示板による学生間の交流など）。

英語教育におけるインターネット活用の特徴としては、英語のニュース記事などのインターネット上にあるコンテンツの利用や掲示板・電子メールによる英語よる交流などがある。しかし、本稿での英語学習支援システム(Podcasting)の開発理由としては、①③④⑤が該当する。

### 2.3 動画配信の技術

自宅のパソコンを使ってインターネットを利用する人のブロードバンド利用率は、79.6%(平成19年度末)になっている<sup>15)</sup>。一般家庭でのブロードバンド回線としては、ADSLや光通信などがあるが、40Mbps~100Mbpsの高速な通信回線が使用できるようになってきている。このような通信回線の進歩もあり、マルチメディアの各種データ(画像、音声、動画など)を配信することが可能となってきている。マルチメディアの各種データの配信の方法としては、データ(ファイル)をダウンロードしてから再生する方法と、データをダウンロードしながら再生するストリーミングと呼ばれる方法がある。ダウンロードしてから再生する方法の利点は、①ホームページの作成が容易、②Webサーバ管理が容易、などがある。しかし、欠点としては、①動画や音声のデータが容易にコピーできる、②大容量のファイルのダウンロード・再生に時間がかかるなどが挙げられる。また、ストリーミングで再生する方法の利点は、①ダウンロードしながら再生可能、②通信速度が遅くても再生可能、③動画や音声のデータがコピーされにくい(ファイルのダウンロードができない)などがある。

また、データ容量が大きい動画をインターネット経由で配信が可能となったのは、コンピュータの高性能化や通信回線の高速化だけではなく、動画の圧縮技術の進歩によるところが大きい。しかし、ストリーミング配信を行える動画の圧縮形式には、WMV形式、MPEG-4形式、Real Media形式、Quick Time形式など多くの種類があり、インターネット上における動画配信での仕様が統一されていない。例えば、WMV形式の動画ファイルを再生するには、Windows Media Player、MPEG-4形式の動画ファイルを再生するには、Quick Time Playerなど、Real Media形式の動画ファイルを再生するには、Real Media Playerなどのソフトウェアが必要であり、再生用のソフトウェアも統一されていないのが現状である。そのため、大学において、動画を取り入れた学習教材を配信し、自宅などで学習させるには、どのような動画の圧縮形式を採用するのかを検討する必要がある。

## 3. 英語学習支援システムの概要

### 3.1 動画配信によるPodcastingの設計

ポッドキャスト( Podcasting)とは、Apple社の携帯デジタルオーディオプレイヤーであるiPodと「放送」を意味するbroadcastを合成して作られた造語であり、主に、iPodに保存できる音声ファイルを配信することを指す用語である。Podcastingの最大の特徴は、

オンラインで配信された音声や動画ファイルを、携帯デジタルプレイヤーに保存し、再生できることである<sup>13)</sup>。英語教育において Podcasting を利用する最大の意義として、学習者への英語音声供給の機会を増やし、音声入力不足を解消することが挙げられる。Krashen<sup>16) 17)</sup> が述べるように、理解可能な入力を大量に得ることは、第二言語を獲得する重要な鍵である。しかしながら、日本人のように外国語として英語を学習する場合、理解可能な入力、特に、音声入力を得ることは難しく、結果として能力向上につながる様な音声入力が絶対的に不足していると考えられる。そのため、日本人英語学習者に見られるような英語音声入力不足を解消するために、Podcasting は有効であると思われる。また、竹野<sup>18)</sup> は Podcasting を利用することにより、時間・場所を共有することなしに、学習者が自由に時間を設定し、パソコンがあればどこでも学習できる利点を持っていると述べており、インターネットを使った学習は、距離や時間の制約を越えて実現でき、自分の理解度やレベルに合わせて自由に学習できる学習形態が可能である。

山形大学人文学部から援助を受け、著者らのグループによりインターネットを利用した英語学習支援システム (Podcasting) を構築し、英語音声配信 (音声のみ) を行っている。受講者にアンケート調査を行ったところ、静止画 (写真) と音声の組み合わせよりも、実際に話者の口元や表情を見ることができる動画の方が、内容理解や発音の学習に効果的であるとの意見が見られた<sup>4)</sup>。また、山田ら<sup>19)</sup> によれば、外国語学習において学習言語における非言語コミュニケーション (表情や身振り) を意識的に理解し、獲得することの必要性と意義があると述べている。

以上より、本システムにおいては、①インターネットによる学習教材の配信を行い、いつでも英語を繰り返して聴くことができる、②パソコン上での学習と、携帯デジタルプレイヤーに保存し、再生して学習の両方が可能であること、③実際に話者の口元や表情を見ることができる動画を配信することの3点を設計の基本コンセプトとした。

### 3.2 動画配信の検討 (画像サイズ, ファイル容量)

動画の圧縮形式には、WMV 形式、MPEG-4 形式、QuickTime 形式などがある。山形大学人文学部内および教養教育棟に設置されている教育用パソコンの OS には、マイクロソフト社の Windows OS およびマッキントッシュ社の MacOS が採用されている。また、ネット・アプリケーションズの調査 (<http://www.netapplications.com/>) によれば、2007年9月の時点で Windows OS のユーザーが 90.02%、MacOS のユーザーが 6.61% であり、両者の OS で全パソコンのユーザーの 96%以上となっている。したがって、Windows OS 対応の動画ファイルである WMV 形式と、MacOS 対応の動画ファイルである MPEG-4 形式を採用することとした。また、携帯デジタルプレイヤーへのダウンロードして再生するには、QuickTime 形

表1 動画をMPEG-4形式に圧縮した結果(再生時間2分31秒)

画像サイズ(ピクセル)	MPEG-4(MB)
480×360	14.53
320×240	5.43
240×180	4.06
176×144	3.30
160×120	1.96

※ データレートは、画像サイズの奨励値とした。

式が推奨されているが、汎用性が低いと思われる。現時点では、iPodでも再生可能であり、汎用性が高いMPEG-4形式が適していると考えられる。よって、本システムでは、ダウンロードする動画においては、MPEG-4形式を採用することとした。

デジタルビデオカメラで収録された動画を、上記の動画ファイル形式に変換する必要がある。その際に問題となるのが、「話者の口元や表情を見ることができる」画像サイズとその容量をどの程度まで圧縮できるかである。表1に今回の英語学習支援システムに用いた動画をMPEG-4形式に圧縮した結果(一例)を示す。デジタルビデオカメラで収録された動画は、再生時間2分31秒で206MBである。この動画ファイルをいくつかの画像サイズに変換し、実際に10.4インチ型液晶ディスプレイ(ノートパソコン)および15インチ型液晶ディスプレイ(デスクトップパソコン)にて視聴して確認したところ、320×240ピクセルの画像サイズまでは、話者の口元や表情が見やすいことがわかった。動画ファイルの容量も6MB程度となり、一般家庭での通信回線であるADSL回線でも十分にダウンロードできる画像サイズである。よって、本システム(Podcasting)では、320×240ピクセルの画像サイズを採用することとした。なお、動画ファイルの容量が12MB程度までは遅滞なく再生できることを確認した。また、携帯デジタルプレイヤー(iPodなど)へのダウンロード用として、160×120ピクセルの画像サイズとした。

### 3.3 動画の著作権と二次使用の検討(著作権、ストリーミング配信)

英語学習支援システムをインターネットに接続した場合には、システムへの接続において、パスワードなどの個人認証を取り入れて、クローズシステムにすることも考えられるが、国立大学として、教育資源や研究成果は広く公開する義務があり、誰でもアクセスができるオープンシステムにする必要がある。よって、今回、構築した英語学習支援システム(Podcasting)は、URL(Uniform Resource Locator)を指定すれば誰もが接続し使用できる環境とした。

オープンシステムとした場合の問題点として、動画の著作権と二次使用などがある。そのため、動画配信における著作権の保護と二次使用を考慮して、動画配信ではデータがコピーされ

表2 Webサイトでの著作権に関する掲載内容

YU Podcasting Projectに掲載しているテキスト・音声・動画などの著作物は、日本の著作権法およびベルヌ条約の国際条約により、著作権の保護を受けています。

著作者の許諾を得ずに利用できるのは、「私的使用のための複製」や「引用」、学校の授業での利用など特定の場合に限られます。利用が認められる場合でも、著作者の意に反した変更、削除はできません。

当ホームページの内容について、私的使用又は引用等著作権法上認められた行為を除き、山形大学人文学部に無断で転載等を行うことはできません。

にくいという利点のあるストリーミングによる動画配信を取り入れることとした。また、携帯デジタルプレイヤー用として、160×120ピクセルの画像サイズの動画がダウンロードできることとしているが、これは、画像サイズが小さく、他のWebサイトでの使用には不向きであり、二次使用の可能は低いと思われる。また、表2に示す文章を英語学習支援システムのWebサイト上に掲載し、本サイトのテキスト・音声・動画などの著作物は、日本の著作権法およびベルヌ条約の国際条約により、著作権の保護を受けていること、および引用を行う際は適宜の方法により、必ず出所を明示することを求めることとした。

### 3.4 動画配信によるPodcastingの内容と操作方法

本稿の英語学習支援システムは、英語学習においてPodcastingを利用して、学習者への英語の音声入力機会を増やし、音声入力不足を解消することにある。日本人のように外国語として英語を学習する場合、理解可能な入力、特に、音声入力を得ることは難しく、結果として音声入力が絶対的に不足していると考えられる。そのため、英語母語話者による英会話をインターネットを通して自己学習するために設計・製作したものである。したがって、動画を取り入れ、話者の口元や表情を見るながら、英語を繰り返して聴取できる環境を構築することとした。

動画配信は2つのコースを用意した。1つは、Town Sketch Podcastingとして、アメリカ合衆国の各地の概要とその魅力を紹介する。もう1つは、インタビュー形式で「日本人とアメリカ人のステレオタイプ」というトピックで行った。このインタビューは、英語母語話者に日本に関する印象を聞いたり、日本人がアメリカ人をどのように思っていると思うかを聞いたりしている。インタビュー形式では、インタビューをする方がビデオカメラを持ち、インタビューを受ける方を撮影しながら進められた。

本システム(YU Podcasting Project)にインターネット経由で接続すると、図1に示すようなトップページの画面に表示される。このトップページのメニューには、「山形大学人文学部のポッドキャストについて(概要の説明)」、「放送とその聴き方について(本システ



図1 トップページの画面



図2 学習したいコースを選択する画面



図3 学習したいタイトルを選択する画面



図4 学習を開始する画面



図5 動画の視聴画面 (Windows Media Player)

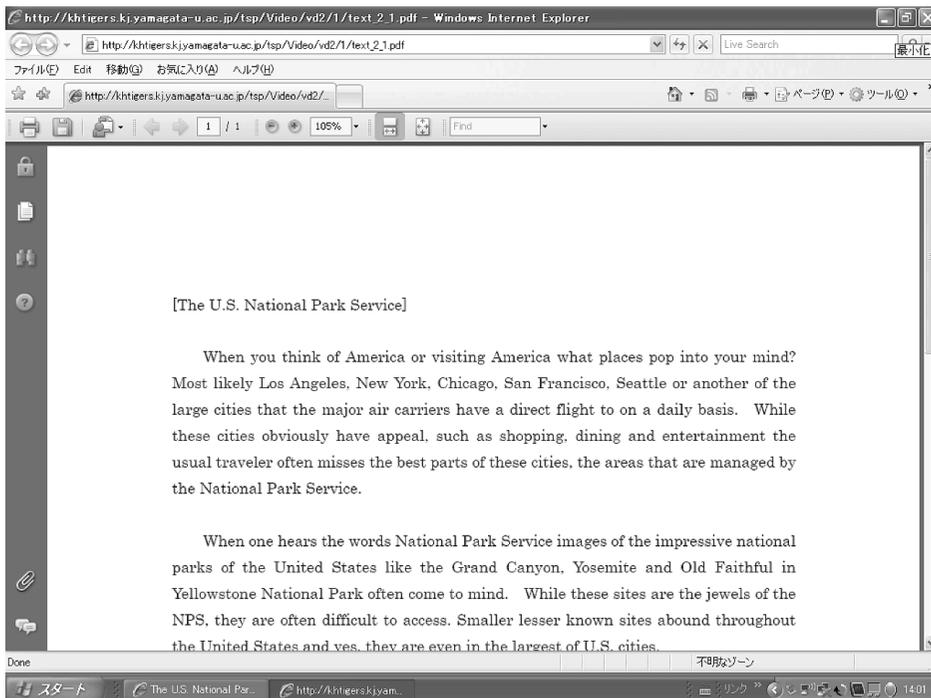


図6 テキストを表示した画面

ムの使い方)」、「お問い合わせ、スタッフについて(問合せ先とスタッフの紹介)」および「著作権、リンクについて(本システムの著作権の説明(表2参照)とリンクの方法)」を選択し、表示させることができる。また、ページの一番下には、「ヘルプ」ボタンがあり、音声・動画を再生するソフトウェアの入手方法や本システム使用上の注意などの情報が入手できる。

本システムは、昨年度から行っている「音声のみ」による学習と、今回、開発した「動画(音声を含む)」による学習を選択できるようになっている。ここでは、「動画によるポッドキャストिंगを利用したい方はこちらをクリック」ボタンを選択する。

次に図2に示すような学習したいコースを選択する画面が表示される。自分が学習したいコースをクリックする。ここでは例として、「United States of America (Todd Enslin)」を選択する。

図3に示すような、タイトル(Lesson1からLesson10)を選択する画面が表示される。自分の学習したいタイトルをクリックする。ここでは例として、「Lesson1 The U.S. National Park Service」を選択する。図4に学習を開始する画面が表示される。ページの最上部には、「Pictures」、「Video」、「Text」、「Download」のコンテンツを選択するボタンがある。「Pictures」は、英会話の内容の理解を助けるために、内容に関する写真を提示している。また、「Video」は動画を再生させるもので、WindowsユーザーとMacユーザーの2者に対応できるように、2つのボタンが用意されている。それぞれのボタンをクリックすると、動画再生用のソフトウェアが自動的に起動され、ストリーミングによる動画配信が開始される。ここでは例として、「[再生] Windowsの方(Media Player)」を選択する。図5に示すようにWindows Media Playerが起動し、新しいウィンドウが表示され動画が再生される。なお、動画の再生では、フレーム内に動画を埋め込み表示させる方法もあるが、画面の表示サイズや音量の調整が容易なことから、新しいウィンドウを表示させる方法を採用した。

図4に示す「Text」は、会話の内容をテキストで確認することができる。「テキスト表示」のボタンをクリックすると、図6に示すようなテキストが表示される。なお、テキストの表示では、HTMLで記述して表示させる方法もあるが、表示・非表示の制御や印刷が容易であることから、PDFファイル形式を採用している。最後に図4に示す「Download」は、携帯デジタルプレイヤー用として、160×120ピクセルの画像サイズの動画(音声を含む)をダウンロードすることができる。

#### 4. 動画配信による英語学習支援システムの評価

本稿の英語学習支援システム(Podcasting)の評価として、学生に本システムを1週間(2008年11月20日から2008年11月28日)使用してもらい、3種類のアンケートに回答してもらった。図2に示すように、本システムは「音声のみ」による学習と、今回、開発した

「動画」による学習を選択できるようになっている。学生には、「音声のみ」の学習と「動画」での学習の両方を行ってもらい、アンケートに回答させた。

(1) アンケート調査1 (英語学習支援システム (Podcasting) を使用した感想)

「ポッドキャストについて、あなたの感想をお聞かせください。」と質問し、見やすさ、操作性、動画での内容理解、インターネット使用環境などを調査した (n=25)。その結果を図7から図11に示す。

図7の「ポッドキャストページは見やすいですか?」との設問では、「良いと思う」が16%、「まあ良いと思う」が48%であり、両者を足すと64%の者が見やすいと回答している。また、「あまり良いとは思わない」が8%、「良いとは思わない」が0%である。次に図8の「ポッドキャストページは操作しやすいですか?」との設問では、「良いと思う」が20%、「まあ良いと思う」が44%であり、両者を足すと64%の者が見やすいと回答している。また、「あまり良いとは思わない」が8%、「良いとは思わない」が0%である。

図9の「ポッドキャストで、動画として話し手が見えることは、内容理解に役立っているか?」

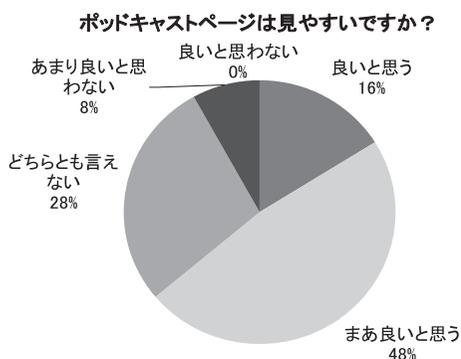


図7 ページの見やすさに関するアンケート結果

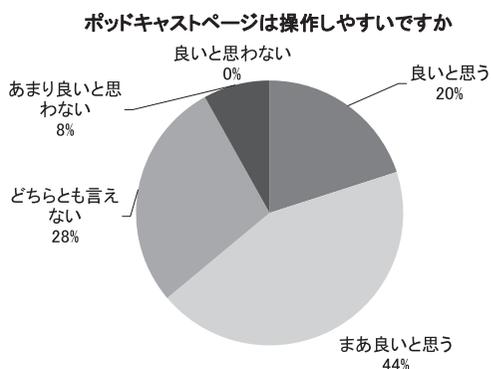


図8 操作性に関するアンケート結果

動画として話し手が見えることは内容理解に役立っているか?

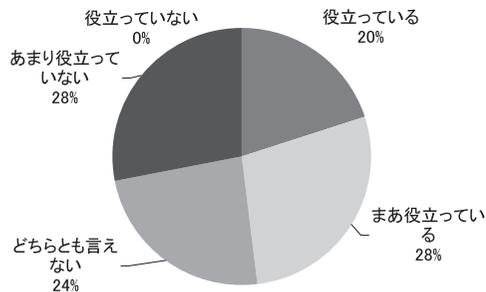


図9 動画に関するアンケート結果

自宅にインターネット環境はありますか?

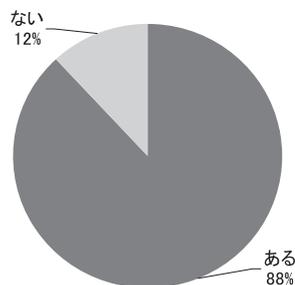


図10 インターネット環境に関するアンケート結果

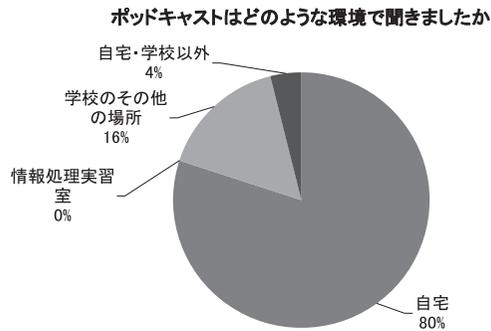


図11 視聴した環境に関するアンケート結果

すか？」との設問では、「役立つている」が20%、「まあ役立つている」が28%であり、両者を足すと約半数の者が内容理解に役立つと回答している。しかし、「あまり役立つていない」を28%の学生が回答している。

今回、構築した英語学習支援システム（Podcasting）は、画面の見やすさや操作性については、6割以上の学生が良いと感じており、「良いとは思わない」の8%を大きく上回っており、評価は高いと思われる。しかし、動画の使用については、半数の学生は内容理解に役立つと回答しているが、28%の学生があまり役立つてないと回答している。このシステムを使用して学習している学生より、「英会話が速く難しい」との意見があり、動画での内容理解が低い評価になったのではないかと推察される。さらに、あまり役立つてないと回答した学生に対して聞き取り調査などを行い、原因を調査する必要があると思われる。

図10の「自宅にインターネット環境がありますか？」との設問では、「ある」が88%、「ない」が12%であった。また、図11の「ポッドキャストはどのような環境で聞きましたか？」との設問では、「自宅」が80%、「学校」が16%の順となっている。この結果から、96%の学生が自宅または大学内から英語学習支援システム（Podcasting）を使用したことがわかった。なお、自宅でのインターネット普及率が高く、学生が日常的にインターネットを利用していることが伺える。

以上より、80%の学生が自宅にインターネット環境があり、かつ大学内にも授業時間以外にもインターネットが使用できる部屋が整備されていることから、インターネットを利用した英語学習支援システムを導入する環境が整っているといえる。

## （2）アンケート調査2（音声のみと動画による学習の比較）

「“音声のみ”の学習と比較し、“動画（ビデオ）”で学習した感想を聞かせて下さい。」の問いに関して、14形容詞対で回答させた（7段階評価：n=24）。結果を表3に示す。各質問

表3 学習の評価結果（音声のみと動画の比較）

質問項目	平均	標準偏差
学習意欲がわく	4.17	1.09
学習に役立つ	4.46	1.10
充実感が得られる	3.83	1.34
楽しんで学習できる	3.58	1.32
気楽に学習できる	3.75	1.62
興味・関心がわく	4.13	1.08
理解が深まる	4.00	1.35
学習しやすい	3.88	1.62
疲れない	3.50	1.77
学習が飽きない	3.67	1.37
親しみが持てる	3.83	1.43
学習に集中できる	3.96	1.71
情報量が豊富である	4.38	1.61
復習に役立つ	3.50	1.35

に対する回答を見ると「学習意欲がわく」、「学習に役立つ」、「興味・関心がわく」および「情報量が豊富である」の得点が高い。このことから、音声のみによる学習よりも、動画による学習の方が、学習意欲や興味・関心が高まることや情報量が豊富であると評価されていると思われる。

一方、「疲れない」では他の項目と比較し得点が高い。これは、インターネットに限らずコンピュータ機器を用いた学習や作業の特徴であると指摘されている<sup>20)</sup>。また、先行研究では、動的メディアが表示されると速く疲労を感じると報告されている<sup>21)</sup>。動画の利用は、動きを目で追い、画面を注視するために疲労感が増すためではないかと考えられる。

### （3）アンケート調査3（インターネットの学習利用のイメージ）

「インターネットで学習することのイメージをお答え下さい。」の問いに関して、12形容詞対で回答させた（7段階評価：n=25）。インターネットを利用したイメージを評価し何種類かに類型化することで、学習におけるインターネットの効果的な利用への指針を得ることを目的に、12項目についてアンケートを実施した。因子分析（主因子法：バリマックス回転）を用いて分析した結果を表4に示す。なお、因子数の決定は2因子から5因子までの分析を行い、最適と判断された3因子とした。

第1因子は、「明るい」、「あっさりとした」の項目で非常に高い負荷量を示している。次い

表4 因子分析の因子負荷量(直交回転:バリマックス法)

質問項目	因子1	因子2	因子3	共通性
楽しい—つまらない	0.66916	0.45908	-0.14794	0.68042
明るい—暗い	0.85716	0.14342	0.32436	0.86050
あっさりとした—くどい	0.84278	-0.06163	0.32042	0.81674
深い—浅い	0.75032	-0.31585	-0.11084	0.67502
おだやか—激しい	0.74451	0.06505	-0.18770	0.59376
愛想がよい—無愛想な	0.50945	0.58707	0.23802	0.66084
のんびりとした—せわしい	0.18500	0.84343	-0.01869	0.74594
きまじめな—きさくな	0.13616	-0.54547	0.01490	0.31630
斬新な—平凡な	0.13042	-0.41336	0.34194	0.30481
速い—遅い	-0.01119	-0.19122	0.53026	0.31787
やさしい—きびしい	0.33469	0.45949	0.51388	0.58722
開放的な—閉鎖的な	-0.05134	0.12487	0.71026	0.52270
二乗和	3.45414	2.12683	1.50115	
寄与率(%)	28.78451	17.72359	12.50958	
累積寄与率(%)	28.78451	46.50810	59.01767	

で、「深い」、「おだやか」、「楽しい」の負荷量が高い。これらから、学習者はインターネットでの学習では、明るい、おだやか、楽しいなど好意的なイメージをあげていると考えられる。すなわち、好意的を示す因子と解釈できる。

第2因子は、「のんびりとした」、「愛想がよい」で高い負荷量を示している。次いで、「きさくな」、「平凡な」が高い。これらはインターネットでの学習は、自分のペースで学習でき、緊張感が低いことを示していると考えられる。すなわち、リラックスを示す因子と解釈できる。日頃から使用しているインターネットへの抵抗感が低い表れと推察される。

第3因子は、「開放的な」、「速い」で高い負荷量を示している。次いで、「やさしい」が高い。これらは、インターネットは世界と繋がっており、情報を瞬時・容易に入手できるというインターネットの特徴を示している因子として解釈できる。

学生はインターネットを学習に利用することに対して、好意的かつ、リラックスして学習できるイメージを持っていると考えられる。コンピュータを用いた学習支援システムは、テキスト(印刷教材)と比較して、「学習意欲がわく」、「楽しいで学習できる」、「気楽に学習できる」と報告されており<sup>22)</sup>、インターネットによる学習も同様の効果があると考えられる。

## 5. ま と め

著者らのグループによりインターネットを利用した英語学習支援システム(Podcasting)

を構築し、英語母語話者による英会話を聴取できるように英語音声配信（音声のみ）を実施してきている。しかし、アンケート調査を実施したところ、音声のみよりも、実際に話者の口元や表情を見ることができる動画の方が、内容理解や発音の学習に効果的であるとの意見が寄せられた。そのため、動画を取り入れたシステムに移行することとした。

本稿では、インターネットにおける教育利用と動画配信の諸問題を検討し、動画配信による英語学習支援システム（Podcasting）の構築を述べた。そして、本システムを使用した学習者からのアンケート調査をもとに、動画配信による英語学習の Podcasting について検討した。その結果、次のことが明らかとなった。

- ①画面の見やすさや操作性については、6割以上の学生が良いと感じており評価が高い。
- ②動画の使用については、半数の学生が内容理解に役立つと感じている。しかし、28%の学生があまり役立っていないと回答した。
- ③音声のみによる学習よりも、動画による学習の方が、学習意欲や興味・関心が高まることや情報量が豊富であると評価された。しかし、疲労感が高い傾向にある。
- ④学生はインターネットを学習に利用することに対して、好意的かつ、リラックスして学習できるイメージを持っていることがわかった。

今回の検討結果をもとに、システムの充実を図って行く予定である。また現在、実際の授業の補助教材として、試用的に本システムを導入しているが、英語の難易度や話題（テーマ）、学習効果などの検討も行う必要があると考えている。

注) McCarty<sup>23)</sup>によれば、Podcasting はあくまで携帯デジタルプレイヤーに音声や動画ファイルを保存・再生するものであり、携帯性がないデスクトップ型コンピュータや携帯性が低いノート型コンピュータで音声・動画ファイルを保存・再生することをウェブキャストィングと呼ばれる。

## 謝辞

本研究は、山形大学人文学部の研究助成を受けて行われている。山形大学人文学部の援助に感謝します。

## 参 考 文 献

- 1) 廣瀬伸行：インターネットを利用する学習支援システムの開発, 愛知産業大学紀要, 16, pp.127-132, 2008.
- 2) 長谷川洋介：インターネットを活用したピアノ学習支援システムの構築—保育科の

- 情報処理入門の中での展開一, 白梅学園大学・短期大学情報教育研究, 10, pp.24-29, 2007.
- 3) 総務省: 情報通信白書 平成 15 年度版, ぎょうせい, 東京, 2003.
  - 4) 森田光宏, 本多薫, Mark Irwin, 富田かおる: From Podcasting to Vodcasting—動画配信の試行一, 2007 年度 ICT 授業実践報告書, pp.53-59, 2008.
  - 5) 高橋邦夫: 100 校プロジェクトの実践から, 情報処理, 39(7), pp.638-644, 1998.
  - 6) 文部省: 高等学校学習指導要領解説(情報編), 開隆堂出版, 東京, 2000.
  - 7) 財団法人インターネット協会: インターネット白書 2007, インプレス R&D, 東京, 2007.
  - 8) 中谷安男: インターネットを利用した英語学習の導入—自己学習への展望一, 中村学園研究紀要, 31, pp.71-76, 1999.
  - 9) 朱京波, 片上大輔, 新田克己: ウェブベース英単語学習支援システムの提案, 電子情報通信学会技術研究報告(教育工学), ET2005-76, pp.13-18, 2006.
  - 10) 佐野洋, 中村隆宏: BNC を利用した英語教材作成とその提供 Web サイトの開発, 情報処理学会研究報告, 2004-CE-77 (8), pp.39-44, 2004.
  - 11) 山本健一, 磯本征雄, 山田善久他: 短大における英語運用能力の向上を目指した e-Learning 支援システムの構築, 日本教育情報学会第 21 回年会論文集, 21, pp.248-251, 2005.
  - 12) 藤井美和子, 吉村克生, 高本明美: Web サイトデータベースを基盤とする学習支援システム, 情報処理学会第 56 回全国大会講演論文集 (4), pp.295-296, 1998.
  - 13) 中川雅樹, 岡本俊雄: インターネット利用による情報教育実践支援システム, 情報処理学会第 55 回全国大会講演論文集 (4), pp.545-546, 1997.
  - 14) 真嶋由貴恵: WWW を利用した看護教育用 CAI システムの評価—アクセスログ分析より一, 第 13 回看護情報システム研究会講演集, pp.331-334, 1997.
  - 15) 総務省: 情報通信白書 平成 20 年版, ぎょうせい, 東京, 2008.
  - 16) Krashen, S.: Second Language Acquisition and Second Language Learning, Oxford: Pergamon, 1982.
  - 17) Krashen, S.: The Input Hypothesis: Issues and Implications, London: Longman, 1985.
  - 18) 竹野茂: Podcasting を利用した高等学校と大学の連携による英語指導の実践—コンテンツ作りを中心に—, 宮崎公立大学人文学部紀要, 14(1), pp.181-191, 2006.
  - 19) 山田眞一, 米川覚: 学内 LAN を利用した中国語言語行動学習支援システムについて, 高岡短期大学紀要, 15, pp.101-111, 2000.

- 20) 島正之: VDT 作業に伴う自覚症状に及ぼす因子の検討, 日本衛生学会誌, 47(6), pp.1032-1040, 1993.
- 21) Hamzah M.D., 田野俊一, 岩田満, 市野順子, 橋山智訓: 動的メディアによる体験的認知タスクへの影響に関する定量的実験, 情報処理学会研究報告, HCI, 2007(41), pp.3-10, 2007.
- 22) 本多薫, 市川博, 西尾章: 生産管理 CAI システムの開発, 産能短期大学紀要, 31, pp.129-138, 1998.
- 23) McCarty, S.: Spoken internet to go: Popularization through Podcasting, The JALT Journal, 2(2), pp.67-75, 2005.

## Construction of an English Learning Support System Using the Internet: Experimental Use of Video Podcasting

HONDA Kaoru, MORITA Mitsuhiro, Mark IRWIN,  
TOMITA Kaoru, Todd ENSLEN and Jerry MILLER

The authors devised an English learning support system using the internet (podcasting) and, after distributing audio-only English conversations between native English speakers and conducting a questionnaire, it was decided that distributing audio and video would be more effective than distributing audio alone. Many respondents felt it would be helpful to be able to see speakers' facial expressions in order to better understand the content of conversations and mimic correct native pronunciation. It was therefore decided to shift to video podcasting.

This study examines a range of educational issues, as well as problems involved in distributing video on the internet. As distribution of video podcasts was experimental a further questionnaire was conducted on students who had used them. The results of this questionnaire may be summarized as follows:

1. More than 60% of students evaluated the appearance and functionality of the screen highly.
2. Approximately half the students felt the video was useful for understanding the content of the conversations. However, 28% of the students thought the video was not very useful.
3. Compared to audio-based learning, video-based learning was found to be more effective with regard to motivating students to study, keeping them interested in the subject matter, and providing them with a wider variety of information. However, students tended to feel more fatigued when participating in video-based learning.
4. Students felt they could use the internet easily and comfortably for learning purposes.

Based on the results obtained in this study, we intend to improve our English learning support system. Although video podcasting was experimental and used as supplemental material, how it affected actual learning was not examined. In future, we hope to evaluate such effects in greater detail.

## Mora Splitting in Loanword Compounds

Mark IRWIN

### 1. Loanwords in Japanese

Although ‘native’, ‘Sino-Japanese’, ‘mimetic’, ‘foreign’ and ‘hybrid’ vocabulary layers have all been proposed for Japanese, few scholars would acknowledge the existence of all five, with the vast majority noting three (e.g. Martin 1952; Backhouse 1993; Gottlieb 2005; Yamaguchi 2007) or four (e.g. McCawley 1968; Vance 1987; Shibatani 1990; Nishio 2002; Irwin 2005).<sup>1</sup> A few scholars (Rice 1997; Ota 2004) are sceptical as to the existence of lexical stratification in Japanese at all.

Words recently borrowed from other languages, the foreign stratum, are known colloquially in Japanese as *gairaigo* 外来語 (foreign words) or *katakanago* 片仮名語 (words written in *katakana*) and, more technically, as *shakuyōgo* 借用語 (loanwords). They may be defined as the residue after native, Sino-Japanese and mimetic words have been removed from the lexicon. But this is not the whole picture. Notions of ‘assimilation’ and ‘intelligibility’ (Loveday 1996: 49-50), dynamics difficult to measure empirically; historical and chronological definitions such as words borrowed ‘since the Muromachi period’, those borrowed recently ‘from languages where sinography is not employed’ and words ‘not usually considered to be *gairaigo* as they are often written with sinographs’ (NKD 2000-2002); as well as the characteristics and function of *gairaigo* (Matsuoka 1982: 91-92) all complicate the issue of what a loanword is. For the purposes of this paper I will adopt a definition which is both simple and swift to determine and which attempts to encompass a range of notions. Equally, one could argue it is a definition that seeks to sidestep thorny theoretical issues:

*Gairaigo* are foreign words that have been adapted to the phonotactics of Japanese and which have been borrowed into the language since the mid-16<sup>th</sup> century.

---

<sup>1</sup> Rather than models based on lexical strata, Itō & Mester (1995; 1999), Fukuzawa, Kitahara & Ota (1998) and Fukuzawa & Kitahara (2005) posit core-periphery or set-inclusion models, some of which further subdivide the foreign class into ‘assimilated’, ‘unassimilated’ or the like.

Under my definition, *gairaigo* thus include Chinese and Korean borrowings since the mid-16<sup>th</sup> century, with the issue of in which Japanese script they are written (cf. NKD 2000-2002) being irrelevant. My definition of *gairaigo* does not include any borrowings prior to the mid-16<sup>th</sup> century, thus excluding early Korean and Chinese loans, loans ultimately from Sanskrit, and some others (e.g. *raŋko* ‘sea otter’ from Ainu).

## 2. Compound Clipping

The vast majority of pure *gairaigo* compounds contain two elements and three strategies of *gairaigo* compound reduction are found. The most common of the three is compound clipping and care should be taken to distinguish this phenomenon from simple clipping (e.g. *esutetiŋku* > *esute* ‘beauty care, beauty salon’ from Fr. *esthétique*). Less common is ellipsis (e.g. *serufu*+*saabisu* > *serufu* ‘self-service’), while a third strategy, portmanteau formation (e.g. *furiira*<sub>NSU</sub>+*arubaitaa* > *furiitaa* ‘permanent part-timer’ from Eng. *freelance* + Ger. *Arbeiter*), is rare. In this paper I deal exclusively with the first of these three strategies, compound clipping.

Compound clipping (and clipping in general) is more commonly employed in slang, jargon and youth speech and thus highly ephemeral in nature. It involves reduction of a *gairaigo* compound to anything from between two to six morae. This is typically achieved through combining the initial morae of each of the two elements of which the compound is composed (Itô 1990; Labrune 2002: 102-104). Combining the first two morae of each of the two elements to a form 2+2 four-mora clipped compound is the pattern overwhelmingly favoured. In her corpus of 350 clipped *gairaigo* compounds, Labrune (opus cit.) found that 80% (281/350) consisted of four morae (1)-(12), of which only a handful (11)-(12) were not of the 2+2 type:

(1) Eng. <i>word processor</i>	<b>waado</b> + <b>puroseŋsaa</b>	>	waapuro	‘word processor’
(2) Eng. <i>digital camera</i>	<b>dejitaaru</b> + <b>kamera</b>	>	dejikame	‘digital camera’
(3) Eng. <i>joint venture</i>	<b>jointo</b> + <b>benċaa</b>	>	joiben	‘joint venture’
(4) Eng. <i>mother complex</i>	<b>mazaa</b> + <b>konpureŋkusu</b>	>	mazakon	‘mother complex’
(5) Eng. <i>patrol car</i>	<b>patorooru</b> + <b>kaa</b>	>	patokaa	‘police car’
(6) Eng. <i>hunger strike</i>	<b>hangaa</b> + <b>sutoraiki</b>	>	hansuto	‘hunger strike’
(7) Eng. <i>jeans</i> + <i>pants</i>	<b>jiinzu</b> + <b>pancu</b>	>	jiipan	‘jeans’

- (8) Eng. *potato* + *fry*      **poteto**+**furai**      > potefura ‘chips, French fries’  
 (9) Eng. *pocket* + *monster*    **poke**qto+**mons**utaa    > pokemon Pokémon™  
 (10) Eng. *delivery* + *health*    **deri**barii+**heru**su    > deriheru ‘escort service’  
 (11) Eng. *short* + *mail*        **šooto**+**meeru**        > šomeeru ‘SMS message’  
 (12) Eng. *Pacific* + *league*    **pašifi**qku+**riigu**      > pariigu ‘Pacific League’

The clipped elements of which clipped compounds are composed typically do not exist as independent simple clippings (Itô & Mester 1992: 26). One exception is *suto* ‘strike’: compare the simply clipped *suto* ‘(labour) strike’ and (6) *hansuto* ‘hunger strike’.

If the prosodic unit of the foot is taken to consist of two morae (Poser 1990), then, as Kubozono (1999: 40) points out, ‘many phonological and morphological structures [in Japanese]... can be generalized’. The 2+2 clipping strategy illustrated in (1-10) above must therefore be viewed as part of a more pervasive proclivity in Japanese, which also embraces non-*gairaigo* compound clipping (Shibatani 1990: 254-256), hypocoristic formation (Mester 1990; Poser 1990: 81-93), accentuation patterns in compounds (Tsuji-mura & Davis 1987; Kubozono & Mester 1995; Aldrete 1999), *rendaku* (Irwin forthcoming), reduplication in mimetics (Poser 1990: 94-95; Hamano 1998: 25-38) and the jazz argot *zūjago* (Tateishi 1985, cited in Poser 1990; Tateishi 1989; Itô, Kitagawa & Mester 1996; Kubozono 2002b).

Examples such as (1) *waapuro* and (7) *jiipan*, although their unclipped initial elements, *waado* and *jiinzu*, contain an initial heavy and super-heavy syllable respectively, both conform to the dominant 2+2 clipping pattern. There are, however, a number of cases where non-light syllables display irregularity during the compound clipping process. One case in particular is that of superheavy syllables ending in *-/aUN/*. Here, in preference to syllable-final *-/N/*, it is the */u/* mora which is typically elided (Kuwamoto 1998a; Kubozono 2001a: 67-68, 2002a: 86-87) in order to preserve the unmarked 2+2 clipping pattern:

- (13) Eng. *soundtrack*      **saundo**+**tora**qku      > santora ‘soundtrack’  
 (14) Eng. *no count*        **noo**+**ka**unto        > nookan ‘no count (in baseball)’

Such behaviour is not observed with other superheavy syllables, such as those ending in

-/aiN/, -/iiN/ or -/oiN/: cf. (3) *joibeN*, not \**jonbeN*, ‘joint venture’ and (7) *jiipaN*, not \**jinpaN*, ‘jeans’.

Kubozono (opus cit.) also notes sporadic cases of heavy syllables containing long vowels where the vowel is shortened:

(15) Eng. *personal computer*    **paasonaru**+**konpyuuta**    >    pasokON    ‘PC’

It should be noted, nevertheless, that maintenance of the long vowel is perhaps encountered with much greater frequency: e.g. (1) *waapuro*, not \**wadopuro*, ‘word processor’.

There appears, however, to be one type of 2+2 clipped compound which is rarely tolerated: those where /Q/ occurs as the second or fourth mora. When an element begins in a heavy syllable ending in -/Q/, it is either (a) clipped to one mora (16-18), resulting in a three-mora (16-17) or even a two-mora compound (18); or (b) the /Q/ is elided to produce a 2+2 compound (19-20).

(16) Eng. *sex* + *friend*    **seQkusu**+**furendo**    >    sefure    ‘sex buddy’

(17) Eng. *nickel cadmium*    **niQkeru**+**kadomiumu**    >    nikado    ‘nickel cadmium’

(18) Eng. *base* + *up*    **beesu**+**aQpu**    >    bea    ‘increase in basic pay’

(19) Eng. *American football*    **amerikaN**+**fuQtoooru**    >    amefuto    ‘American football’

(20) Eng. *Harry Potter*<sup>TM</sup>    **harii**+**poQtaa**    >    haripota    ‘Harry Potter’

Given the constraint against word-final -/Q/ in Japanese in general, it should come as no surprise that /Q/ is illicit word-finally.<sup>2</sup> What is curious is its frequent exclusion from second mora position, in spite of the fact that /Q/ occurs regularly as a second mora across all vocabulary strata. Examples do exist, however, where it is found, a doublet of (17) *niQkado* being one example.

Although we have seen that bimoraic clipping of elements, resulting in 2+2 clipped compounds, is the dominant pattern, monomoraic clipping of individual compound elements, while rare, is tolerated (this is in stark contrast to simple clipping, where it is

<sup>2</sup>There is at least one counter-example (Kuwamoto 1998b: 168) of a clipped Sino-Japanese-*gairaigo* hybrid compound: *daNtocu* ‘far and away, runaway’ from *danzen* ‘absolute’ + *toqpu* (from Eng. ‘top’). Here /Q/, the second mora of the second element, has become /cu/ under the influence of *kana* orthography: /cu/ is ツ, whereas /Q/ is its minuscule variant っ.

not). By extension, therefore, reduction of *gairaigo* compounds to three (21-28) or even two (29-30) morae, where one element, or both, is reduced to just one mora, are also correspondingly atypical (Ito 1990: 220-221). Labrune (2002: 103) found that only 15% (51/350) of the compounds in her corpus were of the 2+1 (21-24) or 1+2 (25-28) clipped type, the former outnumbering the latter by a considerable margin. Meanwhile, a mere 1% (5/350) consisted of just two morae (29-30), i.e. 1+1 compounds. Both (29) and (30) are obsolescent, as is the one further example (34) below.

(21) Eng. <i>mister</i> + <i>doughnuts</i>	<b>misutaa</b> + <b>doonacu</b>	>	misudo	Mister Donuts™
(22) Eng. <i>plastic model</i>	<b>purasuči</b> qku + <b>moderu</b>	>	puramo	'plastic model'
(23) Eng. <i>tracing paper</i>	<b>toreeši</b> ngu + <b>peepaa</b>	>	torepe	'tracing paper'
(24) Eng. <i>homepage</i>	<b>hoomu</b> + <b>peeji</b>	>	homupe	'homepage, website'
(25) Eng. <i>mail address</i>	<b>meeru</b> + <b>adoresu</b>	>	meado	'e-mail address'
(26) Eng. <i>tape recorder</i>	<b>teepu</b> + <b>reko</b> odaa	>	tereke	'tape recorder'
(27) Eng. <i>lemon squash</i>	<b>re</b> moN + <b>suka</b> Qšu	>	resuka	'lemon squash'
(28) Eng. <i>medley relay</i>	<b>medoree</b> + <b>riree</b>	>	merire	'medley relay'
(29) Eng. <i>modern</i> + <i>girl</i>	<b>modaa</b> N + <b>gaaru</b>	>	moga	'flapper'
(30) Eng. <i>modern</i> + <i>boy</i>	<b>modaa</b> N + <b>booi</b>	>	mobo	'dandy' <sup>3</sup>

Examples such as (21) *misudo*, (23) *torepe*, (24) *homupe*, (26) *tereke*, (29) *moga* and (30) *mobo* provide further grist for Kubozono's (2002a: 94) contention that in Japanese in general 'long vowels tend to be shortened in word-final position'. Indeed, (25) *meado* and (26) *tereke* show that they may also be shortened in an initial element. Nevertheless, the motivation for (22) *puramo*, (27) *resuka* and (28) *merire* not following the default 2+2 clipping pattern (1-10) is obscure.

There are, in addition, a very small number of *gairaigo* compounds which are clipped to five or six morae: e.g. *konbisa*ndo from *konbī*neešoN + *sandoi*qči 'combination sandwich'. While these account for 3% (10/350) and 1% (3/350) respectively of Labrune's (opus cit.) corpus, many of them exhibit only one clipped element (Labrune 2006).

<sup>3</sup>*Mobo* is a difficult word to gloss in English, as in the West there was no male equivalent to the female flapper of the 1920s. 'Dandy' is probably anachronistic.

Compounds where only the second element is clipped I prefer to view as back-clipping.

### 3. Mora Splitting and Compound Clipping

A curious phenomenon which cuts across all these compound clipping patterns, but receives only brief mention in the literature (see, however, Lovins 1973: 140), is what may be termed ‘mora splitting’. Consider the following examples:

- (31) Eng. *mass communication*    **masu**+**komyunikee**šON > masukom<sup>i</sup> ‘mass media’  
 (32) Eng. *Italian* + *casual*    **itarian** + **kajuaru** > itakaj<sup>i</sup> ‘Italian casual (fashion)’  
 (33) Eng. *office computer*    **ofisu**+**konpyu**utaa > of<sup>u</sup>kon ‘office computer’  
 (34) Eng. *staple fibre*        **suteepuru**+**faibaa** > suf<sup>u</sup> ‘rayon’

Here, the boxed vowels in the clipped compounds differ from their full forms. In all cases, the morae to which these vowels belong are written with *kana* digraphs: as <myu> ミュ, <ju> ジュ, <fi> ファ and <fa> ファ, respectively. If the digraph is split and the miniscule second graph clipped, we are left with ミ <mi>, ジ <ji>, フ <fu> and フ <fu>, the morae found in the four clipped compounds in (31-34). This strongly suggests that, although it ought to be independent, knowledge of *kana* orthography is at work in the creation of prosodically clipped compounds.<sup>4</sup> Although all clipped compounds (of which the author is aware), in which the second mora of an element is written with a digraph, undergo mora splitting, examples of mora splitting are relatively uncommon and its regularity is open to question. To ascertain how regular a phenomenon mora splitting is, the author conducted a survey of *gairaigo* compounds similar to those in (31-34) above.

### 4. Mora Splitting Survey: (i) Content and Administration

*Gairaigo* compounds susceptible to mora-splitting (which for the remainder of this paper I refer to as ‘Type A’) I define as those containing an element whose second mora is written with a *kana* digraph. Although respondents were told before taking the survey that they were going to be asked to provide the clipped forms to *gairaigo* compounds, it was felt that the overall statistics might become biased should they become aware too soon after beginning the questionnaire that what they were being surveyed for was

<sup>4</sup>As it is in word games such as *shiritori*. With regard to possible links between some moraic phenomena and Japanese orthography, see the discussion in Kubozono (1999b: 57).

mora-splitting. For this reason, the survey also contained a second type of *gairaigo* compound (hereafter ‘Type B’), namely those where neither element contains a second mora written with a *kana* digraph. These functioned as distracters.

The survey consisted of eight *gairaigo* compounds in total, five Type A and three Type B. The survey was administered in written form and in Japanese (see Appendix). After being informed that the survey was part of a research project into Japanese loanwords, the respondents were requested to indicate their age, gender and Japanese native speaker status (non-native speaker surveys were ignored). Respondents were then requested to write how they would clip the eight *gairaigo* compounds. Two examples of clipping were given, (2) and (21) above, the first of these conforming to the more common 2+2 four-mora clipping strategy.

Table 1 below shows the eight nonce *gairaigo* compounds in the order they appeared in the survey, along with an indication of whether they are Type A or B and an English gloss. Type A *gairaigo* compounds only are numbered (35-39), and the *kana* digraph which is the focus of any expected mora clipping is highlighted in bold in the ‘*gairaigo* compound’ column, where it is written in phonemic transcription. It is then shown again in *kana* in the ‘*kana* digraph’ column. The rightmost column indicates the form expected should the element in question be clipped by means of mora splitting.

EX.	GAIRAIGOCOMPOUND	TYPE	ENGLISH GLOSS	KANA DIGRAPH	EXPECTED MORA SPLIT
(35)	kyaria. <b>re</b> jume	A	career CV	ジュ	<b>reji</b>
	daburu.esupureqso	B	double espresso		
(36)	tere <b>bi</b> .dokyumentari	A	TV documentary	キュ	<b>doki</b>
	kimuči.bibiŋba	B	fried rice with <i>kimuchi</i>		
(37)	sutoriito. <b>de</b> byuu	A	first time in public	ビュ	<b>debi</b>
(38)	<b>bi</b> joN.manejimento	A	vision management	ジョ	<b>biji</b>
	makadamia.čokoreeto	B	chocolate macadamias		
(39)	načuraru.kosumetiŋku	A	natural (green) cosmetics	チュ	<b>nači</b>

Table 1: *Gairaigo Compounds Used in Survey*

The survey was administered to a total of 93 students at Yamagata University who attended general education English classes during October 2008. As the majority of English classes at the university are provided for first-year students, this age group formed the bulk of the respondents. Limiting the target age group to approximately 18-

21 has advantages and disadvantages: although we fail to gain any information on mora splitting across other age groups, we do obtain a reasonably unadulterated snapshot, not only of a single age range but of an age range whose members all have a broadly similar educational ability.

### 5. Mora Splitting Survey: (ii) Results and Analysis

Table 2 shows the age and gender of the respondents. Overall, 85% (79/93) of respondents came from the 18-19 age group, with the bulk of the remainder coming from the 20-21 age group. Female students were in the majority at 61% (57/93) overall.

18-19	20-21	22-23	total
79	12	2	93
♂	♀	total	
36	57	93	

*Table 2: Age and Gender of Respondents*

Responses to Type B compounds, the distracters, will be ignored below. Broadly speaking, two patterns of clipping can be discerned from the responses to Type A compounds: those respondents who bimoraically back-clipped the element in which mora-splitting may occur, and those who did not. In other words, if a respondent back-clipped the second element of compound (36) after the second mora (to *dokyu* or *doki*) then this serves as evidence either for or against the phenomenon of mora-clipping. If, on the other hand, the respondent clipped the second element of (36) to just one mora (to *do*), to three or more morae (to *dokyuu*, *dokyuume*, *dokyumeN* etc.), did not clip the second element at all, or fore-clipped (to *mento* etc.) or mid-clipped (to *kyuume* etc.) the second element, then it cannot be used as evidence either way. As already noted in §2 above, the variability found in *gairaigo* compound clipping had strongly suggested that responses of the latter sort, ultimately without any relevance for the research in question, would not be infrequent. A third, fourth and fifth pattern of clipping, all rare and all irrelevant for our purposes, were also found. These were respondents who used Roman letters as acronyms (e.g. *TV-D* for (36) *terebi.dokyumeNtarii*), respondents who deleted an entire element (e.g. deletion of the entire second element of (36) to give *terebi*) and respondents who switched the elements around during the process of clipping (e.g.

	(35)	(36)	(37)	(38)	(39)
☺#	kya.reji 8	tere.doki 4	suto.debi 3	biji.ma 2	naču.kosu 2
	kyari.reji 5		ri.debi 1	biji.mane 12	
	kyaria.reji 1				
	ki.reji 1				
☺μ	kya.reju 11			bijo.ma 1	naču.me 3
	kyaa.reju 1	tere.dokyu 52	suto.debyu 30	bijo.mane 47	naču.kome 2
	kyari.reju 30	terebi.dokyu 5	tori.debyu 1	bijo.manee 1	naču.kosu 37
				bijo.maneeji 2	naču.kosome 20
				bijo.mento 1	naču.metioku 3
	bijo.jimento 1				
☺A	kya.re 2	tere.do 8	suto.de 19		
	kyari.re 8	tere.doku 1	sutoo.de 1		
	kyaria.re 1	tere.mentarii 10	suto.dee 1	bi.mane 7	na.kosu 2
	kya.me 1	tere.dokyumentarii 1	suto.byu 1	bii.mane 2	načura.kosu 1
	kyari.me 5	tere.dokyun 1	suto.byuu 9	joN.mane 2	raru.tioku 1
	kya.reme 2	tere.kyuu 1	tori.byuu 1	bijoN.mane 13	načuraruru.kosu 18
	kya.jume 10	terebi.dokyuume 1	suto.debyuu 20		načurasu.kosu 1
	kyari.jume 1	terebi.dokyumento 2	sutori.debyuu 1		
			sutoriito.debyuu 1		
☺B	CR 1	TV-D 1	SD 2		
☺C		terebi 1			
	rejume 4	dokyuume 1	suto 1		kosume 1
		dokyumento 1			
		dokyumentari 1			
☺D		dokyu.tere 2		mane.bijo 1	kosu.raru 1
<b>TOTAL</b>	<b>92</b>	<b>93</b>	<b>92</b>	<b>92</b>	<b>92</b>

Table 3: Responses to Type A Compounds

*dokyu.tere*). These five patterns I hereafter refer to as ☺ (relevant) and ☺A, ☺B, ☺C and ☺D (all irrelevant) clipping patterns respectively. The relevant ☺ patterns may be further split into those where mora-splitting occurred (☺#) and those where it did not (☺μ). The responses to all five Type A compounds are given in Table 3 below.

Compounds (35) and (36) exhibited the greatest variation overall, both with 17 different clipped forms recorded. Compounds (38) and (39), on the other hand, varied the least, though still with a sizeable 13 different forms each. Restricting discussion to the relevant ☺μ and ☺# patterns, here the situation was reversed with compound (36) exhibiting the least variation and compounds (38) and (39) evincing the most. Compound (35) exhibited especially rich variation in its ☺# patterns. Whether the splittable mora occurred in the first (38-39) or second (35-37) element of a compound appears to have no significance as regards either the level of overall or ☺ pattern variation.

As can be seen from Table 4, neither does it appear to have any significance when responses are grouped by clipping pattern. Here the most concentrated patterns were 71%

☺ $\mu$  for compound (39) and 61% ☺ $\mu$  for compound (36). Compound (37) evinced the greatest proportion (54/92, 59%) of ☺A patterns, while (38) saw no ☺B or ☺C patterns and only one ☺D pattern.

	(35)		(36)		(37)		(38)		(39)	
☺ $\#$	15	16.3%	4	4.3%	4	4.3%	14	15.2%	2	2.1%
☺ $\mu$	42	45.7%	57	61.3%	31	33.7%	52	56.5%	65	70.7%
☺A	30	32.6%	25	26.9%	54	58.7%	24	26.1%	23	25.0%
☺B	1	1.1%	1	1.1%	2	2.1%	0	0.0%	0	0.0%
☺C	4	4.3%	4	4.3%	1	1.1%	0	0.0%	1	1.1%
☺D	0	0.0%	2	2.1%	0	0.0%	1	1.1%	1	1.1%
<b>TOTAL</b>	<b>92</b>	<b>100.0%</b>	<b>93</b>	<b>100.0%</b>	<b>92</b>	<b>100.0%</b>	<b>92</b>	<b>100.0%</b>	<b>92</b>	<b>100.0%</b>

Table 4: Responses to Type A Compounds Grouped by Clipping Pattern

Table 5 shows the data for relevant ☺ responses only. Overall, 62% (286/458) of responses were relevant, with only compound (37), at a mere 38%, deviating substantially from this norm. This was the only compound where the splittable mora was followed by a vowel, rather than a consonant. The vowel was itself followed by a word boundary. These phonotactics may have been responsible for the large number of irrelevant responses in which the element containing the splittable mora was not clipped at all (22/93, 23.6%; cf. Table 3). The clipping behaviour displayed by (37) runs contrary to Kubozono's (2002a: 94) contention noted in § 2 above that in Japanese in general 'long vowels tend to be shortened in word-final position'.

	(35)		(36)		(37)		(38)		(39)		ALL	
☺ $\#$	15	16.3%	4	4.3%	4	4.3%	14	15.2%	2	2.1%	<b>39</b>	<b>8.5%</b>
☺ $\mu$	42	45.7%	57	61.3%	31	33.7%	52	56.5%	65	70.7%	<b>247</b>	<b>53.6%</b>
all ☺	57	62.0%	61	65.6%	35	38.0%	66	71.7%	67	72.8%	<b>286</b>	<b>62.0%</b>
☺ $\#$ : ☺ $\mu$	26 : 74		7 : 93		11 : 89		21 : 79		3 : 97		<b>14 : 86</b>	

Table 5: Relevant ☺ Responses to Type A Compounds

To turn finally to the central question posed by this paper: the regularity of mora-splitting as a phenomenon in *gairaigo* compound clipping. Overall, the ratio of split to unsplit responses was 14:86, clearly indicating that mora splitting is marked. Compounds (36) and (38), with ratios of 7:93 and 3:97 respectively, were especially resistant to mora splitting. While the existence of the lexeme *nači* 'Nazi' may have played

a role in lowering the number of mora-splitting responses for compound (39), no such observation can be made regarding compound (36). Neither the position (first or second) of the element in which the splittable mora occurs, the length of the element in which it occurs, the distance from the end of the element in which it occurs, nor the type of syllable (light or heavy) in which it occurs appears to have any significance. As all splittable morae in this survey were restricted to those with palatal glides, further research is required on splitting ratios for *kana* digraphs without glides, such as ファ <fa>, ディ <di>, トゥ <tu>, etc.

### Appendix

次の四つの質問の中から、それぞれ一つだけ選んで丸をつけて下さい。

- |               |        |        |             |       |
|---------------|--------|--------|-------------|-------|
| 一. 年齢：        | 18-19才 | 20-21才 | 22-23才      | 24才以上 |
| 二. 性別：        | 男      | 女      |             |       |
| 三. 私は日本語母語話者  | です。    |        | ではありません。    |       |
| 四. 私はこのアンケートが | 初めてです。 |        | 初めてではありません。 |       |

①～⑧までの二つの外来語を省略して組み合わせるとしたら、どのように組み合わせるか例A・Bを参考にして片仮名で書いて下さい。あまり深く考えないで思ったままを書いてください。

例A： デジタル・カメラ > デジカメ

例B： ミスター・ドーナツ > ミスド

- |                 |   |       |
|-----------------|---|-------|
| ① キャリア・レジューム    | > | _____ |
| ② ダブル・エスプレッソ    | > | _____ |
| ③ テレビ・ドキュメンタリー  | > | _____ |
| ④ キムチ・ビビンバ      | > | _____ |
| ⑤ ストリート・デビュー    | > | _____ |
| ⑥ ビジョン・マネジメント   | > | _____ |
| ⑦ マカダミア・チョコレート  | > | _____ |
| ⑧ ナチュラル・コスメティック | > | _____ |

## Bibliography

- Aldrete, John. 1995. *Morphologically Governed Accent in Optimality Theory*. Doctoral dissertation, University of Massachusetts.
- Backhouse, A. E. 1993. *The Japanese Language*. Melbourne: Oxford University Press.
- Fukuzawa, Haruka and Kitahara Mafuyu. 2005. Ranking Paradoxes in Consonant Voicing in Japanese. In *Voicing in Japanese*, ed. Jeroen van de Weijer, Kensuke Nanjo and Tetsuo Nishihara, 105-121. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Fukuzawa, Haruka, Kitahara Mafuyu and Ota Mitsuhiro. 1998. Lexical Stratification and Ranking Invariance in Constraint-Based Grammars. In *Papers from the 34<sup>th</sup> Regional Meeting of the Chicago Linguistics Society, Part II: The Panels*, ed. M. Catherine Gruber, Derrick Higgins, Kenneth Olson and Tamra Wysocki, 47-62. Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Gottlieb, Nanette. 2005. *Language and Society in Japan*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hamano, Shoko. 1998. *The Sound-Symbolic System of Japanese*. Stanford: CSLI Publications.
- Irwin, Mark. 2005. Rendaku-Based Lexical Hierarchies in Japanese: The Behaviour of Sino-Japanese Mononoms in Hybrid Noun Compounds. *Journal of East Asian Linguistics* 14: 121-153.
- . forthcoming. Rendaku Immunity and Prosodic Size.
- Itô, Junko. 1990. Prosodic Minimality in Japanese. In *Papers from the 26<sup>th</sup> Regional Meeting of the Chicago Linguistics Society Vol 2: The Parasession on the Syllable in Phonetics and Phonology*, ed. Michael Ziolkowski, Manuela Noske and Karen Deaton, 213-239. Chicago: Chicago Linguistics Society.
- Itô, Junko, Yoshihisa Kitagawa and Armin Mester. 1996. Prosodic Faithfulness and Correspondence: Evidence from a Japanese Argot. *Journal of East Asian Linguistics* 5: 217-294.
- Itô, Junko and Armin Mester. 1992. *Weak Layering and Word Binariness*. Report LRC-92-09, University of California, Santa Cruz. Republished (2003) in *A New Century of Phonology and Phonological Theory: A Festschrift for Professor Shosuke Haraguchi on the Occasion of his Sixtieth Birthday*, ed. Takeru Honma, Masao Okazaki, Toshiyuki Tabata and Shin-ichi Tanaka, 26-65. Tokyo: Kaitakusha.

- 1995. Japanese Phonology. In *The Handbook of Phonological Theory*, ed. John Goldsmith, 817-838. Cambridge, Mass.: Blackwell.
- 1999. The Phonological Lexicon. In *The Handbook of Japanese Linguistics*, ed. Natsuko Tsujimura, 62-100. Oxford: Blackwell.
- Kubozono, Haruo. 1999. Mora and Syllable. In *The Handbook of Japanese Linguistics*, ed. Natsuko Tsujimura, 31-61. Oxford: Blackwell.
- 2001. On the Markedness of Diphthongs. *Kobe Papers in Linguistics* 3: 60-73.
- 2002a. Prosodic Structure of Loanwords in Japanese: Syllable, Structure, Accent and Morphology. *Onsei Kenkyū (Journal of the Phonetic Society of Japan)* 6.1: 79-97.
- 2002b. The Syllable as a Unit of Prosodic Organization in Japanese: Syllable Structure, Accent and Morphology. In *The Syllable in Optimality Theory*, ed. Caroline Féry and Ruben van de Vijver, 129-156. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kubozono, Haruo and Armin Mester. 1995. Foot and Accent: New Evidence from Japanese Compound Accentuation. Paper Presented at the Annual Linguistics Society of America Meeting, New Orleans.
- 1998b. Nihongo ni okeru fukugōgoryakugo no on'inkōzō (The Phonological Structure of Japanese Clipped Compounds). *On'in Kenkyū (Phonological Studies)* 1: 161-168.
- Labrone, Laurence. 2002. The Prosodic Structure of Simple Abbreviated Loanwords in Japanese: A Constraint-Based Account. *Onsei Kenkyū (Journal of the Phonetic Society of Japan)* 6.1: 98-120.
- 2006. *Corpus d'Emprunts Abrégés Japonais*. Available online at [http://erssab.u-bordeaux3.fr/IMG/pdf/corpus\\_gairaigo\\_abreges.pdf](http://erssab.u-bordeaux3.fr/IMG/pdf/corpus_gairaigo_abreges.pdf). Retrieved 21 November, 2008.
- Loveday, Leo. 1996. *Language Contact in Japan*. Oxford: Oxford University Press.
- Lovins, Julie Beth. 1973. *Loanwords and the Phonological Structure of Japanese*. Doctoral dissertation, University of Chicago.
- M<sup>c</sup>Cawley, James. 1968. *The Phonological Component of a Grammar of Japanese*. The Hague: Mouton.
- Martin, Samuel E. 1952. Morphophonemics of Standard Colloquial Japanese. *Language* 28: 3 (Part 2, Supplement).
- Mester, Armin. 1990. Patterns of Truncation. *Linguistic Inquiry* 21: 478-485.
- Ota, Mitsuhiro. 2004. The Learnability of the Stratified Phonological Lexicon. *Journal of Japanese Linguistics* 20: 19-40.

- Poser, William. 1990. Evidence for Foot Structure in Japanese. *Language* 66: 78-105.
- Rice, Keren. 1997. Japanese NC Clusters and the Redundancy of Postnasal Voicing. *Linguistic Inquiry* 28: 541-551.
- Shibatani, Masayoshi. 1990. *The Languages of Japan*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tateishi, Koichi. 1985. *One Secret Language in Japanese: As a Special Case of Reduplication*. University of Massachusetts manuscript, Amherst.
- . 1989. Theoretical Implications of Japanese Musicians' Language. In *Proceedings of the Eighth West Coast Conference on Formal Linguistics*, ed. Jane Fee and Kathryn Hunt, 384-398. Stanford: CSLI Publications.
- Tsujimura, Natsuko and Stuart Davis. 1987. The Accent of Long Nominal Compounding in Tokyo Japanese. *Studies in Language* 11: 199-206.
- Vance, Timothy. 1987. *An Introduction to Japanese Phonology*. Albany: State University of New York Press.
- Yamaguchi, Toshiko. 2007. *Japanese Linguistics: An Introduction*. London: Continuum.
- 桑本裕二. 1998a. 略語から見た日本語の超重音説の構造について. 言語科学論集 2: 25-35.
- . 1998b. 日本語における複合語略語の音韻構造. 音韻研究 1: 161-168.
- 小学館 (編). 2000-2002. 日本国語大辞典. 東京: 小学館.
- 西尾寅弥. 2002. 語種. 「語彙・意味」, 斎藤倫明(編), 29-53. 東京: 朝倉書店.
- 松岡光司. 1982. 外来語の歴史. 「語彙史」, 森岡健二(編), 90-114. 東京: 明治書院.

## 借用語複合語の拍分析

### アーウィン マーク

現代日本語では、借用語複合語の短縮方法において三つの形態がみられ、その中で最も頻繁なのは脱落である。masukomyunikeešON (マスコミニケーション) がmasukomi (マスコミ) になるような「拍分断」は脱落の中でも興味深い現象であり、それをもたらすのは短縮方法と無関係のはずの仮名表記の知識との関係が強く示唆される。拍分断の規則性を把握するため、18~21歳の山形大学生に調査を実施した。その結果、拍分断は極めて例外的であると判明した。



## 「詞」の言葉

### ——楽章集と花間集——

芦 立 一 郎

#### 1 はじめに

詞の世界の一つ特性として、女性や女性との関係を表現するところがあげられる。そのような主題は詞に限らず詩の場にあっても古い時代より追及されてきたものであり、長い伝統を持ち考慮すべき事柄は多い。ただ、いまはその多くをひとまず捨象して、単純に代表的な詞集である『楽章集』の語彙状況の調査をおこなうこととする。比較の対象として『花間集』（テキストは『花間集校』李一氓，1960年，商務印書館）を用いることにする。

柳永の生は、身を花柳の巷に沈め、通俗的文学である詞の名手として名をなし、それゆえ官途を誤まり、士人としての評価は低い。広い意味で文学に殉じた人物の一つの典型として提示されてきたものといえようか。遊興と艶詞作成の故に科挙合格を取り消されたこと、〔仁宗留意儒雅，務本理道，深斥浮艷虚薄之文，初進士柳三變，好爲淫冶謳歌之曲，博播四方，嘗有鶴沖天詞云，忍把浮名，換了淺酌低唱，及臨軒放榜，特落之，曰，且去淺酌低唱，何要浮名，〕（吳曾『能改齋漫錄』）また、青樓に留連し、「奉聖旨填詞柳三變」と居直った話（『苕溪漁隱叢話』引『藝苑雌黃』）などの逸話は有名である。艶情の詞作をもって、世界に反抗する存在としての形象を提示するそれらの記述は、一見明快で一般的な理解が得やすいものではあるが、それが柳永の生の実事であるのかどうかは必ずしも明らかではないようである。事実として確定されことは非常に少い（村上哲見『宋詞研究』、「柳耆卿家世閱歴考」参照）。ただ、花柳界とに如何なる関わり方をしたのか等々その事実は不明だとしても、柳永が残した詞作品の多くは艶詞であり彼の詞の主要な部分を占めるのは事実である。女性と艶情をモチーフとする作品の特性を把握することをも視野にいて、『楽章集』の言葉の使用の状況を検討していくこととする。テキストは『楽章集校註』（薛瑞生，中華書局，1997）を用いる。

#### 2 『楽章集』の用字用語の特徴

まずは、用字の特徴をみることにする。便宜上、『花間集』の用字と比較しながらみていくことにする。まず、使用頻度の高い「文字」100字を表示してみる。

## 『楽章集』

人	134	花	274
風	133	春	215
無	118	香	204
天	112	金	174
處	100	紅	163
雲	98	風	161
相	91	不	159
花	87	人	159
煙	86	無	146
一	83	玉	140
是	79	月	134
千	78	相	134
不	77	翠	114
輕	77	雲	113
情	76	夢	112
何	75	愁	111
時	75	上	108
金	75	情	108
來	73	雨	107
深	73	煙	106
有	72	一	104
盡	72	時	100
香	69	水	100
夜	68	來	99
得	67	柳	99
裡	67	簾	99
雨	67	深	96
前	66	語	95
心	66	屏	94
景	66	羅	94
歡	66	小	91
好	65	畫	91
愁	65	天	88
斷	64	山	88
歸	64	處	88
光	63	輕	88
日	62	心	85
年	61	滿	84
當	61	思	82
向	60	斷	82
紅	59	日	82
慙	58	何	79
如	57	恨	78
春	57	殘	77
歌	57	歸	75
漸	57	暗	74
多	56	長	74
成	56	雙	74
清	56	鶯	73
游	55	去	71
難	55	明	71

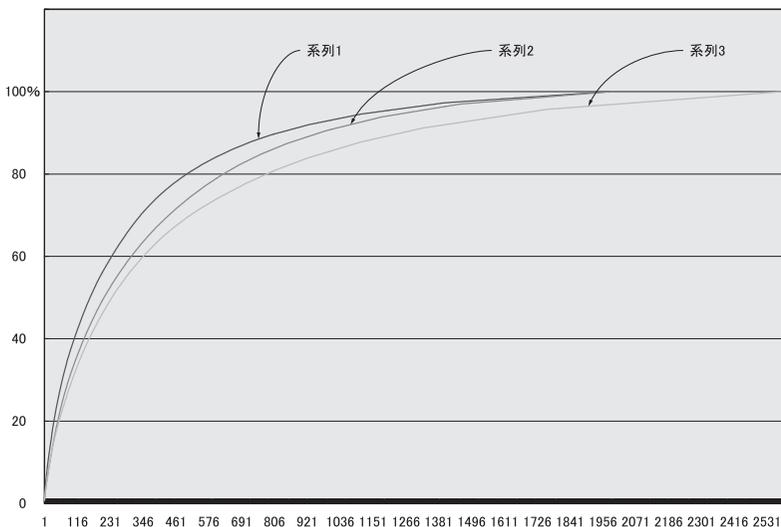
## 『花間集』

去	54	空	70
殘	53	樓	69
空	52	碧	69
長	52	落	69
翠	51	飛	69
別	50	夜	67
山	50	聲	67
月	50	淚	66
生	49	綉	66
萬	49	眉	65
酒	48	如	64
聲	47	斜	63
暮	46	垂	62
水	46	欲	62
芳	46	枕	61
畫	45	窗	59
閒	45	草	58
遠	44	見	58
望	43	倚	57
此	43	是	57
爭	43	江	56
事	42	郎	55
樓	42	魂	55
行	41	鴛	55
似	40	別	54
思	40	芳	54
未	40	晚	53
盈	40	錦	53
高	40	半	51
厭	39	得	51
新	39	閒	51
笑	39	前	50
自	39	燕	50
重	39	綠	50
少	38	年	49
意	38	枝	49
三	37	知	49
中	37	秋	49
更	37	重	49
秋	37	珠	48
陽	37	千	47
上	36	衣	47
回	36	妝	46
嬌	36	寒	46
明	36	曉	45
舊	36	裏	45
鴛	36	起	45
又	35	隔	45
消	35	露	45
鳳	35		

『花間集』、『楽章集』の文字数とその使用であるが、『花間集』は1892種、延べ21374字、『楽章集』は、1987種、延べ17578字である。参考までに、両集の使用頻度の高い順に並べた文字についてその頻度の累積値をグラフにした図表を表2.に示す。

系列1.『花間集』, 系列2.『楽章集』, 系列3.温庭筠詩歌(全唐詩),  
横軸は文字の数, 縦軸は頻度の累積量

表2



この表からは特に『花間集』の同一文字の繰り返しての使用の多さがうかがわれる。上位100文字種で、全文字の約4割を占める。『楽章集』はそれに較べれば文字使用の分散度が高いようではある。それでも温庭筠の詩歌作品に比すると、まだ相当に同一文字の繰り返しがみられる。これらは、詩題などを除いた本文に限って数えたものである。正確を期したつもりではあるが、相当数の誤りあるかと恐れる。それでも一定の方向性は推測できよう。

使用順の上位にする文字は総じてどの集においても使用頻度が高いものではある。ただそのうち『花間集』において使用率の高い「玉」「夢」「簾」「屏」「雙」「鶯」「涙」などの文字使用は『楽章集』においては幾分その使用比率が低くなる。逆に『楽章集』に比較的多くみられるもので、『花間集』に低いものとしては、「歡」「當」「光」「向」「漸」「生」などの文字が掲げられる。また<花><春><香><月>の使用、いわゆる花鳥風月の場を表現する主要な文字であるが、その割合が『楽章集』において若干低減している様子が窺われる。『楽章集』の表現域が『花間集』の花鳥風月の場からは離れていく傾向があるようで、それが反映しているのかもしれない。

文字のみならず語句レベルにおいても繰り返しは多い。『楽章集』だけの現象ではないが、

「詞」には表現の繰り返ししがしばしばみえる（沢崎久和、「花間集の因襲」高知大学紀要、参照）。詞の世界には、表現を表現者個人に帰属させ難くするある種の発想の類型性が存在しているようにも思われる。いま幾つか例を示す。

「太平時、朝野多歡民康阜」は「上-迎新春」と「下-透碧宵」にすっかり同じ形で出現する。「惹起舊愁無限」も「中-御街行其二」と「中-秋夜月」に、「自有憐才深意」は「中-尉遲杯」「中-殢人嬌」。四字句になると更に多く、「好天好景」（上-鶴冲天、下-安公子）、「好天良夜」は上-女冠子、中-少年游其八、下-洞仙歌、「好景良天」は中-婆羅門令中-離別難など。四文字の句で3回くりかえされるものとして、「帝里風光」,「有個人人」,「浪萍風梗」,「綺羅叢裏」,「韶光明媚」などが掲げられる。

『花間集』にも同様な語句の繰り返し使用がみられる、むしろ『花間集』のほうが同一表現の繰り返し使用は多いのかもしれない。5回繰り返される「滿地落花」,「滿地落花紅帶雨」（歸國遙、韋莊）,「滿地落花千片」（謁金門、薛昭蘊）, {滿地落花無消息}（思越人、牛嶠）,「滿地落花紅幾片」（玉樓春、魏承班）, 滿地落花慵掃（西溪子、毛熙震）, 他にも、4回繰り返される「不知消息」「曉鶯殘月」「手按裙帶」など多数ある。詩作品においてはこれほどの繰り返しはみられないようである。（温庭筠の場合は「昔年曾到武陵溪」の<昔年曾>が4例あるのが最も多いもの）これだけから結論づけることは乱暴ではあるが、歌われる対象である「詞」には、個別の事情をそれ自体独自のものとして描写しようとする表現意図とは異なった動機づけが存在しているように思われる。あるいは、ある出来事を不特定多数の共通の体験としてとりあげ認知する発想の枠組みが、歌謡としての特性であり、そのような事情から類似表現の繰り返しが出現するのでもあろうか。さらに検討を加えなければならない。

### 3 『花間集』と『樂章集』の使用語彙の比較

次にそれぞれの集について語彙使用の様子をみていく。まずは『樂章集』においてよく使用される語彙群をみていく。比較の便宜上、『花間集』と『樂章集』の語彙を意味的に分類し、同類の語彙をまとめて数え上げた表を並べて示す。もとより語彙の認定と意味付与に関しては、確立された基準がなく主観の判断による、いささか不安定な判断ではある。

表3は『分類語彙表』（秀英出版、1964年、国立国語研究所資料集6）にならって、意味づけ分類し、意味分野ごとに集計した語彙群を使用頻度の高い順に20位まで示したものの。

表4は意味分類の枠を多少広めにして、たとえば時間であれば、「時刻」とか「期間」,「季節」「あと先の順序」など様々な細かい区分があるが、そのうち近接する意味分野をまとめて計量し、『花間集』と『樂章集』の双方を対比させたものである。とくに偏差が見られるものとして、1：こそあど類 7：時間 8：空間 20：心・感情 23：文化・風俗 31：衣料 33：住居・建物 40：植物 41：動物 42：身体・容貌 48：変化・動き 52：感覚・感情

表3

意味分野	樂章集語彙	数量	千分率	意味分野	花間集語彙	数量	千分率
意識・感覚	暗 14 遠 2 何 限 3 可意 1 寒 1 看朱成碧 1 閑 7 虚 3 狂 6 空 35 など	270	22.6	枝・葉・花	杏花 13 一枝 4 煙花 2 花 175 花 心 1 花片 1 華 1 株 1 玉英 1 玉葉 1 禁花 1 など	394	22.6
こそあど	一一 2 一向 1 何 19 何爲 1 各 2 幾 13 幾 許 6 幾多 3 幾 處 1 許 など	222	18.6	意識・感覚	迴 1 暗 41 暗地 1 陰森 1 遠 8 何限 1 寒 25 閑 5 虚 7 狂 3 空 50 など	383	21.9
まだ・もう	偶 5 更 25 再 3 終 7 重 20 初 12 先 7 漸 43 漸漸 3 抵死 2 動 4 など	188	15.7	鳥	鶉鶉 12 鳥 1 越禽 1 煙雁 1 燕 38 燕子 2 鴛 6 鴛鴦 32 鷗 3 など	305	17.5
気分・情緒	炊 1 愛 4 厭 4 縁情 1 悔懊 2 寛 1 喜 2 喜歡 1 怯 1 恐 9 など	172	14.4	植物名	杏 10 一枝春 1 煙柳 2 荻 1 牡丹 6 荷 6 海棠 8 海棠梨 1 蒲 1 萱 草 2 菊 3 橘 1 等	289	16.6
朝晩	一夜 1 永晝 2 黄昏 3 佳辰 1 向晚 6 向曉 4 更時 1 更深 2 更闌など	167	14	戸・カーテン など	筠簾 1 綃幌 2 鞦 1 雲屏 7 鴛幃 1 錦屏 5 錦帷 1 錦 綉 1 など	273	15.6
こそあど	惟 1 惟是 1 一 箇 1 何事 5 何 處 22 外 2 還 是 1 幾 1 却是 1 此 26 など	146	12.2	色	麴塵 3 蒨 1 罌金 黄 1 黄 3 金 1 金翠 1 銀 1 紅 58 紅色 1 紅鮮な ど	235	13.5
空間・場所	閨苑 1 異域 1 雲中 1 遠 2 黄 金闌 1 近遠 1 江上 2 高 1 際 など	135	11.3	朝晩	一夜 5 永夜 1 黄 昏 5 寒夜 1 曉 1 今宵 3 今夜 1 今 夕 1 秋夜 2 終朝 3 終日 10 など	217	12.4

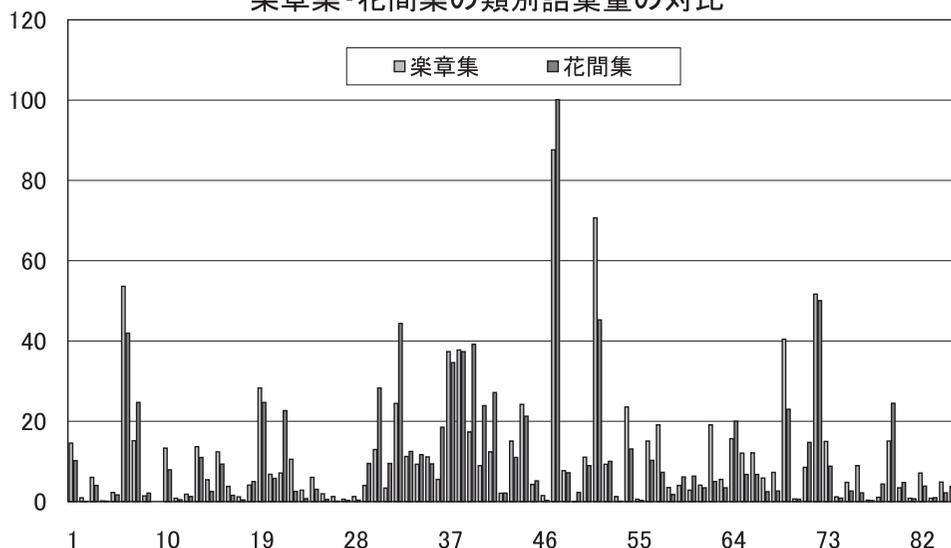
「詞」の言葉——芦立

感覚・疲労・睡眠など	滞 1 厭 1 鴛寝 2 感 1 起 5 狂 6 驚 5 空勞 1 牽役 1 魂消 など	132	11.1	川・湖	雲水 1 汴河 1 浦 8 越溪 1 煙水 1 河 6 回塘 3 漢水 1 曲江池 1 など	209	12
応接	逢 4 逢迎 2 看待 1 偶 3 遇 8 迎 2 見 3 再會 1 謝など	119	9.97	季節	夏 1 寒 3 三春 1 時節 14 秋 27 春 141 春日 2 深秋 2 青春 1 節 2 晩春 1 陽春 1 など	200	11.5
われ・なれ・かれ	你 7 阿誰 1 伊 29 伊家 2 何人 3 我 17 我兒 1 君 5 吾 2 妾な ど	102	8.54	上がり下がり	下 11 降 3 昇 1 上 13 垂 55 墮 3 墜 14 低 17 滴 21 登 1 落 39 零 1 墮 5 搖落 1 擧 1 擧 3 翹 1な ど	196	11.2
植物名	兼葭 3 江梅 1 弱柳 1 松 1 垂 楊 9 楚梅 1 丁 香 1 椿 1 葦 3 杏 8 煙柳 1 荷 5 寒竹など	102	8.54	天体	婺女 1 煙月 4 河 1 海月 1 玉鈎 1 玉兔 1 玉輪 1 玉 繩 1 玉蟾 2 玉鈎 1 など	190	10.9
枝・葉・花	一枝 1 煙眼 1 艷卉 1 黄花 1 花 33 花雨 1 花英 1 花梢 2 花絮 1 など	102	8.54	目鼻・顔など	艷紅 1 遠山眉 1 霞臉 1 蛾 5 蛾眉 4 眼 9 顔 1 金 靨 1 月蛾 1 紅臉 4 香紅 1 など	179	10.3
景	煙光 3 佳景 1 嘉景 3 花光 3 花朝月夕 1 寒色 1 景 12 月下 1 月夕花朝 1 など	101	8.46	相互・異同	却 8 却來 1 交 4 似 3 相 87 多端 1 同 2 如 50 翻 2 兩 17 卻 2 など	177	10.1
見る	看 10 眼看 1 仰 1 凝望 1 凝 眸 1 極目 3 見 6 顧 4 視 1 相看 3 相望 4 登眺 1 頻見 1 一望 1 など	98	8.21	往復	一去 1 往來 4 回 4 還 6 還歸 1 歸 2 歸去 1 歸來 2 去 43 去去 2 去住 1 など	175	10

雲	彤雲 1 彤霞 1 雲 32 雲煙 1 雲海 1 雲峰 1 雲濤 3 煙など	98	8.21	気分・情緒	據懷 1 愛 7 厭 1 含啼 1 喜 3 怯 2 恐 1 狂殺 2 驚 8 凝情 2 遺情 など	170	9.74
色	燕脂 1 艶 7 黄 1 奇艶 1 凝碧 2 金 1 金碧 1 銀 2 五色 1 紅 25 紅翠 2 彩 2 紫翠 など	98	8.21	雨・雪	雨 72 煙雨 4 花 露 2 蒲雨 1 凝露 1 玉露 1 行雨 1 香露 1 細雨 1 芝 露 1 珠露 1 など	167	9.57
驚き・楽しい・快い	忡忡 2 苦 8 荒 涼 1 慘 5 寂寞 8 愁悴 1 傷心 1 消黯 など	96	8.04	打ち消し	不 157	157	9.05
感情・気分	愛 1 意 7 雨意 雲情 1 閑情 1 況 1 況味 1 狂 心 1 興 1 思 1 酒心など	95	7.96	こそあど	伊 3 惟 2 何許 1 何事 10 何處 46 幾 1 幾般 1 此 30 是 57 他 5 底事 1 など	157	9
家屋	雲軒 1 宴館 1 歌樓 1 歌臺 1 閣 4 危閣 1 危 亭 1 危樓 4 玉 宇 1 など蘭臺 2 雙闕 1	92	7.71	感覚・疲労・睡眠など	厭 1 鴛寢 1 感 1 起 6 狂 3 驚 20 驚起 1 驚覺 1 牽 役 1 孤枕 1 睡 15 睡覺 2 など	156	8.94
位置・方向	下臨 1 孤 2 向 31 向背 1 際 1 指 2 西東 2 相 向 1 相對 1 朝 1 など	92	7.71	家屋	越臺 1 屋 1 閣 9 玉殿 2 玉樓 12 金殿 1 金堂 1 金 鑾 1 景陽 3 姑蘇 臺 1 戸 2 など	153	8.77

57：応接 63：生・病 70：時間（相）が掲げられる。数字は次に示すグラフの横軸の番号である。グラフの縦軸は千分率の数値。

楽章集・花間集の類別語彙量の対比



その中で特に差異が窺われる部分、特徴的と思われる事情につき、そのいくつかを検討してみる。事項としては以下のものを取り上げることとする。

- \*こそあど系語彙。
- \*人称語。
- \*時空認知に関わる語彙。
- \*花鳥風月（動植物）語彙の量的相異。
- \*その他、表に表れない現象、魂・夢など。

\*『楽章集』で注目されるのは「こそあど」指示詞系統の使用率の高いことであろうか。「何處」などの例である。「是」については指示系統の配置としていいのかどうか問題があろうが、今はそのままとする。「何處」については、量的には『花間集』でも多く44回の使用が数えられる。ただ「波光渺渺，不知何處」（河傳，和凝）あるいは「天上嫦娥人不識，寄書何處覓」（謁金門其二，韋莊）のように不在あるいは不定の表現で、現実の場の特定とは関わるものではないのかもしれないが、此れとかあれのように実物の指定とは幾分性質異なるようにおもえるが、広い意味での空間指定の例と考えることとする。『花間集』のこそあど系全体としての使用量は『楽章集』より幾分少なくなるようである。そのなかで注目されるのは『楽章集』「恁」の使用量の問題であろうか。『花間集』には「終是為伊，只恁偷瘦」（賀明朝，歐陽炯）の一例だけであるが、『楽章集』では相当に多く、56例ほど数えられる。つぎのような例である。○添傷感，將何計。空只恁，厭厭地。無人處思量，幾度垂淚。不會得 都來 些子 事，甚恁底 抵死難拚棄。待到頭，終久問伊着，如何是。

(つのる想いに痛む心、いかにすべきか。空しくただかくも、悲しく。だれもいないところで思い悩み、幾度となく涙を流す。考えてみれば些細なことではないか、されどどうしてこのようにも忘れ去ることができないのか。あなたがこっちに振り返ってくれたら、絶対にいってやるの、「ほんとに、なんとかして!」と。)

他にも幾つか類例をあげる。

○粉牆曾恁，窺宋三年。(下-玉瑚蝶)

○早知恁地難拚，悔不當時留住(上-晝夜樂)

いずれにしても、擬制的な直接性の志向である。「こんなにも」「かくも」というのであれば、その詞に関係する主体、歌詞に取り上げられ主体あるいは歌う主体と同化した時、感覚感情の実体性が直接的に確認できよう。そのような実感性の獲得を企図する表現手法であろうか。伝統的には「如此」などで担われていたものであるが、『樂章集』の「恁」のように多用されることはないようである。

\*時間・空間のとらえ方、

時間に関わる語彙の使用については、全般的には『樂章集』のほうが多いようである。「寒更」「歳華」「漏」「時」などの抽象性をもつ語彙の使用が眼につく。ただ季節に関しては「春」例が26例と少なくなる。また「曉」の使用も少なく、7例しかない。『花間集』ではそれぞれ141例と38例が数えられる。『花間集』では特に「春」の使用が多いわけだが、それは同時に詞の場としての時空をも規定する。「春晚，風暖，錦城花滿」あるいは「春夢正關情」「一枝春豔濃」というように、濃密な質量に満たされている閉じた特殊な時空を提示する。『樂章集』にはそのような、閉じた入れものとして空間はうかがいにくい。

『樂章集』の時空に関してみれば、それは特殊な異界ではなく、日常的現実と地平が連なる通常の場合のように思われる。

「煦色韶光 明媚，輕靄 低 籠 芳樹」(上-闕百花)「昭華 夜 醮 連 清曙，金殿霓旌籠瑞霧」(上-玉樓春)一部にもや・霞に閉ざされるものもあるが、多くは明るく開けている。「對瀟瀟暮雨灑江天，一番洗清秋，(瀟瀟たる暮雨 江天に灑ぎ，一番 清秋を洗うに對す)」(八聲甘州)というように。

男女がおかれる場も異空間ではない。

○至更闌，疏狂轉甚。相將，鳳幃鴛寢。玉釵亂橫，任散盡高陽，這歡娛，甚時重恁。(中-043宣清)(夜がふけると、疏狂はいよいよ激しく。手に手をとって、鴛鴦の寢床。玉釵玉門相亂れ横になり縦になり、存分に高陽の夢をとげる、かかる歡娛。二度とありはしないのに。)男女の営みをのべるのだが、「甚時重恁。(いつまたこのような機会が)」というとき、経験の記憶を、明快な形相を与え、現実の時空のうちに引き戻し位置づけるもののように思われる。

○恰到如今，天長漏永，無端自家疏隔。知何時，却擁秦雲態，願低幃昵枕，輕輕細說與，江鄉夜夜，

數寒更思憶。(今となっては、天涯に居り時もかなわずへだたる二人、何故にかくそれぞれに隔てられる関係なのか。何時になったら、いつかのあの時のように抱きあい、願わくはとばりのもと枕を交して、耳元でそっと、夜夜睦みあったあとで、「今夜は冷えるね」なんて言った時の思い出を語りあえるようになるのか。) (中・浪淘沙) この作品の「如今」現実的、実体性のある「今」を指定しようとするものように思われる。

あるいは表現する時空の現実性あるいは現実志向とは直接的には関係しないことかとも思われるが、時間に関わる副詞で『樂章集』には「漸」の用法が多く、『花間集』に少ないことを取り上げておく。「星斗漸微茫，露冷月殘人未起」(江城子其二，皇甫松)等，三例しか見えない。『樂章集』では、「漸漸」も入れて52例。つぎのような例をあげる。

○旋暖熏鑪温斗帳。玉樹瓊枝，迤邐相偎傍。酒力漸濃春思蕩。鴛鴦繡被翻紅浪。(暖気あふれ熏鑪匂いたって斗帳の閨房はあつい。玉樹と瓊枝なまめき絡みて寄り添う。恋に酔い春めく心はみだりに疼く。鴛鴦(おしどり)紋様の衾は今夜も紅ないの浪。)(中・鳳棲梧)

男女の営為を持続する時間の内に把握して記述するものである。「持続」の相の対極にあると思われる，変化の相において把握する「已」あるいは「未」の使用に関しては『樂章集』、『花間集』ともに顕著な相違，あるいは特徴を認めることができない。

『花間集』に特徴的なのは閉ざされた特殊空間としての描写である。そこは多く洞房であり，カーテン・屏風(簾・屏・窗)で区切られ視線が閉ざされる場として提示される。「近來音信兩疏索，洞房空寂寞，掩銀屏，垂翠箔，度春宵」(酒泉子其二，温庭筠)。さらにその場は花鳥風月等のシンボリックな物体に満ち溢れる特殊空間としての印象を与える。その内に存在する対象は，宝飾で日常を超えて飾り上げられる，それは非日常性，あるいは異界としての場という特性を付与するする表現法であるように思われる。

○楚女不歸，樓枕小河春水。        楚女歸らず，樓は枕す小河の春水。  
月孤明，風又起，杏花稀。        月孤り明るく，風又た起り，杏花稀なり。  
玉釵斜簪雲鬢髻，裙上金縷。        玉釵と斜簪 雲なす鬢髻，裙上の金縷。  
八行書，千里夢，雁南飛。        八行の書，千里夢みるは，雁の南に飛ぶこと。

(酒泉子其四，温庭筠)

楚女とはおそらくは青楼中の女性であろう。春の河水，月明かりの内に散り残る杏花。愛情が実現するのは，夢の裏でしか通い路がない遥かな場であることを暗示するものようである。

\*人称語においても多少の違いがみられる。『樂章集』には「伊」が多用される。『花間集』にも7例ほど見られるが、『樂章集』では，31例と大幅に増える。他に「你」もある。『樂章集』には7例見える。『花間集』は「換我心，為你心，始知相憶深」(訴衷情其二，顧夔)のみである。『花間集』には「我」と「君」の共出がしばしば見られる。「想君思我錦衾寒」(浣溪沙其五，韋莊)「禮月求天，願君知我心，」(感恩多，牛嶠)「辜負我，悔憐君，告天天不聞」(更漏

子、牛嶠)などである。『楽章集』では「針綫 閒拈伴伊坐，和我，免使年少，光陰虛過」(中-045 定風波)など見られるものの、「新詞多俊格。敢共我勅敵。恨少年，枉費疏狂，不早與伊相識。」(上-惜春郎)のように、一人称と二人称の距離は遠くにあるように思われ、「われ」と「なんじ」の共出することそれ自体に、特別な意味合いは無いのかもしれない。

飲散玉鑪 煙裊。洞房悄悄。錦帳裏，低語偏濃，燭下，細看俱好。那人人，昨夜分明，許伊偕老。(宴も終えて，しなやかに立ちのぼる香炉の煙。閨房は悄悄と音もない。カーテンの奥，密やかな睦言，銀燭の下，見つめあう二人。可愛い人，ゆうべははっきりといった，あなたと永久に添い遂げたいと。)(上-兩同心)

「許伊偕老」に注して『校註』の薛瑞生は、『詩詞曲語辭匯積』を引きつつ，深い関係にある特別な対象を指定する語とする。(詞中「與伊偕老」顯係「那人人」口吻。)あるいは、「伊」には、「卻道你但先睡」(鬪百花其二)等の表現に窺がえる，一人称「私」と二人称「あなた」の間の直接の呼び合い，それよりもさらに心理的な距離感の小ささを実感させようとする用語でもあろうか。

その他，表には明確な形では現れないいくつかの事情について付け加える。あるいは空間表現のところで述べたほうがいいのかもかもしれないが，『花間集』にしばしば取り上げられる「禁城」等の語，「街鼓動，禁城開」(喜遷鶯，皇甫松)，「夢斷禁城鐘鼓，淚滴枕檀無數」(謁金門，牛希濟)「春入神京萬木芳，禁林鶯語滑」(小重山，和凝)，「風流帝子不歸來，滿地禁花慵掃」(滿宮花，尹鶚)などの例が掲げられるが，もとよりその禁と結ぶ場所は一般の出入が禁止される特殊な空間である。『楽章集』には禁止空間としての表現は一例しか見当たらない。「便是仙禁春深」(下-長壽樂)。

身体に関する語彙についても、『楽章集』では使用が少なくなる。表を示す。

『楽章集』語彙			
意味分野	語彙	数量	千分率
からだ	腰身 2 身材 1 醉魄 1 體 1	5	0.41
目・鼻・顔	花面 2 蛾黛 1 眼 4 顔 1 紅臉 1 香腮 1 耳 1 耳畔 1 朱脣 1 修蛾 2 修眉 1 愁蛾 1 愁眉 1 翠蛾 2 翠眉 1 星眸 1 層波 1 黛蛾 1 黛眉 2 檀口 1 頭 1 眉 5 眉宇 1 眉黛 1 眉峰 1 眉兒 2 美盼 1 粉面 4 芳顔 1 明眸 2 面 6 目 1 淚眼 10 雙蛾 2 雙眼 1 雙眉 1 媚靨 1 嬌面 2 臉 1 絳脣 2 臉 5 靨 2 頸 1	81	6.78
背・腹	腰 2 背 1 纖腰 2	5	0.41
手足	玉纖 1 金掌 1 腰肢 3 柔荑 1 掌 1 掌上 1 素手 1 纖手 4	13	1.08
内臓	愁腸 3 柔腸 2 寸腸 3 腸 2 腸肚 1 方寸 2	13	1.08
肌・毛髪	羽翼 1 雲髮 1 雲鬢 3 香雲 3 香雪 2 翠雲 1 翠鬢 1 暖酥 1 白髮 1 肌 1 肌膚 2 綠鬢 1 膩雲 1 髻 1 緞鬢 1	21	1.75
骨・歯	骨 1	1	0.08
涙	玉箸 1 珠淚 1 淚 10	12	1.01

『花間集』語彙頻度			
意味分野	語彙	数量	千分率
からだ	腰身 1 四肢 3 四體 1 身 11 肌骨 1 満身 1 體 1	19	1.08
目鼻・顔	艶紅 1 遠山眉 1 霞臉 1 蛾 5 蛾眉 4 眼 9 顔 1 金鬢 1 月蛾 1 紅臉 4 香紅 1 細緑 1 山額 1 耳 2 朱唇 1 首 3 修蛾 2 修碧 1 愁黛 1 春山 1 笑鬢 3 翠蛾 6 翠黛 3 翠眉 1 星眼 1 星鬢 2 雪面 1 舌 1 黛眉 7 淡蛾 1 桃臉 1 頭 10 眉 33 眉眼 1 眉山 1 眉心 5 眉黛 4 鼻 1 粉面 1 枕函花 1 慢臉 3 面 10 目 1 柳眉 1 頰 1 涙臉 1 蓮腮 1 兩蛾 1 雙蛾 2 雙臉 5 鸞環 1 羞蛾 1 脩蛾 1 唇 1 腮 2 臉 18 鬢 1 頸 1 顛 1	179	10.25
胸・腹	臆 1 胸 3 肩 1 腰 10 背 1 舞腰 1 柳腰 1 纖腰 2 臍 1 酥胸 1	22	1.26
手足	玉指 2 玉纖 5 玉趾 1 金蓮 1 股 1 香臂 1 腰肢 1 指 1 手 17 馬蹄 1 尾 2 腕 5 纖珪 1 纖手 4 臂 1	44	2.52
内臓	愁腸 2 寸腸 1 腸 19	22	1.26
皮膚・毛髪	羽 2 雲 3 雲髮 1 雲鬢 4 雲鬟 3 雲鬢 6 金翼 1 金蟲 1 紅玉 1 翠雲 2 翠鬟 6 青絲 3 雪肌 1 髮 2 蟬翼 1 蟬鬢 5 墜髻 1 低鬟 1 濃雲 1 白頭 1 肌 2 肌膚 3 髮 1 粉翅 1 鳳髻 1 翼 2 緑雲 4 緑鬟 3 雙髻 1 寶髻 1 濕雲 1 翅 3 髮 4 髻 8 髻鬟 1 鬢 1 鬟 7 鬟髻 1 鬟 20 鬟雲 4 鬟鬟 1 鴉鬟 1 緑雲 2 緑鬟 1	120	6.87
骨・歯	象 3 蹄 1 皓齒 1 齒 1	6	0.34
涙・血	汗 2 汗血 1 玉箸 3 血 2 紅涙 2 珠涙 4 粉涙 1 流珠 1 涙 58 涙珠 4 雙玉 1 泪 1	80	4.58

先にも触れたが、「夢」「魂」などの文字使用も『花間集』に比して少ない。(夢, 30回, 頻度順128位, 魂26回, 159位)。ちなみに「夢魂」の語など、『花間集』では「別後憶纖腰, 夢魂勞」(訴衷情, 魏承班), 「舊歡時有夢魂驚, 悔多情」(虞美人, 顧夔) など13例ほどみられるが, 多く男女の性愛との連想を底流させているように思われる。一方『樂章集』では「鱗鴻阻, 無信息。夢魂斷, 難尋覓。」(下・滿江紅) の一例だけである。「巫山」, 「雲雨」などの神話的・神秘的なモチーフの使用も抑制的である。総じて『樂章集』では暗い情念と関係する語彙の使用が抑えられるように思われる。

#### 4 おわりに

『樂章集』が提出した女性に関わる表現の新機軸として, 「観念性・類型性の脱却, 心理の具体的描写」, 「口語的要素のとりこみと“語り”の調子の獲得」等が言われる(宇野直人『中国古典詩歌の手法と言語』156p.参照)。語りの調子とは, いわゆる「白描」, 修辞を排した直接的表現といっているのだろう。これまで検討した『樂章集』の用字, 用語の特徴も, 多く上の指摘の内におさまるものではある。『樂章集』の表現には, 男女の関係の仔細な経過までのべ

られることになり、生身の現実までもが提示される。もとよりそれらは、男女の交際等を生業とする專家の職業上の口説と所作ではあり、尚類型的なものと思われる。焦らし挑発する女(長是夜深, 不肯便入鴛被。與解羅裳, 盈盈背立銀釭, 卻道你但先睡, 「上-鬪百花」), すねる性悪女(似覺些子輕孤, 早恁背人淚灑。從來嬌縱多猜訝, 「下-洞仙歌」)など確かに以前には表現されることの少ない女性とその営為が、明確な形象を与えられて取り上げられる。以前、『花間集』などにあっては彼方の異界に隠し置かれていた女性形象が、現実的な場に引き戻され、より具体的に生々しく表現されることになったわけである。ただそのおり、嘗て隠微な形ではあるが確認できた生命の深奥に関わる想像力、エロスの直観は捨象されてしまったもののように思われる。「詞語塵下」(苕溪漁隱叢話後集三三), 「淺近卑俗」(「碧鷄漫志二」)などの非難もこのこと関係するのかもしれない。

## 词的语言

### ——乐章集与花间集——

芦 立 一 郎

表现女性和女性关系，是词作世界的一个特点。自古以来，不仅限于词，也是诗所追求的主题。面对这个悠久的传统，应该考虑的因素很多。这里暂且将许多因素舍去，仅就《乐章集》的词汇状况作一点考察。

柳永一生置身于花街柳巷，以通俗文学——词作名手而闻名，因此貽误宦途，作为士人的评价很低。不过，从广义上，是否可以说，他是作为一个献身文学的典型人物而出现的。因游兴和写作艳词，科举合格的资格被取消等逸闻趣事广为人知。有些艳情词作，给人以反抗世界的印象。那些记述，乍一看，清晰明了通俗易懂，但是不是事实未必清楚，作为事实确认的非常少。这与花柳界有何关系，其事实即使不清楚，柳永遗留下的词作多数是艳词，在他的词作中占主要部分，这是事实。本文着眼于女性和艳情这个主题来把握作品的特点，对《乐章集》的语言使用状况进行探讨。

## 曹植と「国難」

### ——先秦漢魏文学における国家意識の一面——

福 山 泰 男

#### はじめに

国家は、国土・民族・制度・文化・思想宗教等だけでなく、人々がそれに抱く目に見えない感情や観念によって形作られる。文学は古来、そのような国家に対する無形の意識や感情・観念を表象してきた。歴史の変遷と転換の中で国家というものの自明性や正当性が問われる時、詩人や作家はどのような情念や意識をそれに投影してきたのだろうか。

漢末魏初という王朝交代期の詩人、曹植(192~232)は、国家や皇家をめぐり、様々な、時に陰影のある意識・観念を表している。ここでは、古代・中世転換期の国家像と文学の関わりを、曹植のテキストから探してみたい。

—

曹植を見る前に、上述の視点で先秦から漢代にいたる文学を概観してみよう。

『詩経』にある「中国」の最古の用例はよく知られている。

民亦勞止 民亦た勞す  
汙可小康 汙<sup>ほん</sup>ど小康すべし  
恵此中国 此の中国を恵し  
以綏四方 以て四方を<sup>やす</sup>綏んぜよ<sup>1</sup>

「民亦た勞す…此の中国を恵し…」というリフレインを4回繰り返す『詩経』大雅、民勞は、鄭箋に「時に賦歛重数し、繇役煩多たり、人民勞苦す(時賦歛重数、繇役煩多、人民勞苦)」<sup>2</sup>とあるように、人民をさいなむ悪政を批判した詩である。この「中国」とは京師とその周辺の地域を指し、都市国家に近い。「四方」とはその周辺国を言う。しかしこの詩は、そのような内と外の隔たりの強調よりも、為政者が「中国と四方を治めて民を苦痛と残虐から守るべきことを述べる」<sup>3</sup>ことに主意がある。

「中国」の用例は『詩経』大雅、桑柔にも見え、同様に亡国に導く政治の乱れを諷刺してい

\*1 『毛詩正義』(『十三経注疏 整理本』北京大学出版社、2000) 卷17、大雅、民勞、1338頁。

\*2 同1337頁。

\*3 加納喜光『詩経』(学習研究社、1983) 下、411頁。

る。

…  
 哀恫中国 あいどう 哀恫するは中国  
 具贅卒荒 ぜい 具に贅して卒く荒る  
 靡有旅力 な 旅力有ること靡し  
 以念穹蒼 以て穹蒼を念う<sup>4</sup>

上記『詩経』両篇における「中国」という語は、本来、為政者が善政を施すことによって民衆が安穩に暮らすべき場所にも関わらず、悪政に乱れる国として詠われている。

また「中国」だけでなく「国家」という語も見え、『礼記』緇衣に引かれる逸詩は、民衆のために善政が敷かれるべき領域として詠んでいる。

昔吾有先正 昔吾に先正有り  
 其言明且清 其言明にして且つ清し  
 国家以寧 国家以て寧んず  
 都邑以成 都邑以て成り  
 庶民以生 庶民以て生く<sup>5</sup>

… …

このように「中国」の最古の用例が、統治者ではなく民衆の視点・意識から国家の実像を伝えている点は興味深い<sup>6</sup>。

しかし、文学テキスト上の国家像は、このように批判・諷刺の対象として表象されるだけではない。『楚辞』九歌、国殤は、王逸が「国事に死する者を謂う、小爾雅に曰く、主無きの鬼を之を殤と謂う、と（謂死於国事者、小爾雅曰無主之鬼謂之殤）」<sup>7</sup>と注するように、戦役に身を捧げた死者とその靈魂を詠む。

首身離兮心不懲 首身離れて心懲りず  
 … …  
 身既死兮神以靈 身は既に死し神以て靈し  
 子魂魄兮為鬼雄 子が魂魄は鬼雄為り<sup>8</sup>

\* 4『毛詩正義』巻18、大雅、桑柔、1391頁。

\* 5『礼記注疏』（『十三經注疏 整理本』北京大学出版社、2000）巻55、緇衣、1767頁。

\* 6岸本美緒『東アジアの中の中国史』（放送大学教育振興会、2003）第一章「中国とは何か」（13・14頁）は、『詩経』の「中国」の用例を紹介した上で、『孟子』梁惠王章句上に「苾中国而撫四夷也」、『春秋左伝』僖公二十五年に「德以柔中国、刑以威四夷」とある用例を引き、戦国時代以後、東西南北の夷狄との対比から、文化礼儀を共有する諸国を「中国」として意識するようになったと述べる。さらに、岸本は「注目しておきたいのは、『中国』とはもともと、国の名前ではなく、複数の国を含む緩い文明圏をさす語だった」と言う。中国における国家像は、もともと人間の意識・心性にもとづく文明という観念と分かちがたく結びついていることを再認識したい。

\* 7『楚辞補注』（中文出版社、1979）巻2、九歌、国殤、140葉。

\* 8同139葉。

「国殤」では、国事に殉死する者が国の英霊として称揚される。しかしこのような、我が身を捧げる対象として国家を見る意識は、後述するように曹植以前の文学ではむしろまれであった。

国家はもともと狭い領域で、本来人民が善政によって安楽に住むべき場所であるという批判意識と、その反対に身を捧げる対象と見る観念を『詩経』『楚辞』のそれぞれに見た。いずれにせよ、屈原が「俗人祭祀の礼、歌舞の楽（俗人祭祀之礼、歌舞之楽）」<sup>9</sup>をもとに『楚辞』九歌を制作したとされるように、両詩篇とも民衆の視点から「国」に言及していると言えよう。

逆に為政者の立場から、国家支配をめぐる感情・意識を述べる早い例として、漢の高祖「大風歌」が挙げられる。

大風起兮雲飛揚　　大風起こりて雲飛揚す  
威加海内兮掃故郷　　威は海内に加わりて故郷に帰る  
安得猛士兮守四方　　安ぞ猛士を得て四方を守らん<sup>10</sup>

小川環樹は、「大風歌」について、漢の武帝「秋風辞」と対比させつつ論じている<sup>11</sup>。小川は「秋風辞」は、専制君主にとっても避けがたい老と死の苦悩を言う末部の二句「歓楽極まって哀情多し、少壯幾時ぞ老いを奈何せん（歓楽極兮哀情多、少壯幾時兮奈老何）」と、首句の「秋風起こって白雲飛ぶ（秋風起兮白雲飛）」<sup>12</sup>が照応し、「その不安の情を象徴する役目をはたしている」と述べ、「大風歌」も「大風起こりて雲飛揚す」という首句が「帝の抑えがたい不安を隠した心情を暗示」し、「皇帝の前途に対して抱く漠然たる不安の表現である」結句と対応していると説く。高祖「大風歌」の文学としての奥行きは、海内を征服したことを英雄的に詠むのみならず、国家の中心に位した統治者の「四方を守る」ことへの不安や困惑を述べるところにある<sup>13</sup>。

他方で、漢朝の草創期に漢王室の絶対性を讃える詩も見える。高祖の宮人・唐山夫人の作とされる「安世房中歌」は次のように詠っている。

王侯秉徳　　王侯徳を乗り  
其鄰翼翼　　其の鄰は翼翼たり  
顯明昭式　　昭式を顯明す  
清明鬯矣　　清明鬯ちようたり  
皇帝孝徳　　皇帝の孝徳

\*9 同 96 葉，王逸注。

\*10 『史記』（中華書局，1959）卷 8，高祖本紀，389 頁。『漢書』（中華書局，1962）卷 1，高帝紀，74 頁。

\*11 小川環樹「風と雲」（『小川環樹著作集』＜筑摩書房，1997＞第 1 卷所収）235～238 頁。初出は『東光』1947，第 2 号。

\*12 胡本李善注『文選』（芸文印書館，1979）卷 45，18 葉左。

\*13 吉川幸次郎「漢の高祖の大風歌について」（『吉川幸次郎全集』＜筑摩書房，1968＞第 6 卷）は「この歌の裏には、不安がある」とし、縷々論じている。

竟全大功 竟に大功を全うし

撫安四極 四極を撫安す<sup>14</sup>

この詩は、国家という中心とそれに征服されるべき「四極」とを対比させ、天の意を受けた漢王室の正統性を讃えている。前掲『詩経』のように批判・諷刺の角度から国家に言及する一方で、「安世房中歌」のようにそれを賛美することを通して、文学は国家像や国家のアイデンティティを形成することにもなった。さらに、そのような批判・賛美という両極のみならず、国家をめぐる文学表象には、前掲の高祖「大風歌」のように、支配者が抱く統治への不安や葛藤も見出すことができる。

漢による国家統一が様々な文学上の統一をもたらした点について、章培恒・駱玉明主編『中国文学史』は、次のように概観している。〈戦国時代の多地域文学は相互に影響・融合し、『楚辞』は漢賦に、楚歌は五言詩等に、戦国時代の散文は政論へと、漢代の様々な文学様式として吸収・統一されていった。漢朝は、地域による多元化から国家による一元化を文学にもたらした。〉<sup>15</sup>

しかし逆に言えば、そのような文学の一元化こそが漢代国家の文化的アイデンティティを形成したとも言えよう。

司馬相如は、「子虚賦」「上林賦」において漢武帝時代の繁栄ぶりと天子の絶対的地位を讃えている。司馬相如は「賦家の心は、宇宙を包括し、人物を総覧す（賦家之心，包括宇宙，総覧人物）」<sup>16</sup>と述べ、漢代国家の巨大な版図を称揚した。さらに司馬相如は、武帝への頌歌「封禅頌」において、天が下した瑞兆を例示し国家・国君の絶対性・神秘性を讃えている。

国家の威信は礼楽の整備によってももたらされる。「郊廟」等の典礼雅楽等、漢初に楽府の整備が行われたことは、国家の文化的統一や国家意識を高める上で大きく作用したであろう。

以上を要するに、漢初の文学は「安世房中歌」や司馬相如の賦・頌、あるいは楽府の整備を通して国家の権威を讃え高めた。その一方、逆に国家の支配者が抱える一個の人間としての不安や焦燥を詠う高祖、劉邦「大風歌」のような詩歌も見いだせる。先秦にその芽生えが見られた国家をめぐる意識・観念とその表象は、漢代帝国の成立にいたり様々な側面を示していると言えよう。

漢代帝国の興隆期は、文学テキストに国家賛美の表現が見られるが、漢朝の衰退に伴い文学における国家像も変貌を遂げる。衛広来によれば、政治的統一の代表として最高の国家主権を有し、かつ天命を受けた神聖なる皇帝権力（＝天立）は、後漢中後期に外戚に擁立されることにより世俗化（＝人立）した<sup>17</sup>。

\*14『漢書』巻22，礼楽志，1047頁。

\*15章培恒・駱玉明主編『中国文学史』（復旦大学出版社，1996）上巻，179頁。

\*16『四部叢刊』電子版1.0版（万方数拠電子出版社，2001）初編，子部所収『西京雜記』巻2，頁表示無し。

\*17衛広来『漢魏晉皇權嬗代』（書海出版社，2002）第1章「皇權士大夫与郡国 — 東漢分裂的三要素」89頁。

漢朝衰退期の政治的変容は様々な角度からの把握が可能であるが、さらに孫明君の論考を以下に要約し、後漢末士人の「天下」への志向に触れておきたい。<そもそも『孟子』万章下に「天下之重」、滕文侯下に「天下之大道」と述べる聖人の道たる「天下」は、『荀子』正論に「天下は至大なり、聖人に非ざれば之を能く有する莫きなり（天下者至大也、非聖人莫之能有也）」、また『呂氏春秋』貴公に「天下は一人の天下に非ず、天下の天下なり（天下非一人之天下、天下之天下也）」とあるように、もとより国家を超越する存在であった。「凡党事…海内塗炭…諸所蔓衍、皆天下善士」（『後漢書』党錮伝）と称され、「天下を以て己の任と為す漢末の党人」は、漢朝衰亡の時に会し、「日びに漸く朝廷より疎み離れる」こととなった。「初め顛、曹操を見て嘆じて曰く、漢家將に亡びんとす。天下を安んずるは必ず此の人なり、と（初顛見曹操、歎曰、漢家將亡、安天下者必此人也）」（『三国志』魏書、武帝紀）とあるように、後漢末士人はすでに漢室に対する信望を失い、その滅亡を予感していた。><sup>18</sup>

孫明君は、このような国家を超えて天下の経営に向かう後漢末士人の行動・精神を背景に見た上で、建安文学の特徴を、「天下意識の流露」と捉える。さらに孫明君は、漢末の文学を、士人の朝廷に対する「観望・支持・徘徊・疏離・対立・決裂」の一連の精神を再現したものと概括し、そこに「国家（漢室）から天下に到る心路歷程」を見ている<sup>19</sup>。

後漢時代、特に後期から末期の文学に表れる国家意識の諸相は、さらに具体的な検討を要する。しかし、以上のような孫明君の考察からも、国家を超越し新しい時代を創り出そうとする後漢後・末期文学の特質の一端が理解できよう<sup>20</sup>。

## 二

後漢末に制作されたテキストは、後代の編纂になる史書以上に当時の士人の心性や意識を直接知りうる資料であるが、その中に「漢季」という表現がある。

陳琳「武軍賦」は、次のように記す。

漢の季は世の辟からず、青龍大荒に紀む（漢季世之不辟，青龍紀乎大荒）。<sup>21</sup>

また「袁紹の為に予州に檄す（為袁紹檄予州）」では、このように述べている。

方に今漢室陵遲し、網維弛み絶ゆ、聖朝に一介の輔無く、股肱に折衝の勢い無し（方今漢室陵遲，網維弛絶，聖朝無一介之輔，股肱無折衝之勢）。<sup>22</sup>

\*18孫明君『漢魏文学与政治』（商務印書館，2003）「從“国家”到“天下”——漢魏士大夫文学中的政治情感考察」。

\*19羅宗強『玄学与魏晋士人心態』（天津教育出版社，2005）第1章「玄学産生前夕的士人心態」は、後漢末士人の政權との対立から生じる感情・批判が文学表象に表れたことを論じ、その一例として「古詩十九首」を挙げている。

\*20注15前掲書は、東漢中後期の文学について、「国家意識の薄さと個人意識の強さ（国家意識的淡薄和個人意識的強化）」にその特質を見ている。上巻，264頁。

\*21『芸文類聚』（中文出版社，1980）卷59，武部「戰伐」，1070頁。

\*22『文選』卷44，9葉左。

陳琳は建安中に没しているから、両テキストは漢代のものであることが明らかである。他方蔡琰は「悲憤詩」の冒頭で、次のように詠んでいる。

漢季失権柄	漢の季は権柄を失し
董卓乱天常	董卓天常を乱す
志欲図篡弑	志は篡弑を図らんと欲し
先害諸賢良	先ず諸賢良を害す
逼迫遷旧邦	逼迫して旧邦に遷らしめ
擁主以自彊	主を擁して以て自ら彊む <sup>*23</sup>
…	…

「悲憤詩」について、「漢季」という言葉から漢魏禪譲後の制作と判断する説がある。しかし、漢末、陳琳の上記2例から見て、実質的に漢朝が崩壊しつつあった後漢末期に「漢季」と表現しても不自然ではない。「悲憤詩」の制作時期は蔡琰帰漢後の建安年間と見なしてよいであろう<sup>\*24</sup>。

後漢末における「漢家」＝「国家」の表象を考えると、この「漢季」という表現は注目に値する。「初め顛曹操を見て、歎じて曰く、漢家將に亡びんとす、天下を安んずるは必ず此の人なり、と（初顛見曹操、歎曰、漢家將亡、安天下者必此人也）」<sup>\*25</sup>と見なす後漢末士人の政治観・国家観は、文学テキストにおいても同様に表現されていたのである。何進の部下から袁紹幕下へ、さらに曹操の支配下へとその従属先を替えていった陳琳にとって、漢家という既存の国家はもはや帰属対象ではなかった<sup>\*26</sup>。

では蔡琰「悲憤詩」における漢家＝国家とはいかなる存在か。「悲憤詩」は冒頭で「漢季」と述べ、漢代国家の終末を現実的に認識する一方、別の部分で南匈奴と漢との文化的・言語的差異を詩的モチーフとし華夷の別を詠んでいる。そこに、国家をめぐる蔡琰の意識・心性を読み取ることも可能であろう。しかし、「漢季」という言葉からも窺えるように、「悲憤詩」の主旨は華夷の対立と国家意識を強調することではない。

…	
見此崩五内	此を見て五内崩れ
恍惚生狂癡	恍惚として狂癡を生ず
号泣手撫摩	号泣して手を撫摩し
当発復回疑	発するに当たりて復た回疑す

\*23 『後漢書』（中華書局、1965）巻84、列女伝、董祀妻伝、2800～2803頁。

\*24 拙稿『「悲憤詩」小考 — 研究史とその問題点 —』（『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』創刊号、2005）で、「悲憤詩」制作時期の検証を試みた。

\*25 『後漢書』巻67、党錮列伝、2218頁。

\*26 陳琳作とされる「飲馬長城窟行」（『玉台新詠』巻1、『樂府詩集』巻38）は、長城建築という国家事業を批判する。

…

我が子との生別の場面に端的に示されるように、「悲憤詩」でより浮き彫りにされるのは、蔡琰という一女性の、家族・個としての感情や苦痛、悲劇であろう。蔡琰にとっての国家とは、矛盾と混乱に満ちた世界であった<sup>27</sup>。

陳琳・蔡琰のテキストから窺えるような現実感覚を備えた国家・政治への意識は、他の建安七子や曹操・曹丕にも見いだすことが出来る。王粲「七哀詩」第一首の冒頭はこのように詠んでいる。

西京乱無象	西京乱れて象 <sup>かたち</sup> 無く
豺虎方遘患	豺虎方に患 <sup>あ</sup> に遘う
復棄中国去	復た中国を棄てて去り
遠身適荆蛮	身を遠ざけて荆蛮に適く
…	…
路有飢婦人	路に飢えたる婦人有り
抱子棄草間	子を抱きて草間に棄つ
顧聞号泣声	顧みて号泣の声を聞き
揮涕独不還	涕を揮いて独り還らず <sup>28</sup>
…	…

この詩は、「棄」という言葉が2回用いられる。戦禍の「中国」を「棄て」荆州の地へ去る詩人と、我が子を「棄て」行く路傍の「飢えた婦人」。このように「七哀詩」は、詩人・婦人両様の視点から動乱による「中国」=国家の中心領域の荒廃を描写している。王粲はこの詩を通し、もはや「棄て」去るべきものとして、後漢末の国家を深刻に批判しているのである。前章で、『詩経』における「中国」の語が、為政者の善政により民衆が安穩に暮らすべき領域でありながら、実際は悪政に乱れる国という含意を有することに触れた。『詩経』がもつ文学規範の強さを考えれば、王粲が「七哀詩」で「中国」という語を用いたのは、『詩経』を下敷きにしつつ、被支配者による批判・風刺の対象という意味をそこに含ませる意図があったのではないだろうか<sup>29</sup>。

王粲は、建安13年(208)以後、荆州を離れ曹操に帰順した<sup>30</sup>。王粲の「従軍詩」は曹操の武功を讃える内容を含むが、第一首では曹操を「相公関右を征す(相公征関右)」<sup>31</sup>と称しつ

\*27拙稿『「悲憤詩」と『胡笳十八拍』－蔡琰テキストの変容－(『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』第2号, 2005) 参照。

\*28『文選』巻23, 15葉左。

\*29「中国」は「四夷」や「四方」と対比され、守るべき、しかし周辺から侵犯されやすい中心という意味でしばしば用いられる。「中国蒙被其難」(楊雄「長楊賦」<『文選』巻9, 4葉左>)「存撫天下, 安集中国」(司馬相如「喻巴蜀檄」<『文選』巻44, 1葉左>)「四夷之与中国並也」(司馬相如「難蜀父老」<『文選』巻44, 23葉右>)等。

\*30『三国志』(中華書局, 1959)巻21, 王粲伝, 598頁。

\*31『文選』巻27, 10葉左。

つ、第四首では「一に我が聖君に由る（一由我聖君）」<sup>32</sup>という美称を用いる。劉楨は、王粲が帰順する以前、曹操の下で荊州征伐に従軍していた往事を回想し、「贈五官中郎將詩」第一首で「昔我元后に従う（昔我從元后）」<sup>33</sup>と詠んでいる。王粲・劉楨にとって、帰服すべき政治の中心はもとより漢家ではなく、「聖君」「元后」と賛美する曹操だった。

また、曹操自身、漢朝末期の建安15年（210）に布告した「十二月己亥令」で、「設使国家に孤の有ること無くば、当に幾人か帝と称し、幾人か王と称すべきかを知らず（設使国家無有孤、不知当幾人称帝幾人称王）」<sup>34</sup>と述べる。この「令」において曹操は、自己の政治的責任感から、漢末の混乱の中、天下を平定するにいたったと論じている<sup>35</sup>。曹操にとっての「国家」とは、「設使国家に孤の有ること無くば…」と述べるように、政治家としての責任倫理において新たに立て直すべきものとなっていた。

### 三

このような、曹操や建安詩人の新たな国家観と全く異なる国家意識・漢家意識を有していたのが曹植である。曹植は、建安20（215）年に曹操の征西に従軍した際、「贈丁儀王粲」において、「皇佐天恵を揚げ、四海兵を交うる無し（皇佐揚天恵、四海無交兵）」<sup>36</sup>と詠んでいる。李善は「皇佐とは太祖なり（皇佐太祖也）」<sup>37</sup>と注し、清の丁晏は「其父を称して皇佐と曰うは、大義凜然たり（称其父曰皇佐、大義凜然）」<sup>38</sup>と論評している。元の劉履は、「皇佐」という呼称について、先に引いた王粲・劉楨の「聖君」「元后」という尊称と対比させ、「上は君臣の義を失わずと謂うべし（可謂上不失君臣之義）」<sup>39</sup>と評している。「大義凜然」「君臣之義」と指摘されるように、漢朝の崩壊時期においても曹植にとって国家とは漢家であり、父曹操は漢の臣下であった。では、曹植はいかなる国家観を有していたのか。

曹植は、高祖より光武帝が優れている点を「漢二祖優劣論」で論じている。しかしその臣下については「將は則ち韓周に比し難く、謀臣は則ち良平に敵せず（將則難比於韓周、謀臣則不敵於良平）」<sup>40</sup>と述べ、光武帝独りの天賦の才に比し、その群臣は主命に従うだけで、高祖の臣下より凡庸であったと評している。

この論に対し、諸葛亮は「曹子建光武を論ずらく、將は則ち韓周に比し難く、謀臣は則ち良平に敵せず、と。時人談ずる者は亦た以て然りと為す、吾以えらく此の言誠に大光武の徳を美

\*32『文選』巻27, 13葉右。

\*33『文選』巻23, 30葉右。

\*34『三国志』巻1, 魏書, 武帝紀注引『魏武故事』, 33頁。

\*35拙稿「曹操『十二月己亥令』をめぐって——文学テキストとしての『令』——」（『六朝学会報』第四集, 2003）参照。

\*36『文選』巻24, 4葉左。

\*37同上。

\*38丁晏『曹集詮評』（清, 同治本）巻4, 7葉右, 眉批。

\*39朱緒曾『曹集考異』（金陵叢書本）巻5, 17葉右。

\*40『曹集考異』巻10, 2葉右。

みせんと欲すれども、一代の俊異を誣<sup>し</sup>うる有り(曹子建論光武、將則難比於韓周、謀臣則不敵良平、時人談者亦以為然、吾以此言誠欲美大光武之徳、而有誣一代之俊異)<sup>41</sup>と述べ、逆に光武帝の優秀な群臣・武將を評価している。さらに、光武帝と心をつにした群英の存在があってこそ国家経営が成り立った、と主張する。諸葛亮は、政治が一人の天才の偉業ではなく君臣の異体同心による共同作業であることを、自らの行動に照らし現実として認識していた。したがって、曹植の中心論点が歴史人物の優劣比較とはいえ、後漢の創業を超越的な皇帝一人の專政によるものとする主張に、諸葛亮はあえて反論を加えたのであろう。

このように、諸葛亮に批判された曹植の歴史人物論からわずかに窺えるのは、国家・政治に対する現実感覚の欠如ではないだろうか。だとすれば、先に挙げた「贈丁儀王粲」が漢朝崩壊末期において曹操を「皇佐」と称するのも、同様に、そのよう現実感覚のずれなのだろうか。もう少し曹植のテキストを検討してみよう。

「丹霞蔽日行」は、殷周・秦漢の革命を述べ、最後に次のように漢王朝の傾覆を詠む。

…

雖有南面	南面有りと雖も
王道陵夷	王道陵夷す
炎光再幽	炎光再び <sup>かす</sup> 幽かに
忽滅無遺	忽として滅び遺す無し <sup>42</sup>

清の朱乾はこの詩を、「蓋し漢の亡ぶるを悲しむなり(蓋悲漢之亡也)」<sup>43</sup>と述べ、曹植が漢の滅亡を悲しみ、魏朝の遠からぬ滅亡を暗示したと解釈している。

次の「情詩」は、「遊子」と「処る者」の互いの思慕の情を詠う。制作時期は漢末建安と魏初黄初の両説がありいずれも確証がない。

…

眇眇客行士	眇眇たり客行の士
徭役不得歸	徭役して歸るを得ず
始出嚴霜結	始出でしとき嚴霜結び
今來白露晞	今來りて白露晞く
遊子嘆黍離	遊びし者は黍離を嘆き
処者歌式微	処る者は式微を歌う <sup>44</sup>

…

…

\*41『四庫全書』(上海古籍出版社, 1987) 第848冊, 子部, 雜家類, 雜学之属, 「金樓子」卷4, 立言篇9上, 852頁, 30葉右。

\*42『芸文類聚』卷41, 樂部1, 論樂, 742頁。

\*43朱乾『樂府正義』(『京都大学漢籍善本叢書』<同朋社, 1980>第8卷)二, 479頁。「炎光再幽, 蓋悲漢之亡也, 而魏祚之不永, 於言外見之」。

\*44『文選』卷29, 17葉右。

「黍離」「式微」は、李善が注するようにそれぞれ『詩経』王風、黍離と『詩経』邶風、式微を下敷きにしている。「黍離」の語について、毛序は「黍離は、宗周を関いたむなり、周の大夫行役して宗周に至り、故もとの宗廟宮室を過るに、尽く禾黍と為る、周室の顛覆を関いたみ、彷徨し去るに忍びずして、是の詩を作るなり（黍離、関宗周也、周大夫行役至宗周、過故宗廟宮室、尽為禾黍、関周室之顛覆、彷徨不忍去、而作是詩也）」<sup>45</sup>と述べ、周の衰亡を傷む詩と解釈している。

また古直はこの毛序を踏まえ、「情詩」について「時に軍役息まず、漢京焚燬す、故に黍離式微の歎有り（時軍役不息、漢京焚燬、故有黍離式微之歎）」<sup>46</sup>と解釈する。毛序・古直注が示すように、「情詩」の「遊子は黍離を嘆ず」という句は、「黍離」を踏まえ戦役の続く国家の衰亡を嘆いた表現ととらえることができよう。

「式微」の詩は、毛序に「黎侯衛に寓し、其の臣以て帰るを勧むるなり（黎侯寓于衛、其臣勸以帰也）」<sup>47</sup>と解かれる。一方、伊藤正文は「曹植が『歌式微』といったのは、この式微の詩が『胡なんぞ帰らざる（胡不帰）』の三字を含むが故に、家で帰りを待つ者が歌う詩として適当なものである」<sup>48</sup>と説く。伊藤正文の解釈のように、「情詩」の主旨は、従軍の旅から長く戻ることができない「遊子」と、家に「処る者」のあいだの思慕の情を詠うことにある。「情詩」の巧みさは、そのような男女の情愛に、国家＝漢家の衰亡、戦乱という時代状況に対する嘆きを重ねた点にある。

「情詩」で下敷きとされた『詩経』王風、黍離に関連して、曹植「応氏を送る（送応氏）」にも触れておきたい。董卓により焼き払われた洛陽の荒廃を詠う、漢末建安中の作である。

歩登北芒阪	歩みて北芒の阪に登り
遥望洛陽山	遥かに洛陽の山を望む
洛陽何寂寞	洛陽何ぞ寂寞たる
宮室尽焼焚	宮室尽く焼焚し
垣墻皆頓擗	垣墻皆な頓擗す
荆棘上参天	荆棘上りて天に <small>まじ</small> 参わる <sup>49</sup>

… …

丁晏は、孫月峰の評を引き「詩は漢室を傷むとは、此の言之を得たり、黍離麥秀之感、惻然として傷み懐う（詩傷漢室、此言得之、黍離麥秀之感、惻然傷懐）」<sup>50</sup>と述べている。丁晏は、董卓による破壊の余燼が残る洛陽の荒廃を詠う「送応氏」に、漢朝の衰亡に対する曹植の悲痛

\*45『毛詩正義』巻4、王風、黍離、297頁。

\*46古直『曹子建詩箋』（『層氷堂五種』〈国立編訳館中華叢書編審委員会、1984〉所収）巻1、8葉右。古直は建安年間の作とする。

\*47『毛詩正義』巻2、邶風、式微、297頁。

\*48伊藤正文『曹植』（岩波書店、1958）52頁。

\*49『文選』巻20、31葉左・32葉右。

\*50『曹集詮評』巻4、2葉右・眉批。

を読み取っている。

朱緒曾は前掲の「情詩」について、「自ら其の情を詠む、思婦の為に作るに非ざるなり…黍離漢の亡ぶを悼み、式微は並びに己の帰らざるを傷むなり（自詠其情、非為思婦作也…黍離悼漢之亡、式微并傷己之不歸也）」<sup>51</sup>と評し、曹植の漢の滅亡への格別な思いが含意されていると見る。しかし「情詩」の主意は、先述したように、「遊子」と「処者」の情愛を描出することにある。「情詩」は、なおそれに戦乱と国家の滅亡への悲歎が重ねられていると言えよう。

丁晏・孫月峰・朱緒曾のように、曹植の詩から漢朝への特別な思いを捉える批評が目立つが、いずれも文学的解釈の領域に属し確証はない。ただ、そのような解釈が生じる背景に考えられるのは『三国志』魏書、蘇則伝に見える次のような曹植の行跡である。

初め、則及び臨菑侯植魏氏の漢に代わるを聞き、皆服を発し悲哭す、文帝植の此くの如きを聞く、而れども則は聞かざるなり（初、則及臨菑侯植聞魏氏代漢、皆発服悲哭、文帝聞植如此、而不聞則也）<sup>52</sup>。

丁晏・古直・朱緒曾等の批評には、曹植の文学表現のみならず、漢の滅亡に際して服喪、悲泣したというその行動が念頭にあったのであろう。このような曹植の注目すべき行為をどう理解するか。いわゆる兄弟確執論を含め曹植をめぐる後漢末の権力闘争の逸話は、『三国志』裴松之注以後の小説資料等から生じたものであり、正確な理解は難しい<sup>53</sup>。

小論を要するならば「丹霞蔽日行」は、漢朝の傾覆を淡々と述べ、「送应氏」は洛陽の荒廢を詠っている。「情詩」は、分断された男女の情愛と国家の衰亡・戦乱への嘆きを両様に読みうる意味の二重性をもつ。いずれにせよ、曹植の漢家に対する格別の思いやその有無を論証するのは容易ではない。だが少なくともこれらの詩歌から、傾頹・衰亡する国家に対する一種の挽歌の響きを読み取ることは可能であろう。漢末から魏初の詩人における文学表象や言説において、戦乱への呪詛・批判は見られても、曹植のように国家の衰滅自体を主要な題材に詠み込むのは特異と言えよう。

さらに「贈丁儀王粲」と歴史人物論「漢二祖優劣論」を並べて窺えることは、後漢末の他の詩人に比し曹植の現実認識にある種のずれが見られることではないだろうか。漢魏交代という変革期における、そのようなリアリティーの欠如や、国家・政治に対する曹植の意識・観念をさらに検討する必要がある。

#### 四

魏成立後の太和年間、曹植は「自ら試すを求むる表（求自試表）」を上表し、次のように述べている。

\*51『曹集考異』巻5, 25葉左。ただし、朱緒曾はこの詩を魏朝成立後、黄初年間の作と見る。

\*52『三国志』巻16, 魏書, 蘇則伝, 492頁。

\*53注48前掲書, 9・10頁, 参照。

夫れ国を憂い家を忘れ、軀を捐てて難を濟くるは、忠臣の志なり。……史籍を覽る毎に、古の忠臣義士、一朝の命を出して、以て国家の難に徇じ、身は屠り裂かると雖も、而れども功名は景鍾に著われ、名績は竹帛に垂るるを觀て、未だ嘗て心を拊して歎息せずんばあらざるなり（夫憂国忘家捐軀濟難忠臣之志也。……世每覽史籍、觀古忠臣義士、出一朝之命、以徇国家之難、身雖屠裂、而功名著於景鍾、名績垂於竹帛、未嘗不拊心而歎息也）<sup>54</sup>。

『三国志』魏書、曹植伝の太和2年（228）の条に「植常に自ら利器を抱きて施す所無きを憤怨し、上疏して自ら試すを求めて曰く…（植常自憤怨、抱利器而無所施、上疏求自試曰…）」<sup>55</sup>として掲載される「求自試表」は、「古の忠臣義士」の「国家の難に徇じ」た行動に照らし、曹植個人の政治参加の志を訴える。

政治的抱負を述べる言説という点から言えば、「求自試表」と表裏の関係にある文学テキストは次に掲げる「雑詩」であろう。制作年代は不明だが、呉の征討を述べており魏の黄初年間以後とも推定しうる。

…	…	
遠遊欲何之	遠遊して何にか之かんと欲す	
呉国為我仇	呉国は我仇為り	
…	…	
閑居非吾志	閑居は吾志に非ず	
甘心赴国憂	心に甘んじて国憂に赴かん <sup>56</sup>	
…	…	「雑詩」第五首
…	…	
烈士多悲心	烈士は悲心多く	
小人媮自間	小人は媮にして自から間なり	
国讎亮不塞	国讎 <sup>まこと</sup> 亮に塞きず	
甘心思喪元	心に甘んじて元 <sup>ころべ</sup> を喪わんことを思う	
…	…	
絃急悲風発	絃急にして悲風発す	
聆我慷慨言	我が慷慨の言を聆 <sup>き</sup> け <sup>57</sup>	「雑詩」第六首

上記は、「我仇」「国讎」に立ち向かう意気を「国憂に赴く」「元を喪わんことを思う」と述べ、高ぶる感情の表れを「慷慨の言」と表現した部分である。筆者は別稿<sup>58</sup>で、「求自試表」「雑詩」等に見える曹植の政治や国家に関わる意識・表現には、およそ次のような共通点があ

\*54『三国志』卷19、魏書、曹植伝、566・567頁。

\*55同曹植伝、565頁。

\*56『文選』卷29、16葉左。

\*57同、16葉左・17葉右。

\*58拙稿「曹植「白馬篇」考—「游侠兒」の誕生—」（『山形大学人文学部研究年報』第4号、2007）

ることを述べた。曹植は建安16年(211)、曹操による馬超等の征討に従軍して以来軍役には就かず、生涯を通じて戦役体験を描く材料をほとんど持たなかった。また、『三国志』魏書及び注が記すように、実際に曹操政権や魏朝廷の中枢で国家経営に参画することもほとんどなかった。必然の帰結として、曹植は言説や虚構の文学世界で、体験や現実より観念や表象の上で国家・政治に関わる自らの意識を示したのである。

次に「白馬篇」を掲げてみたい。制作時期が確定できないが、前節で触れたように、曹植の国家意識や政治認識には、漢魏の年代の差を越えた一貫性があるように思う<sup>\*59</sup>。

白馬飾金羈	白馬金羈を飾り
連翩西北馳	連翩として西北に馳す
…	…
辺城多警急	辺城警急多く
胡虜数遷移	胡虜数しば遷移す
羽檄従北来	羽檄は北従り来たり
厲馬登高堤	馬を厲 <sup>はげ</sup> まして高堤に登る
長駆蹈匈奴	長駆して匈奴を踏み
左顧凌鮮卑	左に顧みて鮮卑を凌ぐ
棄身鋒刃端	身を鋒刃の端に棄つれば
性命安可懐	性命安んぞ懐うべけん
父母且不顧	父母すら且つ顧みず
何言子与妻	何ぞ子と妻とを言わん
名編壯士籍	名を壯士の籍に編せらるれば
不得中顧私	中に私を顧みるを得ず
捐軀赴国難	軀を捐てて国難に赴けば
視死忽如帰	死を視ること忽として帰するが如し <sup>*60</sup>

「白馬篇」は「游侠児」の美的形象とその血気・勇壯を描く。筆者は別稿<sup>\*61</sup>で、「白馬篇」の「游侠児」が、『史記』『漢書』『後漢書』等に記載される游侠少年の歴史的動態を踏まえていることに触れた。正史によれば、秦末から漢三国時代を通じ、無数の「少年」たちが勢力集団に糾合・組織化され、あるいは自ら参入を志願した。「少年」は、時には豪侠勢力における強力な兵力・戦力ともなる。また、朝廷による征戦に徴発されることすらあった。遊侠の「少

\*59 趙幼文『曹植集校注』(人民文学出版社, 1984)は、曹叡時代に鮮卑・匈奴により国家の安全が脅威にさらされていた状況から、游侠少年の尽忠報国が詠われたとし、太和年間の作と推測する。確証に欠けるが、比較的妥当な推論と思われる。413頁。

\*60 『文選』巻27, 22葉右・左。

\*61 注58前掲書。

年」は「悪少年」とも記され、「父母の教命を承けざる者（不承父母教命者）」<sup>62</sup>であった。「白馬篇」の「父母すら且つ顧みず，何ぞ子と妻とを言わん」と詠む句は，集団組織のために家族すら顧みない遊侠「少年」の性格と密接に関連している。

このような「少年」の歴史的動態は，文学作品における遊侠少年の意味形成に強固な因襲として働くであろう。曹植の「白馬篇」はそのような因襲を踏まえつつ，「游侠児」をさらに，私的勢力ではなく国家に進んで身を殉じる者へと変容させている<sup>63</sup>。

「少年」はまた、『史記』『漢書』の記載だけでなく，同時代の曹仁・魯粛等が「少年」を糾合していたという『三国志』の史実に見られるように，曹植にとって身近な存在であった。「白馬篇」は，そのような実像・動態をもつ遊侠少年に，曹植が創意を加えた詩的典型と見ることができよう。そのような典型の上に，「求自試表」「雑詩」と同様の国家政治に対する曹植の意識や抱負が投影されていると考えられる。

「求自試表」「雑詩」では，「国を憂い家を忘れ，軀を捐てて難を濟く」「国家の難に殉ず」「我仇」「国憂」「国讎」「喪元」「慷慨」という語句が着目される。しかし，「求自試表」のような政治散文のみならず，「雑詩」にも見られるこのような直裁的な言葉は，文学表現として瘦せている一面があろう。他方「白馬篇」は，「游侠児」という虚構の主体を設けることによって，「国難」に「軀を捐てる」という観念に物語的なふくらみをもたらした楽府作品であると言える。

以上，政治的言説から仮構の文学表象まで，「国憂」「憂国」「捐軀」「視死」「国難」「国讎」「慷慨」等々曹植の国家・政治に関わる意識・感情を瞥見した。

小論ではさらに，そのような国家意識と，「白馬篇」の「游侠児」に見た「侠」および曹植に特徴的な「慷慨」との関係を考えてみたい。

## 五

「白馬篇」は「游侠児」の「国難に赴く」姿が描かれているが，遊侠に関して若干補足したい<sup>64</sup>。増淵龍夫は、『史記』游侠列伝に書かれる遊侠を，民間秩序の維持者として評価し，遊侠の倫理・行動が，後漢末にいたるまでなお，個人と個人を結ぶ規範として働いていた点に注目した<sup>65</sup>。また増淵は，曹操が若年より「任侠放蕩」<sup>66</sup>であり，それに従った魏将も豪侠の徒

\*62『漢書』卷90，酷吏伝，尹賞伝「輕薄少年惡子」に係る顔師古注。3674頁。

\*63多数の「少年」が国家の兵力としてかり出された史実があるが，それらは「悪少年」の徴発という面がつよい。李広利の外征に不品行の少年が徴集されたという記載は，「少年」の性格および動態を見る上で興味深い。豪侠に糾合される「少年」はまた「悪少年」とも記され，国家の戦役に徴発される者であった。史料は「拜李広利為弑師將軍，發属国六千騎，及郡国惡少年数万人，以往伐宛。…益發惡少年及辺騎」等。『史記』卷123，大宛列伝，3174・3176頁。

\*64拙稿注58前掲書および「曹植の『少年』」（『山形大学紀要<人文科学編>』第16巻第2号，2007）で触れた。

\*65増淵龍夫「漢代における民間秩序の構造と任侠の性格」（『中国古代の社会と国家』岩波書店，1996）79～89・114頁。初出『一橋論叢』26-5，1951，1959補。

\*66『三国志』卷1，魏書，武帝紀，2頁。

であったこと、さらに劉備が「豪侠と交結するを好み、年少争いて之に附す(好交結豪侠、年少争附之)」<sup>67</sup>遊民であり、さらに呉の孫堅・孫権とそれに従う呉将も游侠の徒であったことを例示し、「三国分立の混乱の際に、かれらのもとに相結び相はなれる游侠のむれの活躍は、依然として跡(ママ)をたたない」と述べている。そして、三国の群雄の軍事的勢力を構成する様々な新しい要素を認めつつ、その「変貌発展の諸相の内面において常にそれに作用している一つの基調として、依然として変わらない任侠的習俗の根深い機能を、私たちは看過し得ない」と論じる。増淵が説くように、魏呉蜀の勢力集団に共通する紐帯として働いた「任侠的習俗の根深い機能」は、なお注意に値しよう。

魏の勢力集団に関して言えば、小論第二節で述べたように、曹操にとっての「国家」とは政治家としての責任倫理において新たに立て直すべき対象であった。曹操政権において、必ずしも既存の漢朝国家の延命は企図されていないのである。漢代にいたる游侠は、『韓非子』五蠹篇や『漢書』游侠列伝で、国家秩序を乱す者として非難されるように、国家権力にとり秩序破壊者として弾圧の対象ともなった。時に国家・社会の秩序を逸脱し、個人の自立に立脚する存在であった游侠にとって、既存の国家は単に臣伏随従する対象ではなかったとも言える。したがって、曹操の政治行動の底流に、増淵の言うように「任侠的習俗の根深い機能」を見ることは不可能ではないであろう。

「軀を捐てて国難に赴けば、死を視ること忽として帰するが如し」と詠む「白馬篇」に目を戻したい。曹植は、上記のような曹操等の後漢末の軍事勢力を構成する「任侠的習俗」を念頭に置きつつ、「白馬篇」において「游侠児」を描いたのであろう。しかし、曹操の貴種として生育した曹植自身は、游侠の徒としての経歴を有しない。したがって「白馬篇」が描く游侠の姿とその心情は文学的仮想である。そして、国家権力とは別の勢力集団を構成する人的結合関係の紐帯として働いていた本来の游侠が、「白馬篇」の「游侠児」では、国家の難局に死を賭して立ち向かう者へと変容している。

要するに、個人・集団を結ぶ任侠的な関係を経験しない曹植は、自らの游侠の理想を「游侠児」に託し、そこに国家への侠的な犠牲の精神を込めたと考えられる。言い換えれば、歴史的な游侠の本質とは異なり、「白馬篇」の游侠は、自分と国家・皇家との間に一種の任侠的關係を仮構した文学的表象であったと言えよう。「白馬篇」のような楽府作品は虚構の文学空間を作るが、曹植はそこに国家政治へ参画する自らの強い意志を投影させたのであろう。曹植の国家経営・政治参加への意志は、「游侠」に新たな文学的意味づけをすることによりその表現の場を得たのである。

このような、曹植の文学における国家への義侠的な犠牲の精神は、他方で「慷慨」という言葉によって表されている。

\*67『三国志』巻32、蜀書、先主伝、872頁。

曹植は「薤露行」において、明君を補佐する経世の理想に一人高ぶる思いを「慷慨」と詠う。

… …  
 願得展功勤 願わくば功勤<sup>の</sup>を展ぶるを得て  
 輸力於明君 力を明君<sup>いた</sup>に輸さん  
 懐此王佐才 此の王佐の才を懐きて  
 慷慨<sup>68</sup> 独不群 慷慨して独り群せず<sup>69</sup>  
 … …

先に引いた「雑詩」第六首は末句でも「慷慨」と述べている。

… …  
 国讎亮不塞 国讎<sup>まこと</sup>亮<sup>つ</sup>に塞きず  
 甘心思喪元 心に甘んじて元<sup>こうべ</sup>を喪わんことを思う  
 … …

… …  
 絃急悲風発 絃急にして悲風発す  
 聆我慷慨言 我が慷慨<sup>き</sup>の言を聆け

国家の外敵に対し命を賭して立ち向かおうとする憂国の感情を「慷慨」と詠っているが、「求自試表」では、次のように述べる。

何ぞ況んや巍巍たる大魏多士の朝にして、慷慨して難に死するの臣無からんや  
 (何況巍巍大魏多士之朝、而无慷慨死難之臣乎)<sup>70</sup>。

このように、曹植が用いる「慷慨」は、政治参加の志や国家への殉難の決意に高ぶる感情を表現している。先述した国家への游侠的な犠牲の精神をあわせ見ると、曹植の政治言説や文学テキストには、それ以前には見られない国家意識の急激な高まりとその表現が指摘できよう。ただし 確認すべきは、曹植に、従軍や戦争の体験を詠む詩自体が存在しないことだ。曹植は、「求自試表」「雑詩」第五・六首、また「白馬篇」「薤露行」等で、観念や想像において「国家之難」「国憂」「国讎」云々と述べている。しかし、曹植の国家国難に殉じようとする「慷慨」の情念は、表現活動において衝迫作用として働くことはあっても、実際の行動に結実することはなかったのである。

このような実体験を欠いた観念の上での国家・政治に対する意識やその文学表象は、曹植における以下のような、表現活動に伴う「慷慨」の使われ方を見てもわかる。すでに例示した「絃急悲風発、聆我慷慨言」(「雑詩」第六首)以外、「余少くして賦を好み、其の尚ぶ所や、雅<sup>つね</sup>に慷慨を好む(余少而好賦、其所尚也、雅好慷慨)」(「文章序」)<sup>71</sup>。「躍魚を南沼に観、鳴

\*68『芸文類聚』は愷に作る。『楽府詩集』巻27により改める。

\*69『芸文類聚』巻41、楽部1、論楽、741頁。

\*70『三国志』魏書、曹植伝、568頁。

\*71『芸文類聚』巻55、雑文部1、集序、996頁。

鶴を北林に聆く、素筆を擲りて慷慨し、大雅の哀吟を揚ぐ(観躍魚於南沼、聆鳴鶴於北林、擲素筆而慷慨、揚大雅之哀吟) (「幽思賦」)<sup>72</sup>。「秦箏何ぞ慷慨たる、齊瑟和して且つ柔らかなり(秦箏何慷慨、齊瑟和且柔)」(「箏篴引」)<sup>73</sup>。「帷を拏げ更に帯を撰え、節を撫して素箏を弾ず、慷慨して余音有り、要妙として悲しく且つ清し」(拏帷更撰帯、撫節彈素箏、慷慨有余音、要妙悲且清) (「棄婦詩」)<sup>74</sup>。

以上の「慷慨」は、悲憤の言葉や若年時から制作した賦の好尚、文筆表現に伴う心の昂ぶり、あるいは心の昂ぶりをもたらす音楽の響きを表している点に注意を払いたい。曹植の「慷慨」は、その用例の上から、言説あるいは虚構の表現活動に衝迫をもたらす動因になっていることがわかる。李善は、「忼慨して悲心有り、文を興こせば自ずから篇を成す(忼慨有悲心、興文自成篇)」(曹植「贈徐幹」)の部分に「説文に曰く、忼慨とは壮士の志を心に得ざるなり、と(説文曰忼慨壯士不得志於心也)」<sup>75</sup>と注しているが、政治上の不満や失意のみを曹植の「慷慨」に読み取るのは一面的に過ぎるのではないだろうか。

曹植における「慷慨」の精神は、現実や体験よりは理想と虚構を創出する表現活動へと突き動かす動因の一つであったと言えよう。その表現世界の結晶を「白馬篇」における「游侠兒」の美的形象に見ることができるのである。

以上に見てきたように、曹植の国家あるいは皇家に関する意識・観念は、游侠少年の血気や、報国のために死を賭ける犠牲の精神によって特徴付けられる。曹植の「慷慨」は、そのような主情的な国家観とその美的表象もたらす動因として働いていると言えよう。

さらに言えば、「胡虜」「匈奴」「鮮卑」(「白馬篇」)、「呉国は我が仇為り」(「雜詩」第五首)「国讎」(「雜詩」第六首)という“敵”の表象も、曹植のテキストに顕著である。排外意識と国家意識は表裏一体であるが、前漢を経て後漢末、曹植に至り文学は“敵”を見だし国家を賛美するべく作用したと言えよう。

国家を犠牲の対象と捉える曹植の言説・表象は、前述したように国事に殉死する者を国の英霊として称える『楚辞』九歌、国殤にその遠い淵源を見ることができる。しかし、以上のような曹植の国家意識とその表象は、小論第一節で述べたように、曹植以前には顕著ではなかった。前述したように、頌歌的な賦や楽府も国家の絶対性・神秘化を称揚しているが、士人個人の国家に対する意識や感情は十分に表現されていなかったのである。

## 結 び

第一章で述べたように、国家というものに関わる観念・意識を表象する文学の発展と、国家

\*72同、巻26、人部10、言志、470頁。

\*73『文選』巻27、20葉左。

\*74『玉台新詠箋注』(中華書局、1985)巻2、67頁。

\*75『文選』巻24、2葉左。

およびそのアイデンティティーの形成とは相即不離の関係にある。漢末魏初は、漢代国家が解体し国家像が変容していく転換期にあたる。国家に対する意識は、社会制度の変革のみならず文学や言説によって形成あるいは模索された。小論は、曹植を通してその一端を垣間見たが、そのテキストは慷慨・愛国・犠牲あるいは游侠少年等、主情的なモチーフによって創り上げられる国家像であった。

このような曹植の国家意識、特に国家に対する「犠牲」の情念は、じつは近代国民国家の形成と文学の関係に照らし見る時、興味深い共通点をもつ。

高橋哲也は、近代国家の戦争と「犠牲」の関係から国家論を展開し、ジョージ・モッセの次のような発言を引いている。「記念されたのは、戦争の恐怖ではなく栄光であり、悲劇ではなく意義である。……国民のイメージと変わらぬ魅力を重視する者が神話を創作する役割を果たし、戦死から痛みを取り除いて、恐怖と犠牲の意義を強調した。戦死者の祝典や、戦争から生まれた文学作品が、彼らを支援した」<sup>76</sup>。また、高橋は国家における「犠牲」の論理について、「国民」を定義するエルネスト・ルナン次のような主張を引いている。「国民とは、…人々が過去においてなし、今後もおなす用意のある犠牲の感情によって構成された大いなる連帯心なのです」<sup>77</sup>。

加うるに、曹植の描く国家や戦役に身を賭する游侠少年から容易に連想されるのは、若者が政治や国家に糾合され犠牲となってきた数々の歴史事実ではないだろうか<sup>78</sup>。

文学はしばしば時代を越えて典型を創り出す。曹植の国家意識を示した「白馬篇」等のテキストは、古代と近代とを問わず、国家像のある一つの典型を描き出していると言えよう。国家は、時代の差無く意識の中の存在でもあるのだ<sup>79</sup>。そのような国家を形成する意識や観念に、表象をもたらした早い例が曹植の文学であろう。

上述したように、曹植は国家政治や戦役にほとんど参与せず、「游侠」の経験もない。曹植の情緒的な国家意識は、現実や経験とはかけ離れた所からもたらされたことに注意を払いたい。

曹丕と比較してみよう。曹丕は漢から帝位の禅譲を受ける際、一端は辞譲するという布令を出す<sup>80</sup>が、その中に次の詩が詠まれている。

喪乱悠悠過紀	喪乱悠悠として紀を過ぎ
白骨縦横萬里	白骨は萬里に縦横たり
哀哀下民靡恃	哀哀たる下民は恃む靡し
吾将佐時整理	吾将に時を <sup>たす</sup> 佐けて整理め

\*76高橋哲也『国家と犠牲』（日本放送出版協会、2005）144頁。

\*77同、122頁。

\*78白虎隊・ヒトラーユーゲント・紅衛兵・テロリストの若者たち等々、その一部に過ぎまい。

\*79国民の意識や観念・イメージと近代国民国家の形成との関係は、B・アンダーソン『想像の共同体 — ナショナリズムの起源と流行 —』（書籍工房早山、2007）等参照。

復子明辟致仕 <sup>きみ</sup>子に明辟を復して致仕せんとす<sup>\*80</sup>

漢朝への服従を述べる言葉は儀礼にとどまるが、万里まで累々と広がる白骨に象徴される後漢末の戦乱描写が注目される。王朝の創業は白骨累々たる戦争の現実を背景にもつ、という冷めた認識が曹丕にあった。曹植が国家への犠牲を美化し文学描写するのと対照的である。

では、曹植の政治や国家経営に関する発言や文学表象は、すべて仮構の世界に閉じ込められたテキストに過ぎないのであろうか。曹植は、最晩年の太和二年「利器を抱いて施す所無」き「憤怨」を「求自試表」によって上訴した<sup>\*81</sup>。また同五年、曹植は士卒の息子が多く徴発されたことに対し、明帝曹叡に上表し、現状に鑑みて行き過ぎた徴発を諫め若者を返すよう建言した<sup>\*82</sup>。曹植のこの献策は、明帝の受け入れるところとなり、「皆遂に之を還す（皆遂還之）」<sup>\*83</sup>結果を得た。同六年、明帝は曹植はじめ諸王を参内させる。その際、曹植は、明帝と面会して治世を論議し国家経営へ参画することを期待したが、結局かなわなかった<sup>\*84</sup>。

「天下將に乱れんとし、命世の才に非ずんば済う能わざるなり（天下將乱，非命世之才不能済也）」<sup>\*85</sup>という後漢末の動乱期から国家の礎もままならない魏初にかけ、新たな国家像が様々な言説や文学表象によって模索されている。

「白馬篇」の「国難」という語に約言されるような国家の解体と建設の時代において、曹植は文筆・言論の力で乱世に立ち向かったと言えよう。第三節で述べた曹植の詩歌における「傾頽・衰亡する国家に対する一種の挽歌の響き」は、第五節でふれたように、衰滅する「国家への義侠的な犠牲の精神」から発したものであろう。曹植の言論活動は、太和年間の行動に照らしても、中央政界から疎外されたことに対する代償行為ではない。国政へのあくなき参画の志と言論の力への信頼、そして「国難」への義侠心、それこそが曹植の文筆表現の原動力として働いていたと考えられる。

曹植のテキストが示すような国家意識とその表象は、その後の文学・言説においてどのように継承され、あるいは変容していくのか。稿を改めて論じたい。

\*80建安25年(220)10月「漢帝以衆望在魏…奉璽綬禪位」(『三国志』卷2, 魏書, 文帝紀, 62頁)と記され、曹丕は禪讓を受けるが、それに対し、「王令曰…」(『三国志』卷2, 魏書, 文帝紀注引『献帝伝』所収, 65頁)と述べる中でこの詩を詠んでいる。

\*81『三国志』卷19, 魏書, 曹植伝, 565~568頁。

\*82同注引『魏略』, 574~576頁。

\*83『三国志』卷19, 魏書, 曹植伝, 576頁。

\*84同, 576頁。

\*85『三国志』卷1, 魏書, 武帝紀, 2頁。

## 曹植与「国难」 ——先秦汉魏文学中的国家意识——

福 山 泰 男

所谓国家，不仅是由国土，民族，制度等因素构成，它还包括了人们对于它所怀有的感情和观念。而文学自古以来就起到了表达这种情感和观念的作用。关于表现所谓国家意识、情感以及观念的文学的发展和国家的形成之间的关系是密不可分的。

汉末魏初，正是汉朝瓦解国家面貌发生变革的时期。围绕着国家、皇族，曹植表达了许多具有那个时期的意识和观念。也是文学史上较早表现国家形成意识和观念的例子。

曹植的作品，通过慷慨、爱国、牺牲以及游侠少年等富有激情的主题，将国家形象呈现于读者面前。一些表现国家形象的文章如《白马篇》等是描写国家形象的典型之一。国家，是没有时代差异而存在于意识之中的。

那回荡在曹植诗歌中的对于颓废、衰亡国家的挽歌完全发源于投身衰亡国家的侠义的牺牲精神。即使参照太和年间的行为来看，曹植的言论也不是因为被权利核心排挤而产生的心里补偿，而是完全发源于对国家政治持之以恒的参与志向和对舆论力量的信赖以及对于国难的侠义之心，而这些正是激发曹植文学创作的原动力。

## 歴史への内在：ボリス・エイヘンバウムの世界観

中 村 唯 史

### 1. 『テー・ヤー・テーゼ』をめぐって

ロシア・フォルマリズムの初期の目的は、「文学性、すなわちある作品をして文学的な作品にしているところのもの」<sup>1</sup>を解明することにあつた。これは哲学的・思想的・歴史的・社会的など文学外的な観点に立脚していた旧来の文学研究の克服を意図したものだったが、詩的言語と日常言語を区別し、作品を手法の総体と捉えていくその方法は、やがてトロツキーやルナチャルスキーを含むマルクス主義者やバフチン・サークルなどから、フォルマリズムは文学を社会状況や時代変化から恣意的に切り離して考察しているとの批判を受けるようになった<sup>2</sup>。

もっとも、そのような批判を待つまでもなく、文学の構造や固有性を静態的に把握する方法の限界は、フォルマリストたち自身によって早くから認識されていた。ボリス・エイヘンバウム(1886-1959)が現在の自分たちの課題は「形式の進化の問題、つまり歴史-文学的研究の問題」であると明言したのは1925年のことだが(『形式的方法』の理論)<sup>3</sup>、彼らの関心はすでにその前年ごろから、①文学に関する従来の静態的な構造把握(共時態)をいかにして歴史という動態(通時態)へと開いていくか、②文学系列と文学外諸系列との相関関係をどう考えていくかという問題に移行していたのである。この時期のフォルマリズムの代表的な論考としては、ユーリイ・トゥイニャーノフ(1894-1943)の『文学的事実』(1924)<sup>4</sup>、同『文学の進化について』(1927)、エイヘンバウムの『文学的ブイト』(1927)などが挙げられる。

トゥイニャーノフとロマン・ヤコブソン(1896-1982)の共著『文学研究・言語研究の諸

<sup>1</sup> ロマン・ヤコブソン「最新ロシア詩」(Новейшая русская поэзия, 1921), 新谷敬三郎・磯谷隆編訳『ロシア・フォルマリズム論集』(現代思潮社, 1971), 76頁

<sup>2</sup> このいわゆる「フォルマリズム論争」の主要な論考については、桑野隆・大石雅彦編『ロシア・アヴァンギャルド6: フォルマリズム-詩的言語論』(国書刊行会, 1988) 235-315頁に日本語訳がある。またこの論争を考察したものとして、桑野隆「フォルマリズム論争再読: きたるべき詩学のために」, 同『バフチンと全体主義: 20世紀ロシアの文化と権力』(東京大学出版会, 2003) 69-98頁。

<sup>3</sup> Борис Эйхенбаум: Теория «формального метода», *О литературе: работы разных лет* (Советский писатель, 1987), с. 375-408. 日本語訳として『形式主義的方法』の理論, 水野忠夫編『ロシア・フォルマリズム文学論集1』(せりか書房, 1984), 215-270頁(小平武訳)等。なお本稿におけるフォルマリストの論考の日本語訳は、先行の翻訳を参照したうえで、文責は著者にある。引用に際しては、原則として最初の引用時に、底本における掲載箇所を示すに留め、個々の引用の該当頁をいちいち示す煩は避けることにする。

<sup>4</sup> Юрий Тынянов: Литературный факт, Ю. Н. Тынянов: Литературный факт (Высшая школа, 1993), с. 121-137. 日本語訳として「文学的事象」, 水野忠夫編『ロシア・フォルマリズム文学論集2』(せりか書房, 1982), 71-103頁(水野忠夫訳)。

問題』(1929)<sup>5</sup>は、このような後期フォルマリズムの模索の到達点と見なされている。この論考は、①の問題について「どんな共時体系も、不可分の構造要素として、その過去と未来とを含んでいる。……どんな体系も必ず進化として提示され、その一方で進化が必ず体系としての性格を持つことをわれわれが認める以上、この(共時態と通時態との)対立は原理的な本質性を失ってしまう」(第4 テーゼ)と述べ、共時態が通時的な差違としてのみ表れるという説明によって両者の対立の解消を試みている。②については「文学の系列と他の歴史的系列との……相関性(諸体系の体系)にも解明すべき独自の構造法則があるが、個々の体系の内在的な法則を考慮に入れることなしに諸体系の相関性を考察することは、方法として致命的である」(第8 テーゼ)として、文学と他系列との相関の考察に対して文学系列の固有性の考察が先行しなければならないと主張している。共著者の頭文字を取って『テー・ヤー・テーゼ』とも呼ばれる『文学研究・言語研究の諸問題』は、構造主義の方法的先駆として現在でも評価が高い。

この『文学研究・言語研究の諸問題』は、病気治療のために一時出国したトゥイニャーノフが、1928年12月に、当時プラハで活動していたヤコブソンと会って話し合いを重ね、共同で執筆したものである。ただし彼らはこの作業を、モスクワのヴィクトル・シクロフスキー(1893-1984)との手紙による頻繁な連絡のもとにおこなった。その末尾に「今まで指摘してきた諸々の理論的問題・上記の諸原則から派生する具体的な課題……を、今後集团的に処理していくことが重要である。V. シクロフスキーを代表とするオポヤズを復興させる必要がある」という一節のあるこの論考は、シクロフスキーが編集に参加していた『新レフ』誌1928年12月号に掲載された(実際の刊行は1929年初頭)。それはトゥイニャーノフ、ヤコブソン、シクロフスキーの三人が、フォルマリスト・グループの再建をめざし、その綱領とするべく練った文章だったのである。

ところで、三者のあいだで当時やり取りされた書簡を読むと、再建されるオポヤズにエイヘンバウムを加えるかどうか、彼らの最大の懸案となっていたことがわかる。オポヤズ復興の中心人物だったシクロフスキー自身が逡巡していた。1928年11月23日付けのヤコブソン宛書簡で「われわれの観点からのロシア文学史を書くために、私はトゥイニャーノフとエイヘンバウムとともに多くを読み、討議を重ねている」<sup>6</sup>と書いた彼は、そのわずか4日後のトゥイニャーノフ宛書簡では、論集の執筆予定者として、トゥイニャーノフ、ヤコブソン、シクロフスキー本人のほかにはマール学派の研究者ポリヴァノフの名前を挙げたのみで、エイヘンバウ

<sup>5</sup> Юрий Тынянов и Роман Якобсон: Проблемы изучения литературы и языка, там же, с. 148–150. 日本語訳として「文学研究・言語研究の諸問題(テー・ヤー・テーゼ)」, 前掲書 341–347頁(北岡誠司訳)等。

<sup>6</sup> Виктор Шкловский и Роман Якобсон. Переписка (1922–1956): Предисловие, подготовка и комментарии А. Ю. Галушкина, Роман Якобсон: Тексты, документы, исследования (РГГУ, 1999), с. 125. 以下、フォルマリストの書簡や日記の日本語訳は著者による。

ムを除外している<sup>7</sup>。12月5日付けトゥイニャーノフ宛書簡では、エイヘンバウムをオポヤズ再建メンバーのリストに入れてはいるが、「彼のトルストイについての本は私は気に入らないが」との留保付きである<sup>8</sup>。

一方、プラハで会合を重ねていたトゥイニャーノフとヤコブソンは、シクロフスキーに対して、一貫してエイヘンバウムをグループに入れるよう主張したが<sup>9</sup>、それは彼をマール学派への傾斜を強めていたヤクビンスキーやポリヴァノフと同列に置いたたうえでの、あくまでも戦略的な判断だった。トゥイニャーノフは1928年末のシクロフスキー宛書簡で「オポヤズを始めなければならない。……君と彼(ヤコブソン)と私とはともにまだ多くのことを成しとげられるだろう」と述べているが、エイヘンバウムの名前は挙げていない<sup>10</sup>。

もちろん、このような排除の動きは、オポヤズ復興を企図した三名とエイヘンバウムとの個人的な確執によるのではなく、基本的には文学研究上の方法をめぐる両者の見解の相違に起因していた。強く主張したのは、ヤコブソンだったと推測される。トゥイニャーノフとの邂逅とオポヤズ復興の企図をユーラシア主義の盟友ニコライ・トルベツコイ(1890-1938)に伝えた書簡(1929年2月2日付け)のなかで、彼は「私たちは何があってもオポヤズを再建し、ジルムンスキー一派の折衷主義はすでにいうまでもなく、エイヘンバウムの偏向に対しても闘争を始めることを決意した」と述べている<sup>11</sup>。これを『文学研究・言語研究の諸問題』第1テーゼ中の「アカデミズムの折衷主義(ジルムンスキー他)や……文学と言語に関する学を体系的学問から挿話とアネクドートのジャンルへと変えようとする再三の試みとは、一線を画さなければならない」という記述と照らし合わせるなら、この論考が、名指しこそ避けてはいるものの、当時『レフ・トルストイ』(1928)などで伝記ジャンルへの傾倒を顕著にしつつあったエイヘンバウムを、論敵の一人として想定していたことは明らかである。シクロフスキーも1929年2月16日付けヤコブソン宛の書簡では「ボリス・ミハイロヴィチ(エイヘンバウム)は、最近の仕事で墮落して折衷主義に陥ってしまった。彼の文学的ギフトは俗流唯物論の最たるものだ。……結論。オポヤズは君が帰国した場合にのみ再興可能である。なぜならオポヤズとは、つねに三人のことだから」と明言している<sup>12</sup>。この「三人」が、シクロフスキー、ヤコブソン、トゥイニャーノフを指していることはいうまでもない。

だが、諸般の事情からヤコブソンのソ連帰国は実現せず、オポヤズが再興されることもなかつ

<sup>7</sup> Из переписки Ю. Тынянова и Б. Эйхенбаума с В. Шкловским, *Вопросы литературы*, 1984, №12 (以下 *ВЛ* と略記), с.193.

<sup>8</sup> *там же*, с.194.

<sup>9</sup> М. О. Чудакова: Социальная практика, филологическая рефлексия и литература в научной биографии Эйхенбаума и Тынянова, *Тыняновский сборник: вторые тыняновские чтения* (Импринт, 1986), с. 445.

<sup>10</sup> *ВЛ*, с.196.

<sup>11</sup> *Роман Якобсон*, с. 127.

<sup>12</sup> *там же*, с.127-128.

た。トゥィニャーノフは1929年3月31日付けのシクロフスキー宛書簡で「とはいえ私は彼（エイヘンバウム）がとても好きだ」と述べている<sup>13</sup>。1921年の亡命後は祖国に生活基盤を戻すことがなかったヤコブソンはともかくとして、ソ連で生きつづけたシクロフスキー、トゥィニャーノフとエイヘンバウムとの交友は、けっきょくは彼らの死まで絶えることはなかった。だがそれは彼らが研究上の立場の相違を、個人的な友誼の問題に帰着させ、うやむやのままにってしまったことを意味してもいた。

エイヘンバウムと他の三者との懸隔がきわめて大きいものだったこと、少なくとも後者がそう認識していたこと、そしてそれが主に文学史をめぐる見解の相違だったことは、以上のような『テー・ヤー・テーゼ』成立前後の状況から明らかである。では両者の相違とは、具体的にどのようなものだったのだろうか。

## 2. 『文学的ブイト』と『文学の進化について』のあいだ

1920年代後半のフォルマリスタたちのあいだでのエイヘンバウムの孤立は、従来のフォルマリズム研究ではあまり指摘されず、むしろトゥィニャーノフとエイヘンバウムが連携して、後期フォルマリズムの文学史への展開を主導したかのように説明される場合が多かった。フォルマリスタの書簡や日記の刊行に尽力したソ連（ロシア）の研究者たちも、おそらくフォルマリズムの一体性という神話を壊したくなかったためだろう、この点については示唆するだけに留めている<sup>14</sup>。だが近年キャロル・エーニや八木君人が指摘しているように<sup>15</sup>、文学史をめぐるエイヘンバウムとトゥィニャーノフの構想のあいだには決定的な相違が存在した。そしてそのことは、少なくともシクロフスキーやトゥィニャーノフの側からは、当時からエイヘンバウムの「偏向」として認識されていたのである。

両者の構想の相違は、1927年の9月と10月に同じ『文学哨所』誌にあいついで発表された二つの論考——エイヘンバウムの『文学的ブイト』<sup>16</sup>とトゥィニャーノフの『文学の進化について』<sup>17</sup>とに明瞭にあらわれている。二つの論考の異同を整理してみよう。

単なる「事実」の集積を、歴史体系そのものではなく、体系のための素材であると見なしている点では、どちらの論考も同様である。いいかえれば、歴史体系が記述主体によって構築さ

<sup>13</sup> Чудакова, с. 444.

<sup>14</sup> Ю. Н. Тынянов: *Поэтика, История Литературы, Кино* (Наука, 1977. 以下ПИЛКと略記), с. 508. ほか。

<sup>15</sup> Carol Any: *Boris Eikhenbaum: Voices of a Russian Formalist* (Stanford University Press, 1994), pp. 104 - 109. 八木君人「Ю. Туви́няно́вの『文学史』再考」, 『スラヴ研究』(北海道大学スラブ研究センター) 53号(2006) 155-191頁。なお本節の記述は、とくに後者から多くの示唆を受けている。

<sup>16</sup> Борис Эйхенбаум: *Литературный быт, О литературе*, с. 428-436. 日本語訳として「文学の風俗・慣習」, 水野編『ロシア・フォルマリズム文学論集1』283-298頁(小平武訳)。

<sup>17</sup> Юрий Тынянов: *О литературной эволюции, Ю. Н. Тынянов: Литературный факт*, с. 137-148. 日本語訳として「文学の進化について」, 桑野・大石編『ロシア・アヴァンギャルド6: フォルマリズム-詩的言語論』189-202頁(松原明訳) ほか。

れる表象であることは、エイヘンバウムにとってもトゥイニャーノフにとっても自明の前提だった。両者の相違は、そのうえで、この記述する主体をどのように考えるかという点にあった。

私たちはすべての事実を一度に見るわけではなく、いつも同じ諸事実を目にしているわけでもなく、またいつも同一の相関関係の解明を必要としているわけでもない。……文書や種々の回想に横たわっている膨大な過去の素材は、ただ部分的にだけ [文学史に] 採り入れられる (しかもいつも同じ素材とは限らない) が、それは理論が、さまざまな意味上のしるしに基づき、過去の一部を体系に導入する権利と可能性を供するためである。もし理論がなければ歴史体系もまた存在しない。諸事実を選別し、認識するための原則もないということになるからだ。

『文学的ブイト』の冒頭で示されているエイヘンバウムのこのような考えは、一見したところ、理論とそれに立脚する記述主体の専制的な優越を想定しているかのように読める。だが、実際にはその逆である。

だが、あらゆる理論は、事実そのものへの関心によって示唆された作業仮説であり、必要な事実を抽出し、体系にまとめるためにのみ、必要とされるにすぎない。

記述する主体の依拠する理論が普遍的な真理たりえず、かならず「作業仮説」に留まるのは、それが「現代、すなわち、現に目の前にある最も主要な諸問題の動向によって決定される」ものだからだ。資料にアプローチする際にいかなる理論を適用するかは、最終的には、記述主体の意思や選択によるのではなく、彼を圍繞している同時代の社会的配置によって定まるというのである。

「ブイト」はエイヘンバウムの論考の標題ともなっている、後期フォルマリズムのきわめて重要な概念だが、本来は「風俗」「慣習」「日常」等を意味するこの語<sup>18</sup>を用いてエイヘンバウムが言い表そうとしたのは、記述主体の存在形式を定めている諸系列の社会的配置である。たとえば「現在危機に瀕しているのは、文学それ自体ではなく、その社会的なあり方であると、はっきり断言することができる。作家の職業的な立場が変わり、作家と読者の関係が変わり、文学活動の習慣的な条件と形式が変わった——ほかならぬ文学的ブイトの領域で決定的な変動が生じ、文学と文化の進化がその外で形成される諸条件に従属しているという一連の事実を明

<sup>18</sup> とくに 20 世紀初頭のロシア文化におけるブイトという語の含意については、Aleksander Flaker: *Быт, Russian Literature*, XIX (1986), pp. 1-14, また近年の成果としては、近藤大介「日常生活 (ブイト) という文化の場: ロシア・フォルマリズムの文学史研究から」、『言語社会』(一橋大学) 1号 (2007) 407-386 頁を参照せよ。

るみに出した」。記述主体による世界観や理論、またそれらに基づく事実の選択は、直接には主体の意思や志向によるが、その意思や志向は自立的なものではなく、諸系列の社会的な配置という意味でのビットによって定められている。時代が変わり、したがって主体の存在形式を定めるビット＝社会的配置が変われば、彼が記述する歴史体系も変わり、体系を構築するべく選択される事実もまた違ったものになる。

彼の文学史において、記述主体が恣意を働かせる余地はほとんどない。エイヘンバウムの考えによれば、記述する主体は同時代の文脈・社会的配置に内在し、その厳密で圧倒的な規定を免れないのである。

トゥイニャーノフの方は、記述する主体とビットとをどのように捉えていたのだろうか。

この根本的な問題を分析するためには、文学作品がひとつの体系であり、文学もまたひとつの体系であることを、前もって定めておく必要がある。このような基本的了解のもとでのみ、多様な現象や系列の混沌を観察するのではなく、研究するような文芸学の構築が可能になる。

トゥイニャーノフにおいて、記述する主体は、文芸学を構築するために設置される、いわば方法的な基点である。記述主体は、エイヘンバウムの場合とは違って、同時代の社会的な文脈から自律しており、その限定を受けない。その意味で、この主体は時代や社会を超越しているといえるが、その一方で、設定上かならず文学の系列に内在する。

このような記述主体を基点とする学問においては、「個々の要素を体系から切り離し、それらを体系の外で相関させる、すなわちそれらの構造的な機能なしに、他の諸体系の同様の系列と相関させるのは誤りである」。ある事実が文学史の素材——「文学的事実」となるのは、その事実が文学の系列と相関するかぎりにおいてである。「文学系列の体系とは、なによりも、他の諸系列との絶えざる相関性の内にある文学系列の諸機能の体系である」が、その相関性はかならずや文学系列の体系の内部という記述主体の位置から語られる。「事実が文学的事実として存在するかどうかは、その示差的な性質（すなわち文学の系列と相関しているか、文学外の系列に相関しているか）によって、いいかえるなら、その機能によって決まる。ある時代に文学的事実であるものが、他の時代には一般的な発話としてのビットの現象となることもあれば、その逆のこともあるだろう。それは所与の事実が関係する文学の体系全体によって決まる」。

トゥイニャーノフにおいて、ビットとは文学の系列に隣接し、これと相関する諸系列のことである。「ビットはその構成において多角的で多面的」だが、「なによりもその言語面において文学と相関している」。記述する主体は文学の系列に内在しているので、ビットが文学の系列と相関し、文学体系内でその示唆的性質が知覚される場合にのみ、これに関わるということに

なる。

記述主体とブイトに関するエイヘンバウムとトゥイニャーノフの考えは、このように、たがいに大きく食い違っている。エイヘンバウムの記述主体は、文学の系列に対してではなく、自分が生きる時代に内在する具体的な存在である<sup>19</sup>。彼の注意や志向は、その時代の社会的な配置によって厳密に規定され、ほぼこれに従属している。エイヘンバウムのブイトは、主体を取り巻くこのような諸系列の配置の総体を指すが、それは主体の存在形式を定め、画然と輪郭づけている。

これに対してトゥイニャーノフの記述主体は、方法的基点として文学系列の内に設定される視点である。もちろんそれはこの主体が文学系列内に閉塞することを意味してははず、むしろその逆だが、文学系列を恣意的に超越できるようなものでもない。

個々の作品は、その志向について語る以前に、文学の系列と関連しなければならない。大きな数の法則は小さな数に適用されない。

検討は、構造的機能から文学的機能へ、文学的機能から言語的機能へと進まなければならない。……進化の研究は、文学系列から、相関する最も近接した諸系列へと進まなければならない。重要ではあってもかけ離れた諸系列へと進んではならない。

記述する主体は、文学系列に内在する位置から出発して、文学に相関する隣接諸系列、そこからさらに隣接するまた別の諸系列へと、段階的に視野を拡張していく。このときブイトとは、主体によって記述される受動的な素材である。記述主体を厳しく定義し、規定する社会的配置としてブイトを捉えていたエイヘンバウムの場合とは対照的に、トゥイニャーノフのブイトは、文学系列への内在から出発し、この系列の内部から外へとしだいに拡張していく主体によって、「文学的事実」として体系に組み入れられるのを待つのである。

『文学的ブイト』と『文学の進化について』のあいつぐ発表によって1927年に表面化した、文学史の構想をめぐるエイヘンバウムとトゥイニャーノフの相違は、このようにきわめて大きく、根本的とすらいえるものだった。だがその後しばらくは、シクロフスキーとトゥイニャーノフの側から、両者の懸隔を埋める努力が試みられたようである。そもそも『文学の進化について』という論考自体が、『文学的ブイト』への対論だった。この論考の冒頭には「ボリス・

<sup>19</sup> エイヘンバウム「アンナ・アフマートヴァ」(Anna Akhmatova, 1923, Борис Эйхенбаум: *О прозе. О поэзии*, Художественная литература ленинградское отделение, 1986, c. 374-439.)などを参照せよ。なおこの論考に関しては、八木君人「ボリス・エイヘンバウムの文芸学における文学作品の非文字テキスト的要素」、『ロシア語ロシア文学研究』第40号(2008)9-16頁が示唆に富んでいる。

エイヘンバウムに」という題辞があるが、両者の見解の根底的な相違を考慮するなら、あきらかにこれは献辞ではなく、むしろトゥイニャーノフからエイヘンバウムへの問いかけだったと考えられる<sup>20</sup>。

エイヘンバウムの日記によれば、1928年3月15日にシクロフスキーとトゥイニャーノフが彼の自宅を訪れ、文学史の構想について議論しているが、その場では両者の対立は明確なかたちを取るには至らなかったようだ<sup>21</sup>。だがその5日後にエイヘンバウムが芸術史研究所で近刊予定の伝記『レフ・トルストイ』の最初の2章を朗読した際、トゥイニャーノフの反応は厳しいものだった。同日のエイヘンバウムの日記には「ユーリー（トゥイニャーノフ）の態度が私を悲しませた。最近の私と彼の関係について考え込まないわけにはいかなかった。彼は暗い、（故意に）凍りついたような、乾いた顔をして、私の方に目を上げずに、メモを取りながら聞いていた。その後で話したが、乾いて酷薄で敵意ある口調で、些細な部分に拘泥してきた——まるで他人のように」とある<sup>22</sup>。シクロフスキーも7月14日に再びエイヘンバウムを訪れ、彼の仕事を批判している。その翌日のエイヘンバウムの日記には「（シクロフスキーは）、本（『レフ・トルストイ』）における私の“伝記主義”を心配している——あまりに大きな譲歩ではないだろうか。私はこうしたすべてを違ったふうに感じている」との記載がある<sup>23</sup>。

両者の議論は平行線をたどり、第1節に見たようなエイヘンバウム排除の動きへとやがていたるのだが、文学の固有性を追求した初期フォルマリズムとの連続性の観点からみれば、記述主体を文学系列に内在させ、その位置から隣接する諸領域へと視野を拡大していくトゥイニャーノフの構想の方が妥当なものだったといえるだろう。逆にいえば、エイヘンバウムの構想には、あきらかに初期フォルマリズムとの断絶が認められる。

エイヘンバウム自身は、この断絶を「人間への郷愁」として表現している。

歴史が私を疲労困憊させた。だが私は休みたくはないし、またそうすることができない。私には行為への郷愁、伝記への郷愁がある。……いま必要なのは人格だ。自分の生を創造するような人間（を書くこと）が必要なのだ。<sup>24</sup>

「偏向」後のエイヘンバウムの眼前にあったのは、もはや自律し、固有性を持った「文学」ではなく、みずからの生を構築しようとする「人格」「人間」だった。そしてそのような人間

<sup>20</sup> リディア・ギンズブルグは、エイヘンバウムとトゥイニャーノフが共同で主催していたゼミナールが1927年前半に紛糾して活動停止となったことを証言している。см.: ПИЛК, с. 520.

<sup>21</sup> ПИЛК, с. 519.

<sup>22</sup> Чудакова, с. 441.

<sup>23</sup> Marietta O. Čudakova: Социальная практика и научная рефлексия в творческой биографии Б. Эйхенбаума, *Revue études slaves*, LVII/1 (1985), p. 36.

<sup>24</sup> ВЛ, с. 189.

は、「歴史」の内で思惟し、行動するのである。では、「文学」の自律をめざした初期フォルマリズムの闘将としてふるまってきたエイヘンバウムが、このように「文学」よりも「歴史」を前景化するようになったのには、どのような背景があったのだろうか。

### 3. 歴史という語の二つの審級

エイヘンバウムの研究者としての関心が一貫して文学史の分野にあったことは、その著作歴をみればあきらかである。前節で見た1927年の『文学的ブイト』の発表後、彼は1959年の死まで、けっきょくは未完成に終わる評伝『レフ・トルストイ』に心血を注いだ。初期フォルマリズムを代表する論考として著名な『ゴーゴリの「外套」はいかにつくられているか』(1919)<sup>25</sup>のような作品構造分析は、彼の著作全体のなかでは、むしろ例外である。エイヘンバウムの本領は、フォルマリズム批判への応答として書かれた『「形式的方法」の理論』が、そのまま明晰なフォルマリズム史となっていることに、よくあらわれている。

前節で見たように、エイヘンバウムが『文学的ブイト』で諸系列の社会的配置としてのブイトに焦点を当て、文学系列に内在する視点に立脚しようとするトゥイニャーノフと対立するようになったのは、1920年代後半のことだった。それまでは彼もまた「詩学は目的論的原理の基礎のうえに築かれ、それゆえに手法の概念に立脚しなければならない」(『ロシア叙情詩のメロディカ』<sup>26</sup>)など、主張としては文学の固有性を重視する発言をおこなっていたのである。だが『若きトルストイ』(1922)、『レールモントフ：歴史的-文学的評価の試み』(1924)など、この時期に書かれたエイヘンバウムの文学史的著作を読むと、文学の枠内に留まろうとしていたとはいえ、当時から彼の興味は、社会的配置や文芸思潮の変遷と作家との関係に向いていたことがわかる。

現在まで断片的に刊行されてきた彼の書簡や日記を読むとき、エイヘンバウムは「文学史」のなかでも「文学」よりむしろ「歴史」の方に憑かれており、それはたんに研究者としてだけではなかったとの印象を受ける。この意味で象徴的なのは、当初は医学を修めるために首都サンクト・ペテルブルグに出たエイヘンバウム青年が、音楽学校とペテルブルグ大学人文学部スラヴ学科に転じることを母親に告げた1907年2月4日付け書簡中の一文である。「今では完全に明らかなことですが、私にとって重要な学業は音楽と(文学も含む、最も広い意味での)歴史です」<sup>27</sup>。ソ連の研究者チュダコヴァが述べているように、「歴史こそ、エイヘンバウムがその仕事においてつねに取り扱っていたというだけでなく……、日常生活においても彼の前に

<sup>25</sup> Эйхенбаум: Как сделана 《Шинель》 Гоголя, *О прозе. О поэзии*, с. 45-63. 日本語訳としては、桑野・大石編『ロシア・アヴァンギャルド6：フォルマリズム-詩的言語論』116-131頁(井上幸義訳)ほか。

<sup>26</sup> 新谷・磯谷編訳『ロシア・フォルマリズム論集』, 206頁。

<sup>27</sup> Письма Б. М. Эйхенбаума к родителям: Publication, commentaires et notes par Ol'ga B. Eichenbaum, *Revue études slaves*, LVII/1 (1985), p. 19.

ぬぐいがたく立ち現れていた最重要の現象であり、一種のファントムだったのだ」<sup>28</sup>。

もっとも、前節で見たようなエイヘンバウムとトゥイニャーノフの文学史構想の食い違いを改めて想起するまでもなく、「歴史」とはときに曖昧で、多くの含意を帯びうる概念だ。エイヘンバウムが「歴史」というとき、それは具体的にどのようなものとして想定されていたのだろうか。

エイヘンバウムが1910年代にアンリ・ベルグソンの哲学の強い影響を受けていたことは、研究者 J. M. カーティスなどによってすでに指摘されている<sup>29</sup>。ベルグソンが1911年にオックスフォード大学で行った講義が翌年ロシアで単行本化された際に、エイヘンバウムはその書評を書き、「ベルグソンの哲学の根本的な原理は、運動、そして動き一般の分割不可能性である」と述べている<sup>30</sup>。

このようなベルグソンの影響は、1923年夏にエイヘンバウムによって書かれた『レールモントフ：歴史的一文学的評価の試み』<sup>31</sup> 導入部の記述にも認められる。

私たちが研究するのは、時間内の運動ではなく、運動それ自体——けっして分割されたり断絶したりすることがなく、正にそれゆえに**現実**の時間を内包しておらず、時間によって測定されえないような、**動的な過程**である。……重要なのは、単なる**過去への投影**ではなく、できごとの歴史的**アクチュアリティ**を理解すること、その本質から言って恒常的であり、現れることも消えることもなく、それゆえ時間の外で作用している歴史エネルギーの展開内におけるできごとの役割を定義することである。(強調はエイヘンバウム)

ただし、カーティスが指摘しているように<sup>32</sup>、『レールモントフ』のこの導入部は、その本論とは齟齬をきたしている。テキストや周辺資料の具体的な分析に基づき、レールモントフの創作の変遷を比較文学や文学史の観点から詳細に論じた本論は、現在でもその学術的価値を失っていない優れたものだが、導入部で提唱されているような「純粹持続」の立場からの記述ではない。

一方、これより早く1922年に刊行された『若きトルストイ』<sup>33</sup>の序文(1921年6月執筆)には、『レールモントフ』導入部の志向とは矛盾しているように読める記述がある。

<sup>28</sup> Чудакова, с. 433.

<sup>29</sup> J. M. Curtis: Bergson and Russian Formalism, *Comparative Literature*, Vol. 28, No. 2 (Spring, 1976), pp. 109–121. Дж. Кертис: *Борис Эйхенбаум: его семья, страна и русская литература*, (Академический проект, 2004).

<sup>30</sup> Curtis, p. 112. *О литературе*, с. 8.

<sup>31</sup> Эйхенбаум: Лермонтов: Опыт историко-литературной оценки, *О литературе*, с. 139–286.

<sup>32</sup> Curtis, p. 109.

<sup>33</sup> Эйхенбаум: Молодой Толстой, *О литературе*, с. 33–138. 日本語訳は、ボリス・エイヘンバウム『若きトルストイ』(山田吉二郎訳, みすず書房, 1976)。

作品そのものを研究するという事は、作品を解剖することを意味すると考えられてきた。だが周知のとおり、解剖するためには、まず生ある存在を殺さなければならない。私たち(フォルマリスト)は、この罪を犯しているつつねに非難されてきた。だが、これもまた周知のとおり、比喩は証明ではない。それに結局ここで問題となっているのは、現在の生きた諸現象に対する知覚の鋭さによって興味ぶかい批評ではなく、過去の研究のうえに構築される学問の方である。過去は、いかに甦らせられようとも、すでに死んでいるもの、時それ自体によって殺されているものなのである。

ここで語られているのは、現在に生きる記述主体と過去に属するその対象との、時による分割である。「解剖」や「死」にさえなぞらえられるような記述主体と対象の断絶についてのこのような自覚と、ベルグソンの「時間によって測定されえないような動的過程」「歴史的アクチュアリティ」の認識とは、一見たがいに齟齬をきたしているようにみえる。

だが、この矛盾は表面的なものに過ぎない。エイヘンバウムが、「歴史研究」と「歴史の動的過程」とのあいだに、いっさいの媒介項なき深淵を見ているからだ。彼によれば、記述主体が把握するのは「運動それ自体」「時それ自体」ではなく、あくまでも「時それ自体によって殺されているもの」——歴史という動的過程の断片的な痕跡だけなのである。

エイヘンバウムは、記述化された歴史と、動的過程としての歴史それ自体とを峻別して考えていた。ひとは運動の断片的な痕跡を比較対照し、たがいに関連づけて整合的な体系を構築することはできるが、それは現代の観点から見て有効な歴史記述ではあるけれども、歴史の動的過程それ自体ではない。

さらには、記述化される歴史の方もまた、その主体が自由にどうこうできるようなものではない。

歴史は本質的に、複雑な分析の学問、二重の視点を持つ学問であり、過去の事実が私たちによって意味ある事実として識別され、体系に組み込まれる場合、それは必ず、また不可避免的に、現代の諸問題の基調にしたがっている。

『文学的ブイト』中のこの一節を、現代に生きる記述主体による、過去という対象に対する恣意性の容認と解釈してしまうと、エイヘンバウムの意図を読み違えることになる。ここで述べられている「歴史」は「動的な過程」そのものではなく、その過程の痕跡(過去の事実)を主体が体系化したもの、つまり記述化された歴史の方だが、前節で見たようにエイヘンバウムの考えでは、記述主体の存在形式や認識は、その属する時代の「ブイト」によって厳しく規定されている。ところでブイトとは、その時代における諸系列の配置——「動的な過程」の現代

という共時面におけるかたちである。したがって、記述化される歴史もまた、「動的な過程」としての歴史の帰結にほかならないということになる。

エイヘンバウムは、「運動それ自体」「時それ自体」を、人間がけっして至りえないものと見なしていた。彼が1921年7月に発表した文章には次のような一節がある。

私たちはいかなる原因も知ることがない。あせめてほんの些細なもので良いから、原因を知ることができるなら！全世界が変容するだろうに！だが私たちは、あちこちにある類例を知り、目にし、そして比較対照するだけだ。すべてがひとつで、小さいものや偶然や個別などはなく、すべてが大きく合法則的であることを知り、感じてはいるが。<sup>34</sup>

ここで希求されている歴史の法則性ないし合目的性は、しかし「私たち」によって決して理解・認識されえないものとして想定されている。記述する主体も、記述される対象も、すべては「運動それ自体」「動的過程」「歴史エネルギーの展開」の帰結であり、エイヘンバウムによれば、したがってみずからを規定している「運動・過程・展開」そのものを語ることはできない。エイヘンバウムの記述主体は、「純粹持続」があることを知りつつも、その立場から語るという言語的な超越や遡行を断念している。

ユダヤ系ロシア文学者イリヤ・セルマンの「エイヘンバウムは大文字の歴史の中に、疑いなく存在する生と宇宙の根源を見ていた。ただし、その本質や、活動の自発的な原因を、私たちは知ることはできない。だがそれは在り、その営為の結果を私たちは刻一刻目にしている」という要約は的確なものである<sup>35</sup>。エイヘンバウムは「歴史」という語によって異なる二つの審級を表していた。人間にとって不可知である歴史の動的過程それ自体と、人間が動的過程の諸々の痕跡を体系化することによって構築する表象としての歴史とである。そしてこの二つの「歴史」を峻別することが、エイヘンバウムの原則的な立場だった。

#### 4. エイヘンバウムのトルストイ観

すでに言及したとおり、エイヘンバウムは「偏向」以降、その死にいたるまでの30年以上を、主としてトルストイの生涯の研究に捧げたのだが、それは『戦争と平和』などで歴史を主題に据えたこの作家に、記述主体のあるべき姿を見いだしていたからだろう。事実、エイヘンバウムが着目するトルストイの発言は、その多くが歴史法則の不可知性をめぐるものだ。

たとえば1935年に発表された論考『L.トルストイにおける創造への刺激』<sup>36</sup>第3節では、

<sup>34</sup> П'ја Z. Serman: Б. М. Эйхенбаум и проблема истории, *Revue études slaves*, LVII/1 (1985), p. 81. に拠る。

<sup>35</sup> *Ibid.*, p. 81.

<sup>36</sup> Эйхенбаум: Творческие стимулы Л. Толстого, *О прозе. О поэзии*, с. 64–76.

トルストイの1874年の書簡中の「あなたは私たちが車輪の中を走るリスのようだとおっしゃる。……だが、そのことを語ったり考えたりする必要はありません。少なくとも私は何をしても、*du haut de ces pyramides 40 siècle me contemplent*（これらピラミッドの高みから40世紀が私を見つめている）、もし私が止まれば全世界が滅ぶだろうと確信しています」という一節が、詳細に考察されている。

トルストイのこの言に対するエイヘンバウムのコメントは、次のようなものだ。

トルストイは、私たちが「車輪の中を走るリスのよう」であるということに同意しようとはしない。もしたとえ実際にそうだとしても（トルストイが問題の本質的な解決を回避していることは注目に値する）——それは労働と活動のパトスをそこなうので、語ったり考えたりしてはならないのである。……私たちが「車輪の中を走るリスのよう」に生き、働いているのかどうかという真実を、トルストイは少しも知ろうとはしていない。

（強調は中村）

エイヘンバウムは、トルストイが歴史の「真実」を知ることを断念しているというのである。彼はさらに、不可知の「真実」と「体系」との関係をめぐるトルストイの認識を、作家の創造観に即して、次のように要約している。

トルストイは、芸術の創造を、「意味を持たず、抑えがたい本能」と定義していた。いかなる合理的な説明にも従うことのない自然で盲目的な（*стихийный*）過程であると定義していたのである。この「地上の、自然で盲目的なエネルギー」は、正にそのようなものであることによって、倫理の埒外にあり、それゆえトルストイにとっても理解しがたく、いかなる体系にも収められないようなものだ。

トルストイは自分自身にも理解不能な、したがって盲目的な（*стихийный*）力に突き動かされて、文学作品という統一的で首尾一貫した体系を構築する。ただしそれは「真実」ではない。真実は人間にはその痕跡だけが断片的なものとして表れる。トルストイはそのような断片を組み合わせ、みずからの体系——芸術作品を創造したというのである。

エイヘンバウムの描くトルストイ像はこのようなものだが、ここでの「真実」を「歴史の動的過程」に、「芸術創造」を「歴史記述」にそれぞれ置き換えるなら、それはエイヘンバウム自身の認識と重なり合わさる。あきらかに彼は、トルストイにあるべき記述主体を見いだしていたのである。

ただしエイヘンバウムは、つづく第4節で、創造に関する作家自身の定義を斥け、「トルス

トイの創造を本能や自然で盲目的な過程に帰することはできない」と強調している。

いかなる創造も、ただ自然的事実というだけでなく、歴史的な事実でもある。個人的事実であるだけでなく——、いや個人的というよりも、むしろ社会的な事実である。芸術の創造は、この点でとくに示唆に富む。その真の動機が意識のもっとも深い層——生の結果、歴史的行為の結果、人間生活の最も深刻な諸問題と結びついた様々な経験の結果であるところの、精神的・心的経験から生じているからだ。

1930年代半ばという時代の刻印を押されているようでもあるが、ここで述べられているエイヘンバウムの主張は、『文学的ギフト』と基本的に同一である。記述主体であるトルストイの志向や動機を規定し、決定していたのは、作家自身が考えていたような本能などの自然衝動ではなく、あくまでも作家を圍繞していたギフト——当時の社会状況だったというのである。

同様の見解は、『戦争と平和』に関するエイヘンバウムの1944年の記述にも認められる。「トルストイは、歴史の過程を、人間の意識を超えた、その法則が理性には理解しがたいような、自然で盲目的な(стихийный)過程であると……断言していた」と述べたうえで、しかしエイヘンバウムは「歴史を作るのは普通の人々、大衆である」と付け加えている<sup>37</sup>。

エイヘンバウムは若い頃、トルストイが嫌いだったようだ。文豪がまだ存命中の1906年に、彼は父親に「数日前、よりもよってトルストイの新著『生について』を手にとってしまいました。なんとという低俗さ、狭量さ、自己満足！世界についてはいうまでもなく、人間までもが仕切りによって諸々の範疇に分類されています」<sup>38</sup>と書き送っている。

エイヘンバウムの私的な書簡中のこの一節を、彼の1930年代のトルストイ論と対照してみると興味深いのは、どちらもトルストイの言説が持つあからさまな体系性に鋭く反応しながらも、その評価が逆転していることだ。文豪を聖人視し、崇拝する風潮が強かった1900年代半ばに文豪のリゴリズムに反発していた青年時代とは対照的に、1930年代のエイヘンバウムは、トルストイが範疇を駆使して整合的で首尾一貫した体系を構築したことを高く評価している。その前提にあったのは、トルストイが世界の不可知性を認めたうえで、世界に内在する人間として何を書くべきかを模索していたという認識である。動的過程としての歴史の超越と、そのような歴史に対する人間(およびその言説)の不可避的な内在とは同じことの表と裏であり、エイヘンバウムは超越的な視点を断念している点にトルストイの誠実を見いだしていたのである。

<sup>37</sup> Эйхенбаум: Творчество Ю. Гынянова, там же, с. 206.

<sup>38</sup> Дж. Кертис, с. 254.

以上のような観点から、エイヘンバウムのトルストイ研究のなかでもとくに注目に値するのは、『トルストイの歴史的意義に対するレーニンの見解について』<sup>39</sup>だ。これはエイヘンバウムが1945年のレニングラード大学主催レーニン生誕75周年記念式典の席上でおこなった講演である。この2年後のエイヘンバウムの日記中に「亡命中のレーニンによるトルストイについての講演に関する興味深い資料を見つけた」という記載があることなどからも<sup>40</sup>、彼が「レーニンのトルストイ観」というテーマを真剣かつ持続的に考えていたことは疑えない。ただし彼の問題意識は、文学現象をレーニンの発言に依拠して裁断する式の、当時のソ連の典型的な言説とは、あきらかに一線を画していた。この講演を聞いたある文学者が「ボリス・ミハイロヴィチ（エイヘンバウム）がレーニンを認めたぞ！」と驚愕したという逸話が伝わっているが<sup>41</sup>、エイヘンバウムはむしろ、当時神格化されていたレーニンを、20世紀初頭という時代の社会的配置の内に位置づけたのである。

エイヘンバウムはこの講演で、亡命中のレーニンがトルストイ逝去の報を受けておこなったいくつかの演説を考察し、「レーニン（の演説）以前は、トルストイはつねに歴史の過程の外に立つ存在のように見えていた。レーニンは、これとは逆に、トルストイが『けたたましいほどの矛盾』を抱えて現れたことが、歴史的にみて完全に合法的であり、必然的だったことを示して、この状態を克服した」と評価している。だが同じことは、返す刀でレーニンその人にも当てはまるのでなければならない。レーニンが20世紀初頭に神格化されていたトルストイを歴史過程の内に位置づけた正にそのように、レーニンの主張もまた歴史過程を超越したものではありえないからだ。

エイヘンバウムは、レーニンがトルストイを「現代の社会秩序によって抑圧されている広範な大衆」の「自然で盲目的な（стихийный）抗議と不満の表現者」と呼び、また「（トルストイは）ヨーロッパ的な教養の作家ではない」と評したことについて述べたあとで、レーニンが1890年代から人民と前衛党との関係の問題を「自然的な盲目性（стихийность）と意識性との相関の問題」として提起していたことに言及している。やや唐突なこの記述展開は、トルストイとレーニンがともに同一の時代の社会的配置の内であったことを示唆している。ロシアの民衆の自然で盲目的な感情の「鏡」、代弁者だったトルストイと、民衆に向けて西欧由来のマルクス主義という意識性を導入することを主張したレーニンとは、たがいに対称的な立場にあった。だがそれはあくまでも民衆のなかに自然で盲目的な力（стихийность）を見るという当時の知的配置に、ともに内在している枠内での対称性であった。

1945年のこの講演は、「コスモポリタニズム批判」の余波で、スターリン批判後の1957年

<sup>39</sup> Эйхенбаум: О взглядах Ленина на историческое значение Толстого, там же, с. 254–268.

<sup>40</sup> Б. М. Эйхенбаум: Работа над Толстым. Из дневников 1926–1959 гг., Контекст: литературно-технические исследования (Наука, 1981), с. 277.

<sup>41</sup> Serman, p. 73.

まで活字化されなかったが、それは講演が、レーニンを脱神格化する潜在的な可能性を有していたことの傍証であるようにも思える。もっとも、この時期のエイヘンバウムを積極的な反体制派だったと考える理由はない<sup>42</sup>。講演におけるレーニンの脱神格化は、秘められた抵抗というより、むしろエイヘンバウムがあらゆる対象に、例外なく自分の原則的な立場を貫いた結果であった。

## 5. 内在性の指標としての「作業仮説」

レーニンなどの権威的な存在や、自分自身を含めて、ひとは超越的な歴史の動的過程への内在を誰ひとり回避できない。——エイヘンバウムの生涯の固執を一言でいえばそういうことになるだろう。ただし、「社会学的」とも呼ばれた彼の研究において重要なのは、人間にとって不可知である歴史の動的過程と、その内に存在する人間とのあいだに、グィット——各時代の社会における諸系列の配置——が介在していることである。歴史家としてのエイヘンバウムがめざしたのは、主として19世紀のグィットと、トルストイをはじめとする作家たちの存在形式との相関の記述だった。

だが晩年のエイヘンバウムの日記からは、グィットの影が急速に薄れ、あたかも社会の介在なしに歴史と人間が直接対峙しているかのような印象を受ける。息子が戦地スターリングラードで行方不明となり、つづけて妻をも失った1946年以降の日記では、歴史に関する記述はきわめて切迫した響きを帯びている。「なんとすべてが悲劇的に終わってしまったことだろう！働かなくては、働かなくては——ただもう働かなくては！歴史だけだ——私には他に何も残されてはいない」<sup>43</sup>。「歴史がなくて何もない（地球は偶然に形成され、偶然に滅んでいく）か、歴史だけがあるか——どちらかだ」<sup>44</sup>。このとき「歴史」は、社会的で具体的な相貌をすでに失い、ほとんど宿命というに近い。

このように歴史がなにか神秘的なものとして意識されるにつれて、エイヘンバウムは、記述主体による対象の体系化という営為それ自体を忌避し、「事実」そのものを尊重する姿勢を強めていった。1958年の第4回スラヴィスト会議の「19世紀スラヴ諸国においてロマン主義文学からリアリズム文学への移行はどのように生じたのか？」という事前アンケートに対して、彼は「理論と芸術それ自体とのあいだには、もちろん歴史的なつながりはあるけれども、(両者の)完全な融合はないし、またありえない。芸術（と芸術の創造）の特徴のひとつは、それがいかなる哲学的体系によっても生み出されたり、包摂されたりするものではないということ、

<sup>42</sup> エイヘンバウムが、ゾーシチェンコ、アウマートヴァなどの作家・詩人、ジルムンスキー他レニングラードの文学研究者とともに、いわゆる「コスモポリタニズム批判」にさらされたのは1946年のことである。以後、スターリンの死後に復権するまで、エイヘンバウムはいっさいの公職を退き、論考を発表する機会もほとんど得られなかった。

<sup>43</sup> Работа над Толстым, с. 277.

<sup>44</sup> там же, с. 281–282.

生をそのすべての複雑さと矛盾のままに反映していることにある」<sup>45</sup>と、理論や体系の限界を強調する回答を出している。エイヘンバウムは1959年11月24日に急逝したが、彼が最後に構想していた著書は『考証学の基礎』——手稿の整理と校訂の実践に関する入門書だった<sup>46</sup>。

もっとも、晩年にやや極端なかたちをとったとはいえ、エイヘンバウムの「事実」尊重の姿勢は、じつはその活動の当初から一貫していたといえる。たとえば、すでに1922年の論考で、彼は次のように述べている。

……学術的な仕事でもっとも重要なのは、図式の設定ではなく、事実を視る能力であると私は考える。理論はこのために必要不可欠なのだ。なぜなら、理論の光を当てることによってこそ、諸事実が明視的になる——すなわち、真の事実となるからである。理論は滅んだり変化したりするが、理論によって見いだされ、確かめられた事実は残る。<sup>47</sup>

このような認識と、すぐれて理論的な自身の記述とを、当時のエイヘンバウムは自分のなかでどのように整合させていたのだろうか。この関連で留意すべきは、彼が、1920年代を通じてくり返し記述主体の言説一般、あるいは自分自身の言説について、その条件性を強調していたことである。

具体的な歴史研究は、それが一般理論の諸問題に関わり、特定の理論的諸前提の基盤の上に構築される場合にのみ、学術的意義を持つことができる。事実を手中にするためには、それを受容する能力が必要だ。事実はそれ自体としては存在しない。

(『若きトルストイ』)

そのような完成した体系や原理は、私たちにはなかったし、今もない。私たちは自分の学問的な仕事において、理論をただ作業仮説としてのみ評価し、これを用いて事実を発見し、意味づける。……私たちは具体的な原理を設定し、それが素材(の分析)において正当化されるかぎりには、これを維持する。もし素材が原理の複雑化や変更を求める場合には、私たちは原理の複雑化や変更を行う。……完成した学問など存在しない。学問が生きているのは、真実の樹立によってではなく、誤謬の克服によってである。

(『「形式的方法」の理論』)

<sup>45</sup> Эйхенбаум: Ответ на анкету к IV Международному съезду славистов, *О литературе*, с. 458. 強調は中村。

<sup>46</sup> 1957年6月4日の日記の記載。см.: Работа над Толстым, с. 300.

<sup>47</sup> Б. Эйхенбаум: *Мелодика русского лирического стиха* (ОПОЯЗ, 1922), с. 195.

あらゆる理論は、事実そのものへの関心によって示唆された作業仮説であり、必要な事実を抽出し、体系にまとめるためののみ、必要とされるにすぎない。（『文学的グイット』）

これらの発言をフォルマリズム批判に対する弁解のレトリックと考えることはできない。だが、その一方で、オーストリアの研究者ハンゼン＝リョーヴェのように、エイヘンバウムが「文学ジャンルや手法のみならず、不均質構造内での立ち位置、語りの視点、世界観なども含めた選択の自由」を強調していたと見る解釈<sup>48</sup>にも疑問は残る。

たしかにエイヘンバウムには、ときに世界観の複数性を強調しているかのような記述がある。

ロシアのインテリゲンツィア、そして彼らとともにその学問は、一元論の思想に毒されている。……わが国では“一元論的観点”が支配的になった。……いや、一元論はもうたくさんだ！我々は多元論者だ。生は多様であり、これを一つの要因に帰することなどできはしない。……生は川のように——間断なき奔流として動いているが、しかしその川からは無限数の細流がながれ出ており、その一つ一つが独自なのである。いっぽう芸術は、この奔流の分流ですらなく、それらの上に架かる橋だ。……学問は創造行為であり、創造とは構成する過程である……<sup>49</sup>

だが多元論がすなわち、ハンゼン＝リョーヴェが言うような、「立ち位置、語りの視点、世界観」の「選択の自由」に直結するわけではない。引用におけるエイヘンバウムの「生＝川」の比喩が、それ自体すでに奔流とその支流というヒエラルキーを内包していることに注意しよう。支流一つ一つはたしかに「独自」であるけれども、同時にそれはあくまでも「生」という「間断なき奔流」の分岐にはかならない。生が一つの要因に収斂したりしない、多様なものであるとしても、それは生の多元的なあり方のあいだに階層性があることを否定するものではない。

上の引用でもう一点留意すべきは、「芸術」や「学問」などの「創造」が、動的な「生」それ自体からは分離した、素材（「生」の痕跡）を構成する営為として位置づけられていることだ。動的過程と言説とは、この比喩においても、あくまで異なる審級に属するのである。そしてエイヘンバウムにおいて、このような「創造」の主体が少しも自由ではなく、その属する時代のグイットによって厳密に規定されており、彼にはほとんど選択の余地などないことは、これ

<sup>48</sup> Aage A. Hansen-Löve: 《Бытология》 между фактами и функциями, *Revue études slaves*, LVII/1 (1985), p. 99.

<sup>49</sup> Эйхенбаум: 《5 = 100 (посвященная Опоязу)》, *Книжный угол*, 1922, №8. Serman, p. 76 および Дж. Кергис, с. 116 に拠る。

までに見てきたとおりである。

エイヘンバウムの「作業仮説性」の強調は、文字どおりのものである。彼が述べているのは、自分(たち)の体系や理論が「作業仮説」であり、形式としては完結し、閉じているけれども、じつは完結しているそのままに、他の体系や理論とのたえざる対話へと投げ出されているという認識にはかならない。いいかえれば、エイヘンバウムは、個々の言説が流通し交差する場、言説の外部——彼はそれをときに「生」と呼んだり「歴史」と呼んだりした——を想定していたのである。

彼が理論や体系の「作業仮説」性を強調する必要があったのは、理論体系が、じっさいにはそれ自体が「歴史の動的過程」(不可知の歴史法則)の帰結であるにもかかわらず、あたかも動的過程や歴史法則それ自体であるかのように読まれ、超越的なものとして機能してしまうことを防ぐためだ。不可知である歴史の動的過程に対する内在を絶対の前提とするエイヘンバウムは、みずからの言説の超越を回避しようとしたのである。

ロシア・フォルマリズムの世界的な評価は、1960年代のフランスから始まった。プラハから米国に移住したヤコブソンとレヴィ=ストロースとの邂逅が構造主義の形成に大きく寄与したこと、ジュリア・クリステヴァとツヴェタン・トドロフというブルガリア出身のユダヤ人がロラン・バルトの指導下にフォルマリズムの紹介に活躍したことなどを、ここで改めて詳述する必要はないだろう。ただ一点留意しておきたいのは、ロシア・フォルマリズムが構造主義と記号論の先駆として評価される過程で、エイヘンバウムが理論や体系を「作業仮説」として提示していた事実がかならずしも重視されてこなかったということである。

みずからの言説を「作業仮説」として捉えることは、エイヘンバウムの世界観・文学観・歴史観の不可欠の要素だった。もしその構想の基点にある「作業仮説」性が忘却されるなら、本来は歴史に内在しているはずの言説が、超越的・俯瞰的な視点に立つものとなってしまう。事実、欧米や日本では、そのようなエイヘンバウム理解はいまなお根強いのである。

この点では、ロシア文化圏も例外ではなかった。たとえば1920年代を亡命者の境遇で過ごしていた批評家のD. ミルスキーは、エイヘンバウムについて次のように言明している。

(エイヘンバウムの)この歴史主義は、伝統的な歴史観とは完全に断絶しているが、エイヘンバウムをマルクス主義に著しく近づけている。両者に共通しているのは、退行的だが揺るぎないドグマティズムだ。……そのうえ彼は、理論が知識に先行しなければならない、なぜならその場合にのみ研究が実り豊かなものになりうるからだと言明している……<sup>50</sup>

<sup>50</sup> Дж. Кергис, с. 100.に拠る。

ミルスキーがエイヘンバウムの「理論」を「ドグマ」と呼ぶのは、それが「作業仮説」であることを見落としているからだ。彼が、記述主体が歴史法則の立場へと超越する史的唯物論と、主体が歴史に内在しつづけるエイヘンバウムとの相違を認識できないのも、同じ理由による。

だが実際には、ミルスキーが想定していたような、世界や歴史全体を俯瞰して超越的な立場からこれを語ろうとする姿勢ほど、エイヘンバウムから遠いものはない。たしかに彼の認識は、人間の思考や欲望が時代のグィットによって厳密に規定されているとする点で、シクロフスキーやミルスキーが示唆したように、1920年代後半以降のソ連で支配的だった史的唯物論と無縁ではなかったかもしれない。けれどもエイヘンバウムの記述主体が、歴史法則の名のもとに語ることはない。彼にとって歴史の弁証法は、「純粹持続」と同様に、かならずや断片的に映り、不可知である。

エイヘンバウムは、1915年に、次のような印象深い一文を書いている。

アンチテーゼはみずからの正しさを信じているのでなければならない。——ジンテーゼはただその時にだけ可能である。<sup>51</sup>

エイヘンバウムの記述主体は、形而上的実在へと超越するシンボリズム的な主体とも、「世界文化」の内で自同律に依拠するアクメイズム的な主体とも違っている。それは整合的で完結した体系を構築するが、構築された体系がみずからの認識を超越した歴史の動的過程へと投げ出されることを知っている。

---

<sup>51</sup> Эйхенбаум: *О литературе*, с. 6.

## Имманентность Истории: над мирозерцанием Бориса Эйхенбаума

НАКАМУРА Тадаси

В данной статье ведется рассуждение о концепции истории литературы, предложенной русскими формалистами — в частности, Б. Эйхенбаумом.

В первой главе исследуется процесс попытки восстановить ОПОЯЗ (группу формалистов) В. Шкловским, Ю. Тыняновым и Р. Якобсоном в конце 1928 – начале 1929 годов, опираясь на их переписку, дневники и т. п.. Выясняется, что в это время они думали об исключении Эйхенбаума из группы, и, что причиной этого явилось расхождение мнений о концепции истории литературы между вышеуказанными троими и Эйхенбаумом.

Во второй главе с целью осветить это расхождение сравниваются две статьи: «Литературный быт» Б. Эйхенбаума и «О литературной эволюции» Ю. Тынянова. Обе статьи были опубликованы в 1927 году. У Эйхенбаума субъект, ведущий описание – это воплощенная личность, существующая в общественном контексте ее эпохи, и форма существования которой строго определяется «бытом»: цельным соотношением различных рядов в обществе того времени. А у Тынянова субъект, ведущий описание – это методологически установленная внутри литературного ряда точка зрения, которая пропорционально расширению своего поля зрения постепенно вводит «быт» как материал в свою систему – в историю литературы. Развитием раннего формализма, изыскавшего присущие литературе качества, уместно считать замысел Тынянова. Другими словами, здесь можно обнаружить разрыв между концепцией Эйхенбаума и ранним формализмом.

В третьей и четвертой главах с целью освещения причины этого разрыва ведется рассуждение о взгляде на историю и мирозерцании Эйхенбаума, опираясь на его письма, дневники и статьи. Он считал историю вневременным динамическим процессом, закономерность которого недоступна человеку, так как он находится внутри течения данного процесса. Эйхенбаум всю жизнь старался завершить биографию Толстого, потому что в этом писателе нашел схожее со своим мирозерцание. Отвергнувший описания истории с трансцендентной точки зрения типа Гегеля, Эйхенбаум на закате своей жизни постепенно обожествлял «Историю с прописной буквы».

В пятой главе указывается на то, что Эйхенбаум постоянно учитывал неизбежную условность различных высказываний. Он повторно подчеркивал, что его высказывания являются «рабочей гипотезой». Данная условность постепенно забылась или скрылась в процессе развития будущего структурализма. А Эйхенбаум считал мир не столько целостностью, состоящейся из дискурсов, сколько наддискурсным полем, где обращаются и пересекаются различные высказывания, включая его собственные.

## 「過去」を背負う者、背負わない者

——マルティン・ヴァルザーの戦後ドイツ社会論——

渡 辺 将 尚

1

1979年、マルティン・ヴァルザーは、アウシュヴィッツおよびドイツのいわゆる「過去」を取り上げたエッセイを2つ発表した。「幽霊たちとの握手 (Händedruck mit Gespenstern)」と「終わらないアウシュヴィッツ (Auschwitz und kein Ende)」である。<sup>1)</sup> いずれのエッセイも、アウシュヴィッツを解決済みの問題としてはとらえず、ドイツ人のこの問題への対処の仕方を厳しく批判している。戦後30年以上を経過した時期になお、そのような批判を展開するという事実から、この問題に関するヴァルザーの関心の高さをうかがうことができる。

しかし、2つのエッセイの間には大きな差異がある。それは以下の2つの引用文に顕著に表れている。

「資本家たちは、どのみちいつも戦争と歴史の勝者の側にいる。愚か者となるのはいつも民衆だ。」<sup>2)</sup> (「幽霊たちとの握手」)

「社会や、民族や、国家が、その権力と力を結集して犯罪を正当化し実行しておきながら、あとになって実行犯を選定するというようなことが行われるならば、それはどんな時代にとっても、またどんな未来にとっても危険なことであると思う。」<sup>3)</sup> (「終わらないアウシュヴィッツ」)

2つ目の引用文の内容は明解である。社会、民族、国家、いかなる形態であろうとも、集団的に行われたことについては集団で罪を負わなければならないという主張である。最初の引用文には若干の説明が必要であろう。「資本家たち」とは、ドイツの資本家たちのことであり、「民衆」とは同様にドイツの民衆のことである。ドイツは国としては敗戦国であるが、戦争を引き

1) ただし、「終わらないアウシュヴィッツ」は、ある展覧会の開催に際して行った講演がもとになっている。

2) Walser, Martin: Werke in zwölf Bänden. Herausgegeben von Helmut Kiesel. Frankfurt am Main (Suhrkamp). 1997. Bd.11. (Ansichten, Einsichten) S.626. 以下, Werke と略し, 巻数とページ数のみ示す。

3) *ibid.* S.635.

起こした者としての責めをすべて負わなければならなかったのは民衆だというわけである。この引用文の直前には、知識人たちへの言及もある。ヴァルザーによれば、知識人たちも責任を負うことのない勝者の立場にいる。両者とも、その根底にある問題は同じものである。「集団的罪」<sup>4)</sup>である。どちらにおいても、集団的に罪を負っていくことの必要性が説かれているところまでは共通している。しかし、差異はその先にある。責任を回避する者として名指しされている対象が異なるのである。「幽霊たちとの握手」では知識人および資本家、「終わらないアウシュヴィッツ」では直接の実行犯以外の者たちである。この2つのエッセイを同時に読めば、両者が矛盾していることに気づく。「幽霊たちとの握手」で被害者とされた民衆は、「終わらないアウシュヴィッツ」では一転して批判の対象となるからである。

名指しされる対象の違いは、批判者であるヴァルザーの足場の置き方に由来するものである。いずれのエッセイも、「集団的罪」をめぐる問題を考察する際に、対立構造が用いられている。対立構造ということは、対立する二者を隔てる境界線、つまり対立軸が存在することになる。その対立軸の置き場が、それぞれの引用文において異なっているのである。「幽霊たちとの握手」では、それは資本家（あるいは知識人）と民衆との間に、「終わらないアウシュヴィッツ」では、直接の実行犯とそれ以外の者との間にある。「幽霊たちとの握手」において、ヴァルザーが足場を置いているのは民衆の側であり、民衆の側から資本家批判が行われている。一方、「終わらないアウシュヴィッツ」では、ヴァルザーはもちろん実行犯以外の側におり、自分と同じ側で実行犯にのみ罪を押しつけようとしている人々を批判している。当然のことながら、資本家の中にも、ナチズムには直接の関わりを持たず、戦後においてそれを盾に罪を回避しようとしている者はいるはずだから、後者の枠組み——実行犯とそれ以外——にしたがった場合、資本家のある部分と民衆は確実に同じ範疇に入ってしまうことになる。これは、資本家と民衆との間に明確な対立軸を置き、資本家および知識人を痛烈に批判する「幽霊たちとの握手」の

---

4) この考え方自体は何ら新しいものではない。たとえば、有名な発言で言えば、1952年に行われたテオドール・ホイス大統領の講演に、すでにこの問題への言及がある。彼は、かつて強制収容所があった場所の中に、戦後になるまで知らなかった地名が含まれており、すべてを知っていたわけではないと断りながらも、なおつぎのように述べる。「このような発言をしたからといって、『私たちは何も知らなかった』と言う人々を擁護しようというわけではありません。私たちは知っていました。…プロテスタントの、あるいはカトリックの聖職者たちの書簡からも、ドイツの精神病院の入院者たちに対して組織的な殺害が行われていたことを私たちは知っていたのです。(Heuss, Theodor : Dies ist unsere Scham. In : Bibliothek der Geschichte und Politik. Politische Reden IV. 1945-1990. Frankfurt am Main (Deutscher Klassiker Verlag) 1999. S.331.) 知っていたのだからドイツ全体の罪であるという主張である。

もちろん、この考え方を受け入れない、あるいは受け入れることをためらう人々がいるからこそ、このような発言がなされるのである。ハインリヒ・ベルは、あるインタビューで、戦争直後に抱いた思いを率直に告白している。「私自身決してSAやヒトラーユーゲントに入っていたわけではありませんが、同年代の人々への連帯感を持っていました。それが突然非難されたのです。それは、そもそも我々が受けた卑屈な大勢順応主義教育の結果なのです。」(Böll, Heinrich : Eine deutsche Erinnerung. Interview mit René Wintzen. München (Deutscher Taschenbuch Verlag) 1981. S.141.) この発言をもって、ベルが「集団的罪」を引き受けることを頑なに拒否しているとするのは、乱暴な解釈であろう。しかし、戦争直後、連帯感を抱いたことさえも非難の対象となり、「集団的罪」を受け入れることへとまどいを感じたことは読み取ることができる。

スタンスと明らかに矛盾する。では、なぜこのような矛盾が生じるのだろうか。この矛盾の要因はどこにあるのだろうか。

## 2

上記2つの枠組みのうち、ヴァルザーが以前に発表したエッセイと共通するのは「終わらないアウシュヴィッツ」の方である。以下ではまず、この「終わらないアウシュヴィッツ」と、1965年に書かれた、初期のヴァルザーを代表するエッセイ「私たちのアウシュヴィッツ (Unser Auschwitz)」<sup>5)</sup>を比較し、時代を経ても変化することのなかったヴァルザーの基本姿勢を確認しておくことにしよう。

「私たちのアウシュヴィッツ」は、ヴァルザー自身がいわゆる「アウシュヴィッツ裁判」<sup>6)</sup>を傍聴した経験をふまえて書かれたものである。ここでは、裁判の内容に関する報告だけでなく、メディアの報道の仕方、民衆の受け止め方など、さまざまな問題が取り上げられているが、「終わらないアウシュヴィッツ」同様、「集団的罪」にも言及されている。

「しかし、これらの実行犯たちが、1918年から1945年に至るいずれかの時点まで、私たちすべてと見間違えるほどそっくりな存在であったこと、そして、彼らはその後起こった特別な諸事情によって裁判を受けることになったのだということは、あのような裁判で十分に話題にされることはありえない。」<sup>7)</sup>

アウシュヴィッツで残虐な行為を行い、今裁判で罪に問われている者たちも、もとをたどれば、罪に問われていない「私たち」と同じであって、彼らは途中から別な道を進んで、そのような境遇に至ったに過ぎない。具体的に何かは特定されていないものの、その「特別な諸事情」が作用すれば誰でも同じ立場になり得た、という考え方がその根底にある。そして、その「特別な諸事情」の責任は、すべてのドイツ人にある。

「私たちは…1933年から1943年まで、私たちの目の前で一步一步事が進められていったとき、少なくとも寛容な目撃者であったことを忘れているのだ。」<sup>8)</sup>

直接関わっていないのだとしても、容認していた罪はあるのだという。

---

5) このエッセイに潜む問題点の詳細については、拙論「あらゆる既存の概念を超えたアウシュヴィッツ? ——マルティン・ヴァルザーのエッセイをめぐって」(『山形大学人文学部研究年報』第5号) 2008年、133~144ページ)を参照。

6) 1963年に始まった、収容所での大量虐殺に関わった者たちへの裁判である。詳細は、石田勇治『過去の克服——ヒトラー後のドイツ』(白水社、2002年) 178ページを参照。

7) Walser, Martin : Werke. Bd.11. S.167.

8) ibid.

「終わらないアウシュヴィッツ」も、アプローチの仕方は異なるものの、最終的に目指す結論は同じである。このエッセイでは、冒頭からすでに、「集団的罪」をめぐる問題に対して、ヴェルザーの批判的な目が注がれている。

「いずれにせよ私たちは、罪を、恐ろしい出来事の1つ1つを、一部の権力の手先どもに押しつけることで救いを得てきた。しかし、よくしつけられた私たちの中の一部に、なぜ突然あんなことが可能な人間たちが出てきたのかという問いからは逃れることができないのだ。」<sup>9)</sup>

アウシュヴィッツの実行犯たちも、もとは「私たち」と同じ存在であったとする、先の引用文(注7)と同じ主張である。実行犯たちは、かつて「私たち」の中にいた者たちである。同様に、直接の関わりを持たなかった者の罪についても述べられている。

「この結果に対応する原因はない。しかし、この殺人工場は私たちの中から出現した。私たちによって育て上げられたのだ。」<sup>10)</sup>

「結果」とはアウシュヴィッツで行われた残虐行為のことである。それを可能にした「原因」を探ろうとしても、容易に見つかるものではない。しかし、原因にたどりつけない事柄であっても、責任の所在を明らかにすることはできる。ここでも、アウシュヴィッツのような「殺人工場」を生み出し、発展させた「私たち」の責任が明確にされていると見ることができる。

このように、「私たちのアウシュヴィッツ」と「終わらないアウシュヴィッツ」はともに、「集団的罪」の問題を取り上げている点、何の関わりもなかったように見える「私たち」にも罪はあるのだと主張している点で共通し、両者は同一線上にあると言える。しかし、「幽霊たちとの握手」は、「終わらないアウシュヴィッツ」と同じ年に書かれていながら、冒頭に少し触れたように、明らかに異なるスタンスの上に組み立てられている。以下、「幽霊たちとの握手」におけるヴェルザーの議論を追っていくことにしよう。

完全な同一線上に置くことができないとはいえ、それは正反対の主張がされているという意味ではない。議論の出発点となる前提に関しては、「幽霊たちとの握手」も他の2つと変わることはない。

「もしアウシュヴィッツを克服することができるなら、私たちはふたたび国内の問題に取り組むことができるようになるだろう。しかし、完全に世俗的な、自由主義的な、宗教的なもの、いや、そもそもすべての自己を超えるものから逃げていく社会 (eine rein weltliche, eine

---

9) *ibid.* S.631.

10) *ibid.*

liberale, eine vom Religiösen, eine überhaupt von allem Ich-Überschreitenden fliehende Gesellschaft) では、アウシュヴィッツをただ排除するだけしかできないことを、私は認めざるを得ない。」<sup>11)</sup>

まず、ここでは、ドイツのいわゆる「過去」を解決済みのものとは捉えていない。「自己を超えるもの」とは、人びとが自らのテリトリー外にあると判断する（あるいはそう判断したいと思っている）もののことである。具体的には、アウシュヴィッツの罪、ひいてはドイツの「過去」を指す。また、そのようなものから「逃げている社会」は、原文では不定冠詞付きの名詞で表現されているが、当時の西ドイツ社会を念頭に置いていることは明らかである。

同様の主張が「終わらないアウシュヴィッツ」にもある。

「私たちはあまりにも早く解放されすぎた。アウシュヴィッツの写真の前にすれば、誰でも訴訟を継続しなければならないということを思い知らされる。生涯にわたって、私たちの心の中での訴訟を。」<sup>12)</sup>

「訴訟」とは、前述の「アウシュヴィッツ裁判」のことである。歴史的事実としての裁判は結審しても、今度は各人がそれぞれ自分の中で継続していかなければならないのだという。

「幽霊たちとの握手」では、「集団的罪」についても述べられている。

「受け止め、保持し、背負うという行為は、共同作業によってしか成し得ない。しかし、いかなる共同の傾向も、私たちのところでは時代遅れの嫌疑を招く。共同、連帯、国民という言葉が現れると、連邦共和国の自由主義下に生きる現世主義者は、教会、あるいは共産主義、あるいはファシズムをそこに見るのだ。」<sup>13)</sup>

「背負うという行為」を「共同作業によって」行うべきであると言われていることから、集団的に罪を負うことの必要性が述べられていることが分かる。ここで注意しなければならないのは、その場合の集団とは東西ドイツ、もっと正確に言えば、統一を経た後のドイツだということである。それは、この引用文からもすでに明らかである。ヴァルザーの言う「共同」が東ドイツとの共同までを含まないのならば、そもそも「共同」という言葉から共産主義者が連想されることについて批判を行う必要はないからである。後には以下のような文もある。ここでははっきりと「分裂 (Teilung)」という単語が使われている。

---

11) *ibid.* S.627.

12) *ibid.* S.633.

13) *ibid.* S.627.

「分裂がまったくの歴史的諸条件から発生したものであることを見抜いていながら、なぜ私たちは分裂を自然法則のように受け入れているのだろうか。」<sup>14)</sup>

分裂が「自然法則」であるならば、そこに疑問をさしはさむ余地はない。人為的なものであるがゆえに、東西ドイツの分裂は疑問に付され、再考され、最終的には修正されなければならないのである。<sup>15)</sup>

「終わらないアウシュヴィッツ」でも同様の立場が表明されている。

「フランス人、あるいはアメリカ人は、アウシュヴィッツの写真を、私たちとは別様に認識することができる。彼らは、我々人間ときたら！と考える必要はない。このドイツ人たちめ！と考ればよいのだ。私たちは、このナチどもめ！と考えることができるだろうか。私にはそうすることはできない。この罪は、私たちの歴史の諸条件のもとで生じたものだ。私たちは、その歴史すべてを相続したのだ。」<sup>16)</sup>

アウシュヴィッツで行われた犯罪を、「このナチどもめ」と言って自らと関係のない領域のものとして片付けることはできないと言明されている。また、フランスやアメリカのような外部から見れば、「このドイツ人たち (diese Deutschen)」が犯した犯罪と見なされるのだと述べられていることから、「幽霊たちとの握手」同様、ヴァルザーが「集团的罪」という時、そこに東西の区別がないことも、改めて確認することができる。

---

14) *ibid.* S.629.

15) ドイツの分裂に関するヴァルザーの立場を、遠山義孝氏は以下のようにまとめている。「その間にドイツの現状『1 民族 2 国家』という形がお互いの国 (西ドイツと東ドイツ) でそれぞれ独立に固定化されてしまった。これに対してヴァルザーは大いに不満であった。彼は最初から一貫してドイツの分割そのものを認めないで、分割前の状態に復する形での統一を望んでいたからである。ドイツの歴史を、自分の罪が惹起した破局の所産のままに終わらせることはできないというのがヴァルザーの主張である。だから東西ドイツの分割の現状を容認することは、結局ナチスとアウシュヴィッツという自己の過去を克服せぬまま、その過去を認知することを意味する。」(遠山義孝：『ドイツ現代文学の軌跡 マルティン・ヴァルザーとその時代』(明石書店) 2007 年、103 ページ。) なお、文中の ( ) は原文のまま。東西ドイツ分裂を扱ったヴァルザーの文学作品としては、『ドルレとヴォルフ』(1987 年) などが挙げられる。西ドイツで活動する東ドイツのスパイが主人公であるが、ヴァルザー自身の言葉によれば、西側のドイツ人が「どの領域——つまり司法、文学、もちろん政治などもふくめて——においても、分裂を健全な判断に裏付けられたものとしたがっている」 („Ich habe ein Wunschpotential.“ *Gespräche mit Martin Walser*. Herausgegeben von Rainer Weiss. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1998. S.37.) ことを批判することが、この作品の目的であった。これは、本稿で取り上げている 2 つのエッセイで表明されている立場、および上記の遠山氏がまとめた見解とも一致する。

16) Walser, Martin : *Werke*. Bd.11. S.632. 引用文中 2 行目の「彼ら」に当たる部分は、原文では、1 行目の「あるいは (oder)」でつながれた 2 つの単数形「フランス人 (ein Franzose)」、 「アメリカ人 (ein Amerikaner)」を受けて単数の「彼 (er)」である。しかし、ここでは日本語としてより自然となるよう訳に修正を加えた。

## 3

これまで見てきた限り、ともに1979年に書かれた2つのエッセイ——「幽霊たちとの握手」と「終わらないアウシュヴィッツ」——は、「集団的罪」という、ヴァルザーの思想の根幹に関わる部分を共有しており、以前のエッセイ——たとえば「私たちのアウシュヴィッツ」——と比べても、突飛な存在というわけではない。しかし、これほどの共通点を持ちながら、「幽霊たちとの握手」のみがその枠組みを離れ、資本家批判に向かっている。冒頭に触れたように、これは資本家と民衆を同じ範疇で捉える「終わらないアウシュヴィッツ」のスタンスとも矛盾する。また、「集団的罪」の問題を持ち出しながら、批判の矛先を資本家に向けるのは、一見ただけでも奇妙なことである。「集団的罪」を受け入れようとしないのは、資本家たちだけではないはずだからである。

「幽霊たちとの握手」において、資本家に対する批判はどのように開始されるのだろうか。冒頭に引用した文に至るまでに何が語られていたか、ヴァルザーの議論を追ってみることにしよう。

「私たちの知識人たちは、1918年以降まるで民衆から乖離し、それ以降、民衆の中で、民衆とともに、あるいは民衆によって経験してきたことを排除してしまったかのように思える。」<sup>17)</sup>

このエッセイがこれから問題として取り上げようとしている対立構造が、いつ始まったのかが示されている。この引用文では、「知識人」しか名指しされていないが、資本家も当然知識人の側にいる。このあとすぐ「封建的=ブルジョア連中」<sup>18)</sup>として、彼らも批判のただ中に引きずり込まれることになる。

ところで、なぜ1918年なのだろうか。第1次大戦においても、ドイツは敗戦国となった。第2次大戦後同様、この時も敗戦の「結果をほとんど一身に背負わなければならなかったのは、ドイツ人であった。」<sup>19)</sup> もちろん、この「ドイツ人」の中に、資本家や知識人たちは含まれない。彼らは、「勝利者の側についた」<sup>20)</sup>からである。そして知識人たちはいわゆる「怒濤

17) *ibid.* S.625. 「私たちの知識人 (unsere Intellektuellen)」は、日本語として違和感がある表現であるが、原文に忠実に訳出した。この「私たちの」という表現には、知識人批判とはいえ、彼らをまったく別次元に生きる者として区分しないという意図が働いているのであろう。

18) *ibid.* S.626.

19) *ibid.* 傍点部は原文ではイタリック。「ドイツ人」に当たるドイツ語は„das deutsche Volk“である。周知のように、Volkは「民族」、「国民」、「民衆」等の訳が考えられるが、ここでは、戦争に参加した他国との比較を交えて述べられているところであるので、あえて「ドイツ人」と訳出した。「ドイツの民衆」と訳すと、ドイツの政治家、あるいは知識人との比較というニュアンスが強く出てしまい、文脈と齟齬をきたす危険がある。ただ、Volkのみがイタリックで強調されているように、結果を背負わなければならなかったのはドイツの知識人ではなく、あくまでドイツの民衆であったという点を主張したい意図がヴァルザーにあったのも事実である。

20) *ibid.*

の20年代」を謳歌することになる。そのような中で、怨恨や苦しみを別の手段で晴らそうとする者たちが現れた。ナチズムである。しかし、ナチズムの出現も、1918年以来の対立軸を打破することにはならなかった。ナチズムに参加したわけではなく、むしろ被害者であった可能性もある知識人たちは、「あの熱狂した小市民たちとは関係ない」<sup>21)</sup>と主張することができたからである。この直後に、冒頭に引用した資本家に関する文が登場することになる。知識人層と民衆の間に明確な対立軸を置くことで、徹底した知識人層批判が展開されている。

実は、「幽霊たちとの握手」におけるこの線引きによって、定義があいまいになり、揺れ動いている要素がある。逆にこの線引きを行っていない「終わらないアウシュヴィッツ」には、この揺れを見いだすことができない。それが「幽霊たちとの握手」における対立軸の位置と密接に関係しているからである。まず、つぎの2つの文を比べてみよう。後者はすでに引用した文である。

「推測するに、国や社会における私たちの寄る辺なさは、私たちが私たちの歴史に距離を置いてしまった結果なのだろう。」<sup>22)</sup>

「私たちの知識人たちは、1918年以降まるで民衆から乖離し、それ以降、民衆の中で、民衆とともに、あるいは民衆によって経験してきたことを排除してしまったかのように思える。」

この2つの引用文は、途中で改行をはさむものの、連続した位置関係にある。しかし、連続していながらも、両者の間には視点の変化による大きな断絶が横たわっている。その断絶を生み出しているのは、「私たち (wir)」,あるいは「私たちの (unser)」という表現である。前者における「私たち」とは誰を指すのだろうか。この「私たち」は、自分たちの「歴史に距離を置いてしまった」者たちである。この前後の議論についてはすでに述べた。その議論の内容から判断すれば、「私たち」とは、歴史の責任を引き受けなかった者たち、つまり知識人層ということになる。

後者の「私たち」が指すものは明解である。「私たち」が前者と同じように知識人層を指すのなら——「私たち知識人」と言うことは可能であっても——そもそも「私たちの知識人」という言い回しにはなり得ない。この「私たち」は知識人層と対立する関係にある者たち、つまり民衆ということになる。

このあと、議論は東西ドイツ分裂の問題に移行し、この対立軸は解消されることになるが、そこまで「私たち」の指示するものは一貫して民衆である。揺れ動くのは、知識人と民衆との間の葛藤について論じた部分だけである。

---

21) *ibid.*

22) *ibid.* S.625.

## 4

「終わらないアウシュヴィッツ」でも多用されている「私たち」に、このような揺れを見いだすことはできない。「終わらないアウシュヴィッツ」には、知識人と民衆の対立軸もなければ、知識人批判もないからである。「集団的罪」を考える上でより自然な線引きなのは、「終わらないアウシュヴィッツ」の方である。前述のように、「集団的罪」を受け入れようとしなのは、資本家たちだけではないはずである。「幽霊たちとの握手」は、〔責任を回避する者たち＝資本家(あるいは知識人)〕という図式を成立させてしまう点に不自然さが残る。14年隔たった「私たちのアウシュヴィッツ」と「終わらないアウシュヴィッツ」の間で同じ枠組みが用いられているのは、それがヴァルザーの中でも、読者の中でも、ある程度の説得力を持つからであろう。その枠組みをあえて崩しているのが、「幽霊たちとの握手」ということになる。そのことがまた、「私たち」の指示内容の揺れと密接な関係を持っているのである。

この揺れが意味するものとは何だろうか。「私たち」の示す範囲が移動するという事は、自分がどこに所属しているかに関する認識、一言で言えばアイデンティティがその都度移動していることの表れである。先ほど比較した2つの引用文において、前者では知識人に属する者として、後者では民衆に属するものとして、それぞれ主張を展開している。冒頭の引用(注3)は、2つのベクトルの内の1つを示したにすぎない。その反対のベクトルもまた、同じテキスト内に共存していたのである。このエッセイにおけるヴァルザーは、同一の問題に対して複数の視点を持っていることになる。ただし、ここで言う複数の視点とは、多角的な見方ができるという意味ではない。同時に複数の視点が可能なのではなく、どちらかに定まらないまま揺れ動いていると見るべきである。

ここから、「幽霊たちとの握手」独自の対立構造についても、その理由が明らかになってくる。「幽霊たちとの握手」において、知識人と民衆の対立構造が見いだされるのは、何よりも、ヴァルザー自身が、知識人層にも民衆にも、自己同定することができず揺れ動いていることの証明である。社会における思想的リーダーとしての活動歴を客観的に見れば、さまざまな変遷はあるものの、彼はおおむね左派知識人に位置づけられる。<sup>23)</sup>しかし、大きな問題を抱える知識人層に自らも位置づけられることに、完全に同意することはできない。だから、ある時は知識人として、戦争責任をめぐる自らの、および仲間たちの態度を自己反省しながらも、時には境界線を飛び越えて反対側へと赴き、民衆側にいる者として、言い換えれば、悪しき知識人か

23) 「(ヴァルザーは)かつて連邦共和国における左派の代弁者だった。ついで、ドイツ共産党の支持者となった。そして今や、1つの国民となったドイツ人のアイデンティティの問題を嘆く…愛国者となった。」(Schirmer, Heinrich: Tauroggen liegt am Bodensee. In: Die Drei: Zeitschrift für Wissenschaft, Kunst und Soziales Leben. Jg.64. Heft 3 (1994). S.186.) 引用文中の「今」とは、この論文が書かれた1994年である。

ら距離を置いた存在として、知識人批判を展開するのである。<sup>24)</sup> このように、知識人批判をめぐって両者の間で揺れ動くからこそ、そこに対立軸が生じることになるのである。<sup>25)</sup> 知識人による内部告発に終わるなら、そもそもこの対立軸の必要性はない。

結局、「幽霊たちとの握手」においては、「集団的罪」の問題を掲げ、罪を負おうとしない知識人層を批判しながらも、その背後に、知識人あるいは民衆のどちらへ帰属意識を見いだすかという、自らの問題が見え隠れしている。この問題は、たしかに、あからさまに表面に持ち出されたものではない。ヴァルザー自身気づいているという形跡も見受けられない。しかし、この問題こそが、矛盾を引き出していた元凶である。したがって、この矛盾は、「幽霊たちとの握手」と「終わらないアウシュヴィッツ」の論理がともに混乱することによって生じたものではない。むしろ、これまでの彼の論理の延長線上から、「幽霊たちとの握手」のみが分離してしまった結果である。この分離を促したものが、帰属意識における揺れであった。

ただし、このことによって、「幽霊たちとの握手」が欠陥を持っていると結論づけるのは誤りである。なぜなら、このエッセイが、民衆の意見を統制しているかのようなメディアを批判し、その統制から自らを解き放って自由に心情を吐露することを、もうひとつの目的としているからである。この姿勢は、すでにこのエッセイのある種衝撃的とも言える冒頭の文で明らかにされていた。

「道徳的疲弊には驚きである。私が、今よりまだはつらつとしていた頃偽善者だったにしても、今ますます偽善への意欲も力もなくしてしまっていることを、私は健全な発展だとは思わない。」<sup>26)</sup>

引用の1行目にある「道徳的疲弊」の内容は直接的には述べられていない。しかし、後に展開されている議論から明らかである。戦争責任を真摯に受け止め、反省することにおける疲弊である。以前は、たとえ偽善だったにしても、それを実行することができた。ところが、今は

---

24) ヴァルザーのエッセイには作家批判まである。「西側における最新の風潮について」(1970, Werke. Bd.11. S.284-315.)では、自らの世界にこもり、社会的な問題に関わりたくない作家たちが痛烈に批判されている。

25) ヴァルザーの創作活動自体が、この揺れの表現と言ってもよいのかもしれない。注23に引用したように、彼は左派知識人としてその名を知られているが、彼の文学作品は、徹底して民衆の視点にとどまり、そこから現代社会に潜む問題を暴き出すという手法によっているからである。「彼(=ヴァルザー)が、『雇われ人』という言葉で括れるような小市民層の(生き方の)記録者であることが、いつも改めて確認されるのである。」(Rothschild, Thomas: Täuschung und Selbsttäuschung. Martin Walsers „Dorie und Wolf“. In: Die Neue Gesellschaft, Frankfurter Hefte. Jg.34. Heft 4 (1987). S.383.) 「50年代、小説『フィリップスブルクの結婚』(1957)によって、彼は自らの文学スタイルを生み出した——連邦共和国の現実を批判的=写實的に描くこと、より厳密に言えば、小市民の意識に写った現実を描くことである。」(Bohn, Volker: Deutsche Literatur seit 1945. Frankfurt am Main(Suhrkamp) 1995. S.273.) ( )は原文のまま。

26) Walser, Martin: Werke. Bd.11. S.617.

その偽善を行う気にすらならないのだという。それは、偽善をやめるという積極的態度であるよりは、偽善から来る疲弊である。だから、「健全な発展だとは思わない」のである。ヴァルザーによれば、この偽善的態度はメディアによって作られてきた。

「何年もの間、世論の担い手として（ナルシスト的なものとは反対に）社会的に共有された言い回しを使い続けていると、言い回しが一人歩きを始めて、その使用者との関係をますます薄めていく危険が生じることになる。」<sup>27)</sup>

世論をリードしようとするなら、大衆に共通して理解される言い回しを使用しなければならない。しかし、長らくそのような言い回しに接していると、いつしか自らの意見とはまったく異なった意見を表明している自分に気づく。そうして作られた意見は、多くの者が受け入れることのできるものであるが、その分差し障りのない、言ってみれば教科書的な、模範的なものとなる。その都度自らの思うところを表明してきたかのように見えるヴァルザーも、そのようにして偽善的態度をとってきた1人なのだという。

「幽霊たちとの握手」においてヴァルザーは、まず自分をとりまく状況を直視し、認めるところから出発する。そして、メディア操作からも、それが作り出す偽善的態度からも解放されて、率直に自らの感情を吐き出そうとしている。そのようなエッセイの中で、矛盾する論理が展開されているのだとしても驚くにはあたらない。自らの立場の困難さを、まるで関係がないかのように客観的に述べるのではなく、その当事者として積極的に開示し、問題の所在を明らかにしていこうというのが、このエッセイの目的であったからである。つまり、内容だけでなく、矛盾をもふくめたその存在全体が、著者ヴァルザーの意図を表現していたと言えるのである。

---

27) *ibid.* ( ) は原文のまま。

## Erben und Nichterben der deutschen „Vergangenheit“:

### Martin Walsers Sozialkritik

Masanao WATANABE

1979 schrieb Martin Walser zwei Essays über Auschwitz und die Schuld der Deutschen: „Händedruck mit Gespenstern“ und „Auschwitz und kein Ende“. In diesen Essays macht er darauf aufmerksam, dass es in Deutschland in Hinsicht auf die Schuld zwei Arten Menschen gibt: diejenigen, die sie auf sich nehmen mussten, und die nicht auf sich nehmen wollten. Doch die Gegenstände, die Walser als der Schuld Abweichende kritisieren will, sind in beiden Essays verschieden: In „Händedruck mit Gespenstern“ Intellektuelle, die sich immer „auf die Seite der Sieger“ schlagen, und in „Auschwitz und kein Ende“ allgemeine Leute, die sich für unschuldig halten, weil sie weder Nazis noch Täter in Auschwitz waren.

In beiden Essays wird das Thema „Schuld“ mit den Gegensätzen der zwei Gruppen überlegt. Aber die Grenzen, die die zwei Gruppen unterscheiden, liegen in jedem Essay in einem anderen Ort: In „Händedruck mit Gespenstern“ ist sie zwischen den Intellektuellen und dem Volk, und in „Auschwitz und kein Ende“ zwischen den Tätern und den Anderen.

Das Schema in „Auschwitz und kein Ende“ ist leicht verständlich und unproblematisch als Essay, das versucht, die deutsche „Vergangenheit“ zu überlegen. Und zwar wurde es in seinem früheren Essay („Unser Auschwitz“ (1965)) schon benutzt. Dieses Schema ist Walsers Grundstein für das Thema „Vergangenheit“. Problematisch ist das in „Händedruck mit Gespenstern“, weil es unmöglich ist, dass alle der Schuld Abweichenden Intellektuelle wären. Diejenigen, die keine Intellektuellen sind, könnten der Schuld auch abweichen. Man kann sagen, dass es Walser in diesem Essay nicht ganz gelingt, dem Problem der Schuld nachzugehen.

Was es hindert, ist eine andere Angelegenheit, die in diesem Essay auch in Betracht kommt: Walsers Identität. In anderen Worten, zu welcher Gruppe (oder Klasse) er selbst gehört. Wie gesagt, kritisiert Walser in „Händedruck mit Gespenstern“ von der Seite des Volkes Intellektuelle. Aber es sind Sätze auch zu finden, wo er sich einen Intellektuellen nennt und an Intellektuellen von innen Kritik übt. Das bedeutet, dass in diesem Essay

seine Identität zwischen den Intellektuellen und dem Volk schwankt. Dieses Schwanken beschränkt das Schuldproblem auf die Auseinandersetzung zwischen den zwei Gruppen (den Intellektuellen und dem Volk), und lässt das Essay scheitern.

Aber das ist kein Nachteil von „Händedruck mit Gespenstern“. Denn es hat auch ein Ziel, von allen Einflüssen (z.B. Politik, Medien) befreit seine eigenen wahren Meinungen zu äußern. In diesem Essay scheint das Ziel, die deutsche „Vergangenheit“ zu überlegen, zwar nicht ganz erfüllt zu werden, indem es von einem anderen Problem behindert wird. Doch dieses Scheitern ist ein Resultat der Absicht Walsers, und Widersprüche einschließlich ihrer Ursache zu zeigen ist auch wichtig.



# むだ時間システムとしてとらえたサプライチェーンについての一考察

## ——リードタイムが既知の場合——\*

西 平 直 史

### 1 はじめに

生産管理や在庫管理といったサプライチェーンにおいて、Bullwhip 効果が生じることが課題の一つである [1]。これが生じると、わずかな在庫の余剰（または不足）分が最終的には莫大な在庫増につながることもあり、余剰な在庫は経営を圧迫するため Bullwhip 効果を抑制するような手法が研究されている。

参考文献 [2, 3] では、そのような観点に基づいて、サプライチェーンをむだ時間をもつ動的プロセスとして定式化し、それに基づいた解析を行っている。伊藤らは古典制御理論を用いて解析を行っているし、筆者は現代制御理論を用いて解析とサーボ系の設計を行なっている。

本稿で扱うシステムは、参考文献 [2, 3] と同様のサプライチェーンをむだ時間をもつ動的システムとして定式化したものであるが、ここでは、リードタイムを観測できる場合を考える。参考文献 [3] では、リードタイムすなわちむだ時間の情報を条件に含んでいないため、リードタイムが未知の場合には使いやすい条件であるが、それと同時にリードタイムを条件に含んでいないために、保守的な条件となっている。実際のサプライチェーンにおいては、例えば発注してから入庫するまでの時間がわかっていることが多い。換言すると、リードタイムが既知の場合が多い。本稿では、これを条件に含めることで、より保守性を軽減した条件の導出を考察する。

### 2 問題の定式化

本稿では、参考文献 [3] と同じ以下のシステムを考える。

$$x(k+1) = x(k) + w(k) - d(k) \quad (1)$$

ただし、 $x(k)$  は時刻  $k$  における在庫量、 $w(k)$  は時刻  $k$  における入庫量、 $d(k)$  は時刻  $k$  における出庫量である。

また、リードタイムを  $L$  とし、時刻  $k$  における発注量を  $u(k)$  とすると、発注量と入庫

---

\* 2008年12月1日受理

量については

$$w(k) = u(k-L) \quad (2)$$

なる関係が成り立つ。(2)式を(1)式に代入すると

$$x(k+1) = x(k) + u(k-L) - d(k) \quad (3)$$

となる。

以下では、(3)式を対象とし、リードタイム  $L$  があらかじめわかっているものとする。これを含めることで新たな条件を導出することを考える。

### 3 解析と設計

筆者は、文献 [3] において、フィードバック制御のみよりもサーボ系を構成したほうが定常偏差を取り除くことが可能であり、高い制御性能を達成できることを示した。そこで、本稿でもサーボ系の設計問題、すなわちステップ状の信号  $r(k)$  に追従する問題を考える [4]。そのため、(3)式に対して、観測出力  $y(k)$  を

$$y(k) = x(k) \quad (4)$$

と定める。これは、在庫数を常に監視していることを意味する。単位時間あたりの入出庫数を把握していればよいという設定なので、これは過度に厳しい要求ではないことに注意しておく。

さて、定常偏差を取り除くために積分器<sup>1</sup>

$$x_I(k+1) = x_I(k) + T\{r(k) - y(k)\} \quad (5)$$

を考える。ここで、 $T$  はパラメータである。

サーボ系の内部安定性には外生信号は影響しないので、 $r(k) = 0$ 、 $d(k) = 0$  とした場合を考えると、

$$x_I(k+1) = x_I(k) - Tx(k) \quad (6)$$

となる。これを用いて拡大系を構成すると、

$$\xi(k+1) = A\xi(k) + Bu(k-L) \quad (7)$$

が得られる。ただし、

$$A = \begin{bmatrix} 1 & 0 \\ -T & 1 \end{bmatrix}$$

$$B = \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \end{bmatrix}$$

$$\xi(k) = \begin{bmatrix} x(k) \\ x_I(k) \end{bmatrix}$$

である。

---

1 厳密には和分器であるが、参考文献 [4] の表現に従った。

つぎに、メモリーフィードバックを考えるために状態の予測を考える。時刻  $k+2$  の状態は、(7)式の両辺の時刻を1だけ進めると、

$$\xi(k+2) = A\xi(k+1) + Bu(k-L+1)$$

となるが、これに(7)式を代入すると、

$$\begin{aligned} \xi(k+2) &= A(A\xi(k) + Bu(k-L)) + Bu(k-L+1) \\ &= A^2\xi(k) + ABu(k-L) + Bu(k-L+1) \end{aligned}$$

が得られる。同様に、時刻  $k+3$  について計算すると、

$$\begin{aligned} \xi(k+3) &= A\xi(k+2) + Bu(k-L+2) \\ &= A^3\xi(k) + A^2Bu(k-L) + ABu(k-L+1) + Bu(k-L+2) \end{aligned}$$

となる。逐次計算していくと

$$\begin{aligned} \xi(k+L) &= A^L\xi(k) + A^{L-1}Bu(k-L) + A^{L-2}Bu(k-L+1) \\ &\quad + \dots + ABu(k-1) + Bu(k) \end{aligned} \tag{8}$$

となる<sup>2</sup>。  $\bar{\xi}(k) = \xi(k+L)$  とすれば<sup>3</sup>、  $u(k) = K\bar{\xi}(k)$  なるフィードバックにより、(7)式は

$$\begin{aligned} \xi(k+1) &= A\xi(k) + BK\bar{\xi}(k-L) \\ &= (A+BK)\xi(k) \end{aligned} \tag{9}$$

となる。ただし、 $K$  はフィードバックゲイン行列である。

システム(9)の安定化コントローラの設計、つまり  $K$  の設計問題は線形行列不等式 (LMI) に帰着することができ (例えば参考文献 [6])、計算機を用いた数値計算で簡単に設計することができる。

**条件1** パラメータ  $T$  に対して、つぎの LMI を満たす正定対称行列  $X$ 、行列  $W$  が存在するとき、サーボ系を構成した拡大系(7)は漸近安定である。

$$\begin{bmatrix} X & X \begin{bmatrix} 1 & -T \\ 0 & 1 \end{bmatrix} + W^T \begin{bmatrix} 1 & 0 \end{bmatrix} \\ \begin{bmatrix} 1 & 0 \\ -T & 1 \end{bmatrix} X + \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \end{bmatrix} W & X \end{bmatrix} > 0 \tag{10}$$

また、そのときのコントローラゲイン  $K$  は

$$K = WX^{-1} \tag{11}$$

で求められる。

証明は、参考文献 [6] と同様であり自明であるので省略する。

さて、文献 [3] の結果との比較をしておこう。文献 [3] では、リードタイムの情報を条件

2 これは状態方程式の解の公式 [5] を用いても導出できる。

3 (8)式の右辺は時刻  $k$  までの情報しか使っていないことに注意しておく。すなわち、左辺は  $L$  だけ将来のことを予測しているのだが、この予測は時刻  $k$  までの情報で可能なことを表している。したがって、左辺は  $k$  で表現している。

に含んでいなかった。すなわち、これはリードタイムが未知であったり、変動する場合にも用いることのできる条件である。文献 [3] の条件 2 で得られた条件自体は簡単なものであるが、コントローラのゲイン  $K$  は LMI の形で導出することはできず、例えばヒューリスティックな数値計算法で求めることになる。一方、本稿で得られた条件 1 は、LMI の形で導出されているため、簡単な凸最適化問題であり、パッケージソフトウェアなどを用いてすぐに解を導出できる。また、性能の限界も計算できるのが利点である。

その一方で、得られたコントローラを実際に適用することを考えると、文献 [3] の方法は、現在の在庫数の定数倍を発注すればよいので、過去の履歴を用いる必要がなく簡単に適用できるが、本稿で得られた条件は(8)式の計算が必要であり、リードタイムに応じて、過去の発注量の履歴を記憶しておき、それを用いることが必要であり、より高度な計算能力と記憶容量が必要になる。また、リードタイム分の過去の履歴を用いるという意味でリードタイムの情報を用いているため、リードタイムが未知の場合や変動する場合には適用できない。

以上をまとめると Table 1 のようになる。

Table 1 条件の比較

	文献 [3]	本稿の条件
リードタイム既知	○	○
リードタイム未知	○	×
リードタイム変動	○	×
計算の容易さ	△	○
実装の容易さ	○	△
性能の限界	×	○

#### 4 おわりに

本稿では、サプライチェーン・システムを、入力にむだ時間をもつ動的システムとして定式化し、それに対してメモリーフィードバックを用いたサーボ系を構成することで Bullwhip 効果を抑制する手法を提案した。

今後の課題として、実際のサプライチェーンにおいては需要予測が行なわれ、それに基づいた手法が一般的であるが、本稿で用いたメモリーフィードバックは予測制御の一種であるのでこれらの関連について考察したい。

## 参 考 文 献

- [1] 圓川隆夫, 生産システム, 生産管理における全体最適, 精密工学会誌, 67-11, pp. 1764-1768 (2001)
- [2] 伊藤利昭・橋本芳宏・石原大司, 最適制御理論を用いたブルウィップ効果を防止する在庫補充方式の提案, 日本オペレーションズ・リサーチ学会 2006 年春季研究発表会, pp. 66-67 (2006)
- [3] 西平直史, サプライチェーンにおける Bullwhip 効果を抑制するための一手法—むだ時間システムとメモリーレスフィードバックを用いた解析—, 山形大学人文学部研究年報, 5, pp. 205-214 (2008)
- [4] 渡部慶二, むだ時間システムの制御, 社団法人計測自動制御学会, (1993)
- [5] 萩原朋道, デジタル制御入門, コロナ社, (1999)
- [6] 岩崎徹也, LMI と制御, 昭晃堂, (1997)

# **A Study of the Supply Chain as a Time-Delay System: a Case when the Leadtime is Known**

Naofumi NISHIHIRA

This paper formulates a supply chain as a time-delay dynamic system. Memory feedback control employing predictive controls is examined, and a servo-system for augmented systems designed in order to eliminate steady state errors.

## Czechs and Germans shaping the regional milieu: The case of growing regional cooperation influenced by the Europeanization of mutual relations

Václav Houžvička

これは、平成20年9月27日に行われた人文学部国際学術講演会の講演「チェコ人とドイツ人——地域協力の進展は相互理解にどのように寄与したか(原題 Czechs and Germans shaping the regional milieu: The Case of growing Regional Cooperation influenced by the Europeanization of Mutual Relations)」の講演記録です。

講演者のヴァーツラフ・ホウジヴィチカ氏は、チェコ科学アカデミー社会学研究所のボーダーランド研究部門の主任研究員です。ホウジビチカ氏は越境地域協力研究の専門家であり、また歴史的な対立を抱えるチェコ人とドイツ人の「和解宣言」(1997年)の策定にチェコ側の委員として関わってきました。チェコ人とドイツ人が歴史的な対立を乗り越える決意表明でもあった「和解宣言」策定までのプロセスは、同じように歴史的な対立を抱える日本と東アジア諸国との関係を考えるうえで、示唆に富むものでした。(高橋和、法経政策学科)

Ladies and Gentlemen, Dear Friends,

I would like to express my warm thanks for your kind invitation to Japan, very nice country still rather exotic in the eyes of Europeans, although we know your culture (let me for instance remind movies of Akira Kurosawa), famous brands like Mitsubishi, Toyota, Olympus, Cannon, excellent electronics etc. To meet you personally is quite new experience.

Three pictures of the Mountain Fuji and the charming Japanese landscape brought from the port of Yokohama by my grandfather in 1919 (then he was soldier of the Czechoslovak Legions) reminds me historical roots of our relations.

Please, accept my warm thanks for kind invitation from The Association for the Northeast Asia Regional Studies, University of Yamagata and personally Dear Prof. Kazu Takahashi who originated our exceptional meeting.

**Institute of Sociology, Academy of Sciences of the Czech Republic Research  
Department Czech Border Regions**

**Short introduction of the research programme**

Today, Czech Border Regions is a research department with a programme that focuses on the assessment of the progressive changes that may be observed in the attitudes the Czech population maintains towards Germans and Germany and on an examination of the current state and potential development of cross-border co-operation between the Czech Republic and Germany.

On the basis of qualified analyses, thematically conceived empirical studies, and other materials, the department studies different forms of cross-border co-operation and the possibilities for their further development and application. Also studied are issues that relate to the formation of the social structure in the border regions as a result of changes induced by the transformation and diffusion effects.

In this connection the research looks at questions of national and regional identity and studies the mentality of the population that lives in the border regions. Research on internal factors in the foreign policy of the Czech Republic is aimed at a systematic and long-term observation of the specific attitudes the population in the border regions maintains towards Germany (including the historical dimension of mutual relationships) and the role this has in the process of the Czech Republic's integration into Euro-Atlantic structures and the European Union.

**From diversity to complexity-response to the Challenge**

Why CBC spread all over the Europe? The reason of the phenomenon is the response to the globalization and the globalization generate the Europeanization

The process of international networking brings possible tensions between the processes of globalisation and the national power to decide on economic matters. States and Multinational Corporations can have different goals may collide on practical and political matters. National states need to co-operate or will lose out with regards to economic performance, with corresponding economic and social costs (Lambooy: 1986).

**Barriers of Cross-Border Cooperation**

**The enlarged EU consists of heterogeneous members** (for instance Germany and the Czech Republic). Although there is common ground of political and cultural values, still every member state has its own institutional, cultural and political heritage that influences its political position and opinion. Especially it's true after the EU enlargements in 2004 and 2007, when 12 new states (10 of them with the communist past) entered the European Union and the EU has to invest a lot of resources to moderate and overcome political differences.

**Rejection of a European constitution** in 2005 by the citizens of France and the Netherlands showed lack of communication between the European institutions/politicians and the European citizenry led to a reflection phase. New approaches and methods have to be explored and tested and common participative culture has to be established. A key issue in this context is show **different actors** can become part of **the democratic decision making**. Public affairs are no longer an exclusive sphere of activity for the administration and elected representatives. Politics on the local and regional levels increasing include the citizens and organizations from the third sector in the political decision making.

### **Globalisation as New form of geopolitics?**

- Differently from economic functions, political functions are fundamentally rooted in territory.
- Networks of international market relations transgress the national boundaries in an „economic space“.
- Nation-states don't have a direct influence on the economic performance of its systems.
- Influence of cultural and institutional factors indirectly via the qualities of labour and entrepreneurs (Porter: 1990).

Bi-lateral relationships are likely to be crucial to the successful expansion of the EU and CBC could become the means of building trust between bordering countries, as it meshes the formal (EU-led initiatives) with the multiplication of informal, socio-economic and cultural interaction. The need for building trust between neighbours is essential, both between countries which share a border with the frontiers of the EU and,

perhaps more importantly, between former Soviet satellite states in Eastern Central Europe.

The Map of the EU changed once again on May 1, 2004, when the EU accepted ten new members. Let's look at how citizens of the four newly accepted members are satisfied with the situation after nearly a year after being incorporated in the Union.

In Poland, Hungary, Slovakia and the Czech Republic the clear majority of citizens agree with their membership in the EU. Though the lowest proportion of affirmative statements can be found in the Czech Republic and in Hungary. In spite of the fact that the ratio of the citizens who do not agree with the membership in the EU in both these countries, reaches nearly three quarters of respondents.

*Regional, structural and cohesion policy belongs to the primary competencies of the European Commission and the Member States of the EU as well.*

The analysis of multi-level governance<sup>i</sup> seems a fruitful approach to the formal levels of European integration, one which perhaps come closer to some aspects of CBC by shedding considerable light on the role of subnational actors and regional elites in the process of inter-state bargaining. Actors involved in CBC and its implementation, for example, range from the European Commission right down to local civic elites. The increasing importance of CBC has in turn led to increasing autonomy for regional and local governments, who co-operate in subnational, transboundary projects, effectively managing parts of foreign policy at the local level (Scholte: 1993, Grix/Houžvička: 2000).

The many different forms of cross-border co-operation, cutting across the economic, cultural and social spheres of life, which have increased greatly since the collapse of communist rule and the opening of the borders to Central European states, contribute immensely to accelerating these state's 'pre-integration' into *the wider supranational framework of the EU*. Flows of people (travel), communications, commerce (trade), culture and ideas across-borders have proliferated in recent years.<sup>ii</sup>

Informal integration is thus ***a matter of flows and exchanges, of the gradual growth of networks of interaction*** (Wallace, 1990).

### **Challenge of globalisation on macrolevel**

- Dilemma of interstate regionalism: countries and regions need to be competitive, but at the same time have to set free economic forces that may weaken their political power.

- Possible way out: regions and countries can be conceived as learning systems, in which an institutionalised configuration and inter-firm network relations develop.
- The dynamics of the transition of the new member state of the EU (including the Czech Republic) depicts in what extent the process of learning is successful after change of values.
- Still exists some limits/path dependencies: foremost the old institutions and social factor/consciousness lagging behind the reform program.

The complexity of CBC flows is also to be found in the relationship between the factors making up the wider formal and informal integration processes of the EU of which CBC is part. A useful distinction between formal and informal integration can be found

The EU cohesion policy is based not on providing income support but consists mainly of providing grants and credits from the regional and structural funds and the European Investment Bank, mostly for infrastructure investment. The basic idea is to raise the productivity in a region in order to support local or attract foreign investment of neighbouring states. Ideally, public policies strengthen and flank favourable market between public institutions (universities, research institutes etc.) and private enterprises in order to achieve competitiveness. The results of that approach have been mixed.

With regard to cross-border (CBC) regional co-operation, EU initiatives appeared in the Association Agreements, among others with the former Czechoslovakia signed in October 1990. There were settled down specific provisions for regional co-operation by calling on the parties to strengthen mutual co-operation for regional development and spatially land planning.

German border areas after 1989 started by the opening of the frontier between the two former enemy countries. The frontier ceased to act as an impermeable political barrier, however, the boundaries also kept their dual role in the new situation. They serve as reference framework of the system formed by its environment as an instrument of creating relations to the neighbouring state. The process reached its peak at the end of **2007 when the Czech Republic joined the Schengen system.**

Boundaries not only separate, they also link (Luhmann 1982). **Euroregions established**

**along the Czech-German border** help generate social capital, among others trust, creating *conditio sine qua non* dynamic development of local communities as direct consequence of European integration on both local and regional levels. Dynamism of cross-border linking is apparently limited by three factors: language, mentalities and economic disparity/asymmetry.

### **Challenge of globalisation on microlevel**

- Creating a stock of social capital on local level with circular relationship: Interaction/Participation— Trust — Access/influence — Social Capitals/Networks.
- Regional, structural and cohesion policy belongs to the primary competencies of the European Commission and the Member States of the EU as well.
- Cross-border co-operation leads to trust generation — the first stages of social capital mobilisation.

Regional cooperation and CBC efforts, as well as decentralization initiatives are equally affected by ongoing domestic, European and international trends. The domestic processes of nation building, **economic transformation and democratization are as much contextual factors as the European Union and globalization** (Kirchner 1998).

### **Difficulties in regional cooperation - Tensions within the European Union - Barriers of Cross-Border Cooperation.**

Although the EU started different activities to improve the communication with the citizens and to sharpen the EU's profile, still many citizens have the impression that cannot influence European policies and do not feel connected to their European representatives. New forms of participation on the European level have to be considered to overcome this problem.

By many votes [Ágh, 2006] the EU has reached its limits in many respects which generated EU identity crisis that appears in forms as follows:

1. Westernized Europe has reached its geographical limits with Eastern enlargement the rest of Europe is beyond the "limes";
2. solidarity has reached its limits due to "support fatigue" in the net contributor states;

3. policy integration has reached its limits and the first period of the Lisbon strategy has been a failure;
4. “elite Europe” has reached its limits as people no longer follow them;
5. the reform capacity of the big founding states, Germany and France, has reached its internal limits and the EU must wait patiently while they deal with their domestic problems.

An aim formulated in 2000 into Lisbon Strategy, to make the EU into “the most competitive and dynamic knowledge-based economy in the world” by 2010. Decisive in this respect is when and how member states will be able to find way out of contemporary problems with the Lisbon Strategy.

The European Union requires a reform its Treaties. That’s why on October 29, 2004 the Heads of State and Government signed “the Treaty establishing a Constitution for Europe” in Rome. Although the ratification process was supposed to have been completed by the end of 2006, the process is still under way. “No” response in referenda in France, the Netherlands and the Republic of Ireland has plunged the EU crisis. Its roots are not only in mechanism and institutional frame however mainly in **lack of democracy, growing gap between the integration elites/politicians and ordinary people. The European Constitutional treaty** is long, complicated and incomprehensible to average readers. This became painfully apparent in France where hardly anyone read 480 page document despite the fact that the Constitution was mailed directly to 42 million voters (Weidenfeld: 2007).<sup>1</sup>

The European Constitution marks the starting point for renewal debate about Europe, the start of re-thinking what are the roots and aims of European integration. There is a **danger for Europe**, in the transition from the US-dominated western world order to multipolar power constellation, with China and India as new world powers, **will be marginalized**. On the other side, the transformation also offers opportunities for Europe to become an influential global-governance actor in international politics.

The European Union has globally been ascribed the mostly positive role of an international negotiating or civil power, which stands for the development of a fair multilateralism. The EU contributed substantially to the largely peaceful transformation process in the former socialist countries. In this context the EU has made major political and financial investments in Europe’s stability and security.

---

<sup>1</sup> [Messner, 2007].

Despite of current stalemate situation within the reforming process the EU is both the most advanced and at the same time the most ambitious project of regional cooperation in the world and in principle an appropriate answer to the challenges to the globalization, which is increasingly giving rise to transnational sets of problems and necessitating cross-border governance [Messner, 2007].

### **Connection of foreign and domestic policy of the state**

If the thesis on the close **connection of foreign and domestic policy** of the state applies, then the Czech-German relationship is a model situation, moreover characterized especially on the Czech side by **the tendency to react emotionally** (especially towards some opinions and initiatives of organizations of ethnic German expellees). All of the continuities in the factors which influence foreign policy, historical memory is probably the least constant (Paterson 1996).

The modern **history of conflicts** between Czechs and Germans, as well as some of the periods of **productive cooperation** between the two countries, must be studied in the inter-related context of the Central European space, so that **historical memory** contributes to bringing the countries closer together and to improving the mutual understanding of two neighbouring nations, as the risk of recollection not coped with is that there remains the potential for the recurring evocation of former conflicts.

**Historical memory and distinct ethnic identity continue to play the role of risk factors in Czech-German relations** and the study of these phenomena warrants corresponding attention. It is ultimately difficult for the partner on the other side to understand and anticipate his neighbour's problems and the steps that could lead to solving them. Rarely does it occur that such problems are approached and dealt with in a complexly, in a broader, supra-national context. This fact must be viewed as a call to intensify the level of knowledge and understanding relating to the differences in the historical memory of the two neighbouring countries and to extend the degree to which each side is knowledgeable about the other, as deficits in this regard tend to encourage the development of *disparities* rather than similarities.

Clearly it is much easier to overcome gaps in factual knowledge (language skills, educational curricula and textbooks, etc.) than it is socio-psychological barriers of an emotional tenor (a sense of the "otherness" in one's neighbour) that are lodged in the

deeper layers of the attitudes and opinions of people. It is the deep roots behind these attitudes that historical memory relates to.

The end of the Cold War and the subsequent bipolar arrangement of Europe also predestined, to a certain extent, “the return of Central European history”, namely those recent trends or stages emanating from the post-war division of Germany, and the eviction (transfer of population) of groups of ethnic Germans. This necessitated drastic intervention in the strongly diverse and complex environment of the Continental Centre, whose ethnic composition had evolved over centuries. As a result of the rapid disintegration of the Allied coalition and the subsequent East-West conflict (the Cold War), these historical changes were either not reflected at all, or only partially, or in a strongly ideological form. Ultimate ask of the new era was contemporary reflection on the post-war migration of German-speaking inhabitants from the countries of Central European Countries, as part of the German Question. An understanding of the development after 1945 requires knowledge of the historical development, which ethnic Germans “created” outside Germany.

After the reunification of Germany in 1990, European policy was repeatedly confronted with the phenomenon of the “German Question”, which had dominated it throughout the 19th and 20th centuries. It was associated, among other things, with the fact that until the formation of the German “Reich” in 1871, Germans have never lived in one state. This question represents a problem in itself, but it also predetermines, in combination with a series of other factors of an external and internal character, the outburst of two world wars, which caused enormous suffering to all inhabitants of the European Continent and other parts of the world. Whether introduced in connection with security, integration or diversity, the German Question and its roots are always based on unresolved problems concerning the relationships between the nation and the territory.

### **East Central Europe And Falling of the Iron Curtain - Dreams came True? General situation within Central and Eastern Europe after the Fall of the Berlin Wall-Basic frame of the regional cooperation**

Yet the acknowledge prevails that central Europe exists there is no agreement about where it precisely ends and starts. While the coordinates of world politics are shifting away from Europe, central Europe remains politically important because it evokes

powerful memories of some of the major disasters of the twentieth century: Nazism, two world wars, and the holocaust. Furthermore, Central Europe was the staging area of the Cold War and the most likely flashpoint where that war might have turned out (Markowitz, Reich: 1997).

Falling down of the Iron curtain deeply reshaped the circumstances of Central Europe and expectations connected with the end of the Cold War in the area.

Every nation, including Czechs and Germans and most probably Japanese, is “condemned” by the past to perpetually re-affirm itself, to search for its own identity, and is continuously forced to confront the past in the changing conditions and circumstances of its existence [Hovel 1990; Havelka 2001; Křen 1992].

**Otherness is thus a part of identity every nation community.**

The modern history of conflicts between Czechs and Germans, as well as some of the periods of productive cooperation between the two countries, must be studied in the inter—related context of the Central European space, so that historical memory contributes to bringing the countries closer together and to improving the mutual understanding of two neighbouring nations, as the risk of recollection not coped with is that there remains the potential for the recurring evocation of former conflicts. This is where we see the social mission of our research.

When the Czech Republic became a member of the EU, Czech-German relations took on a new and different dimension. For the first time in history both countries are members of a single European community promoting democracy. Both countries are also members of the NATO.

**The relations between the two countries today are substantially affected by the process of Europeanization, which in the border regions involves processes of social integration and networking that is aimed in the long term at the formation of cross-border community.**

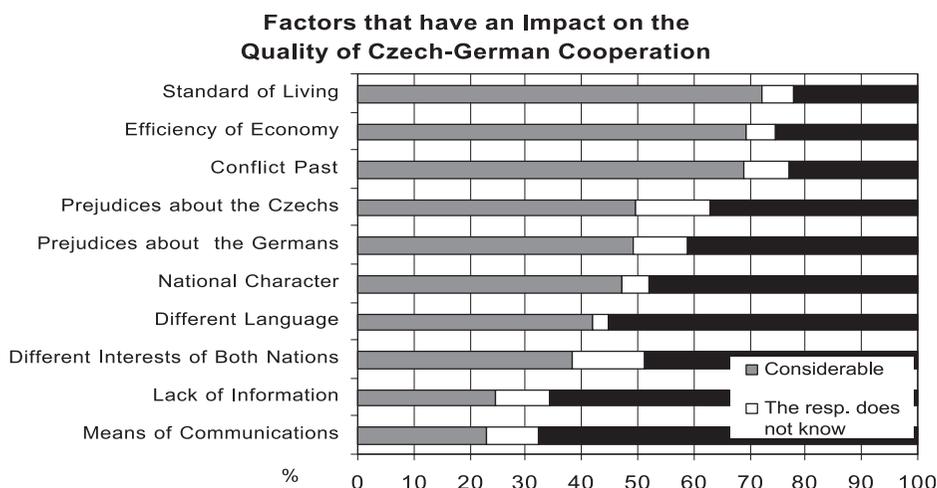
The processes of European integration, in which the Czech Republic itself is also a participant, are based on the assumption that many of the problems inherited from past — often very tragic — events, which affected relations between European states and the populations of Europe, can be overcome. The waning effects of these tragic events from the past century continue to have an impact, to a greater or lesser indirect extent, on the current state of Czech-German relations.

Basic political agreements exist between the Czech Republic and Germany, and there

is a shared declared interest in the development of cooperation, which includes support from Germany for ethnic Germans living in the Czech Republic. With the accession of the Czech Republic to the European Union relations between the two states eased significantly and are now cooperative in nature. But the factor of historical consciousness (the demise of an independent Czechoslovak Republic, the Nazi occupation, the transfer of the German-speaking population out of the country at the end of the war) remains a latent presence (primarily in the form of the so-called Sudeten Germans Issue) with influence beyond just the bilateral relations of these two countries. *The factors which influence foreign policy, historical memory is probably the least constant* (Paterson: 1996).

Before entering the EU the Czech-German relation were characterised by an enormous intensity of direct contacts. But typical of this relationship is an asymmetry between the intensity of practical cooperation and the achieved political and social proximity. On the axis between dependence on the one side and a **close partnership** (*Michigander*) on the other side, this relationship can be designated as that of a **cooperative neighbourhood** (*Nebeneinander*). Germany cannot be “walked over” either in the Central Europe or in the EU.

It is within multilateral organisations that Germany’s national power becomes more effective and can be legitimised easier. Multilateralism and European integration enlarges Germany’s elbow —room as a national state in international politics (Nijhus: 1998). Germany has become a team player by conviction: its population has internalized multilateralism, not for reasons of altruism but for the sake of efficient foreign and security policy in an interdependence world (Hyde-Price: 2000). Nevertheless continuation of the endless debate on the new German foreign policy comprehends debate on German cope with history/*Vergangenheitsbewältigung* and German national identity. That’s why, by my opinion, was opened so intensively after the Fall of Iron Curtain topic of historical memory within the bilateral relations of Germany with the Czech Republic and Poland.



Institute of Sociology, Academy of Sciences of the Czech Republic: own research 2003/2005.

### Historical Background

In the period before the First World War ethnic Germans (with the exception of Russia, where they always used to find themselves in the minority position), were in a dominant position not only in Germany, but also in the whole Austro-Hungarian Monarchy. This status was radically changed by the new international arrangement defined by the Versailles Treaty system (1919, signed also by the Empire of Japan), which brought about radical changes in Central Europe, namely in its political geography. Including the newly established Republic of Czechoslovakia, all new democracies relied on the support of the victorious powers of the Entente which guaranteed their existence and maneuvering space in their interest of restraining Germany and the USSR.

### Germans in the pre-war Czechoslovakia

The defeat of the Central Powers in World War I brought fundamental changes as the Austro-Hungarian Empire broke up, Germany was badly weakened and Russia suffered great losses. Several new state formations emerged in Central Europe, and each of them had numerous German speaking minorities that were deprived of their original status as members of the ruling nation. The largest of all were groups of ethnic Germans in Czechoslovakia (3.7 mil.) and Romania (nearly one million).

A series of decisions made immediately after the First World War solved some aspects of the German Question, but ignored and created some others, at the centre of

which were namely groups of ethnic Germans. Soon afterwards it was evident that revisionist politicians in Germany had found arguments that helped them get support, at first in the domestic environment, but later also on an international scale, including destruction of the Czechoslovak Republic in the autumn 1938.

### **The Czechoslovakia after the Munich Agreement 1938**

The German national minorities' agitation for their ever-increasing demands of belonging to Germany became the tools for the Nazi expansion into Central and Eastern Europe during the thirties of the 20<sup>th</sup> century. A. Hitler used the K. Henlein's Sudeten German Party, at that time representing the majority of all Germans in Czechoslovakia, to stir up national tension to boiling point and thus create a pretext for a German diplomatic and military intervention. After massive pressure from Western Powers<sup>2</sup> accepted President E. Benes at 30<sup>th</sup> September 1938 conditions of the Munich Agreement that started liquidation of the CSR.

The border territories (then Sudetenland) which Germany compelled the Czechoslovak Republic to surrender and to the cession of which was not concerned about re-adjusting the boundaries of the German nation state by seizing the Borderland/then Sudeten German territories, but about hegemony in Europe. Hitler intended to incorporate Czechoslovakia in the German sphere of influence as a military glacis, as an arms producer and reservoir of labour. In the Czech lands, the German occupation authorities followed the racist concept of the Germanization of the country. The Czechs were to be destroyed as an independent nation.<sup>3</sup> The same model of drastic ethnic conflict resolution was applied towards the Jews.

The situation in Central Europe only changed after the defeat of Germany in the Second World War. Germany lost extensive territories in the East of Central Europe and these losses were accompanied by the escape and forceful expulsion of German speaking population (so-called ethnic Germans).

### **Period of Expulsions**

---

<sup>2</sup> N. Chamberlain sent in Septemebr 30, 1938 instruction to his Amabassador B. Newton: "You should at once see President (E. Beneš) and on behalf of His Majesty's Government urge acceptance of plan that has been worked out today after prolonegd discussion (with A. Hitler) with a view of avoiding cinflict. You will appreciate that there is no time for argument it must be plain acceptance."

<sup>3</sup> Czech-German Joint Comission of Historians. 1996. A Conflictual Community, Catastrophe, Detente. An Outline the Portrayal of German-Czech History since 19<sup>th</sup> Century. Prague: Institute of International Relations.

The German Question was given a new dimension after the end of the Second World War by evicting a portion of big groups of ethnic Germans from Central and Eastern Europe, deported and later systematically displaced on the basis of the Potsdam Treaty of the August 4, 1945. Plans of transfers were originated in May 1940 by group of academics in Chatham House/The Royal Institute of International Studies (Foreign Research and Press Service, Foreign Office) independently of the “expulsion” concepts of the Czech and Polish exile governments. In the opinion of the group no stable post-war solution was achievable without the transfer of several millions of Germans. This plan was resolution of disappointment arising from the failure of the inter-war minority policies of the League of Nations which worked-out framework of the protection of minority groups, among other Germans in Czechoslovakia, one of the largest group both in relative and absolute terms.<sup>4</sup>

The Implementation of the Transfer of German speaking population was made by the Czechoslovak Army. The Czechoslovak authorities, after consultation with the Allied occupation authorities, endeavoured to ensure that the necessary conditions for carrying out the transfer were created. From pre-war 3,7 mil. of German speaking population about 2,8 mil were deported to both the US and the Soviet sectors of occupied Germany.

By 1950, nearly fourteen million ethnic Germans from Central and Eastern Europe had left their home, nearly two thirds had settled in the territory of the Federal Republic of Germany.<sup>5</sup> **Millions of people experienced the traumatising process of economic, social and political uprootedness**, irrespective of the scope of individual guilt, caused by their coming to the environment of Germany devastated by military operations and occupied by victorious powers.

In spite of prior fears of the Allied bodies, which administered the occupied zones of Germany, **evictees had become a factor of the economic growth** and significantly con-

---

<sup>4</sup> The Second World War brought the first great wave of violent migrations in the form of Nazi settlement plans leading up to consolidation of ethnic Germans in the so called “core territory”, including namely Western Poland, which was ethnically cleaned from all Polish inhabitants and inhabited by nearly a million ethnic Germans. Gradually, other plans to “strengthen German citizenship” started to be implemented in other occupied countries, including then the Protectorate Böhmen und Mähren (Czech lands). In 1941 ethnic Germans living in the territory of the Soviet Union were deported to Siberia and Central Asia and even after the war had ended, they were still denied the right to return to their country.

<sup>5</sup> The limited capability (not in economic however in socio-psychological sense) of German society to cope with expatriation in the post-war era and again after the re-unification of both parts of Germany has given use to the possibility of a selective explanation of history to some of the evictees and their descendants. They exclude nearly all that preceded these deportations from the selective explanation of history.

tributed to the subsequent “Economic Miracle” of West Germany, underway at that time.<sup>6</sup> This experience served as a catalyst or a **strongly motivating factor** for the systematic acquisition of a professional career (the willingness to work under a heavy workload) with a corresponding standard of living and social growth in particular.

The geopolitical reality of the ruling victorious powers facilitated the possibility “to cope with” the German question more easily, if for no other reason, than for its marginalisation within the fight for global ascendancy over and for the protection of the spheres of influence in the pending bipolar conflict between the East and the West.

### **Between the Past and the Future**

**After 1989 Czech-German relations were subjected to extensive debates on key events in their mutual relations in the period of modern history.**

The ongoing debate took place in both specialised, scholarly circles and at a society-wide level. Reflections on these relations resulted in some social catharsis, but also provided proof that there still exist two perspectives and interpretations of their shared history — Czech and German (and Sudeten German in some cases) [Hahnová 1999]. As the dialogue and cooperation proceed, opinions in Czech society have also become differentiated and polarised over the course of the dialogue with Germany and in relation to the organisations representing transferred ethnic Germans.

There remains therefore the question of whether “coping with history” really has the purported positive and purgative effect it is meant to have in the case of cooperation between the Germans and the Czechs? When historical topics in the Polish-German relationship were instrumentalised it took relatively little time for them to seriously damage that relationship. For the same to occur in Czech-German relations would be highly undesirable.

### **The Czech-German Declaration-liberation from the past?**

After 1989 latent historical *resentiments* showed a capacity for very rapid ethnic

---

<sup>6</sup> Their common fate in expulsion from the East in the period of the Cold War generated interest in “Landsmannschaft” organisations/Landsmannschaften, the existence of which was supported by the Evictees Federal Act /Bundesvertriebenengesetz of 1953, imposing, in section 6 of the Act, a duty on the federal government to preserve the German cultural heritage of refugees and evictees. In compliance with the Act, each town, even a small town in the Federal Republic of Germany, with a ratio of inhabitants from ethnic Germans, was expected to have its “patron twin” in the East.

mobilisation, not just of Czech society on the whole, but also of a considerable portion of its elites. If a mobilisation with dynamics similar to what occurred during the pre-election campaign in 2002 were to repeat in the future, it could be a serious threat not only to the quality of the bilateral relations between the Czech Republic and Germany but also to cooperation within the European Union. The conflict-marked past of Czech-German co-existence, symbolised in the countries' distinct cultures of recollection and historical memory, remains latently present in the attitudes and behaviour of people on both the German and the Czech sides today.

Every retrospective discussion about values in history is simultaneously an attempt to reach a moral self-understanding with respect to the past. Does an understanding of the historical context mean the legitimisation of past actions? Is it all possible to generalise conclusions? The questions remain (Pauer: 1998).

The Czech foreign policy had to solve the problem of strains that accompanied Czech-German relations after 1989 connected mainly with the evicted German speaking citizens of the former Czechoslovakia. Then President Václav Havel offered in 1995 in his speech "Czechs and Germans are on the road to being good neighbours" on 17 February 1995 possible key formulation of past Czech-German relations. Including clear limits on the repeated revisionist and restorative demands from the Sudeten German side.<sup>7</sup>

New space for political manoeuvring was created. There was also clear will to negotiate and accept a Czech-German Declaration that will remove the burden of history with the help of compromise. Some German media and politicians (R. von Weizsäcker, R. Herzog, A. Vollmer, G. Verheugen, D. Genscher etc.) took up this cause, whether from personal motivations or purely from pragmatic- instrumental reasons (Kunštát: 1998).

There were **different interests of both sides** what topics should be include in the prepared text.

From the point of view of the Federal Government : The Czechoslovak-German Treaty, German assistance for the Czech application for EU membership, economic co-operation, collaboration in the United Nations etc.

---

<sup>7</sup> There were also some next examples how to deal with history. For instance **the German-British Forum** settled down in 1995 partly as reaction to strains over German unification, the Gulf War, the single currency etc. Basic idea of Forum is: Germany and Britain the choice of becoming masters or victims of intensified international competition. Their chances of success will increase if they draw constructively on the wide economic, social and political networks between the two countries. The same guilts for Czech-German relation.<sup>7</sup>

From the Czech point of view, the most interesting and also most difficult passages were those which “analyse” the historical projections into the nature of current relations. As Havel’s speech the foreign minister of the FRG K. Kinkel cited the joint statement by Czech and German *bishops*. *They saw the reconciliation of the two nations as a primarily spiritual process* rather than a political one. However it was clear that political approach and decision are indispensable.

During discussions both in the FRG and Czechia, the main focus of interest was aimed on the historical section of the Declaration (articles 2 and 3), dealing with “**recognition of guilt**”. The German side, for the first time, officially recognised a casual connection between the events 1938/39 (destruction of Czechoslovakia) and 1945/46. This made it possible for the Czech side to undertake a relatively serious self-criticism on the question of expulsion and transfer of German speaking population. Nevertheless, the German negotiators did not succeed in obtaining a Czech recognition that the transfer of Czechoslovak Germans as such was illegal.

There were two reasons of this Czech attitude:

- 1) The post-war Czechoslovak and allied legislation stemming from the protocol of the Potsdam Conference (chapter XIII),
- 2) Public opinion of the Czech society towards the issue of transfer<sup>8</sup> nevertheless, the German negotiators did not succeed in obtaining a Czech recognition that the transfer of Czechoslovak Germans as such was illegal.

**When the Declaration after many delays was signed in Prague, there was relief on both sides.**

The uncomfortable past is slowly diminishing with help of the Czech-German Declaration of 1997 signed after the extensive and sometimes emotionally sharp debate accompanying its birth. Historical memory and distinct ethnic identity/otherness continue to play the role of risk factors in Czech-German relations and the study of these phenomena warrants corresponding attention.

It is ultimately difficult for the partner on the other side to understand and anticipate his neighbour’s problems and the steps that could lead to solving them. Even after-declaration period appeared that is much easier to overcome gaps in factual knowledge

---

<sup>8</sup> The Czech government had to reflect in her decision results of sociological polls made in the same time in the border areas (and similar results gained in the whole state polls) of the Czech Republic that appeared more or less  $\frac{3}{4}$  of respondents justified post-war transfer of the Sudeten Germans. This crucial attitude changed longitudinal very slightly as direct implication of the deeply rooted collective memory.

(language skills, educational curricula and textbooks, etc.) than its socio-psychological barriers of an emotional tenor.

It is obvious that the polarisation of opinions is dependent not only on topic of ethnic Germans, but also on the course of the system transformation of Czech society. The factor of economic inequality between the two systems is approximately twice as important in the minds of Czechs as is the weight of historical memory of the conflict between Czechs and Germans in modern times.

### **Expectation for Germany**

What is needed today, is a political culture adapted to the situation in which the Union is now operating. Where the old culture favored straight-line evolution, top-down harmonization, and a monopoly of policy ideas, the new political culture should support diversity and competition as organizing principles of the European polity (Majone 2007).

The gradual europeization of relations between Czechs and Germans involves civic and institutional cross-border cooperation. The effects of a divided Europe during the Cold War continue to make themselves evident to date in poorly developed contacts and ties between citizens on both sides of the Czech-German border in comparison with contacts within the Western Europe.

There are three factors, viewed from the sociological perspective, characterizing the attitude of Czech citizens when assessing the role of Germany expressing parallelly the awaitings towards neighbour country:

- Factor one—a forthcoming attitude of active cooperation
- Factor two—a rejecting attitude and vigilance
- Factor three—recognition of the importance of Germany and partial rejection of fatalism

The absolutely prevailing opinion of the local elites, in connection with the possibility of the further development of Czech—German cross-border cooperation, is that a greater amount of cooperation between entities on the Czech side of the border is necessary and desirable, i. e. between Czech municipalities, local entrepreneurs and non-profit organizations. Nearly one half of the respondents consider the cooperation between local partners to be highly desirable for the results of cross-border cooperation and a further 50 % of all respondents admit that it would be useful.

**Particularly the first of the findings is valuable: the expectations of higher benefits from this kind of cooperation on the Czech side, in cross-border communities. We consider this question to be one of the principal prerequisites for the further dynamic development of “cross-border policy” at the local level.**

On the whole, it is possible to claim that the Czech Republic's entry into the EU and its consequences for the further development of the border regions has met with predominantly positive appraisal and optimism on the part of the local elites. This optimism is necessary to correct the data taken from other research activities, which maintained that initiatives in establishing cross-border contacts were most frequently taken by the German party. Whether the reasons for the Czech passivity include a lack of acquaintance with the EU mechanisms, or a lack of financial funds, or language incompetence, it is desirable to bring to bear more assertively the needs and interests of Czech entities. This ascertainment of more-dimensional asymmetry will, only become valid at the time when however, become valid until the social capital and economic parameters have become equal on the Czech and German side of the border.

#### **Final remarks**

As time passes, even most painful chapters if „the common Czech-German“ cease to be part of real-life history, and gradually change into subject of research, open to a reflective analysis. Results of sociological polls of collective memory as well historiography dealing with „issues of guilty“ confirmed that any „break through“ from *circulus vitiosus* has its limits and is possible only by politicians. Unfortunately, they are often short of necessary courage.

Nevertheless still we should repeat next words: After the disastrous experiences of two World Wars, it seems almost miraculous that the states of the European Union now live in peace, freedom and prosperity.“ First of all, thanks to the process of European integration. Maybe this recognition contains main message to the Regional Studies Association for the Northeast Asia and in broader sense to the people of Japan.

### **Literature:**

- ALTER, P. 2000. *The German Question and Europe-A History*. London: Arnold, New York: Oxford University Press.
- BENEŠ, Z., KURAL, V. (eds.) 2002. *Facing History*. Prague: Gallery.

- BRUBAKER, R. „National Minorities, Nationalizing States and External National Homelands in the New Europe.“ *Daedalus* No.2, Vol. 124 (1995), 107-132.
- BROWN, MacAlister. 1959. „Fifth Column in Eastern Europe.“ *Journal of Central European Affairs* XIX, July 1959.
- BECKER, J.-KNIPPING, F. 1986. *Power in Europe?* Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- BULMER, S.-JEFFERY, Ch.-PATERSON, W. E. 2000. *Germany's European Diplomacy.* Manchester/New York: Manchester University Press.
- Czech-German Joint Commission of Historians. 1996. *A Conflictual Community, Catastrophe, Detente. An Outline the Portrayal of German-Czech History since 19th Century.* Prague: Institute of International Relations.
- German-British Forum. *Forging links for European success.* Berlin and London Conferences. 23 July and 13 October 1998.
- EVANS, R. J. 1997. *Rereading German History 1800-1996* (From Unification to Reunification). London / New York: Routledge.
- CHASZAR, E. 1981. „The Problem of National Minorities before and after the Paris Treaties of 1947.“ *Nationality Papers*, Vol. IX, No. 2
- HANDL, V. (ed). 1998. „Coming to Terms with the Past, opening up to the Future.“ *Discussion Paper in German Studies.* University of Birmingham: Institute for German Studies.
- HOUŽVIČKA, V. 1997. „Euroregions as Factors of Social Change within the Czech-German Borderland,“ in MUSIL, J., STRUBELT, W. (Hrsg.) *Räumliche Auswirkungen des Transformationsprozesses in Deutschland und bei den östlichen Nachbarn.* Opladen: Leske+Budrich.
- HOUŽVIČKA, V. 2001. „Wie Tschechen die Deutschen wahrnehmen,“ in ROTH, K. (Hrsg.) *Nachbarschaft* (Interkulturelle Beziehungen zwischen Deutschen, Polen und Tschechen). Münster/New York/München/Berlin: Waxmann, 79-97.
- HOUŽVIČKA, Václav. „Mitteleuropa- between Europe and Germany.“ *Czech Sociological Review* VI (2, 1998), 261-264.
- HOUŽVIČKA, V. „Germany as a Factor of Differentiation in Czech Society.“ *Czech Sociological Review*, VI, (2, 1998), 219-239.
- HOUŽVIČKA, V.-GRIX, J. 2006. „Cross-border cooperation in the theory and practice, the case of Czech-German borderland.“ *Acta Universitatis Carolinae* 1 (XXXVII). 61-77.
- HOUŽVIČKA, V. 2005. *Návraty sudetské otázky* [Returns of the Sudeten Issue]. Praha:

Karolinum 546 pp.

HOUŽVIČKA, V. 2002. „Has the reunification of Germany changed the perception of its history?“ *Perspectives — The Central European Review of International Affairs* No. 19 (Winter): 88-96.

HOUŽVIČKA, V. 2002. „Suverenita, hranice, integrace — konflikt zájmů?“ in Mansfeldová, Z.-Tuček,

M. (eds.) *Současná česká společnost*. Praha: Sociologický ústav AV ČR. 307-321.

HOUŽVIČKA. 2001. „Wie Tschechen die Deutsche wahrnehmen,“ in Roth, K. (ed.) *Nachbarschaft-Interkulturelle Beziehungen zwischen Deutschen, Polen und Tschechen*. Münster/New York/München/Berlin: Waxmann. 79-98.

HOUŽVIČKA, V. <http://www.borderland.cz/> bulletin *Czech-German Connections* 2003-2005. Various articles.

HOUŽVIČKA, V. 2003. Czechs toward Germans. *Problems and chances of the east enlargement of the EU*. Srubar, I. (ed.) Publication: Hamburg : Krämer.

HYDE-PRICE, A. 2000. *Germany and European order (enlarging NATO and the EU)*. Manchester/New York: Manchester University Press.

KRZEMINSKI, A. „Zwischen Renationalisierung und Europäisierung-Ein polnisches Blick auf Deutschland.“ *Internationale Politik und Gesellschaft* 1/2004. 11-26.

KNIPPENBERG, H.-MARKUSSE, J. (eds.) 2000. *Nationalising and Denationalising European Border Regions, 1800-2000*. Dordrecht/Boston/London: Kluwer Academic Publishers.

KIRCHNER, J. E. 1998. „Transnational Border Cooperation between Germany and the Czech Republic: Implications for Decentralization and European Integration.“ *EUI Working Paper* RSC No. 98/50. Badia Fiesolana.

KATZENSTEIN, P. (ed.) 1997. *Mitteleuropa between Europe and Germany*. Providence/Oxford: Berghahan Books.

KANSTEINER, Wulf. „Mandarins in the Public Sphere“ (Vergangenheitsbewältigung and the Paradigm of Social History in the Federal Republic of Germany). *German Politics and Society* No.3, Vol. 17, Fall 1999.

KUNŠTÁT, M. 1998. Czech-German Relations after the Fall of the Iron Curtain. *Czech Sociological Review*, VI, (2, 1998), 149-172.

LAMBOOY, G., J. 1997. „Geopolitics and Spatial Economics Networks.“ *Unpublished Paper*. Seminář: Central European Identity. Polish UNESCO Committee. Mandralin 8-11 May, 1997.

- MESSNER, D. 2007. „The European Union: Protagonist in a multilateral World Order or Peripheral Power in the 'India-Pacific' century? *International Politics and Society*. 1/2007. 12.
- MARKOVITS, Andrei S.-REICH, Simon. 1998. *Das deutsche Dilemma*. Berlin: Alexander Fest Verlag.
- Musil, J.-Suda, Z. 1998. Czech-German Relations. A Sociological View. *Czech Sociological Review*, VI, (2, 1998), 135-148.
- NIJKAMP, P. „Preface.“ 1993. In: Ratti,R., Reichman,S. (eds). *Theory and Practice of Transborder Cooperation*. Helbing & Lichtenhahn, Basel.
- LANKOWSKI, Carl (ed.) 1999. *Germany's Difficult Passage to Modernity*. New York/Oxford: Berghahn Books.
- PAUER, J. 1998. Moral Political Disent in German-Czech Relations. *Czech Sociological Review*, VI, (2, 1998), 173-186.
- PEDERSEN, T. 1998. *Germany, France and the Integration of Europe* (a realist interpretation). London/New York: Pinter.
- ROCK, D.-WOLFF, S. 2002. *Coming home to Germany*. New York/Oxford: Berghahn Books.
- STÜRMER, M. 2002. *The German Empire*. New York: The Modern Library (RandomHouse).
- STRMISKA, Z. „Výsledky nezávislého průzkumu současného smýšlení v Československu.“ *Svědectví/ Témoignage*. 78/1986 (XX), 265-334.
- WOLFF, S. 2000. *German Minorities in Europe*. New York/Oxford: Berghahn Books.
- SMITH, A. D. 1995. *Nations and Nationalism in a Global Era*. Cambridge: Polity Press/Blackwell Publishers.
- SCHECHTMANN, J. B. 1971. *European Population Transfers 1939-1945*. New York: Russell.
- SETON-WATSON, H. 1982. *Eastern Europe between the Wars 1918-1941*. London: Westview Press/Boulder.
- VLIELAND, M. 47. *Deutsch-Englisches Gespräch Forum* (proceedings), Königswinter Conference in Berlin, March 13-15, 1997.
- Preparing for EU Enlargement*. Devolution in the first wave candidate countries. 1999. Committee of the Regions, Brussels.
- Weidenfeld, W. 2007. *Understanding the European Constitution*. Gütersloh: Verlag Bertelsmann Stiftung.

---

<sup>i</sup>.See, for example, the work of G. Marks in: Jeffery, C (ed.) (1997) *The Regional Dimension of the European Union. Towards a Third Level in Europe?*, London: Frank Cass.

<sup>ii</sup> Scholte, *ibid.* p. 47.

平成19年度研究・教育活動報告

人間文化学科

人間文化学講座(人間学系)

阿子島 功

(1) 研究成果

- ・阿子島 功(2007.8) ナスカ台地の地形分類図と地上絵研究。山形大学大学院社会文化システム研究科紀要4, pp.107-138
- ・Shoji Inoue, Tomoki Sakamoto, Mitsuhiro Hayashida, Noriyuki Kobayashi, Isao Akojima, Tsugio Ezaki, Minoru Okada and Yuhki Nakashima (2007. 12) Tsunami Disaster in Solomon Islands in April, 2007----Field survey on the damage reduction effect of coastal forest. 海岸林学会誌7-1, pp.1-6
- ・Mitsuhiro Hayashida, Huminori Satoh, Atsushi Yanagihara, Isao Akojima, Yuhki Nakashima (2007.12) Types of Coastal Forests in Southern Sri Lanka and their Characteristics. 海岸林学会誌7-1, pp.37-42
- ・阿子島 功(2008.1) 地変と供養塔——災害考古学の視点から。『森と山と日本人——自然と人間の共生』山形大学教養セミナー・シリーズ講義録(編著 仙道富士郎) NTT出版, pp.133-154
- ・阿子島 功(2008.3) 山西・内蒙古地域の自然地理学的環境。『漢代北方境界領域における地域動態の研究(平成17~19年度科学研究費 基盤研究(C) 17520528 代表者 上野祥史) 報告書』, pp.3-18, 図版1-2
- ・阿子島 功(2008.3) 山形市馬見ヶ崎川扇状地外縁部の梅ノ木1遺跡でみられた噴砂現象。山形応用地質, 28, pp.65-68  
〔口頭発表〕
- ・阿子島 功(2007.10) 半乾燥・乾燥地域で移動砂丘の発現する地点の地形的特徴——モンゴル, 中国西部, ペルー海岸の数例より——。東北地理学会2007年秋季大会, (季刊地理学60-1, pp.58)
- ・阿子島 功・坂井正人・渡邊洋一(2008.3) ペルー, ナスカ台地の2007.2.17洪水による地形変化——ALOS画像による——。日本地理学会予稿集, 73, pp.236

(2) 教育, 地域連携等の活動

〔授業〕

環境地理学(1), 地圏環境論, 環境地理学演習, 環境地理学調査実習, 地理学基礎, 共生人間学(1), 地図を読む(教養教育 地理学), 大地の科学(教養教育 地球科学), 環境地理学特論I, II, 同特別演習(修士課程), 学部長(~2008.3)

〔地域との連携活動〕

(財)山形県埋蔵文化財センター(外部)理事, (財)山形県建設技術センター(外部)理事, 山形県環境審議会委員(環境保全部会部会長, 温泉部会委員), 山形市環境審議会(委員長), 山辺町洪水ハザードマップ検討委員会(委員長), 宮城県栗原市国指定史跡山王圀遺跡保存検討委員会, 東根市小見川イバラムチオ検討委員会(小見川塾 塾長03.11~08.3), 国土交通省土地・水資源局(国土調査課)土地状況変遷基礎調査に関する検討委員会(委員長), 新庄泉田道路計画検討委員会(委員長), 山形県景観検討委員会委員,

〔講演など〕

酒田市里仁館（5-7）教養講座（国際）世界の風土とくらし，最上地区教職員退職互助会（6）新庄地区の防災，山形市小百川地区自主防災組織（6）山形市の防災，村山地区小中学校教育研究会社会科見学会（7）ジャガラムガラ地すべり・ほか，山形河川国道事務所ほか（8）羽越水害 40 周年記念シンポジウム（コーディネイター），文翔館ボランティア・ガイド研修会（9）馬見ヶ崎川扇状地と山形城下町，文翔館・山形大博物館（12）五百澤智也山岳スケッチ展記念シンポジウム「山地の地形景観を読む」

〔受託研究〕 平成 18・19 年度土地分類基本調査 1:50,000 地形分類「飯豊山・大日岳」図幅調査，山形県

〔学会活動〕 東北地理学会評議員 平成 19 年 5 月——東北地理学会会長

## 横山 敏

### (1) 研究成果

- ・編著『生活記録にとりくんだ山村の実証的研究—米沢市南原地区綱木の事例—』(2007(平成 19)年度社会調査実習報告書)，2008 年 3 月
- ・「現地報告」の提起する諸問題を、「家」と「村」から考える(『現場から見た「戦後農政の大転換」農業法研究 43，農文協)，2008 年 3 月

### (2) 教育，地域連携等の活動

- ・授業(担当授業名)

社会学基礎，社会学概論，社会学演習，現代社会学演習，社会調査実習，市民社会と大衆社会の再編(教養教育)，家族と地域社会(教養教育)，地域社会計画特論

(大学院)

- ・地域連携

山形県農業会議評価委員

山形県社会福祉協議会社会福祉人材センター運営委員会委員長

財団法人情報社会学研究所理事

### (3) 平成 19 年度の研究・教育活動に関するコメント

- ・1950 年代に山形県全域で取り組まれた，農山村青年の生活記録運動の研究と調査に着手し，併せて同テーマで社会調査実習を行なった。以後この研究を継続し，この対象に関する日本で最初の，まとまった成果を挙げることを期したい。
- ・日本農業法学会 2007 年度年次大会を山形市において開催し，その企画・運営に当たった。農業者による山形県等の現場の報告を行い，活発な討論を行なうなど，少なくない成果を収めることに寄与した。

## 上田 弘毅

### (1) 研究成果

- ・「王竜溪に於ける公と理」(『明代中国の歴史的位相』・汲古書院・2007 年 6 月)

## 渡邊 洋一

### (1) 研究成果

〔論文〕

- ・渡邊洋一「3. ナスカ台地の空間認知」、『特集 ナスカの地上絵に関する学際的研究 (1)』，山形大学大学院社会文化システム研究科紀要，第 4 号，151-163，2007 年，8 月。

〔学会シンポジウム〕

- ・渡邊洋一「ナスカの地上絵—山形大学の学際的研究—」，東北心理学会第 61 回大会，シンポジウ

ム『越境する心理学』における話題提供, 2007年9月6日, 岩手大学。

- ・山形大学インフォメーション・センターにおいて『ナスカ展』を開催, 平成19年4月2日～5月31日。

(2) 教育, 地域貢献等の活動

〔担当授業〕

実験心理学入門(教養教育科目), 心理学基礎, 心理学概論, 心理行動論演習, 心理学実験, 心理学特殊実験, 行動科学情報処理実習(以上専門教育科目), 実験心理学特論, 実験心理学特別演習(以上, 大学院授業科目), コミュニケーション論(医学部看護科オムニバス講義)。

〔卒論指導等〕

4年生7名の卒業論文のための研究を指導。

〔学外活動〕

山形地方社会保険医療協議会委員, 仙台国税局外カウンセラー(平成2年4月～平成20年3月), 自動車事故対策機構適性診断専門員・運行管理者等一般講習会講師, 日本自動車連盟(JAF)山形支部交通安全実行委員会委員, NHK庄内文化センター講師, 出前講義(郡山高校, 会津学鳳高校), 山形大学工学部技術職員研修会講師。

(3) コメント

人文学部のプロジェクト研究支援を受けて, 平成19年12月にナスカの現地調査を実施できた。ペルー文化庁の許可を得て, 2006年4月に公表した新発見の地上絵付近まで立ち入り調査できたことは, 今後の研究展開にとって非常に意義のある成果だった。ご支援に感謝する。

## 小熊 正久

(1) 研究成果

〔論文〕

- ・「フッサールとフルッサー—画像とテクノ画像—」, 『東北哲学会年報』第23巻, 2007年5月。
- ・「知覚における同一性と差異—フッサール『物と空間 講義 1907』を手がかりとして—」, 山形大学人文学部研究年報第5号, 2008年2月。

(2) 教育, 地域連携等の活動

〔授業〕

「ギリシア哲学の世界観」(教養教育), 「認識について」(教養教育), 「ギリシア語」(前・後期), 「共生人間学(一)」, 「哲学基礎」, 「西洋哲学史」, 「哲学演習二」(前・後期), 「西洋哲学講読」

〔卒論指導〕: 題目(略記)

- ・「アリストテレス『魂について』から視覚・色・光について」, 「ニーチェとキリスト教」, 「サルトルにおける対自存在と対他存在」, 「レヴィナス『全体性と無限』における他者について」, 「ミシェル・フーコー—刑罰の歴史における人間と制度の関係」。

〔地域連携〕

出張講義(山形南高校2007年9月)

(3) 平成19年度の研究・教育活動に関するコメント

- ・論文(i)については, さらにコミュニケーションおよびメディアの問題として展開する必要がある。(ii)では, 「現象学的還元」を構想した頃のフッサールの講義を題材とした。主題は知覚の問題であるが, 現象学的観点からの空間論やキネステーズ論と関連する。以前の空間論との関連を考察する必要がある。
- ・卒論題目は多彩で, それぞれ力が入った取り組みが行われた。

## 富田 かおる

### (1) 研究成果

〔論文〕

- “Effects of word familiarity in contexts on speaker's vowel articulation,” Bulletin of Yamagata University (Humanities) 16:3, 55-67. 2008. 2
- “Town sketch podcasting project: the Northern Ireland podcasts,” (Joint paper) Faculty of Literature & Social Sciences, Yamagata University Annual Research Report, Vol 4, 21-31, 2008. 2

### (2) 教育, 地域連携等の活動

〔教育〕

英語学特殊講義, 英語学演習, 英語 (R), 英語 (C) 担当

### (3) 平成 19 年度の研究教育活動に関するコメント

英語母音に関する音声分析研究と音声と字幕の提示方法の調査研究を行った。

## 磯野 暢祐

### (2) 教育, 地域貢献等の活動

- 教養教育として, フランス語 I (前期) を週 4 コマ, フランス語 II (後期) を週 4 コマ計 8 コマ担当。
- 専門教育として, 言語学特殊講義 (前期・音声学), 言語学特殊講義 (後期・ロマンス語学), フランス語学演習 (中級), フランス文化購読, 欧米文化演習 (トワイライト講義) を担当。
- 大学院では, 現代外国語フランス語を担当。

## 永野 由紀子

### (1) 研究成果

- 共著: 『グローバル・ツーリズムの変容と地域コミュニティの変容』(吉原直樹編) お茶の水書房, 担当部分: 第 7 章「交錯するエスニシティと伝統的生活様式の解体」131~175 頁, 2008 年 (平成 20 年) 2 月, 御茶の水書房
- 書評: 森本一彦著『先祖祭祀と家の確立』ミネルヴァ書房『家族社会学研究』第 19 巻第 1 号, 76~77 頁 2007 年 4 月 (平成 19 年 4 月)

### (2) 教育, 地域貢献等の活動

〔担当授業科目〕

社会を見る眼 (教養教育), 共生人間学 (二), 社会学基礎, 現代社会学, 社会調査論演習, 社会学演習, 現代社会学演習

〔卒業論文〕

「町内会における高齢者支援」, 「定年後の農村移住」, 「女性の就労と家事について」の卒業論文を指導した。

〔地域貢献〕

- 公開講座委員として「理想の家族はどこにあるのか?」を企画すると同時に, 「変貌する日本型近代家族と女性—理想の家族としての磯野家」というタイトルで報告した。
- 「社会学基礎」をトワイライト開放講座として開放し, 家族社会学入門を担当した。
- 山形県障がい者施策推進協議会委員

### (3) 平成 19 年度の研究・教育活動についてのコメント

教育面では, 連絡責任者として社会調査士認定機構と連絡を取り, 3 年生には社会調査士 (取得見込み) の資格, 卒業生には社会調査士の資格の取得を仲介した。

研究面では, 平成 19 年度~平成 21 年度 科研費, 基盤研究 (C) 「イエ存続戦略と地域ネットワー

クの展開に関する経験的研究」の代表者として、日本の農村や農村家族の比較研究を行った。また、「村落研究を語る会」の第2回～第4回までの研究例会を、呼びかけ人の一人として企画・運営した。

## 清塚 邦彦

### (1) 研究成果

〔著書(翻訳)〕

- ・D・デイヴィドソン『主観的, 間主観的, 客観的』(春秋社, 2007年4月)。篠原成彦(信州大学), 柏端達也(千葉大学)との共訳。収録されている14編の論文のうち, 7編の論文(ならびに「序論」)の翻訳を担当。

〔論文〕

- ・「写真のリアリティと演技的な態度」『視覚表象における「リアル」の研究:平成16年度～平成18年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書(研究代表者:阿部宏慈)』(2008年01月), 7-19頁。
- ・「写真とメディア:K・L・ウォルトンの写真論を手がかりに」『東北哲学会年報』第23号(2007年05月), 81-92頁。
- ・「外部主義と還元元主義:デイヴィドソン解説」, D・デイヴィドソン『主観的, 間主観的, 客観的』(春秋社, 2007年4月)に所収, 340-369頁。

〔学会発表〕

「写真のリアリティと演技的な態度」, 日本記号学会第27回大会(2007年05月, 山形県立米沢女子短期大学)。

〔その他の研究活動〕

日本科学哲学会 『科学哲学』第40巻編集委員

日本哲学会 『哲学』第59号査読委員

### (2) 教育, 地域連携等の活動

〔担当授業〕

- ・教養教育:「哲学ってどんなこと?(哲学)」(前・後期)
- ・専門教育:「哲学基礎」(前期), 「人間情報科学基礎」(後期), 「共生人間学(二)」(後期), 「論理学概論」(前期), 「情報記号論」(後期), 「情報記号論演習」(前・後期)
- ・大学院:「論理学特論」(前期), 「論理学特別演習」(後期)
- ・非常勤:「哲学思想各論」(東北大学文学部・後期), 「哲学特論」(東北大学文学研究科・後期)

〔卒論指導〕

人間情報科学コースの卒論指導10件。哲学コースの卒論指導1件。

〔出張講義〕

2007年5月28日, 南陽高校, 「機械は心を持ちうるか?」。

## 渡辺 文生

### (1) 研究成果

〔学会, 研究会などの口頭発表〕

- ・“Syntactic and semantic relations created by clausal self-repetition in Japanese animation narratives.” 10th International Pragmatics Conference, University of Göteborg, Sweden, 2007.7.10. (*Conference Handbook*. 242.)
- ・「個人プロジェクトワークにおける学習者の気づきを促すためのフィードバックの試み —教室外の言語活動環境を構築するために—」第29回日本語教育方法研究会, 京都教育大学, 2007.9.22. (後藤典子・澤恩嬉・山上龍子と共同発表, 『日本語教育方法研究会誌』14, 2, 30-31.)
- ・「語りの会話で節のくりかえしが起きた出来事は作文でどう書かれるのか」日本語文法学会第8

回大会, 筑波大学, 2007.10.28. (『日本語文法学会第 8 回大会発表予稿集』57-63.)

- ・「中国語母語話者による日本語作文の分析」山形大学人文学部・ハルビン工業大学外国語学院共催 日本語教育に関する国際シンポジウム 「中国語母語話者による日本語の文章をめぐる」, 山形大学, 2008.2.19.
- ・「語りの談話・文章における評価表現の使われ方について」6th International Conference on Practical Linguistics of Japanese, College of Humanities, San Francisco State University, USA, 2008. 3. 1. (*Conference Handbook*. 33-34.)

[出版物]

- ・『日本語母語話者と非母語話者の語りの談話における「話段」についての研究』平成 16～18 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (課題番号: 16520311) 研究成果報告書
- ・「ブログの言葉遣い」『日本語学』26, 4, 26-33. 明治書院
- ・『学際的アプローチによる大学生の講義理解能力育成のためのカリキュラム開発』平成 16～18 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (課題番号: 16520319) 研究成果報告書 (西條美紀ほかとの共著)
- ・「日本語の談話におけるくりかえしとジェスチャーについて」南雅彦 (編)『言語学と日本語教育 V』231-243. くろしお出版
- ・『「依頼の電話」の開始部における初級日本語学習者の談話管理』『山形短期大学教育研究』7, 13-25. (澤恩嬉・後藤典子・山上龍子との共著)

(2) 教育, 地域貢献等の活動

- ・担当授業は, 言語学概論 (二)・日本語学概論 (二)・日本語学特殊講義・日英対照言語学演習・日本語学講読・日本語 (二)・異文化間コミュニケーション演習《以上学部専門科目》・日本語意味論特論・日本語意味論特演・特別研究《以上大学院科目》・教養教育科目 (言語学)・教養教育科目 (日本語)《以上教養教育科目》。

学生の指導については, 日本語学コース 1 名の卒業論文, および大学院文化システム専攻 1 名の修士論文を担当した。

(3) 当該年度の研究, 教育活動に関するコメント

研究活動に関しては, 研究代表者として科学研究費が交付され (平成 19～21 年基盤研究 (C) 課題番号: 19520439 「ストーリーを語る談話・文章における日本語らしさについての研究」), そのプロジェクトに関わるデータ収集や研究発表を中心に行った。

また, 山形短期大学の澤恩嬉講師を研究代表者とする科学研究費プロジェクト (平成 19～21 年度基盤研究 (C) 課題番号: 19520470 「日本語初級学習者の教室外活動を支援するためのカリキュラム開発」) に研究分担者として参加し, データ収集や分析を行った。

人文学部から国際共同研究プロジェクトとして, ハルビン工業大学外国語学院と「中国語母語話者による日本語の文章についての研究」を行い, 2008 年 2 月 19 日にはハルビンからの講師も迎えて国際シンポジウムを開催した。

山形大学小嶋国際交流基金と人文学部の海外渡航補助を得て, 2007 年 7 月にスウェーデンで開かれた国際語用論会議で研究発表を行った。

教育活動に関しては, 異文化間コミュニケーション演習で, 2007 年 9 月 3 日から 14 日までの 12 日間にわたり 12 名の学生を引率してハルビン工業大学で研修・交流を行った。また, 2008 年 3 月 27 日にミネソタ大学言語学科の LING 5462: Field Research on Spoken Language という授業において “Comparative analysis of narrative strategies” というタイトルの講義を行った。

## 池田 光則

### (2) 教育, 地域貢献等の活動

[担当授業]

- ・学部専門教育科目: 言語学概論(一), 言語学演習, 言語学基礎, ラテン語初級
- ・教養教育科目: 言語学概論(言語学), 言語学とその周辺領域(言語学), 英語
- ・大学院: 言語学特論, 言語学特別演習

[卒業論文指導テーマ]

- ・J-POPの歌詞に見られる男性語・女性語の変遷

[その他]

平成19年度教養教育ベストティーチャー賞受賞

## 鈴木 亨

### (1) 研究成果

[論文]

- ・「結果構文の有界性を再考する」, 小野尚之(編)『結果構文研究の新視点』, 103-141, ひつじ書房.
- ・「結果構文の半生産性と創造性のありか」, 金子義明他(編)『言語研究の在り形式と意味のインターフェース』, 387-396, 開拓社.

[口頭発表]

- ・「Spurious Resultatives Revisited」, 日本英文学会第79回大会シンポジウム「Issues in the Typology of Resultatives: Ten Years After」(於慶應義塾大学, 2007年5月)における口頭発表.

### (2) 教育, 地域連携等の活動

- ・担当授業: 英語C, 英語R, 英語学演習, 英作文, 共生人間学(二), 英語語法論特論, 英語語法論特別演習, 卒論指導

### (3) 平成19年度の研究・教育活動に関するコメント

研究面では, これまでの結果構文研究の成果を, 1つの学会シンポジウムと2つの研究論文集に発表することができた。最近の関心は, 結果構文の有界性制約から, 構文の生産性と創造性のメカニズムにシフトしつつある。

教育面では, 専門の英作文の授業で, 課題作文を毎回メールで提出させ, 添削する指導を行った。教養教育の英語では, 担当したすべての授業で, テキストの内容を毎回復習させる小テストを作成・実施した。

## 富澤 直人

### (1) 研究成果

- ・「主部内在関係節と知覚動詞補部節の統語分析」, 金子義明他(編)『言語研究の現在一形式と意味のインターフェース』440-449. 開拓社: 東京. (2008/3/17)

### (2) 教育, 地域連携等の活動

前期 英語(C), 英語(R), 英語学概論, 英語学特論, 特別研究

後期 英語(R), 英語(C/R), 英語の教材研究A, 英語学特別演習, 特別研究

### (3) 平成19年度の研究・教育活動に関するコメント

なし

## 山田 浩久

### (1) 研究成果

#### 〔著作〕

- ・『草木塔』, 山形大学出版会, 2007 年 8 月, 「地理情報システムを用いた草木塔分布図の作成」, 175-185.
- ・『図説 世界の地域問題』, ナカニシヤ出版, 2007 年 10 月, 「山形市における郊外の商業開発」, 156-157, 「山形県酒田市飛島における高齢化」, 158-159.
- ・『離島研究Ⅲ』, 海青社, 2007 年 12 月, 「新潟県粟島における生活行動」 181-196.

#### 〔論文〕

- ・「集約型都市構造と広域地方計画との関連」, 山形大学人文学部研究年報, 5, 45-58.
- ・「東京大都市圏中心部におけるマンション立地と地価変動との関係」, 山形大学歴史・地理・人類学論集, 9, 1-12.

#### 〔報告書〕

- ・「都市構想の集約化と地域の広域化」, 山形県広域調整会議報告書.

#### 〔口頭発表〕

- ・「新潟県粟島における観光産業の実態」, 2007 年 5 月, 東北地理学会.
- ・「東京都心近接部におけるマンション立地と地価変動との関係」, 2007 年 6 月, 山形大学歴史・地理・人類学研究会.
- ・「居住地選択の二分化が地価変動現象に与える影響」, 2007 年 7 月, 人文地理学会.
- ・「新潟県粟島におけるグリーンツーリズムの導入過程」, 2007 年 10 月, 日本地理学会.

### (2) 教育

#### 教養教育：都市論（地理学）

学部教育：地理学基礎, 人文地理学概論, 地誌学, 環境地理学演習, 地域構造論演習, 都市地理学調査実習

大学院：経済地理学特論, 経済地理学特別演習

#### 卒論指導

- ・「交通網の変化と集落の盛衰」
- ・「新種小麦『ゆきちから』導入による地域活性化の方向性」
- ・「城下町を起源としない都市の空間構造とその形成過程」

### (3) 地域連携

- ・山形県総合政策審議会特別委員
- ・山形県広域調整会議委員
- ・「官学金」連携事業上市市コーディネータ

### (4) 平成 19 年度の研究・教育活動に関するコメント

従来から継続している地価変動研究に加え, 地域活性化を目的とする連携事業に関与できるような研究結果を公表することができた。その成果は, 卒論指導やバーチャル研究所「GIS 利活用研究所」での活動に反映された。研究, 教育, 地域貢献をシステムチックに考えられるようになった 1 年間であった。

## 本多 薫

### (1) 研究成果

#### 〔著書〕

- ・市川博, 本多薫：統計処理入門, 日本教育訓練センター, 2007 年 4 月 20 日発行, (ISBN 4-382-05416-8)

[論文]

- ・佐藤翔, 西平直史, 本多薫, 渡邊洋一: 人工社会モデルにおけるエージェントの個人差が与える影響, 山形大学人文学部年報, 第5号, p.33-44, 2008年02月
- ・TOMITA Kaoru, MORITA Mitsuhiro, IRWIN Mark, HONDA Kaoru: Town Sketch Podcasting Project: The Northern Ireland Podcasts, 山形大学人文学部研究年報, 第5号, p.21-31, 2008年02月
- ・本多薫: 研究成果の公表と課題, 今後の計画について(ナスカの地上絵に関する学際的研究(1)), 山形大学大学院社会文化システム研究科紀要, p.165-167, 第4号, 2007年08月
- ・伊藤理絵, 本多薫, 佐竹真次: 幼児に見られる笑いの分類学的研究, 笑い学研究, 第14号, p.40-50, 2007年07月

[学会発表]

- ・門間政亮, 本多薫: 就寝前のDVT作業が生体に与える影響に関する基礎的研究, 人間工学, 第43巻特別号(名城大学), p.290-291, 2007年6月
- ・本多ふく代, 本多薫, 信末匡哉: 「重い」と感じる重さに関する予備的研究—第2報—, 日本作業療法学会抄録集(鹿児島大学), p.072, 2007年6月
- ・市川博, 広瀬啓雄, 山本芳人, 本多薫: 高等教育における基礎数学のリメディア教育について, 日本経営工学会平成19年度秋季研究大会予稿集(小樽商科大学), p.194-195, 2007年10月
- ・本多薫, 門間政亮: 地下空間移動時の生体負担の計測に関する基礎的検討—移動と心拍変動との関係について—, 地下空間シンポジウム論文・報告集(早稲田大学), 第13号, p.167-172, 2008年1月
- ・森田光宏, 本多薫, Mark IRWIN, 富田かおる: From Podcasting to Vodcasting—動画配信の試行—, 2007年度ICT授業実践報告書(大妻女子大学), p.53-59, 2008年3月
- ・森田光宏, 富田かおる, 本多薫, Mark IRWIN: 山形大学 Town Sketch Podcasting: 静止画から動画配信へ, JACET東北支部12月例会(東北工業大学), 2007年12月

[その他]

- ・本多薫: ビジネス・キャリア検定試験 標準テキスト「生産管理オペレーション(作業・工程・設備管理)2級」, 中央職業能力開発協会編(社会保険研究所出版), 第5章(第2節 p.295-328), 2008年1月31日発行, (ISBN 978-4-7894-9960-6)
- ・本多薫: ビジネス・キャリア検定試験 標準テキスト「生産管理プランニング(生産システム・生産計画)2級」, 中央職業能力開発協会編(社会保険研究所出版), 第6章(第2節 p.307-339), 2008年1月31日発行, (ISBN 978-4-7894-9920-0)
- ・本多薫: ビジネス・キャリア検定試験 標準テキスト「生産管理オペレーション3級」, 中央職業能力開発協会編(社会保険研究所出版), 第6章(第2節 p.263-286), 2007年12月28日発行, (ISBN 978-4-7894-9950-7)
- ・本多薫: ビジネス・キャリア検定試験 標準テキスト「生産管理プランニング3級」, 中央職業能力開発協会編(社会保険研究所出版), 第2章(第3節 p.198-221), 2007年12月28日発行, (ISBN 978-4-7894-9930-9)

(2) 教育, 地域連携等の活動

[授業] 情報処理(教養), 人間情報科学概論, キャリアガイダンス(1コマ), 人間情報科学基礎, 人間情報科学演習, 人間情報科学実習, プログラミング演習(学部), 人間情報科学特論, 人間情報科学特別演習, 心理・情報特別研究(大学院)

[セミナー] 人文学部公務員試験対策講座(講義1回, 演習2回を担当した)

[卒業研究の指導](人間情報科学コース担当として指導)

- ・家庭における情報モラル教育に関する研究
- ・コンピュータのヘルプ機能に関する研究~WindowsXP, Vistaの比較~

- ・顔文字の印象に関する研究—携帯電話の電子メールにおける効果について—
- ・大学における e ラーニングの現状と課題
- ・電子マネーの現状と課題
- ・言語処理システムに関する研究—自動要約システムの開発を通して—
- ・簡易学習支援システムの開発
- ・ユーザ支援のためのファイル管理ソフトウェアの開発
- ・地域観光振興のためのホームページ利用

〔修士学位論文の指導〕

- ・人工社会モデルにおける個人差のもたらす影響：Adaptive Cultural Model による検討〔地域貢献活動等〕

- ・放送大学山形学習センター客員准教授（学習相談等を担当した）
- ・東北芸術工科大学非常勤講師（「コンピュータ応用演習」を講義した）
- ・放送大学非常勤講師（「パソコンの基礎と情報処理」を講義した（集中講義））
- ・山形県産業技術短期大学校非常勤講師（「情報工学特論」を講義した（1 回のみ））
- ・日本経営工学会東北支部 支部長
- ・日本人間工学会 評議員

(3) 平成 19 年度の研究・教育活動に関するコメント

平成 19 年度は、生体情報処理、ネットワークを活用した教育支援などの研究を進めた。また、教育としては、情報科学関連の講義を担当するとともに、清塚邦彦教授との共同で卒業研究の指導、渡邊洋一教授との共同で修士学位論文の指導を行った。

## ライアン スティーバン

(1) 研究成果

- ・Ryan, S. B. (2008). Recognizing Deep Culture's Influence on Communicative Behavior. Bulletin of Yamagata University (Humanities), Vol.16, No.3. pp.69-80.
- ・2007. December. "Why English and Japanese Speakers Misunderstand Each Other." Presentation. Japan Association of Language Teachers (JALT). Yamagata Chapter, Yamagata-city.
- ・Ryan, S.B. (2007) American Kids Raised in Japan: One Case of Bilingualism and the Misunderstood Self-Identity Issue. Japan Association for Language Teachers, SIG: Bilingualism. Vol.16, No.3. pp.17-19.
- ・Ryan, S.B. (2007). The Disruptive Potential of Cultural Background Knowledge in Cross-Cultural Communication: An Analysis of Sample Japanese and American Business Conversations. Journal of International Business Research, Volume 6, Special Issue 1. Cullowhee, NC: Allied Academies. pp.89-108.

(2) 教育、地域連携等の活動

- ・Society for Intercultural Education Training and Research (SIETAR, Japan)
- ・Japan Association of Language Teachers (JALT)

(3) 平成 19 年度の研究・教育活動に関するコメント

Research interests include English language education, Intercultural Education and Training. Current research focuses on how cultural background knowledge can result in cross-cultural conflict and misunderstanding.

## アーウィン マーク

### (1) 研究成果

- 2007年12月, 森田光宏・富田かおる・本多薫・Irwin, Mark. 「山形大学『Town Sketch Podcasting』: 静止画から動画配信へ」, JACET 東北支部研究会, 仙台市.
- 2008年2月, Tomita, Kaoru; Morita, Mitsuhiro; Irwin, Mark & Honda, Kaoru. Town Sketch Podcasting Project: The Northern Ireland Podcasts, 山形大学人文学部研究年報 5: 21-31.
- 2008年3月, 森田光宏・本多薫・Irwin, Mark・富田かおる. From Podcasting to Vodcasting: 動画配信の試行. 2007年度ICT授業実践報告書, 53-60.
- 2008年3月森田光宏・本多薫・Irwin, Mark・富田かおる. 「From Podcasting to Vodcasting—動画配信の実践」, Information/Communication Technology 合同研究会, 大妻女子大学.
- 2008年4月, Irwin, Mark. Homomorphemic Diffusion in Japanese Nonce Lexemes, *Japanese Language and Literature* 42: 45-61.

### (2) 教育・地域連携の活動

担当ゼミ・授業: 言語学演習, 英語コミュニケーションI, 英語コミュニケーションII, 英語(C)

## 森田 光宏

### (1) 研究成果

[学術論文・研究報告書]

- Tomita, K., Morita, M., Irwin, M., and Honda, K. (2008). Town Sketch Podcasting Project: The Northern Ireland Podcasts. 『研究年報』, 第5号, 21-31. 山形大学
- 森田光宏, 本多薫, Mark IRWIN, 富田かおる (2008). From Podcasting to Vodcasting—動画配信の試行—. 『2007年度ICT授業実践報告』(pp.53-60). 大学英語教育学会(JACET) ICT特別委員会
- 山下淳子・アックシュ・ダリヤ・天野修一・阪上辰也・森田光宏・村尾玲美・古泉隆・村木恭子・市川新剛 (2008:平成20年3月). 「英語学習者コーパスエラータグ付けのための基礎的研究: 文献レビューからの示唆」 杉浦正利(代表)『自然言語処理技術を応用した英語学習者の誤用に関する包括的かつ体系的分析』(pp.23-50). 平成16, 17, 18年度科学研究費補助金(萌芽研究)研究成果報告書, 研究課題番号16652044.
- 森田光宏 (2007). 日本人英語学習者の名詞単数形認識における頻度効果—表層頻度と累積頻度— 『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』, 第4号, 9-19. 山形大学

[学会発表・ワークショップ]

- 森田光宏, 本多薫, Mark IRWIN, 富田かおる. (2008) “From Podcasting to Vodcasting—動画配信の試行—” ICT合同研究会(大妻女子大学)(2008年3月22日)
- 森田光宏, 富田かおる, 本多薫, Mark IRWIN. (2007) 「山形大学 Town Sketch Podcasting: 静止画から動画配信へ」 JACET 東北支部12月例会(東北工業大学)(2007年12月8日)
- 森田光宏 (2007) 「TOEIC 導入と2つの試み」アルク教育社 e-learning ワークショップ in 北海道(AUC: Advanced Center for Universities)(2007年10月20日)
- Kazuko Matsuno, Tatsuya Sakaue, Mitsuhiro Morita, Remi Murao and Masatoshi Sugiura. (2007) “Processing Loads and Fluency in Writing: Comparison of the Production Fluency Between Native Speakers and Non-Native Speakers in Terms of the 'Cost Criteria'” The Symposium on Second Language Writing. (Nagoya Gakuin University) (2007年9月17日)
- 森田光宏 (2007) 「日本人英語学習者はどのように心的辞書に語彙を貯蔵しているのか?—派生語尾辞付き語の貯蔵—」言語学会第9回年次国際大会(宮城学院女子大学)(2007年7月7日)
- 松野和子・村尾玲美・森田光宏・阪上辰也・村木恭子・大名力・杉浦正利. (2007) 「統語的観点から見たライティングにおけるポーズの分析」言語学会(JSLs)第9回年次国際大会(宮城学

院女子大学) (2007 年 7 月 7 日)

(2) 教育, 地域連携等の活動

- ・教養教育担当授業: 英語 (C), 英語 (R), 英語 (CR) (工学部 B コース)
- ・専門教育担当授業: 実践英語 (一), 英語学特殊講義
- ・出張講義: 「英語勉強法: 何をすれば, 何に効くのか」宮城県立仙台東高等学校 (2008 年 2 月 14 日)

(3) 平成 19 年度の研究・教育活動に関するコメント

[研究]

- ・平成 19 年度より科学研究補助金 (日本学術振興会 平成 19, 20, 21 年度 若手研究 (B) 課題番号: 19720131) の交付を受け, 「日本人英語学習者の派生接辞付き英単語の認知に関する研究」を行っている。
- ・平成 18 年度に引き続き, 人文学部研究活動支援を受け, マーク・アーウィン, 本多薫, 富田かおるの各氏とともに, 「ポッドキャストを利用した英語教育の基礎研究」に取り組んでいる。
- ・文章産出過程を情報として含む新しい形式の日本人学習者コーパス「動的コーパス」を構築し, 日本人英語学習者の英語産出過程を明らかにすること試みた。

[教育]

- ・教養教育科目として開講している英語での実践により, 山形大学教養教育ベストティチャー新人賞を受賞した。

**福野 光輝** (平成 20 年 4 月着任)

(1) 研究成果

[分担執筆]

- ・Fukuno, M. (2007). Distributive and procedural fairness in ultimatum bargaining. In K. Ohbuchi (Ed.), *Social justice in Japan: Concepts, theories, and paradigms* (pp.55-71). Sendai: Tohoku University Press.
- ・福野光輝 (2007). 攻撃行動 山田一成・北村英哉・結城雅樹 (編著) よくわかる社会心理学, ミネルヴァ書房, 90-93.
- ・福野光輝 (2007). 葛藤解決 山田一成・北村英哉・結城雅樹 (編著) よくわかる社会心理学, ミネルヴァ書房, 94-97.
- ・福野光輝・小嶋かおり (2007). 対人葛藤と交渉 潮村公弘・福島治 (編著) 社会心理学概説, 北大路書房, 100-109.

[論文]

- ・Hatta, T., Ohbuchi, K., & Fukuno, M. (2007). An experimental study on the effects of excitability and correctability on electronic negotiation. *Negotiation Journal*, 23 (3), 283-305.
- ・福野光輝 (2008 a). 交渉における対人関係と情報交換の効果. 北海学園大学経営論集, 5 (4), 45-52.
- ・福野光輝 (2008 b). 公共事業における対立構造の認知. 北海学園大学経営論集, 5 (4), 13-21.

[学会発表]

- ・Takada, N., Fukuno, M., & Soma, Y. (2007). Forgiveness in intragroup conflict: Discrepancy between internal forgiveness and forgiving behavior. Poster presented at the annual conference of the International Association for Conflict Management, July 1-4, Budapest, Hungary.
- ・福野光輝・多田優基・村上昌幸・池谷光壽 (2007). 交渉における対人関係と情報交換の効果. 東北心理学研究, 57, 33.
- ・福野光輝・岩本育子 (2007). マクロ公正判断の規定因: 衡平基準と平等基準の対立. 日本社会心理学会第 48 回大会ワークショップ「公正研究の理論的展開と展望」(早稲田大学, 東京都新宿区,

2007年9月22日)

(2) 教育, 地域貢献等の活動

〔担当授業〕

「心理学実験実習」(通年), 「行動科学概論Ⅰ」(前期 [1部・2部]), 「社会心理学」(通年 [1部・2部]), 「演習Ⅰ」(通年 [1部]), 「企業研修」(通年 [1部]), 「外書講読 A/B」(通年 [2部]), 「社会心理学演習」(後期集中 [山形大学人文学部])

第32回学生懸賞論文創作コンテスト(北海学園大学学生部主催) 入選論文指導多田優基・池谷光壽・村上昌幸「親密感が交渉の情報交換と合意結果にもたらす効果」

〔出張講義〕

福野光輝(2007). 交渉の心理学: なぜ交渉はまとまらないのか. (苫小牧東高等学校, 北海道苫小牧市, 2007年12月12日)

中澤 信幸(平成20年10月着任)

(1) 研究成果

〔口頭発表〕

- ・「公任の「漢呉二音相同」再説」第214回筑紫日本語研究会, 九重共同研修所, 2007.8.10
- ・『『大般若経抄』における中国語意識について 一公任の「漢呉二音相同」再説一』日本語学会中国四国支部2007年度大会, 愛媛大学, 2007.10.27

〔著書・論文〕

- ・「日遠『法華経随音句』における「呉音」「漢音」『訓点語と訓点資料』120, 60-75, 訓点語学会, 2008.3

(2) 教育, 地域連携等の活動

赴任前なので該当せず。

(3) 平成19年度の研究・教育活動に関するコメント

平成17年度に学会で口頭発表した近世初期の「呉音」「漢音」の問題について, 引き続き研究を重ねて成果を学会誌に公表した。また新たな領域として古代の中国語学習の実態について調査し, 研究会および学会で口頭発表した。

人間文化学講座(文化学系)

奥村 淳

(1) 研究成果

〔論文〕

- ・「明治14年明治天皇庄内巡幸」, 『山形大学人文学部研究年報』第5号, 平成20年2月
- ・「太宰『ろまん燈籠』論—アンデルセン, グリム, ホームズ, 『剽窃』の論理—」, 『国文学年次別論文集』近代4, 平成17(2006)年学術文献刊行会(朋文出版), 平成20年3月発行『山形大学紀要(人文科学)』第15巻第4号(平成17年2月)発表論文の再録

板垣 哲夫

(2) 教育・地域連携等の活動

日本史概論(二), 日本史講義(二), 日本史演習(二)

日本史講読(二), 福沢諭吉再考(歴史学), 江戸時代とは何か(教養セミナー)

卒業論文(3人)

日本近代現代史特論Ⅱ, 日本近代現代史特別演習,

歴史文化特別研究Ⅱ  
学位論文（2人）

芦立 一郎

(1) 研究成果

- ・韋荘詞の語彙について 山形大学研究年報 5 号 2008 年 2 月

(2) 教育・地域連携等の活動

- ・アジア文化概論・演習 中国文学講義 中国語
- ・山形 NHK 文化センター講師

藤澤 秀光

(1) 研究・教育活動

(2) 教育・地域連携等の活動

[担当授業名]

- ・学部：アメリカ研究演習，アメリカ研究特殊講義  
英語 RⅡ，欧米文化概論，人間文化基礎演習
- ・大学院：英米現代文化論特論，英米現代文化特別演習

[地域連携活動（ボランティア）]

- 国際ロータリー第 2800 地区財団奨学生選考委員
- 国際ロータリー第 2800 地区財団ロータリー学友会代表幹事

(3) 平成 20 年度の研究・教育活動に関するコメント

ユダヤ系，日系といったアメリカの少数民族に関する小説，演劇，雑誌，新聞，広告，CM，映画，TV 番組，音楽，スポーツといった，文字化，音声化，映像化された文化的生成物を対象にした研究を行っています。

教育活動としては山形県のロータリークラブの財団奨学生のアドバイザーとして，奨学金の申請から海外の留学先の大学，大学院決定までの指導を行っています。ちなみに，本年度は本学部院生 1 名をフランスの大学に，また，もい 1 名の学生をカナダに留学できるよう指導し，実現できる運びとなりました。

また，新入生の指導教員として，授業を離れても会食の機会を設け，様々な話題を話し合うよう努力しました。

菊地 仁

(1) 研究成果

[論文]

- ・「草より出でて草にこそ入れ—武蔵野>の意匠—」，（『伝承文学研究』第 56 号，pp.33-43，2007 年 5 月）

[科研成果報告書]

- ・「福島県信達地方の西行伝説—『撰集抄』最終話との接点を再検証する—」，（『西行伝説の説話・伝承学的研究（第三次）』pp.14-21，2008 年 3 月）

[座談会]

- ・森朝男・菊地仁・宮脇真彦・渡部泰明・（岡部隆志），「《座談会》詩歌のことば（第四・五回）」，（『文学（隔月刊）』第 8 巻・第 4・6 号，pp.174-196・184-204，2007 年 7・11 月）

(2) 教育，地域連携等の活動

[平成 19 年度の担当授業]

- ・前期

教養セミナー(教養教育)・アジア文化基礎・日本文学講読・日本古典文学講義  
日本古代中世文化論特論・アジア文化特別研究(大学院)

- ・後期  
文化論(教養教育)・日本文化講読・日本文化概論  
日本古代中世文化論特別演習・アジア文化特別研究(大学院)

[地域連携]

- ・公開講座  
「<病い>の表象—山形県の事例を中心として—」  
(平成19年度山形大学都市・地域研究所公開講座  
「山形の魅力再発見パート5」・2007年7月8日)
- ・出張講義  
「言葉を観る／画面を読む—絵巻はどのように解釈できるか」  
(山形県立寒河江高等学校<寒河江高校メイフラワーカレッジ>・  
2007年9月12日)  
「恐怖がひきおこす想像力—『今昔物語集』は鬼をどう描いたか—」  
(福島県白河旭高等学校・2007年11月13日)

## 元木 幸一

### (1) 研究成果

- ・「個別支援型FDの現状と課題」(共著)『山形大学高等教育研究年報』第2号, 2008年3月

### (2) 教育, 地域連携等の活動

- [授業] 「聖母・魔女・お姫様(芸術)」 「西洋美術への招待(芸術)」 (工学部Bコース) 「芸術文化基礎」 「美学・芸術学特殊講義」 「芸術文化特殊講義」 「美学・芸術学演習」 「美術史演習」 「表象文化特論(美学・芸術学)I」 「表象文化特別演習(美学・芸術学)」 「欧米文化特別研究I」
- [卒論指導] 「秋田蘭画の花鳥画研究」 「17世紀オランダ静物画---その性質と機能---」 「ペーテル・パウル・ルーベンス研究---《マギの礼拝》に隠された役割---

[地域連携等]

- ・「冬のゴッホ」山形大学公開講座『山形美術館の傑作たち Part 2』2007年12月
- ・「秋の日の美術漫步」放送大学山形学習センター・ミニ講座, 2007年10~11月
- ・「遊びをせんとや生まれけむ ---P.ブリューゲル《子どもの遊戯》について---」放送大学山形学習センター, 入学式記念講演, 2008年3月

### (3) 平成19年度の研究・教育活動へのコメント

研究活動としては, 平成20年10月に出版される『ルネサンス美術館』(小学館)の第二章, 第四章で北方ルネサンス美術に関する記述を担当することになったため, その執筆を行った。教育活動としては, 前期教養授業「聖母・魔女・お姫様(芸術)」で, 授業クリニックの実験として, すべての授業を公開し, 毎回事後の検討会を実施し, 授業の改善を試みた。その成果は, 前年に比較して, 授業改善アンケートで0.5ポイントほどアップしたことにあらわれた。その試みは, NHK山形と東北版で放送され, 読売新聞からも取材を受け全国版の記事になった。今年度の研究成果は, そのFD報告である。授業に関しては, 人間文化学科の新しいコースシステムが始まり, 非常勤削減に伴って, 担当コマ数が増加したこと, 後期には, 工学部Bコースの授業担当になったため, かなり忙しかった。卒論指導は例年通り, 丁寧な指導が行えたと思う。

全体として, 教員の授業以外の負担が増えすぎている現状は, 学問を基盤とする大学という組織の性質上, 大学にとっても, 教員にとっても, その結果, 良い教育を受けるべき学生にとっても, きわめて危ういものであると思う。今や落ち着いて研究にも, 授業にも打ち込むことが難しい状況ばかりが押し寄せて来ているのである。

## 浅野 明

### (1) 研究成果

- ・翻訳：C. II. オルレンコ「17 世紀ロシアにおける銃兵と《外国人》」、『山形大学歴史・地理・人類学論集』第 9 号（2008 年 3 月）

### (2) 教育，地域連携等の活動

- ・担当授業：西洋中世の社会（歴史学），文化環境学（一），西洋史概論（一），西洋史講義（一），西洋史演習（一），西洋史講読（一），社会科の教材研究 A

### (3) 平成 19 年度の研究・教育活動に関するコメント

翻訳は，2002 年および 2004 年に，モスクワ・クレムリン博物館主宰で開催されたシンポジウムの中の 1 編を訳出したものである。このシンポジウムは，これまでロシアではなかなか取りあげられることがなかった，「ロシア人と外国人」という主題を正面から掲げたという意味で，注目すべきものであった。

教育活動については，従来から担当していた授業に加えて，新たに開講された学科共通科目「文化環境学（一）」を担当した。具体的には，世界各地の人々の歴史と暮らしについて，食文化と農業という観点から検討した。また，社会科の教材研究 B も担当した。ここでは，模擬授業等をとおして，中学校社会科の歴史的分野の授業方法について，学生とともに考えた。

## 松尾 剛次

### (1) 研究成果

[著書]

- ・『A History of Japanese Buddhism』(単著) GLOBAL ORIENTAL LTD, 2007
- ・『遊学館ボックス祈りにみる山形』(財)山形県生涯学習文化財団(共著), 2008
- ・仏教新発見 23『西大寺 西の大寺の巨大伽藍はなぜ残らなかったのか』(共著)朝日新聞社, 2007
- ・仏教新発見 24『建長寺 円覚寺 鎌倉幕府がつくった日本初の本格的禅刹』(共著)朝日新聞社, 2007

[論文]

- ・「宝光院文書と宝光院文書目録」『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要 第 4 号』, 2007
- ・「新発見の五点の中世浄住寺文書—中世安堵制に関する一考察—」『山形大学歴史・地理・人類学論集』第 9 号, 山形大学歴史・地理・人類学研究会, 2008 年
- ・「叡尊教団と中世都市平安京」『戒律文化第 6 号』戒律文化研究会, 2008 年

[その他]

- ・「文殊菩薩騎獅像」の再発見『中外日報』, 2007
- ・事典執筆 網野善彦著「無縁・公界・楽—日本中世の自由と平和」『宗教学文献事典』弘文堂, 2007
- ・事典執筆 松尾剛次著「新版 鎌倉新仏教の成立—入門儀礼と祖師神話」『宗教学文献事典』弘文堂, 2007
- ・事典執筆 横井清著「的と袍衣—中世人の生と死」『宗教学文献事典』弘文堂, 2007
- ・「撃墜 B 29 死亡米兵位碑作り供養」『中外日報』, 2008
- ・書評 竹田和夫著「五山と中世の社会」『日本歴史』718 吉川弘文館, 2008
- ・資料紹介 5 「中条家文書」の世界 II-1」『やまびこ』第 60 号, 2008 年 3 月

### (2) 教育，地域連携の活動

[平成 19 年度における授業]

ゼミ，卒論指導 仏教入門，歴史学入門（一般教育），文化人類学・宗教史基礎，比較基層社会史概論，比較宗教生態史概論，文化人類学・宗教史講読（1），文化人類学宗教史演習（1），文化人類学宗教史実習，日本史演習（3）（以上，学部）

日本中世宗教文化史特殊講義，特別研究（以上，大学院）

Japan study program など担当 学部生 10 名，卒論指導 1 名と 2 名の大学院生の指導を行った。  
〔地域連携活動〕

- ・山形県生涯学習財団「山形学」企画委員として、「祈りに見る山形」と題する公開講座などを主導した。
- ・山形大学都市地域学研究所の所長として，公開講座「山形魅力再発見 パート 5 山形県の健康と生活文化」を実施

(3) 平成 19 年度の研究・教育・地域連携活動に関するコメント

著書 4 冊，論文 3 編，その他 7 編と研究面で大いに成果があった。とくに，11 月には，京都浄住寺で秀吉文書の発見などがあり，マスコミに大きく取り上げられた。また，三菱財団より人文助成を得た。教育面では，英語による日本仏教史の講義を担当するなど成果があった。山形学企画委員として，山形県の生涯学習に貢献した。

## 阿部 宏慈

(1) 研究成果

〔論文〕

- ・「現実的なものの境位：ドキュメンタリー映画における「リアル」の問題をめぐって」，平成 16 年度～平成 18 年度科学研究費補助金基盤研究費（C）(2)，「視覚表象における『リアル』の研究」研究成果報告書，平成 20 年（2008）1 月，pp.93-123.
- ・「ブレーズ・サンドラール『シベリア横断鉄道とフランスの小さなジャンヌ』とロシア・イメージの問題」，平成 17 年度～平成 19 年度科学研究費補助金基盤研究費（C），「近代世界文学におけるロシア表象の研究」研究成果報告書，平成 20 年 3 月，pp.25-51.

(2) 教育，地域連携等の活動

〔教育〕

フランス語（教養教育外国語科目），フランス文化論，フランス文化講読などのフランス関係科目を担当。また，映像学，表象文化演習など表象文化論コースの科目も担当。欧米文化論コースおよび表象文化論コースで卒業論文の指導をおこなった。

〔地域連携〕

山形国際ドキュメンタリー映画祭に参加し，ゲストの受け入れ，フランス語の通訳などをおこなった。仙台短篇映画祭において，河瀬直美監督特集にあたり，監督とのトークショーをおこなった。東北学院大学において，黒澤明シンポジウムのパネリストをつとめた。また山形大学都市・地域学研究所主催の公開講座「山形の魅力再発見 part 5」で講師をつとめた。

会津高校で出張講義。

(3) 平成 19 年度の研究・教育活動に関するコメント

研究に関しては表象文化論関係の科学研究費による研究を継続した。十月に開催された映画祭を契機に山形国際ドキュメンタリー映画祭との連携を強め，三月には東京で開催された「(北) アイルランド映画祭」に参加して，「ブラッディー・マンデー」の記憶を追った秀逸なドキュメンタリー作品など数本の作品の作家と議論することができた。また，ロシア・イメージの研究は，懸案であったブレーズ・サンドラールの新全集に基づく研究をおこなうことができた。教育に関しては，引き続き欧米文化論コースと表象文化論コースで指導をおこなった。「フランス文化論」講義では，フランスでの郊外暴動のその後の展開や大統領選挙という現に進行中の事態と過去の植民地主義的拡張政策との関連を探るべく，「植民帝国フランス」という主題で講義を展開し，学生からは，タイムリーな話題で関心が持てたという意見があった反面，ベトナムなどでのフランスの植民地統治政策などを見てみると，フランスに対して幻滅を感じるようになった，などの感想も寄せられた。「映像学」講義は，「映像の力」をテーマとして，メディアにおける映像の使用や，視覚的メディアと他のメディアの併

用といった問題をとりあげ、写真から映画そして CG に至るまで、映像的メディアのもたらしたものの意味を問うた。主として指導した卒業論文の主題は以下のようである。「近代魔女イメージの形成 — 女性性との関連を中心に—」「クロード・ドビュッシー研究」「北野武研究」「バスター・キートンの「笑い」について～メランコリックな道化の＜運動＞～」 「広告の遊戯性」

## 新宮 学

### (1) 研究成果

#### 〔学術論文〕

- ・「明代南京の京城と外郭城について」『明代中国の歴史的位相』山根幸夫教授追悼記念論叢 汲古書院 p 23～43 2007 年 6 月

#### 〔編著〕

- ・新宮学ほか 6 名による編集（共編著）『明代中国の歴史的位相』山根幸夫教授追悼記念論叢 汲古書院 上・下巻 全 706 頁 2007 年 6 月

#### 〔学会発表〕

- ・新宮学「明初洪武年間の都城建設について—南京と中都—」2007 年度東洋史研究会大会 11 月 3 日 京都大学

#### 〔海外・国内調査〕

- ・2007 年 7 月 29 日～8 月 21 日 中国農耕と牧畜境界地帯の都市と環境調査（北京・大同・銀川・西安等）
- ・2007 年 9 月 8 日～13 日 日本古代都城踏査（難波宮跡・飛鳥宮跡・藤原京跡）
- ・2007 年 11 月 23 日～25 日 日本古代都城踏査（恭仁宮跡・甲賀宮跡・保良宮跡）

### (2) 教育，地域貢献等の活動

#### 〔担当授業名〕

- ・学部 東洋史概論（一），東洋史講義（一），東洋史演習（一），東洋史講読（一），北京の歴史（歴史学），マルコ・ポーロの『東方見聞録』を読む（教養セミナー），卒業論文指導，外国史概説（地域教育文化学部兼任）
- ・大学院 東アジア近世史特論Ⅱ，東アジア近世史特別演習

#### 〔地域貢献〕

- ・山形県立新庄南高等学校での「出張講義」10 月 16 日
- ・秋田県横手市内などの高校訪問（5 校）
- ・学部国際学術講演会（第 1 回 11 月 13 日）「東アジアのなかの遣唐使— 新発見の井真成墓誌から見た国際交流 —」のコーディネイト。王維坤先生（中国，西北大学文化交流学院教授・副院長，国際日本文化研究センター外国人研究員）による「長安から見た遣唐使の役割—新発見「井真成墓誌」の最新研究—」，高橋継男先生（東洋大学文学部教授）による「日本遣唐使と面談した「杜嗣先」の墓誌—最古の「日本」国号史料—」の二つの講演が行なわれ，本学の教員・学生のほか，市民も多数聴講した。

#### 〔学会活動〕

- ・学会事務局 第 56 回東北中国学会大会を大会準備委員長上田弘毅教授に協力して小白川キャンパス等を会場にして開催（5 月 26.27 日）全国から研究者約 130 名が参加した。

### (3) 当該年度の研究，教育活動に関するコメント

研究活動では，昨年度に引き続き基盤研究（S）「歴史学的視角から分析する東アジアの都市問題と環境問題」（代表 妹尾達彦教授）の分担研究者，および基盤研究（B）「東アジア諸国における都城および都城制の比較を通じてみた日本古代宮都の通時の研究」（代表 橋本義則教授）の連携研究者として参加した。また国際日本文化研究センターの共同研究員に委嘱され，「古代東アジア交流の総合的研究」（研究代表名者 王維坤）の共同研究を行った。

教育活動では、中国中世史と近世史、朝鮮近代史をテーマとする学生の卒業論文を指導した。6月には、歴史学専修教員有志とともに、専修学生を対象にした研修旅行を実施し、「始皇帝と彩色兵馬俑展」や「北京故宫博物院展」(新潟市)及び福島県立博物館(会津若松市)の見学研修を行った。合宿先では学生・教員相互の交流を深めた。

## 西上 勝

### (1) 研究成果

[論文]

- ・「毛筆のパロディー」山形大学人文学部研究年報, 第5号, pp.117-131, 平成20年2月

[研究発表]

- ・「自意識とはしがき」第23回中国詩学会(五皓), 平成20年3月9日

### (2) 教育, 地域連携等の活動

専門教育: 人間文化学科基礎演習, 中国文学講義など

教養教育: 外国語科目中国語Ⅰ及びⅡ, 一般教養科目(文学)

## 佐藤 清人

### (1) 研究成果

- ・『「M. バタフライ」におけるセックスとジェンダー』、『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』第4号, 平成19年8月, pp.1-8.

### (2) 教育, 地域連携等の活動

[主な担当授業科目] 英米文化論, 欧米文化演習, 英米文化講読, 英語(R), 英語(C)

### (3) 平成19年度の研究・教育活動に関するコメント

研究においては、これまで日系アメリカ文学を主に研究してきたが、このたびはじめて中国系アメリカ人作家デヴィッド・ウォンの作品を論文で取り上げてみた。今後は日系アメリカ人作家のみならず、他のアジア系アメリカ人作家をも多数取り上げて行きたい。

教育においては、専門科目では、研究と同じように日系アメリカ文学について講義し、また関連のテキストを講読した。教養教育科目(英語)では、今年から成績にTOEIC-IPの成績を含めることになったため、その対策を意識した授業を試みた。

## 山崎 彰

### (1) 研究成果

[論文]

- ・「ブランデンブルク近世史の諸論点をめぐって」『西洋史学』2008年3月

[書評]

- ・「平井進著『近代ドイツの農村社会と下層民』『歴史と経済』200号, 2008年7月
- ・「飯尾唯紀著『近世ハンガリー農村社会の研究—宗教と社会秩序』『西洋史研究』新輯37号, 2008年11月

### (2) 教育, 地域連携等の活動

[教養教育]

- ・「近代ヨーロッパ国家の多様なかたち」を後期に工学部(米沢キャンパス)で行った。他に「自分の未来を描いてみる—キャリア形成論」を企画し、実施した。

[専門教育]

「歴史学基礎」「西洋史概論(二)」「西洋史講義(二)」「西洋史演習(二)」「西洋史講読(二)」。

以上の他に松本邦彦准教授とともに「地域づくり特別演習(二)」を企画、実施した。これは学生たちが山形市内のNPO団体(計7団体)の協力を得て、研修を中心にまちづくりを学ぶ授業であ

る。

〔大学院教育〕

「ドイツ史特論」「ドイツ史特別演習」を用意したが、今年度は受講者はなし。

- ・卒業論文指導としては、ドイツ現代史の論文指導を行った。
- ・社会連携の分野では、本学と山形交響楽団ならびに山形国際ドキュメンタリー映画祭との連携事業を準備した。2010 年度に山形市で開催予定の「アフィニス音楽祭」への山形大学の協力について交響楽団事務局と準備会議を行うとともに、映画祭ライブラリー分館を本学付属図書館に開設する準備を進めた。

(3) 平成 18 年度の研究・教育活動に関するコメント

科研費（基盤研究 C）「19 世紀前半ブランデンブルク農村社会の紛争と社会的調整に関する実証的研究」（代表・山崎彰）の 2 年目として、前年度に引き続き、9 月に 4 週間をかけてブランデンブルク州立中央文書館とベルリン自由大学図書館で資料調査を行った。

4 人の共訳者によって翻訳作業を進めている 18 世紀思想家 J. メーザー著『郷土愛の夢』の訳稿と解題を執筆し終えた。2009 年 4 月刊行の予定である。

## 大河内 昌

(1) 研究成果

〔論文〕

- ・「ロマン主義研究と批評理論」『英語青年』2007 年 4 月号（研究社）pp.2-4, 2007 年 4 月。
- ・「シャフツベリーにおける美学と批評」『未分化の母体—十八世紀文学論集』千葉豊，能口盾彦，干井洋一 編（英宝社）pp.21-39, 2007 年 8 月。
- ・「視覚表象における「リアル」の研究」平成 16-18 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書 pp.21-38, 2008 年 1 月。（共著）

(2) 教育，地域貢献等の活動

〔担当授業〕

英語（教養教育），英文学特殊講義，英米文化講読，欧米文化概論（学部）英米近世文化論特論（大学院）担当

(3) 当該年度の研究・教育活動に関するコメント

〔研究〕18 世紀イギリスの道徳哲学を，道徳哲学内部における倫理学と法学の関係という観点から考察した。また，その成果をふまえ，道徳哲学と小説の関係についても考察した。

〔教育〕教養教育の英語教育においては，学生が文法知識と英語運用を有機的につなげられることを目標に，できるだけ多くの作業を学生自身にさせるよう努力した。また，専門教育においては，文学作品分析の技術を学生に提示することと，英語テキスト読解訓練を両立させるように努力をした。

## 中村 隆

(1) 研究成果

〔共著〕

- ・『ディケンズ鑑賞大事典』（南雲堂，2007 年 5 月 24 日）「荒涼館」を担当執筆

〔論文〕

- ・平成 18～19 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書（2008 年 3 月 31 日）

〔研究発表〕

- ・「クルックシャンクのたくらみ」（ヴィクトリア朝研究会，2008 年 3 月 16 日，於：同志社大学）

(2) 教育，地域連携等の活動

〔主な授業科目〕 英語（R），英語（C），実践英語（二），英文学特殊講義，英米文化講読，欧米文化概論

〔地域貢献〕 県立寒河江高校出張講義講師

(3) 平成19年度の研究・教育活動に関するコメント

研究面では、所属する学会、ディケンズ・フェロウシップ日本支部のプロジェクトであったディケンズについての網羅的研究『ディケンズ鑑賞大事典』の共著者として『荒涼館』について論文をまとめた。また、平成18～19年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書(「センセーション・ノヴェルの再評価—メアリー・ブラッドンとウッド夫人の小説—)を完成させた。研究発表は、挿絵画家クルックシャンクについての研究であり、新たに獲得した平成20～22年度科学研究費補助金(基盤研究(C))の研究の第一歩である。

教育面では、教養の英語では、NHK ラジオ英会話を授業に導入し、コミュニケーション能力の向上に力点をおくとともに、毎回、最新の英字新聞の記事を読解 資料として用いることで、時事英語の読解能力の向上も図った。英米文学特殊講義では、ホガースの版画を取り上げて、18世紀イギリスの政治社会の幾つかのトピックを論じた。英米文化講読では、19世紀のイギリスの画家たちを取り上げたテキストを用い、英国絵画の伝統を考察するとともに、英文読解の基礎練習に取り組んだ。

### 相澤 直樹

(1) 研究成果

- ・『ゴンドラの唄』考、「山形大学紀要(人文科学)」第16巻第3号、平成20年2月、1-31頁

(2) 教育、地域連携等の活動

ロシア語、欧米文化概論、欧米文化基礎、ロシア文化購読、ロシア語学演習

### 阿部 成樹

(1) 研究成果

- ・「手仕事と個 ——オクタヴ・タッセールのアトリエ図」『西洋美術研究』第13号、三元社、73-92頁、2007年7月

(2) 教育、地域貢献等の活動

〔教育〕

- ・担当授業：芸術文化概論、表象文化講義、芸術文化演習(前後期)、芸術文化実習、ヨーロッパ建築紀行(芸術)、フランス絵画史I(芸術)
- ・卒業論文指導：芸術文化論2名、比較文化・表象文化論1名

〔社会貢献他〕

美学会篇『美學』第231号査読委員

(3) 平成19年度の研究、教育活動に関するコメント

19世紀フランス美術について、歴史における「ソシアビリテ」論の視座を利用した試みを形にすることができ、一歩前進したと思っている。

### 坂井 正人

(1) 研究成果

〔口頭発表〕

- ・「インカ帝国の首都クスコとビルカバンバ」(坂井正人) アンデス文明研究会2007年10月20日(土)
- ・「パコパンパ遺跡半地下式広場の封印過程」(関雄二、フアン・パブロ・ビジャヌエバ、ワルテル・トッソ、井口欣也、アラセリ・エスピノサ、坂井正人)、『古代アメリカ学会研究大会』第12回、国立民族学博物館、2007年12月。

〔著書・論文・エッセイなど〕

- ・『ラテンアメリカ』(坂井正人・鈴木紀・松本栄治編) 朝倉世界地理講座14、朝倉書店、pp 1-473。

- ・「インカの太陽神殿コリカンチャ：首都クスコとビルカバンバの景観をめぐる」(坂井正人)『他者の帝国』(関雄二他編), 世界思想社, pp.205- 225。
- ・Informe del Proyecto para Levantamiento del Plano Tridimensional del Sitio Espiritu Pampa.(Gladys Lagos Aedo, Masato Sakai, Ismael Uscachi Santos y Gentaro Miyano), Informe presentado al Instituto Nacional de Cultura del Peru, pp.1-82。
- ・「ヘケテベケ下流域における形成期神殿と社会の動態：リモンカルロ遺跡の発掘調査およびペルー北海岸の一般調査より」(坂井正人)『先史アンデス社会の文明形成プロセス』平成 14-18 年度科学研究費補助金[基盤研究 (S)]研究成果報告書(研究代表・埼玉大学教養学部教授・加藤泰建), pp.183-214。
- ・「ナスカの地上絵に関する学際的研究(1)」(坂井正人, 阿子島功, 渡邊洋一, 本多薫, 門間政亮)『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』4号, pp.103-169。
- ・「日本の考古学調査五〇年のあゆみ」(坂井正人)『季刊民族学』121号, pp.38-39。
- ・「ビルカバンバへの道」(坂井正人)『古代アメリカ学会会報』22号, pp.1-3。

## (2) 教育, 地域連携等の活動

### [担当授業]

「文化人類学入門(文化論)」「南米の考古学(教養セミナー)」「比較地域研究概論」「文化人類学・宗教史講義(二)」「文化人類学・宗教史演習(二)」「文化人類学・宗教史演習(三)」「文化人類学・宗教史実習(二)」「文化人類学・宗教史基礎」「文化環境学(一)」、「文化人類学特論」、「文化人類学特別演習」

### [卒業論文]

「秋田のナマハゲ：民俗行事と観光の事例から」「治療祈願における身体物質化：秋田県能代市の事例より」「現代日本のペット供養」「映画と観客：グローバリゼーションをめぐる」「日本人と死」「天童市におけるイベントと文化創造」「山形の妖怪：村山地方、置賜地方の河童と鬼」「日本のお笑い：漫才おコントの比較を通じて」「武士道と人間形成：柔道と剣道を通して」「マンドリンオーケストラにおける演奏者とパートの関係性」「交換の理論からみる親子関係」「日常生活と民俗芸能に見る高嶺南と高嶺北」「ネットマナー」「記紀神話の構造」「癒しと音楽」「御詠歌」(以上 16 本)

### [地域連携]

- ・山形大学インフォメーション・センターで『ナスカ展』を開催(平成 19 年 4 月 2 日～5 月 31 日)
- ・「人工衛星によるナスカの地上絵研究」NHK 庄内文化センター, 2007 年 5 月 25 日
- ・「ナスカの地上絵とアンデス文明」NHK 庄内文化センター, 2007 年 6 月 9 日
- ・「新発見の地上絵」最上地区教育委員会協議会(主催), 2007 年 6 月 15 日(金)
- ・「ナスカ地上絵と先史アンデス社会」(2007 年度第 1 期異文化理解講座「先住民族文化の現在：ルーツ・変容・声」)国際交流文化推進協会(主催), 2007 年 6 月 15 日(金)
- ・「ナスカの地上絵と古代アンデス文明」出張講義(山形東高等学校)2007 年 10 月 3 日(水)
- ・「ナスカの地上絵と古代アンデス文明」出張講義(新庄北高等学校)2007 年 10 月 19 日(金)

## (3) 平成 19 年度の研究・教育活動に関するコメント

山形大学の共同研究「ペルー, ナスカの地上絵の学際的研究」(科学研究費補助金・基盤研究(B)・研究代表・山形大学教授・阿子島功)に参加して, 人工衛星から撮影された画像の分析を進めるとともに, 現地調査で実態解明に努めた。また国立クスコ大学・クスコ文化庁との共同調査「インカ帝国最後の都ビルカバンバの景観構造」(平成 17～19 年度科学研究費補助金・萌芽研究)が今年度で終了し, その成果報告書をペルー文化庁に提出するとともに, 日本語で学術論文を発表することができた。さらに, ペルー北部高地のパコパンバ遺跡の考古学調査(科学研究費補助金・基盤研究(A)・研究代表者・国立民族学博物館教授・關雄二)に参加して, この遺跡の景観構造に関する調査を実施した。講義と演習では, 世界の諸民族に関する事例を検討することで, 文化人類学の基本的な考え方, 民族誌の読み方と議論の仕方について扱った。また山形市山寺地区で, 文化人類学調査(第 10 次)

を実施した。

## 中村 唯史

### (1) 研究成果

[著書, 論文, エッセーなど]

- ・マンガにおける「リアル」の問題, 視覚表象における「リアル」の研究: 科研費(基盤研究(C)(2)), 課題番号16602001) 研究成果報告書, 平成20年1月, 55-84ページ
- ・超越するトポス: 1830-40年代のペテルブルグ・モスクワ比較論について, 近代世界文学におけるロシア表象の研究: 科研費(基盤研究(C)(2)), 課題番号17520219) 研究成果報告書, 平成20年3月, 65-79ページ
- ・帝国と詩人: 「ソ連多民族文化」とダゲスタンのアヴァル語作家ラスル・ガムザトフ, 『講座スラブ・ユーラシア学3: ユーラシア—帝国の大陸』(講談社), 平成20年3月, 106-136ページ
- ・Literatura i granitsy: Kavkaz v russkoi literature. Osip Mandel'shtam i Andrei Bitov (ロシア語「文学と境界: ロシア文学におけるコーカサス, マンデリシタムとビートフ」), Beyond the Empire: Images of Russia in the Eurasian Cultural Context (SRC of Hokkaido Univ.), 平成20年3月, pp.255-277.
- ・同時代現象ペレーヴィン, ロシア文化通信「群」(群像社) 30号, 平成19年年6月, 3ページ
- ・<ことばの杜>へ, 山形新聞, (平成19年6月9日, 8月4日, 9月29日, 11月24日, 平成20年1月26日, 3月22日, 分担連載エッセー)

[学会, 研究会などの口頭発表]

- ・Vid s Kavkaza: s točki zreniia russkoi literatury (ロシア語報告: 「コーカサスの光景: ロシア文学の視点から」), 国際会議「In search of the Caucasian Culture: Seeking New Perspectives through Dialogues between Philologists and Historians」, (於京都大学, 平成20年1月)

### (2) 教育, 地域連携等の活動

[平成19年度の授業]

ロシア語Ⅰ, ロシア語Ⅱ(教養教育), 人間文化基礎演習, 比較文化・表象文化基礎, ロシア文化論, ロシア文化講読, 欧米文化演習(専門教育), ロシア東欧文学特論, 同特別演習(大学院)

[指導卒業論題目]

「よしながふみ論」, 「テレビタレントの研究」, 「田舎に求められたイメージと変容」, 「キャラクター論」

[地域連携等]

- ・国際交流基金異文化講座「文明の十字路・コーカサスの諸相」で「ソヴィエト連邦におけるコーカサス諸民族文学の位相」と題する講演を担当(平成19年7月, 於ジャパン・ファウンデーション会議場)
- ・山形県立山形北高校, 福島県立会津高校で出張講義(平成19年9月, 10月)

### (3) 平成19年度の研究・教育活動に関するコメント

特にない。

## 三上 喜孝

### (1) 研究成果

[著書, 論文, エッセーなど] (出版社 [発行母体], 発表誌, 巻号数, ページ)

- ・三上喜孝「『境界世界』の特産物と古代国家 一北方・南方世界との交流—」『歴史と地理 日本史の研究』217, 2007年6月, 1~16頁。
- ・三上喜孝「『仏堂墨書の世界』『若松寺観音堂墨書調査報告書』2008年3月, 天童市教育委員会, 60~76頁。

- ・(共著)『長岡京遷都 桓武と激動の時代』国立歴史民俗博物館展示図録, 2007 年 10 月「九世紀の国土観」(43 頁)「六条令解からみる土地売買」(72~73 頁)「印文の変化」(128 頁)「銭の小型化」(130 頁)「暦の変化」(132 頁)の項を執筆。

(2) 教育, 地域連携等の活動

[2007 年度における授業](担当授業名)

- ・一般教育科目: 「論争する歴史学」「貨幣からみた日本の歴史」(各 2 単位)
- ・専門科目: 「歴史学基礎」「日本史概論(一)」「日本史講義(一)」「日本史講読(一)」「文化財調査実習」「社会科の教材研究 B」(各 2 単位)「日本史演習(一)」(4 単位)
- ・大学院「日本古代史特論Ⅱ」「日本古代史特別演習」(各 2 単位)

[修士論文・卒業論文の紹介]

- ・卒業論文: 「馬医師・伯楽と中世社会」「古代東北の城柵支配について」「古代軍団制における鼓吹の研究」

[地域連携活動](審議会, 講演会, ボランティア等)の紹介

- ・若松寺観音堂墨書調査委員会(2007 年度。天童市教育委員会)
- ・2007 年度山形大学人文学部公開講座「理想の家族はどこにあるのか」講演題「日本古代の家族と女性」2007 年 6 月 25 日 於山形大学
- ・2007 年度金山町歴史学講座「谷口銀山」講演題「日本史のなかの谷口銀山」2007 年 9 月 12 日 於谷口がっこそば
- ・2007 年度山形大学公開学術報告会「交流史からみた山形」講演題「出土木簡が語る出羽山形の交流史」2007 年 10 月 20 日 於山形大学
- ・歴博フォーラム「激動の長岡京時代」講演題「『延暦帝の時代』の列島社会 ー長岡京の内と外ー」(主催:国立歴史民俗博物館)2007 年 11 月 18 日 於東商ホール
- ・第 26 回山形県民俗研究協議会 講演題「仏堂墨書の世界 ー天童市若松寺観音堂の墨書調査からー」2007 年 11 月 25 日 於山形県立博物館

(3) 2007 年度の研究・教育活動に関するコメント

研究分野では, 古代境界史に関わる成果や, 若松寺観音堂の近世仏堂墨書についての成果を公表した。また, 国立歴史民俗博物館展示プロジェクト委員として特別展の準備やフォーラムに関わった。科学研究費補助金による若手研究(B)のほか, 共同研究 2 件, 学部内研究プロジェクト 1 件に参加し, 多方面に渉り研究活動を行った。教育面では, 講読や演習を通じて文献史料の読解に重点を置いたほか, 実習(奈良・京都方面)や合宿(金山町)等を通じて生の歴史資料を見る機会を提供した。卒業論文の指導にも力を入れた。

## 渡辺 将尚

(1) 研究成果

[論文]

- ・「事物の流れ」の中の共産主義——ブレヒトの『処置』, (「ドイツ文学論集」第 40 号, 平成 19 年 10 月, 27~36 ページ)
- ・「あらゆる既存の概念を超えたアウシュヴィッツ?」——マルティン・ヴァルザーのエッセイをめぐって, (「山形大学人文学部研究年報」第 5 号, 平成 20 年 2 月, 133~144 ページ)

(2) 教育, 地域連携等の活動

放送大学山形学習センター客員准教授として, 月 2 回のドイツ語講座, 年 1 回のミニ講座等を実施した。

## 中村 篤志

### (2) 教育・地域貢献等の活動

[担当授業]

東洋史講義(二), 東洋史演習(二), 東洋史講読(二), 歴史学基礎, 北アジア遊牧民の歴史(教養・歴史学), モンゴル・遊牧を考える(教養・歴史学)

[教育活動]

- ・歴史学専修合同合宿(2007年6月26~27日:新潟県立万代島美術館, 福島県立博物館, 磐梯町慧日寺など)
- ・東洋史の教員・学生とともに北京・瀋陽の史跡を見学・調査(2008年3月6~13日)

[地域貢献]

- ・講演「モンゴル大草原の家族:養子の伝統をめぐる」(山形大学人文学部公開講座「<理想の家族>はどこにあるのか?—歴史の視点・世界の視点—」2007年7月2日)
- ・模擬講義「モンゴル遊牧社会を考える~文献調査・フィールド調査を通じて」(山形大学人文学部オープンキャンパスにおいて。2007年8月4日)

### (3) 平成19年度の研究, 教育活動に関するコメント

- ・東北中国学会が山形で開催され, 他の教員とともに事務局を務めた。
- ・平成19年度大学教育の国際化推進プログラム・海外先進研究実践支援を受けて, 2007年9月1日より2008年3月25日まで北京の中国人民大学において調査・研究に従事した。
- ・海外渡航のため授業は前期のみとなったが, 渡航前の合宿や北京・瀋陽の史跡見学などで学生に実地体験させる機会を提供できた。

## 齊藤 哲也(平成20年4月着任)

### (1) 研究成果

[学位論文]

- ・Tetsuya SAITO, *Pratiques de la citation dans les textes d'André Breton*, Thèse de Doctorat déposée à l'Université de Paris VII - Denis Diderot, la soutenance publique le 26 septembre 2007.

[研究論文]

- ・齊藤哲也, 「痙攣するイマージュ——シュルレアリスムとイマージュについての覚書」, 『層』創刊号, ゆまに書房, 2007年, 6-28ページ。
- ・齊藤哲也, 「引用のオートマティスム—『シュルレアリスム簡約辞典』を中心に」, 『フランス文学における時間意識の変化』(平成16-18年度科学研究費補助金(基盤(B)(2)—研究代表者, 塚本昌則)による研究成果報告), 2007年, 371-386ページ。
- ・齊藤哲也, 「このあいまいな引用の対象——映画の「シュルレアリスム」」, 『水声通信』第20号, 水声社, 2007年, 138-147ページ。
- ・齊藤哲也, 「本当の私——シュルレアリスムはシュルレアリスムをいかに語ったか」, 『Septentrional』(日本フランス語フランス文学会・北海道支部論集)第1号, 2008年, 3-24ページ。

[学術雑誌等又は商業誌における解説, 総説]

- ・齊藤哲也, 「エルザ・アダモヴィッツ『これはタブローではない——シュルレアリスムの美術論』(書評)『水声通信』第20号, 水声社, 2007年, 155ページ。
- ・齊藤哲也, 『ヴォルフガング・パーレンの《ディン》——完全復刻盤』(書評)『水声通信』第20号, 水声社, 2007年, 159ページ。

[学会・シンポジウム等における発表]

- ・齊藤哲也, 「為了不純の映像—超現実主義与1920年代的法国電影」(「不純なイメージのために—

シュルレアリスムとフランス映画の 1920 年代)], 中日映像文化研究討論会, 中国南京芸術学院, 2007 年 11 月 1 日。

・齊藤哲也, 「開かれた窓—シュルレアリスム絵画とフレームの問題」, フランス語フランス文学学会北海道支部会, 小樽商科大学札幌サテライト, 2007 年 7 月 21 日。

・齊藤哲也, 「シュルレアリスムはモダニズムか?」, モダニズム研究会, 立命館大学, 2008 年 1 月 13 日。

(2) 教育, 地域連携等の活動

北海学園大学非常勤講師 (「フランス語会話Ⅲ」「フランス語会話Ⅳ」「フランス語教養Ⅰ」担当)

(3) 平成 19 年度の研究・教育活動に関するコメント

平成 19 年度は学術振興会特別研究員として課題研究をすすめた。成果の一部を九月に博士論文としてフランス・パリ第七大学に提出した。

## 法 経 政 策 学 科

### 法経政策講座 (経済・経営系)

#### 行方 久生

(1) 研究成果

[論文等]

- ・「地方財政の変容—構造改革の帰結と問題点」(『建設政策』2007 年 4 月, 10/18)
- ・「夕張市『財政破綻』問題の論点と自治体の危機」(『自治と分権』27 号, 大月書店, 2007 年 4 月, 85/102)
- ・「ナショナル・ミニマム保障と今日の自治体」(浜岡政好, 岡田知宏氏と鼎談『自治と分権』28 号, 2007 年 7 月, 4/38)
- ・「ふるさと納税の行方と問題点」(地方自治問題研究機構, ホームページ掲載, 2007 年 8 月)
- ・「道州制をめぐる『政治』情勢と『地域間格差』論」(『自治と分権』29 号, 2007 年 10 月, 65/84)
- ・「最近の地方財政『危機』の特徴と政府の地方財政対策」(『自治と分権』31 号, 2008 年 3 月, 85/103)
- ・「法定外目的税と受益者負担」(『住民と自治』2008 年 3 月, 8/13)

[書評等]

- ・森岡孝二『働きすぎの時代』(岩波新書, 著者へのインタビュー『自治と分権』30 号, 2008 年 1 月) 8 頁分
- ・雨宮処凜『生きさせる! 難民化する若者』(太田出版, 2007 年 3 月)『プレカリアート』(洋泉社, 2007 年 10 月), 著者へのインタビュー (『自治と分権』31 号, 2008 年 3 月, 10 頁分)
- ・渡辺治 (一橋大教授) へのインタビュー「今日の情勢をどう見るか」(『自治と分権』30 号, 2008 年 1 月, 30 頁分)

(2) 教育, 地域連携等の活動

- ①地方財政論, 同演習
  - ②格差と労働 (教養セミナー)
  - ③行政民間化と公務労働 (教養教育)
  - ④地方財政特論・演習 (大学院)
  - ⑤その他, 公務員セミナー論作, 総合講座Ⅲ
- \* 地域連携, 社会活動としては,

- ①朝日新聞(山形), 毎日新聞(秋田)へのコメント(自治体財政等について)
  - ②週刊現代(公務員制度, 退職金について)へのコメント
  - ③さくらんぼテレビ(ニュース解説—土地開発公社の現状と問題について)
  - ④自治体財政, 自治問題等について, 自治体問題研究所をはじめ地域研究所, 住民団体等における「講演」活動(多数)
- (3) 平成19年度の研究・教育活動に関するコメント
- 赴任して1年目のため, 例年に比して, 論文数などが減少したが, 学生への教育活動を重視して取り組んだ。また, 地域の実情を把握するため, 山形県内の自治体へのヒアリングや調査活動に軸足を置いた。

## 鈴木 均

- (1) 研究成果
- ・星野・河村・栗田・鈴木・他『グローバル資本主義と景気循環』(グローバル資本主義, 第4巻)(2008年3月, 御茶の水書房)
- (2) 教育・地域連携の活動
- [教育活動]
- 授業担当: 国際経済論, ヨーロッパ経済論, 世界経済の読み方(教養課程 経済学), 国際経済論演習
- 非常勤講師: 法政大学経営学部(ヨーロッパ経済演習), 流通経済大学(国際経済論, ヨーロッパ経済論)
- [地域貢献活動] 雇用能力・促進機構の公益委員
- (3) 平成19年度の研究・教育活動に関するコメント
- 今年度は, EU経済の景気動向をやや長期に観察して, 論稿をまとめることができた。今後これを進めると共に, EUの国際ネットワーク型生産についても研究を進める。
- また, 副学部長(評議員)として, 学部運営に貢献した。特に, 「山形大学人文学部専門教育アンケート調査」を実施し, これに基づき「暫定評価にかかる調査」を作成した。

## 立松 潔

- (1) 研究成果
- [論文]
- ・「斉藤食品と大連味之母醸造食品」(『山形県の社会経済・2007年 年報第20号』山形県経済社会研究所発行, pp.85-93)
  - ・「横手市の中心商店街の実態と活性化策」(山形大学まちづくり研究所・中小都市研究会『東北地方の中小都市における中心商店街空洞化の現状と活性化策』第4章, pp.42-53)
- [研究ノート]
- ・「教養教育科目のGPA分析—適正な成績評価に向けて」(『山形大学高等教育研究年報』第2号, 2008年3月) pp.51-55
- (2) 教育, 地域貢献等の活動
- [平成19年度の担当授業の紹介]
- ・教養教育科目  
「生活の中の経済学」(経済学) 前・後期
  - ・他の教員との共同で担当する教養教育科目  
「現代社会の諸問題」(教育・福祉): 1回担当
  - ・専門教育科目  
「日本経済論」前・後期

「地域経済論」後期

「日本経済論演習」通年（卒論指導も含む）

- ・オムニバス科目（他の教員と共同で担当）の専門教育科目

「総合政策講座Ⅰ」（公共政策）：2 回担当

「総合政策講座Ⅲ」（経済・経営）：1 回担当

- ・大学院

「日本産業構造分析特論Ⅰ」

「日本産業構造分析特別演習」

「特別研究Ⅰ」

「特別研究Ⅱ」

- ・その他

「人文学部公務員試験対策講座」（平成 19 年 2 月～5 月実施）・・・企画・運営担当・講義 2 回、  
集団討論 4 回担当

〔地域貢献活動〕（審議会委員，講義担当等）

- ・山形県職業能力開発審議会会長
- ・山形県労働委員会公益委員会会長代理
- ・山形県建築審査会委員
- ・山形県保健医療推進協議会医療費適正化部会会長
- ・山形市観光懇話会委員
- ・THK まちのランドデザイン会議講師

〔出張講義〕

鶴岡中央高校（7 月 5 日）「公共政策の課題—構造改革から再チャレンジ支援へ」。高島高校（9 月 7 日）「観光振興—近代化産業遺産とヘリテイジツーリズム」

- (3) 当該年度の研究・教育活動に関するコメント

研究面では、中国に進出している山形県内企業の調査を 8 月に行い、その結果を『山形県の社会経済・2007 年 年報第 20 号』に発表，また前年に引き続き東北地方の中小都市における中心商店街空洞化の現状と活性化策についての調査を行い，調査報告書を発行。教育面では人文学部の公務員講座を企画・運営責任者として担当，平成 19 年は演習（集団討論と論作文）だけでなく，講義 9 コマも実施。85 名の受講生を集めることができた。

## 國方 敬司

- (1) 研究成果

〔出版・論文〕

- ・國方敬司編『三浦新七博士—その人と軌跡』（三浦新七博士記念会，2008 年 3 月）pp.i-x，1-265.
- ・國方敬司「Sevenhampton マナのリーヴ会計報告書と年次会計報告書」、『山形大学紀要（社会科学）』第 38 卷 2 号，2008 年 2 月，pp.81-106.
- ・「団塊の世代」コメンテーター，山形テレビ「提言の広場」2007 年 5 月 5 日（日）
- ・「働きながら子育てしたい」コメンテーター，NHK「クローズアップ山形」2007 年 6 月 1 日（金）

- (2) 教育，地域連携等の活動

〔担当授業〕

- ・山形大学：西洋経済史，環境と経済，西洋経済史・環境と経済演習，教養教育（経済学）
- ・他大学：環境経済学（東北公益文科大学）

〔学会活動〕

- ・比較家族史学会理事，社会経済史学会評議員

〔地域貢献〕

- ・山形県消費生活審議会委員長, 山形市勤労青少年ホーム運営委員会委員長, 山形地方労働審議会副委員長, 山形新聞報道審査会委員, 山形市下水道料金審議会委員長, 三浦新七博士記念会史学研究編纂委員, 山形県食の安全推進会議委員長, 山形市清掃問題審議会委員長, 「やまがた集中改革プラン」の推進に関する第三者委員会委員長, 男女いきいき子育て応援宣言企業登録審査委員会委員〔講演等〕
  - ・「山形の農業と食の安全・安心」, 生活学校連絡会(山形県教育会館)2007年6月18日(月)
  - ・「高齢者扶養からみたイギリスの家族」, 平成19年度人文学部公開講座(山形大学人文部)2007年6月28日(木)
  - ・パネルディスカッション・コーディネーター「食の安全フォーラム」(遊学館ホール)2007年7月11日(水)
  - ・「食品添加物について考える」パネルディスカッション・コーディネーター, 「食の安全フォーラム」(置賜総合文化センター)2007年10月24日(水)
- (3) 平成19年度の研究・教育活動に関するコメント  
論文執筆のペースが落ちているので, 着実な成果発表が必要である。13名のゼミ生が全員卒業論文を執筆し, 卒業した。多人数の卒論指導は, 行き届かない面が出て来るので留意したい。

## 岩田 浩太郎

### (1) 研究成果

〔論文〕

- ・「山形長谷川家の商業活動―「奥羽の商都」の巨大紅花商人―」(『山形大学歴史・地理・人類学論集』第9号, 2008年3月, 65~93頁)
- ・「巨大紅花商人―山形の長谷川家について―」(山形郷土史研究協議会『研究資料集』第30号, 2008年3月, 5~41頁)

〔科学研究費補助金・人文学部プロジェクト研究〕

- ・平成19年度科学研究費補助金・基盤研究(C)「出羽山形の地域特性の歴史的展開に関する基礎的研究―山形地域史の再構築―」(研究代表者)
- ・人文学部プロジェクト研究「出羽山形の地域特性と交流圏に関する歴史文化研究―山形地域史の再構築―」(研究代表者)

研究メンバー(岩田浩太郎・菊地仁・松尾剛次・三上喜孝)による公開研究会を4回開催

特集「山形の地域特性史―古代から近世まで― 出羽山形は, 大都市だったかもしれない説。」

(山形大学広報誌『みどり樹』第33号, 2007年9月)でプロジェクト研究を紹介・広報

公開学術報告会「交流史からみた山形―地域史への諸提言―」(人文学部主催, 2007年10月20日, 於山形大学教養教育2号館221番教室, 182名参加)を企画・開催

### (2) 教育, 地域連携等の活動

〔担当授業科目〕

- ・教養教育科目: 労働者と農民(経済学), 古文書を読む―町の歴史―(教養セミナー), 紅花の歴史(経済学, 専門科目「地域経済史」を教養教育科目としても同時開講)
- ・専門教育科目: 日本経済史, 地域経済史, 日本経済史演習, 法経政策総合講座Ⅲ(オムニバス1回担当)
- ・大学院: 日本近世史特論Ⅱ, 日本近世史特別演習, 歴史文化特別研究Ⅰ・Ⅱ(修士論文指導, 平成19年度修士学位論文=星達人「仙台藩校養賢堂の研究」を(主)審査)
- ・全学: 附属博物館実習「歴史史料の解読」

〔委員会活動〕

- ・学部: 学部入試委員会委員, 学科入試小委員会委員長(平成20年度学科入試改革による新試験の実施), 学科定員削減検討委員会委員(中長期的な科目配置・ポスト計画策定), 人間学系人事選考

## 平成 19 年度研究・教育活動報告

委員会委員，経済経営系人事選考委員会委員，山形大学紀要論文審査員

- ・全学：附属博物館運営委員会委員（博物館組織改革・規則改定について意見書提出）

〔講演・講座〕

- ・宮城県柴田郡村田町教育委員会・奥羽史料調査会主催：村田町古文書調査報告会「村田商人の歴史をひもとくⅡ―大沼家にみる近代と文化―」コーディネーター，2007年5月19日，於村田町中央公民館ホール
- ・NPO 法人柏倉家文化村主催：「柏倉家文化村まつり」における山形大学人文学部日本経済史（岩田）ゼミナールによる柏倉家調査報告「柏倉九左衛門家の江戸中期～昭和戦前期までの土地集積」「柏倉惣右衛門家の商業取引」，2007年10月14日，於柏倉九左衛門家北蔵
- ・山形大学人文学部主催：公開学術報告会「交流史からみた山形―地域史への諸提言―」における報告「趣旨説明」「山形長谷川家の商業活動―「奥羽の商都」の巨大紅花商人―」，2007年10月20日，於山形大学教養教育2号館221番教室
- ・寒河江市教育委員会主催：「山形学」地域連携・寒河江市成人講座講演「あきないの原風景―江戸商業と紅花取引―」，2007年11月30日，於寒河江市中央公民館ホール
- ・山形郷土史研究協議会新春講演会講演「巨大紅花商人―山形の長谷川家について―」，2008年1月12日，山形市中央公民館大会議室（203名参加）

〔社会活動〕

- ・日本学術振興会科学研究費委員会専門委員（第2段審査委員，審査第一部会史学小委員会委員・審査第二部会史学小委員会委員）
- ・学術雑誌『歴史学研究』（歴史学研究会編集・発行）論文審査委員
- ・NPO 法人「柏倉家文化村」顧問（山形県東村山郡中山町柏倉九左衛門家・柏倉惣右衛門家の調査研究，古文書資料保存の助言・協力，ひな祭りボランティア協力，その他）
- ・奥羽史料調査会世話人（宮城県柴田郡村田町大沼正七家文書整理・目録作成・調査研究など）
- ・山形大学所蔵古文書に関する市民からの問い合わせへの対応
- ・地域より依頼された旧家の古文書等資料調査・成果報告
- ・地域の会社より依頼された社史に関する知識提供
- ・地域史研究者・市民から依頼された研究論文・地誌の作成執筆に関わる指導・助言
- ・「全構成員の創意と合意を尊重する山形大学をつくる会」事務局員
- ・山形県世界遺産育成学術研究会委員に地域史研究の成果を講義
- ・東北芸術工科大学文化財保存修復研究センターより依頼の山形県西村山郡河北町旧家蔵調査に参加・協力（蔵所蔵の文化財概要調査・箱書き墨書解読・ひな人形制作者調査・ひな人形箱出し協力など）

〔その他〕

- ・『河北新報』2008年1月29日付紙面「研究ノート拝見 村山地域の個性探る」取材協力

### (3) 平成 19 年度の研究・教育活動に関するコメント

研究では，幕末期山形城下町最大の商人であったマルチョウ長谷川吉郎治家の商業活動と山形城下町の歴史的な性格に関する研究論文をまとめ公表した。山形地域史研究に関して科研費及び人文学部より支援を受けてプロジェクト研究を本年度も継続して組織した。公開学術報告会「交流史からみた山形―地域史への諸提言―」を企画・開催し，その成果を多くの市民に公表できたことは，わたしたちの人プロ活動にとっても一つの画期となった。その他，県内外で古文書調査・聞き取り調査を本年度も数多く実施した。教育では，指導院生（修士課程）を3名抱え（うち2名は社会人），大学院教育に力を注いだ。日本経済史ゼミナールでは，本年度も柏倉家・分家の古文書調査を進め，研究成果を報告し地元へ還元する活動を継続した。とくに，柏倉家の保存・活用と町おこしを進めるNPO法人のイベントで地域の方々へ調査研究成果を報告する機会をもてたことは学生にとっても貴重な経験となった。委員会の活動では，入試委員長としての業務が中心となった。新入試の初年度ということもあり，業務に見落としがないよう慎重を期した。附属博物館運営委員会としては，学芸研究員の制度

的位置づけを弱める組織改革・規則改定の問題点を指摘した意見書を提出した。社会活動では、審査委員・NPO法人顧問や、最上川世界遺産登録をめざす県の活動や東北芸術工科大学の文化財保存活動への協力など、あらたな関係形成をとめない活動の幅がひろがった。地域の旧家・会社・郷土史研究者・市民・自治体などからの地域史関係の要請・依頼については本年度も可能な限り対応し、個別的な知識提供や助言、講演などに力を注いだ。

## 安田 均

### (1) 研究成果

[研究会報告]

- ・「能力主義論の試み」(SGCIME 研究合宿, 08.03.27, 大学セミナーハウス)

[著書・論文]

- ・「能力主義の理論的可能性」経済理論学会『季刊経済理論』第44巻第4号(2008.1)

### (2) 教育, 地域連携等の活動

[講義]

経済原論(4単位), 市場と組織(2単位), 教養「教養セミナー」(2単位), 「賃金の経済学」(2単位)

公務員講座(春休み, 講義1コマ, 論作文1コマ), 学部共通科目「キャリア・ガイダンス」で1コマ担当。

[ゼミ]

経済原論演習(4単位)

[合同ゼミへの参加]

- ・東北学院大, 宮城学院女子大との「三大学合同ゼミ」  
「格差社会」(6月23日山形大学人文学部)  
「仙台地下鉄南北線問題」(11月24日宮城学院女子大)

[地域連携]

- ・解説論文「後藤電子と後藤電子(上海)有限公司」山形県経済社会研究所「山形県の社会経済・2007年」(年報第20号, 2007年12月)
- ・解説論文「トッパーーツと蘇州特柏斯电子有限公司」同上誌
- ・解説記事「経済指標と解説」(連合山形「春季生活闘争方針」参考資料のH, 2008年2月)
- ・講演「中国に工場進出した山形県企業の調査結果」(山形県社会経済研究所総会, 12月25日, 大手門ヒルズ)
- ・人文学部と山形県村山総合支庁との共同研究「山形・仙台圏交流研究会」に参加。  
その成果を会を代表して2007年3月6日村山総合支庁で開かれた「仙山交流セミナー」にて報告した(「仙台圏から見た山形の観光情報(アンケートの分析)」)。

### (3) 平成19年度の研究・教育活動に関するコメント

昨年度よりすべての講義科目においてパワーポイントを用いて講述した後, その配付資料およびまとめプリントによって復習するというスタイルに移行した。学生からはわかりやすいとの評価を得ているので, 今後も改良を重ねつつ続けたい。教養科目でも, 「教養セミナー」はテキストを替えた結果, 前年度よりわかりやすいとの評価を得た。後期「賃金の経済学」からオンライン上の修学支援システム Blackboard を用いることにした。その利用形態はまだ講義資料のアップロード(による閲覧・配布)に留まっているが, 今後は直ちに採点結果が学生に伝わるオンラインテストを利用するなどして, 復習の動機づけや情報の双方向化を図りたいと考えている。

昨年度より年2回開催となった合同ゼミは同じ経済学でも専攻や関心の異なる学生と交流する貴重な機会なので, 今後とも参加したい。特に主催校となった場合には, 専攻の異なる学生が議論に参加しやすいようなテーマの解説や論点設定はどのようなものか, ゼミ生が自分たちの関心を検討し直

す良い機会でもある。

一昨年度より引受けた山形県経済社会研究所年報の執筆や経済指標の解説、あるいは共同調査への参加は研究の間口を広げてくれるので、時間の許す限り引受けたい。

## 是川 晴彦

### (1) 研究成果

〔論文〕

- ・「他財の価格変化が不完全競争市場に及ぼす経済効果について」、『山形大学人文学部研究年報』第 5 号, pp.145-159
- ・「非同質的なクールノー企業の経済行動と他財の価格変化の関係について」、『山形大学紀要（社会科学）』第 39 巻第 1 号, pp.13-30

〔科研費報告書〕

- ・『東北地方の中小都市における中心商店街空洞化の現状と活性化策』, 第 1 章を担当

### (2) 教育, 地域連携等の活動

〔担当授業〕

- ・学部：マイクロ経済学, 応用マイクロ経済学, ミクロ経済学演習, 教養教育（工学部 B コース）
- ・大学院：公共経済学特論, 公共経済学特別演習

〔地域貢献活動など〕

- ・オープンキャンパスにおける模擬授業の担当
- ・山形県指定管理者審査委員会の外部委員
- ・山形県のアンテナショップに関するコメント（YTS, 「提言の広場」）
- ・山形市役所で開催された公共政策に関する勉強会の講師

### (3) 平成 19 年度の研究・教育活動に関するコメント

課税理論の研究では、不完全競争市場に関する部分均衡分析を発展させ、分析対象となる財以外の財の価格変化が当該財の市場価格および当該財生産企業の利潤と均衡生産量に与える経済効果を考察した。財の連関性、企業の市場占有率そして需要曲線の形状などに依存した特徴的な分析結果を得ることができた。

中心市街地活性化に関する研究では、研究代表者として科研費研究（基盤 C）が採択された。高知市、高松市、篠山市などにおいて実態調査とヒアリングを行ったが、研究分担者の方々の協力もあって、各都市の中心市街地の抱える課題や活性化政策のあり方について研究上有益な情報や知識を得ることができた。この他、別な科研費研究の研究分担者として久慈市の事態調査とヒアリングを行った。

教育に関しては、平成 19 年度も講義時の配布プリントの更新を行った。特に、重要な概念や考え方が強調されるようなプリントを作成することにつとめた。また、講義内容や説明にあてる時間についても見直しを行った。大学院では正指導教官として学生 1 名の指導を担当した。実態調査にも当該学生を同行させたが、この学生は修士論文を作成するうえで貴重な知識等を得ることができた。

## 砂田 洋志

### (1) 研究成果

- ・『東北地方の中小都市における中心商店街空洞化の現状と活性化策』, 山形大学まちづくり研究所, 2008 年 3 月, 53 ページ（共著, 2006 及び 2007 年度の科研費報告書）。

### (2) 教育, 地域連携等の活動

〔担当授業〕

計量経済学, 統計学, 教養セミナー, 専門演習, 統計学（東北芸術工科大学）, 経済統計論（福島大学）

計量経済学特論Ⅱ（大学院）, 計量経済学特別演習（大学院）

〔講演(地域連携等)〕

- ・「生活者から考えるみんなが住みよいまちづくり学習会」のアドバイザー, 山形県村山総合支庁総務企画部
- ・「生活者から考えるみんなが住みよいまちづくり学習会」の報告会で基調講演, 2月19日, 於: 山形県村山総合支庁講堂

(3) 平成19年度の研究・教育活動に関するコメント

計量経済学関係の研究では, 階層ベイズモデルに関する研究を行った。また山形県の景気についてマルコフ・スイッチング・モデルを用いて分析した。その成果をまとめた論文は2008年7月発行の山形大学紀要(社会科学編)第39巻第1号に掲載されている。

中心市街地活性化の研究では, 「東北地方の中小都市における中心市街空洞化の現状と活性化策」という題目の科学研究費補助金の分担研究者として東北地方の都市で調査を行うと共に, 報告書の第2章を執筆した。さらに「中心市街地活性化政策の理論的研究—地域資源の類型化と経済理論による考察—」という題目の科学研究費補助金の分担研究者としての活動も行った。

教育関係では, 講義ノートを配布するなどして, 学生の理解を深めることに力を注いだ。また, 専門演習では, 2名の学生の卒業論文を指導した。教養セミナーではマクロ経済学の基礎を輪読形式で学ばせた。

## 下平 裕之

### (1) 研究成果

〔論文〕

- ・「20世紀初頭のケンブリッジ学派における消費者協同組合論」山形大学人文学部研究年報(5), 187-204, 2008年2月。

〔国際ワークショップ報告〕

- ・“Dennis Robertson on Industrial Society: The Control of Industry reexamined”, International Workshop: “Marshall and Marshallians on Industrial Economics” March 15-16 th, 2008, Hitotsubashi University.

〔科研費(基盤研究C)研究成果報告書〕

- ・『東北地方の中小都市における中心市街地空洞化の現状と活性化策』山形大学まちづくり研究所・中小都市研究会, 2008年3月(第3章「五所川原市の中心市街地の実態と活性化策」を分担執筆)。

〔書評〕

- ・平井俊顕編著『市場社会とは何か--ヴィジョンとデザイン』, ソフィア(上智大学), 56(2), 2007年夏季。

### (2) 教育, 地域連携等の活動

〔教育活動〕

山形大学における担当授業: 経済思想, 経済学史, 経済学史演習, 法経政策学基礎演習, 地域づくり特別演習(夏季集中), 教養セミナー(まちづくり入門)

非常勤: 羽陽短期大学(経済学)

〔地域連携活動〕

高校での出張講義・学部説明会: 学部広報委員として複数担当

山形財務事務所財務モニター

村山地域グランドデザイン推進会議委員

大学コンソーシアムやまがた地域活動部会員

コンソーシアム学生合宿(2007年8月・11月)におけるワークショップ指導

エリアキャンパスもがみタウンミーティング(2007年12月)における司会進行

エリアキャンパスもがみ「地域参画マニュアル」(2008年3月)の執筆・編集

(3) 平成 19 年度の研究・教育活動に関するコメント

研究活動では国際ワークショップにおいて従来の研究の成果をまとめたものを報告した。これは次年度以降に論文集の一部として出版される予定である。また今回の報告に関連した日本語論文も執筆した。教育・地域連携活動については、「地域参画マニュアル」の執筆・編集が特に重要であった。

**鈴木 明宏**

(1) 研究成果

- ・ Incentive Problem in Intergovernmental Transfers: Differences between Two Infinitely Iterated Leadership Models, The Economic Society of Meikai University Discussion Paper, DP 2007-001, 2007.
- ・ 地方政府間の距離が財政調整に対する態度に与える影響—独裁者ゲーム実験からの示唆—, 広島市立大学ワーキング・ペーパー No.10 (経済・経営), 2008.
- ・ The Soft Budget Constraint Problem in a Dynamic Central Leadership Model, Economics Bulletin 8(1), 1-10, 2008.
- ・ オーストラリア型財政調整による地方交付税改革, 山形大学紀要 (社会科学) 39 (1), 31-61, 2008\*11.

(2) 教育, 地域連携等の活動

[教育]

- ・ 担当講義 ゲーム理論, 意思決定論, 現代の経済理論 (教養), 情報処理 (教養), 意思決定論演習 (地域連携等)

まちづくり研究会, 仙山交流研究会に参加。

(3) 平成 19 年度の研究・教育活動に関するコメント

19 年度は科学研究補助金を使って, 財政調整に関する経済実験を行った。その成果は学会等で報告しており, 雑誌投稿のため得られたコメントについては反映させているところである。その他には, ソフトな予算制約問題という地方財政の問題について理論的研究を行った。また, オーストラリアの財政調整制度と日本の地方交付税制度の比較についての論文をまとめた。

**西平 直史**

(1) 研究成果

- ・ 西平: サプライチェーンにおける Bullwhip 効果を抑制するための一手法—むだ時間システムとメモリーレスフィードバックを用いた解析—; 山形大学人文学部研究年報, 第 5 号, 205/214 (2008)
- ・ 佐藤・西平・本多・渡邊: 人工社会モデルにおけるエージェントの個人差が与える影響; 山形大学人文学部研究年報, 第 5 号, 33/44 (2008)

(2) 教育, 地域連携等の活動

[担当科目] 応用情報処理, 情報処理 (上級), 情報・システム論演習, 法経政策基礎演習, 情報処理 (教養), 情報化時代の経営 (教養)

[地域連携] 山形大学人文学部地域連携室と山形県村山総合支庁で開催している山形仙台圏交流研究会のメンバーとして参加した。

(3) 平成 19 年度の研究・教育活動に関するコメント

これまで研究していたむだ時間システムを経営の問題, とくにサプライチェーンに適用することについての研究を始め, その成果の一部を公表した。教育活動は情報処理関連科目を担当した。総合政策科学科から法経政策学科への改組の関係で政経社会領域の教養教育も担当した。

## 山口 昌樹

### (1) 研究成果

#### [論文]

- ・「アジアの国際シンジケート・ローン市場 —マイクロ・データによるシンジケート構造の分析—」  
『アジア研究』第53巻第4号, pp.1-18, アジア政経学会, 2007年
- ・「インドの国際シンジケート・ローン市場—地場銀行と外国銀行との競合関係」『証券経済研究』  
第60号, pp.83-99, 2007年

#### [学会発表]

- ・日本金融学会 2007年春季大会, 麗澤大学, 2007年5月12日  
「アジアの国際シンジケート・ローン市場 —マイクロ・データによるシンジケート構造の分析—」
- ・アジア政経学会 2007年度東日本大会, 学習院大学, 2007年5月26日  
「アジアの国際シンジケート・ローン市場 —信用スプレッドのマイクロ実証分析」

### (2) 教育, 地域貢献等の活動

#### [教育]

- ・担当授業: ビジネス・エコノミクス (教養セミナー), 金融論, 国際金融システム, 証券市場論,  
国際金融システム演習

#### [地域貢献]

- ・研究室訪問の受け入れ (2007年8月)
- ・出前講義 南陽高校 (2007年10月)
- ・野村證券連携公開講座/第3回講師

### (3) 平成19年度の研究・教育活動に関するコメント

教員生活4年目をつつがなく終えることができた。人文学部の教職員の方々に感謝したい。

## 野田 英雄

### (1) 研究成果

#### [学術論文]

- ・大隈慎吾・野田英雄 “On the Convergence of CO<sub>2</sub> Emissions,” 『応用経済学研究』, 第1巻, p  
p.179-200, 2007年.
- ・野田英雄「知識基盤経済における高齢化とイノベーションの理論分析」『現代経済学研究』, 第14  
号, pp.207-227, 2007年11月.
- ・Noda, H. “Expanding Product Variety and Human Capital Formation in an Ageing  
Economy,” *Economic Issues*, Vol.12, Part.2, pp.81-101, September 2007.

#### [学会発表]

- ・野田英雄 “How Does Population Aging Affect Product Development Performance?,” 日本  
応用経済学会 2007年度秋季大会, 2007年11月, 中央大学.
- ・野田英雄 “On the International Technology Transfer through Licensing,” 日本地域学会第  
44回年次大会, 2007年10月, 九州大学.
- ・野田英雄・姜興起 “Regional Analysis of the Japanese Economy via Cross-Prefectural  
Production Function,” 日本経済学会 2007年度秋季大会, 2007年9月, 日本大学.

### (2) 教育, 地域連携等の活動

[担当講義] 国民経済システム, 成長と循環, 外書講読, 国民経済システム演習, 総合講座Ⅲ, 法  
経政策学基礎演習, 経済モデル解析入門, マクロ経済学特論 (大学院)

[地域連携活動] 山形県経済動向研究会メンバー

### (3) 平成19年度の研究・教育活動に関するコメント

研究については、「地球環境問題と経済発展」および「人口の高齢化とイノベーション」のテーマ

に関する成果を学術誌に公刊した。また、教育については、教養、学部および大学院において上記科目を担当した。

## 緒方 勇

### (1) 研究成果

〔学術論文〕

- ・「研究開発活動が将来キャッシュ・フロー予測に与える影響についての実証研究」、『山形大学人文学部 研究年報』2008 年 2 月，第 5 号，215-227 頁。

〔学会報告〕

- ・日本会計研究学会第 114 回中部部会，「会計利益が持つ将来キャッシュ・フロー予測能力に関する実証研究」，四日市大学，2007 年 5 月 12 日。
- ・日本管理会計学会関西中部部会 2007 年度第 1 回大会，「研究開発投資がキャッシュ・フロー予測に与える影響についての実証研究」，関西大学，2007 年 7 月 21 日。

### (2) 教育，地域連携等の活動

〔山形大学における担当授業〕法経政策学科基礎演習

### (3) 平成 19 年度の研究・教育活動に関するコメント

平成 19 年度の 9 月に山形大学人文学部に着任した。専門は管理会計である。現在は、R&D（研究開発活動）に関して実証的に研究している。

## 真保 智行（平成 20 年 10 月着任）

### (1) 研究成果

〔論文〕

- ・真保智行「特許制度と企業行動：研究開発，技術移転，および企業間分業への影響」『知財研フォーラム』Vol.74，pp 23-29，2008 年
- ・真保智行「石油化学産業におけるライセンス契約と知識移転：吸収能力とライセンス契約の形態」『研究・技術・計画』Vol.23，No.1，pp 57-68，2008 年
- ・真保智行「製造技術の開発・導入の選択：技術導入の経験と吸収能力」『イノベーション・マネジメント』No.5，pp.61-80，2008 年
- ・真保智行「技術導入と企業パフォーマンス：技術の吸収と学習の範囲」 *Hitotsubashi University IIR Working Paper*, WP#08-02, 2008 年
- ・真保智行「ライセンス・パートナーの選択：技術の吸収と技術の質」『赤門マネジメント・レビュー』Vol.6，No.11，pp 523-542，2007 年

〔著書・報告書〕

- ・真保智行・長岡貞男「商標の外国出願とライセンスに関する実証分析」財団法人知的財産研究所編『我が国企業等における産業財産権等の出願行動等に関する調査報告書』，pp.61-85，2008 年
- ・真保智行『ライセンス契約の形態の選択』特許庁委託平成 18 年度産業財産権研究推進事業報告書，2007 年
- ・真保智行『石油化学産業におけるライセンス契約に関する研究』一橋大学博士論文，2007 年

〔学会報告〕

- ・真保智行「技術導入と企業パフォーマンス：石油化学産業のケース」組織学会（神戸大学），2008
- ・真保智行「製造技術の開発・導入の選択：能力依存と能力構築」研究・技術計画学会（亜細亜大学），2008 年
- ・真保智行「ライセンス契約の形態の選択：機会主義と吸収能力」組織学会（京都産業大学），2007 年

### (3) 平成 19 年度の研究・教育活動に関するコメント

平成20年10月に赴任してまいりました。21年度は経営学と経営戦略論を担当するというので、教育面に力を入れたいと思います。また、研究では企業行動と知的財産制度を絡めた統計的な分析をできればと考えています。宜しくお願い致します。

#### 戸室 健作(平成20年11月着任)

##### (1) 研究成果

〔共著〕

- ・『フッターをつくる仕事・生活術 28歳編』青木書店, 2007年6月
  - ・『学ぶ はたらく つながる 一 格差社会に立ち向かう若者たちへ』かもがわ出版, 2008年2月
- 〔論文〕
- ・「自動車産業における請負労働と分業構造」『大原社会問題研究所雑誌』585号, 2007年8月
  - ・「製造業における請負労働の研究」明治大学大学院博士論文, 2008年3月学会発表
  - ・「請負労働に関する一考察」(社会政策学会非典型労働部会主催研究会: 明治学院大学), 2008年3月29日

##### (2) 教育, 地域連携などの活動

- ・企業経営管理論(日本体育大学体育学部非常勤講師)
- ・社会政策論(拓殖大学政経学部非常勤講師)

##### (3) 平成19年度の研究・教育活動に関するコメント

これまでの研究成果を博士論文にまとめることができた。初めて講義を受け持ち悪戦苦闘したが、何とかやりぬいた。

#### 法経政策講座(法律・政治系)

#### 上野 芳昭

##### (1) 研究成果

特になし。

##### (2) 教育, 地域連携などの活動

〔講義〕 民法総則, 債権各論

〔演習〕 民法演習 I

##### (3) 平成19年度の研究・教育活動に関するコメント

日本民法典成立後, ドイツ法の「学説継受」によって引き起こされた学説の変遷過程を跡づける作業を行った。日本民法典の解釈に適合しない, ドイツ法の学説の影響を除去したい, と考えている。

ゼミの議論は, あるいは, 平成19年が絶頂期となるのではあるまいか, と思われる。優秀な学生が二人いたのである。

#### 澤田 裕治

##### (1) 研究成果

- ・林智良=阪上眞千子=的場かおり=沢田裕治「2007年学界回顧/西洋法制史」, (『法律時報』第79巻第13号, 執筆担当「イギリス・アメリカ」, pp.329-331)

##### (2) 教育, 地域連携等の活動

〔山形大学における講義・演習等〕

- ・教養教育科目: 基礎から考える法学, 基礎からの民法
- ・専門教育科目: 法経政策学科基礎演習, 比較法制度論, 比較法制度論演習
- ・その他: 自主ゼミ「ドイツ語で考える法律学」を開講

〔講演会〕 法学会会長として、一橋大学大学院法学研究科教授水林彪氏による「日本における法観念の歴史」講演会（人文学部と法学会の共催）を企画し、その準備・運営を担当し、講演会を成功に導いた。

〔山形県立保健医療大学における講義〕 法学

〔山形県立産業技術短期大学校における講義〕 法学概論

〔山形市立病院済生館高等看護学院における講義〕 関係法規

〔放送大学における講義（1月12日、13日）〕 面接授業において「基礎から考える法学」を担当し、基礎から考える法学の魅力を伝え、受講生の興味・関心を引き出し好評を得ることができた。

(3) 平成 19 年度の研究・教育活動に関するコメント

研究では、前年度に引き続き、J・M・ケイの著作等の研究に従事し、私訴迫に関する研究を深化させた。また不法行為法の比較法的研究により、厳格責任につきジョン・クリーバーク等の研究成果に学んだ。

教育では、教養教育科目において、『対話 Dialogue』と題するミニコミ誌を毎回発行し、学生同士と教員の相互コミュニケーションを図り、講義内容を血肉化する努力を継続した。

## 北川 忠明

(1) 研究成果

〔学会報告〕

- ・「フランス共和国モデルの現在」, 2007 年度日本政治学会研究会（セッション 11「現代の共和主義」, 2007 年 10 月 7 日）

(2) 教育, 地域連携等の活動

〔教育〕

- ・専門科目：政治理論, 政治理論演習, 地域公共政策論
- ・大学院：特別研究
- ・教養科目：現代政治入門（政治学）2 コマ

ほかに「地域づくり特別演習」, 「公務員対策講座」の講師

〔地域連携〕 地域連携室の運営, 仙山交流圏研究会等

(3) 平成 19 年度の研究・教育活動に関するコメント

公表論文がなかったのは残念だが, 学会報告は論文として公表予定。

教育では, 大学院生の論文指導等に時間をかけた。

## 高橋 和

(1) 研究成果

〔論文〕

- ・「越境地域協力の制度化と変容」山形大学大学院『社会文化システム研究科紀要』第 4 号, 平成 19 年 8 月, 33-49 ページ。

〔著書〕

- ・「下位地域協力と地域政策」大島美穂編『EU スタディーズ 3 国家・地域・民族』けい草書房, 2007 年, 177-193 ページ。

〔学会報告〕

- ・「EU の近隣諸国政策と越境地域協力」  
（於 環日本海学会 2007 年 12 月 9 日, 立命館アジア太平洋大学）

(2) 教育・地域貢献等の活動

〔教育活動〕

- ・担当授業科目：国際関係論, 国際関係論演習, 国際関係概論, 地域の国際化, 東欧の政治（教養教

育)

- ・大学院：国際関係論特論，国際関係特別研究

〔地域連携〕

- ・山形県労働委員会公益委員
- ・山形労働局 紛争調停委員，最低賃金審議会公益委員
- ・山形県薬事審議会公益委員等

(3) 平成19年度の研究・教育活動に関するコメント

平成19年度は，国連大学グローバルセミナーが山形大学で開催されたので，プログラム委員としてその準備実行にあたった。

学部の教育では，演習の授業では，3年生からゼミ論を書き，4年生にはそれを卒論に発展させるように指導を行っている。その結果，8人の学生の卒論指導を行い，大学院の教育では，2名の修士論文の指導を行った。

### 藤田 稔

(1) 研究成果

- ・「抱合せ販売等」公正取引681号18-24頁(2007年7月)
- ・「専売店制に対する独占禁止法による規制」山形大学紀要(社会科学)第38巻2号9-35頁(2008年2月)

(2) 教育，地域連携等の活動

- ・「経済法1」「消費者保護法」「経済法演習」「法的なものの考え方と知的財産権(法学)」を担当。(その他，東北学院大学，東北公益文科大学，岩手大学で，非常勤講師を務めた。)
- ・山形県入札監視委員会委員長として，山形県の土木・建設工事の入札の適正化に努めた。
- ・山形労働局で，個別労働紛争調整委員として，労働紛争の解決のあっせんを行った。
- ・独占禁止政策協力委員として，独占禁止政策のあり方について，公正取引委員会に対して，意見を述べた。
- ・山形県弁護士会綱紀委員会委員として，弁護士倫理の維持に協力した。
- ・日本経済法学会理事として，学会の運営に従事した。
- ・東北経済法研究会で座長として研究を行った。

(3) 平成19年度の研究・教育活動に関するコメント

流通に対する独占禁止政策の研究の対象範囲を広げるように努めた。経済法1の使用テキストを新たなものにしたことに伴い，講義内容の全面的な見直しを行った。

### 金子 優子

(1) 研究成果

〔論文〕

- ・New Systems for More Transparent and Accountable Government — The Japanese Case —, 『山形大学法政論叢』, 第40号, pp.34-68
- ・Introducing Performance and Result Initiatives in Japan: Current Practices and Future Challenges, 『Comparative Studies for Better Governance in Asian Countries』, OECD Asian Center for Public Governance, pp.305-330

〔国際会議での発表〕

- ・Postal Savings for National Development — The Experience of Japan and Future Perspective in a Globalized World —, 国際行政学会第27回アブダビ大会
- ・Science and Technology Policy Making in Japan, 国際行政学会第27回アブダビ大会

(2) 教育，地域連携等の活動

〔担当科目〕 行政学, 自治体法, 日本国憲法, 技術進歩と行政, 行政法演習Ⅱ, 総合講座Ⅰ(公共政策), キャリアガイダンス(公務員制度), 行政学特論Ⅰ・Ⅱ, 行政学特別演習

〔外部での講演〕

- ・新やまがたひゅーまんらいふフォーラム(ニールフォーラム)「男女共同参画推進における行政と市民の役割」2007年6月
- ・参議院法制局「宇宙技術と行政の改革方策について」2008年2月

〔外部研修講師〕

- ・山形市職員研修「行政法研修」講師 2007年9月4日-6日

〔審議会委員〕

- ・第29次地方制度調査会委員
  - ・山形県市町村合併推進審議会委員
  - ・東根市情報公開・個人情報審査会委員
  - ・村山公立病院情報公開・個人情報審査会委員
- (3) 平成19年度の研究・教育活動に関するコメント

研究活動については、外部研究資金を得て、新たな研究を始めることができた。

教育活動については、プレゼンテーションソフトを利用することにより分かりやすい講義となるように努めた。また、行政実務家を招請して行政の現場についての講義を行っていただき、大学教育と実社会との連携に努めた。

#### 小嶋 明美

(1) 研究成果

なし

(2) 教育, 地域連携等の活動

なし

(3) 平成19年度の研究・教育活動に関するコメント

研究については、前年度末に『現代中国の民事裁判』(成文堂)として研究成果を発表した後、19年度は、民事手続研究会(九州)の「日中民事手続の比較研究」をテーマとした執筆出版計画により、中国側原稿の翻訳を行った。また、19年10月の改正を含め、中国民事訴訟法の動向の検討を進めた。

教育については、非常勤のみであるが、それぞれ2単位の「紛争処理法」、「国際取引法」を週に1度、「中国民事訴訟法」と「経済法」を集中講義で担当した。

#### コーエンズ 久美子

(1) 研究成果

- ・「証券振替決済システムにおける権利の帰属と移転の理論 —アメリカ統一商法典第八編の再検討を通して—」, 浅木慎一・小林量・中東正文・今井克典編『浜田道代先生還暦記念 検証会社法』(信山社, 2007年)

(2) 教育, 地域連携等の活動

〔平成19年度担当授業〕

- ・学部専門科目: 商法総則・商行為法, 商法Ⅰ, 商法演習Ⅰ, 法経政策学科基礎演習
- ・大学院科目: 商法特論Ⅰ

〔地域連携活動〕

山形県消費生活審議会委員

(3) 平成19年度の研究・教育活動に関するコメント

証券振替決済システムにおける口座記録としての証券の帰属および移転に関する理論につき、「社

債、株式の振替に関する法律」の解釈のあり方、さらには立法論を視野に入れ検討した。その際、アメリカ法を参照にしつつ、「口座振替システム」という枠組みで資金決済も含めた統一的な法律構成を模索した。

また教育面では、学生自身が他人を説得できるように「考えて書く」ということを通して、理論的な思考方法を身につけることに重点を置いた指導をした。

## 松本 邦彦

### (1) 研究成果

公刊した成果は今期はなし。

人文学部から研究活動支援をうけたプロジェクト研究「地方分権化時代の山形における地域政策と課題：地域的公共性構築の観点から」に参加しつつ、山形県内市町村の施策調査の追加調査とまとめをしていました。

### (2) 教育、地域連携等の活動

〔教育〕

- ・専門科目：アジア政治・外交論（2単位×2期）。同演習（4単位）。  
アメリカ政治・外交論（2単位）。  
日本政治論（2単位）。政治学入門（2単位）
- ・教養教育科目：民族と政治（2単位）。  
「“なせばなる”21世紀の大問題」（2単位）で1回の講義を担当。  
「現代社会の諸問題」（2単位）で1回の講義を担当。
- ・昨年度に引き続き、インターネット検索の実習用のテキストとして『検索マニュアル 2007年度版』（300円）を自費出版。

〔出張講義〕

- ・10月に山形県立東高校「情報操作と権力」。

〔社会活動〕

- ・特定非営利活動法人山形専門家ネットワーク女性支援基金運営委員（2005年8月から）
- ・山形市自転車等駐車対策協議会委員（2005年2月から）。

### (3) 平成19年度の研究・教育活動に関するコメント

市町村施策調査結果を2007年度内にまとめられると良かったのですが、遅れてしまいました。

教育面では、1年生向けの「政治学入門」での授業評価が非常に悪かったのが悔やまれます。200人規模の講義としては手法が不適切だったかと反省していますが、学生気質が思う以上に変わってきていると感じるところもあります。

## 赤倉 泉

### (1) 研究成果

なし

### (2) 教育、地域連携等の活動

- ・学部専門教育科目：アジア政治論演習、アジア政治論
- ・教養教育科目：政治学入門、中国語（人文）

### (3) 平成19年度の研究・教育活動に関するコメント

研究に関しては、これまでに引き続いて毛沢東時代の政治について研究を行った。教育に関しては、「アジア政治論」において、現代中国をはじめ広くアジアの政治について多角的に紹介するよう心がけ、数カ国の留学生に自国紹介をしてもらうなどの工夫をした。教養教育の政治学および中国語では、テキストだけではなく視聴覚機材を利用しながら授業を行った。

## 今野 健一

### (1) 研究成果

〔論文〕

- ・「教育基本法の『改正』とその法的問題」憲法理論研究会編『憲法の変動と改憲問題』〔憲法理論叢書 15〕(2007.10)
- ・「ニューヨーク市における犯罪の減少と秩序維持ポリシング」(共著)『山形大学紀要(社会科学)』38 巻 2 号(2008.2)

〔評論〕 「憲法とデモクラシーの危機 —『改正』教育基本法の成立に寄せて」『日本の科学者』42 巻 4 号(2007.4)

〔判例評釈〕 「ピアノ伴奏拒否事件最高裁判決の検討」『日本教育法学会ニュース』105 号(2007.11)

〔講演〕 「憲法と公教育の関係の再定義～憲法教育をめぐる議論を中心に～」全国民主主義教育研究会・中間研究集会(2008.1)

### (2) 教育, 地域連携等の活動

〔担当授業科目〕

- ・学部専門科目: 人権論, 憲法演習Ⅱ, 法経政策学基礎演習, 総合講座Ⅱ(法律)等
- ・教養教育科目: 日本国憲法, 教養セミナー
- ・大学院科目: 統治組織論特論Ⅰ・Ⅱ等

〔地域連携活動〕

山形県立中央病院治験審査委員会委員・同倫理委員会委員, 山形市情報公開・個人情報保護審査会委員, 研究室訪問事業(新庄北高)への協力

### (3) 当該年度の研究, 教育活動に関するコメント

研究面では, 学会報告が活字化されたほか, セキュリティに関する研究の一環としてニューヨーク市のポリシングをめぐる議論の紹介と評価を行う論文を発表した。教育面では, 基礎演習でディベートを取り入れるなど, 少しずつ工夫を加えている。教養セミナーの運営にはいつも苦勞するが, 今回は受講人数が多いことで困難を感じた。地域連携の面では, 外部委員や高校との連携で例年並みの活動に従事した。また, 講演会・学習会の講師も幾つか引き受けた。

## 金澤 真理

### (1) 研究成果

〔著書〕 「〈市民〉と刑事法」第 2 版(共著)(成文堂)(2008 年 2 月)

〔論文〕

- ・「構成要件の段階的充足と故意の帰属(一)」山形大学法政論叢 40 号(2007 年 9 月)
- ・「中止犯」ジュリスト増刊『刑法の争点』(2007 年 10 月)

〔判例評釈〕

- ・「予備の中止」別冊ジュリスト『刑法判例百選Ⅰ総論(第 6 版)』(2008 年 2 月)

### (2) 教育, 地域連携等の活動

〔担当講義〕 刑法各論, 法政策学, 刑法Ⅰ, 法政策学演習, 刑罰制度と犯罪論(教養法学)

〔審議会等〕 山形県個人情報保護制度運営審議会委員, 山形県精神保健審査会委員, 山形市個人情報保護制度運営審議会委員, 山形市男女共同参画社会推進協議会委員

### (3) 研究, 教育活動に関するコメント

未遂犯論の研究から生じた新たな問題意識に基づき, 犯罪の段階的発展に伴う構成要件構造の異同と故意の帰属との関連に研究領域を広げ, さらに, ドイツ刑法のみならず, 未遂制度をもつヨーロッパ諸外国を比較法の検討対象とした。予想外の人事異動のため, 後期より担当科目が急増したが, 参考資料を用いて学生の理解を深めるよう努めた。講義では, 学生の自習を促す工夫をしているほか,

演習等では、課外活動を積極的に行うことで学習内容と実務との関連に関心を抱かせるよう努めた。

### 高倉 新喜

#### (1) 研究成果

- ・「刑事判例批評(48)」『刑事法ジャーナル』8号(2007年7月)152-156頁
- ・「一事不再理の効力の客観的範囲」『山形大学紀要(社会科学)』38巻2号(2008年2月)59-79頁

#### (2) 教育、地域連携等の活動

- ・専門科目：刑事訴訟法、刑事法基礎、刑事訴訟法演習、法経政策学基礎演習
- ・教養科目：裁判員制度について(法学)
- ・出張講義：山形県立米沢興譲館高等学校(2007年6月18日)
- ・地域連携等：山形県介護保険審査会委員、  
安全で安心なまちづくり推進計画専門委員会委員

#### (3) 平成19年度の研究・教育活動に関するコメント

最近のわが国の一事不再理の効力に関する議論を整理し、自分なりの見解をまとめた上、さらなる研究のための足がかりを得ることができた。

新カリキュラムのもとでの専門科目の講義は、実質的には今年度が初めてであったが、うまく対応できた。

初めて教養の講義を担当したが、裁判員制度についての講義には多くの学生が集まった。

### 和泉田 保一

#### (1) 研究成果

〔口頭発表〕

- ・「住民訴訟による公益の確保—小国町砂利売却事件最高裁判決の検討」(山形大学人文学部地域的公共性と地域ガバナンス・プロジェクト研究会, 5月)
- ・「イギリス計画法制の改革と地域の関与」(イギリス行政法研究会, 8月)

#### (2) 教育、地域連携等の活動

- ・担当授業：行政救済法、行政法総論、行政法演習、法経政策学基礎演習
- ・地域連携活動：山形県情報公開・個人情報保護審査会委員、山形県医療審議会委員、山形広域清掃工場建設事業及び運営技術審査委員会委員

#### (3) 平成19年度の研究・教育活動に関するコメント

赴任初年度で、授業の準備や学部の委員会の業務に忙殺されてしまった感がある。

### 小笠原 奈菜(平成20年4月着任)

#### (1) 研究成果 なし

#### (2) 教育、地域連携等の活動

- ・日本司法支援センター(法テラス)コールセンター 有期雇用職員情報提供者(オペレーター)が実際に受けた相談内容を論点整理し、的確に情報提供するための参考資料の作成
- ・一橋大学大学院法学研究科附属日本法国際研究教育センター 非常勤研究員

### 中島 宏(平成20年4月着任)

#### (1) 研究成果

〔書評〕

- ・「小泉洋一著『政教分離の法 フランスにおけるライシテと法律・憲法・条約』」宗教法第26号(2007年7月)

(2) 教育, 地域連携等の活動

工学院大学共通課程一般教育部社会科学非常勤講師 (「法学 A」, 2008 年 1 月~3 月)

(3) 平成 19 年度の研究・教育活動に関するコメント

フランスにおける宗教規制の研究に取り組んだが, 特筆すべき進展はなかった。

丸山 政己 (平成 20 年 12 月着任)

(1) 研究成果

[学位論文]

- ・「国際連合安全保障理事会による国際法の執行・強制機能—立憲的アプローチの可能性と問題性に関する一考察—」(博士(法学)学位取得, 一橋大学, 2008 年 3 月)

[その他]

- ・「紹介 Erica de Wet, *The Chapter VII Powers of the United Nations Security Council* (Hart Publishing, 2004)『国際法外交雑誌』第 106 巻 2 号, 2007 年, 90-95 頁

(2) 教育, 地域連携等の活動

平成 20 年度より赴任のため, 該当なし。

(3) 平成 19 年度の研究・教育活動に関するコメント

これまでの研究成果を博士論文として一応の形でまとめることができた。今後はこれを公表すべく, さらに加筆修正を加えていきたい。

## 「山形大学人文学部研究年報」投稿規程

### 1 投稿資格

「山形大学人文学部研究年報」に投稿の資格を有するのは、以下の者とする。

- (1) 山形大学人文学部の教員（教授、准教授、講師、外国人教師）
- (2) 山形大学大学院社会文化システム研究科学生（指導教員の推薦ある者）

また、

- (3) 本学部教員以外の者との共同研究についても、応募を認めることがある。
- (4) 山形大学人文学部もしくは山形大学大学院社会文化システム研究科の主催で開催された講演会の原稿も掲載可とするが、原稿依頼および原稿のとりまとめについては当該の講演会を担当した本学教員の責任においておこなう。

### 2 原稿の種類

- (1) 原稿の種類は「論文」「研究ノート」「資料紹介」「翻訳」「判例評釈」「書評」「講演」その他学術研究に資すると判断されるものとする。
- (2) これら以外に、本学部教員の研究活動に関する報告等を掲載する。

### 3 原稿枚数

- (1) 原稿は、各号原則として一人一編までとするが、2に定める分類項目を異にする場合には複数掲載を認める場合がある。
- (2) 「論文」「研究ノート」「資料紹介」「翻訳」「講演」は、原則として400字詰め原稿用紙に換算して100枚以内とする。
- (3) 「判例評釈」「書評」については、原則として400字詰め原稿用紙に換算して30枚以内とする。

### 4 書式

刷り上がりの版型はB5版とする。なお、以下に記載のない書式の詳細については、山形大学紀要の書式に準ずるものとする。

- (1) 原稿は、縦書きもしくは横書きとする。縦書きの場合は二段組みとする。
- (2) 横書きの場合は裏表紙から始める。
- (3) 外国語論文原稿の投稿も認める。
- (4) 原稿は原則としてワープロで作成し、使用したワープロ・ソフト名を明記した電子ファイル（フロッピー・ディスクなど）とプリントアウトしたもの2部（1部は所属・氏名を記載しない）を提出する。

- (5) 日本語（外国語）の場合は外国語（日本語）のレジュメを付ける。その枚数も上記の原稿枚数に含める。投稿者は、当該言語ネイティブまたは外国語教育担当教員によるチェックを受けたうえで、外国語レジュメを編集委員会に提出するものとする。ただし、当該言語ネイティブまたは外国語担当教員に依頼することが困難な場合には、英語によるレジュメに限り、編集委員会が仲介するものとする。

## 5 原稿掲載の可否の決定および査読

原稿掲載の可否は、当該分野の専門家の査読を経て、編集委員会が決定する。

## 6 校正

- (1) 校正は執筆者の責任でおこなう。
- (2) 校正時における大幅な訂正は認めない。

## 7 抜刷

- (1) 抜刷を必要とする者は、投稿申し込み時に申告する。
- (2) 抜刷の作成費用は、執筆者の負担とする。

## 8 図版等

図版、図表、グラフなど印刷に特別の費用を要するものについては、執筆者の負担とする場合もある。

## 9 原稿提出期日

原稿提出期限は11月末とする。

## 10 原稿提出先

原稿は、編集委員に提出する。

編集委員

アーウィン マーク (人間文化学科)

齊 藤 哲 也 (人間文化学科)

小笠原 奈 菜 (法経政策学科)

洪 慈 乙 (法経政策学科)

編 集 者	山形大学人文学部
発 行 者	〒 990-8560 山形市小白川町一丁目 4-12
責 任 者	渡邊 洋一
印 刷 所	田宮印刷株式会社
発行年月日	平成 21 年 3 月 24 日

# Faculty of Literature & Social Sciences, Yamagata University Annual Research Report

Vol. 6

## CONTENTS

### Articles

- Demonstratives in English and Japanese Narrative Discourse .....WATANABE Fumio..... 1  
Verb-driven Resultatives and Result Phrase-driven Resultatives:  
    A Perspective from the Boundedness Constraint .....SUZUKI Toru..... 15  
NPI licensing by FORCE<sub>v</sub> features .....TOMIZAWA Naoto..... 35  
Construction of an English Learning Support System Using the Internet:  
    Experimental Use of Video Podcasting .....HONDA Kaoru, MORITA Mitsuhiro,  
    Mark IRWIN, TOMITA Kaoru, Todd ENSLEN and Jerry MILLER ..... 51  
Mora Splitting in Loanword Compounds .....Mark IRWIN..... 71  
词的语言——乐章集与花间集——.....芦立一郎..... 87  
曹植与「国难」——先秦汉魏文学中的国家意识—— .....福山泰男..... 101  
Имманентность Истории:  
    над мирозерцанием Бориса Эйхенбаума ..... НАКАМУРА Тадаси..... 121  
Erben und Nichterben der deutschen „Vergangenheit“ :  
    Martin Walsers Sozialkritik .....WATANABE Masanao..... 143  
A Study of the Supply Chain as a Time-Delay System :  
    a Case when the Leadtime is Known .....NISHIHIRA Naofumi..... 157

### Lecture transcript

- Czechs and Germans shaping the regional milieu : The case of growing regional cooperation  
    influenced by the Europeanization of mutual relations .....Václav Houžvička..... 163  
2007 Activity Report on Education and Research ..... 185  
Requirements for Contributors ..... 229

MARCH 2009

Faculty of Literature & Social Sciences  
Yamagata University